九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—54—

上　巻

朝倉郡朝倉町所在

金　場　遺　跡

1999

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—54—

上　巻

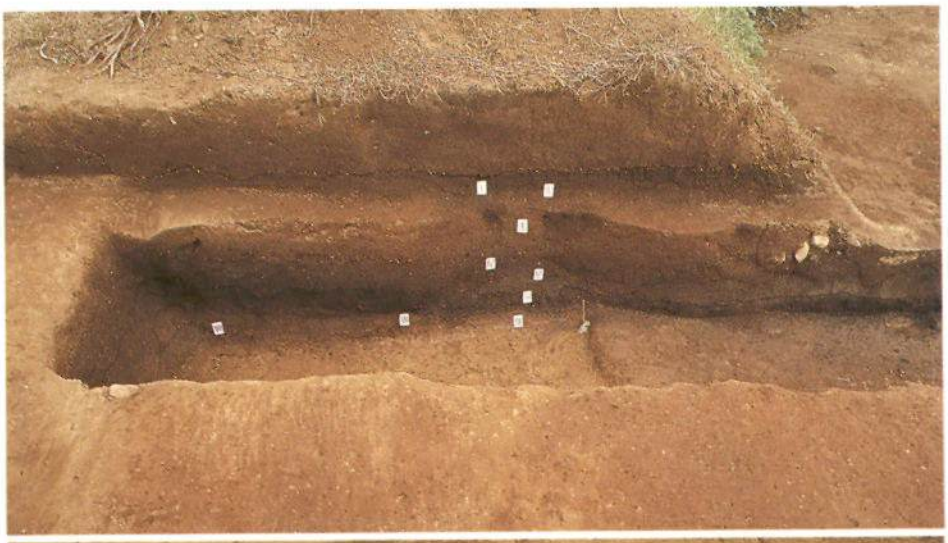
朝倉郡朝倉町所在

金　場　遺　跡

金場遺跡全景（東上空から）（気球写真）

金場遺跡Ⅰ区全景（西南上空から）（気球写真）

金場遺跡Ⅱ区南半全景（南上空から）（気球写真　以上３点は大塚清美氏撮影）



(1)　Ⅰ区
中央トレンチ
（西から）

(2)　Ⅰ区
グリッド㋓
東壁（西から）

(3)　Ⅰ区グリッド㋐㋑北東隅（南から）
火山灰分析試料採取場所

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施してきた，九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告は，朝倉郡朝倉町所在の金場遺跡についてのものであります。その内容は，旧石器時代から縄文時代前期・晩期，弥生時代前～中期初葉，古墳時代中期，７世紀代と各時期にわたって営まれた一大集落跡・墓地であります。また出土した旧石器や縄文時代の土器・石器，弥生時代の炭化米や豆類，古墳時代の鉄器等も貴重な資料であります。

他に例を見ない豊富な発掘成果を公開することができた本報告書を，研究・教育等の資料，文化財愛護思想の普及などにご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり，数々のご協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に心から感謝いたします。

平成11年３月31日

福　岡　県　教　育　委　員　会
教　育　長　　光　安　常　喜

例　言

1　本書は，昭和62・63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて，九州横断自動車道建設に伴って発掘調査を実施した報告である。

2　本書に収録した遺跡は，金場（かなば）遺跡である。福岡県朝倉郡朝倉町に所在し，高速道路完成後の山田サービスエリアの東側に位置する。なお，巻末に補遺として，報告書刊行後に整理ミスで出てきた治部ノ上遺跡出土玉類を併せて報告する。

3　本書掲載の発掘現場における遺構実測図・測量図は，日高正幸・渡辺輝子・牟田サエ子・矢野シズエ・高瀬セツ子・本石セツ子・中間研志が作成した。出土遺物の実測は，弥生土器・土師器・須恵器等を辻啓子・西田美代子・大野愛里が，縄文土器全てとⅠ区旧石器グリッドの石器及び縄文～弥生の打製石器・鉄器類を中間が，旧石器グリッド以外の遺構出土の打製石鏃等を松崎卓郎が，磨石・凹石等は林潤也が各々担当した。遺構・遺物の整図は江上佳子・松崎・林・福本寛が行った。

4　出土遺物の整理は，九州歴史資料館岩瀬正信氏の指導のもとに，県文化財保護課甘木事務所にて行い，同事務所に保管している。

5　遺構の写真撮影は中間が行い，空中写真はフォト・オオツカによる。出土遺物は九州歴史資料館にて北岡伸一が撮影した。

6　本書で使用した方位は，すべて座標北である。

7　自然科学的分析として，㈱京都フィッション・トラックによる土壌中火山灰抽出分析と，佐賀大学和佐野喜久生教授による炭化米の分析，㈱古環境研究所による炭化堅果・豆類の分析を依頼し，巻末に掲載した。短時間の中で快く受諾していただいた各位に感謝申し上げたい。

8　本書の執筆は，上記依頼分の他は中間が行い，編集は福本・松崎・林の補助を得て中間が担当した。

本 文 目 次

〈上　巻〉　頁

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　位置と環境……6

Ⅲ　旧石器～縄文時代の遺構と遺物……12

A　調査の概要……12
B　Ⅰ区旧石器グリッド……13
C　縄文時代の竪穴住居跡……49
D　縄文時代の集石炉……52
E　縄文時代の土壙……54
F　その他の遺構出土縄文土器……65
G　その他の遺構出土石器……118

Ⅳ　弥生～歴史時代の遺構と遺物……144

A　竪穴住居跡……144
B　掘立柱建物……189

〈下　巻〉

C　土壙……199
D　石棺系竪穴式石室……256
E　中原１号墳……262
F　その他の遺構出土遺物……270

Ⅴ　各　論

A　土壌中火山灰抽出分析報告（株式会社　京都フィッション・トラック）……285
B　金場遺跡の炭化米特性と稲作起源（和佐野喜久生・真鍋智子）……291
C　金場遺跡における種実同定（株式会社　古環境研究所）……303
D　集落の変遷……309
E　旧石器グリッド……320
F　弥生中期初葉土器について……326

Ⅵ　補　遺……329

挿　図　目　次

〈上　巻〉　　頁

Fig. 1　九州横断自動車道路線図 …… 4
Fig. 2　金場遺跡の位置（1/25,000） …… 7
Fig. 3　金場遺跡周辺地形図（1/2,000） …… 9
Fig. 4　金場遺跡主要遺構全体図（1/1,200） …… 11
Fig. 5　Ⅱ区北半西壁土層実測図（1/80)(本遺跡基本層序） …… 12
Fig. 6　Ⅰ区旧石器グリッド全体図（1/200） …… 14
Fig. 7　旧石器グリッド周辺トレンチ土層実測図（基本層序)(1/80) …… 15
Fig. 8　旧石器グリッド東西方向土層実測図（その1)(1/100) …… 17
Fig. 9　旧石器グリッド東西方向土層実測図（その2)(1/100) …… 18
Fig. 10　旧石器グリッド南北方向土層実測図（その1)(1/100) …… 19
Fig. 11　旧石器グリッド南北方向土層実測図（その2)(1/100) …… 20
Fig. 12　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅲ層)(1/200) …… 21
Fig. 13　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅵ層)(1/200) …… 22
Fig. 14　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅶ層)(1/200) …… 23
Fig. 15　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅸ層)(1/200) …… 24
Fig. 16　グリッドねいろ出土遺物垂直分布（1/75） …… 25
Fig. 17　Ⅰ区グリッド出土細石刃等実測図（実大） …… 27
Fig. 18　Ⅰ区グリッド出土石刃・翼状剥片等実測図（実大） …… 29
Fig. 19　Ⅰ区グリッド出土ナイフ形石器・台形様石器等実測図（実大） …… 33
Fig. 20　Ⅰ区グリッド出土台形様石器・彫器実測図（実大） …… 35
Fig. 21　Ⅰ区グリッド出土彫器・尖頭器等実測図（実大） …… 37
Fig. 22　Ⅰ区グリッド出土掻・削器実測図（実大） …… 39
Fig. 23　Ⅰ区グリッド出土掻・削器，石核実測図（実大） …… 41
Fig. 24　Ⅰ区グリッド出土石核実測図（実大） …… 42
Fig. 25　Ⅰ区グリッド出土石核・棒状石器実測図（88は1/2，他は実大） …… 43
Fig. 26　Ⅰ区グリッド出土打製石鏃実測図（実大） …… 45
Fig. 27　Ⅰ区グリッド出土凹石・磨石実測図（1/3） …… 47
Fig. 28　Ⅰ区グリッド出土縄文土器実測図（1/3） …… 49
Fig. 29　第13号住居跡実測図（1/60） …… 50
Fig. 30　第13号住居跡(1・2)，第1号集石炉(3)出土縄文土器実測図（1/3） …… 51

Fig. 31　第１～３号集石炉実測図（１/20）……53
Fig. 32　第17・18号土壙実測図（１/40，１/20）……55
Fig. 33　第18号土壙出土縄文土器実測図（１/３）……57
Fig. 34　第28・29号土壙実測図（１/40）……58
Fig. 35　第28号土壙出土縄文土器実測図（１/３）……59
Fig. 36　第30～32号土壙実測図（１/40）……60
Fig. 37　第30号土壙出土縄文土器実測図（１/３）……61
Fig. 38　第31号土壙(１)，第34号土壙(２～４)出土縄文土器実測図（１/３）……63
Fig. 39　第34～36号土壙実測図（１/40）……64
Fig. 40　その他の遺構出土縄文早・前期土器実測図（１/３）……65
Fig. 41　その他の遺構出土轟Ｂ式土器実測図（その１)(１/３）……67
Fig. 42　その他の遺構出土轟Ｂ式土器実測図（その２)(１/３）……69
Fig. 43　その他の遺構出土轟Ｂ式土器実測図（その３)(１/３）……71
Fig. 44　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その１)(１/３）……73
Fig. 45　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その２)(１/３）……75
Fig. 46　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その３)(１/３）……79
Fig. 47　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その４)(１/３）……81
Fig. 48　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その５)(１/３）……83
Fig. 49　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その６)(１/３）……85
Fig. 50　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その７)(１/３）……87
Fig. 51　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その８)(１/３）……89
Fig. 52　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その９)(１/３）……91
Fig. 53　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その10)(１/３）……92
Fig. 54　その他の遺構出土晩期マリ実測図（その１)(１/３）……93
Fig. 55　その他の遺構出土晩期マリ実測図（その２)(１/３）……95
Fig. 56　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その１)(１/３）……99
Fig. 57　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その２)(１/３）……101
Fig. 58　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その３)(１/３）……103
Fig. 59　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その４)(１/３）……105
Fig. 60　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その５)(１/３）……107
Fig. 61　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その６)(１/３）……109
Fig. 62　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その７)(１/３）……111
Fig. 63　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その８)(114のみ１/２，他は１/３）……113

Fig. 64　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その９）（１／３）　……115
Fig. 65　その他の遺構出土台形石器・尖頭器等実測図（実大）　……117
Fig. 66　その他の遺構出土尖頭器・石錐等実測図（実大）　……119
Fig. 67　その他の遺構出土石匙・石刃等実測図（実大）　……121
Fig. 68　その他の遺構出土石刃，掻・削器等実測図（実大）　……123
Fig. 69　その他の遺構出土掻・削器実測図（その１）（実大）　……124
Fig. 70　その他の遺構出土掻・削器実測図（その２）（実大）　……125
Fig. 71　その他の遺構出土掻・削器実測図（その３）（実大）　……127
Fig. 72　その他の遺構出土掻・削器実測図（その４）（実大，163のみ１／３）　……128
Fig. 73　その他の遺構出土掻・削器，石匙実測図（166のみ実大，他は２／３）　……129
Fig. 74　その他の遺構出土石匙・石核実測図（２／３）　……131
Fig. 75　その他の遺構出土石核実測図（２／３，１／３）　……133
Fig. 76　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その１）（実大）　……134
Fig. 77　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その２）（実大）　……135
Fig. 78　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その３）（実大）　……137
Fig. 79　その他の遺構出土石錘・凹石・磨石実測図（１～９は１／２，他は１／３）　……139
Fig. 80　その他の遺構出土磨石実測図（１／３）　……140
Fig. 81　その他の遺構出土打製石斧実測図（１／２）　……141
Fig. 82　その他の遺構出土打製・磨製石斧実測図（１／２）　……142
Fig. 83　その他の遺構出土磨製石斧実測図（１／２）　……143
Fig. 84　Ⅰ区遺構配置図（上層）（１/400）　……145
Fig. 85　Ⅱ区遺構配置図（上層）（１/400）　……146
Fig. 86　Ⅱ区遺構配置図（下層）（１/400）　……147
Fig. 87　Ⅲ区・Ⅰ区北西端部遺構配置図（１/600）　……148
Fig. 88　第１号住居跡実測図（１/60）　……149
Fig. 89　第１号住居跡出土土器実測図（１／４）　……150
Fig. 90　第２号住居跡実測図（１/60）　……150
Fig. 91　第２号住居跡出土土器実測図（１／３）　……151
Fig. 92　第３号住居跡実測図（１/60）　……152
Fig. 93　第３号住居跡カマド・第４号住居跡実測図（１/60，１/30）　……153
Fig. 94　第３号住居跡出土土器実測図（１／３）　……154
Fig. 95　第５号住居跡実測図（１/60）　……155
Fig. 96　第５号住居跡カマド実測図（１/30）　……156

Fig. 97　第５号住居跡出土土器実測図（１～７は１/３，８～10は１/４）……157
Fig. 98　第６号住居跡実測図（１/60）……158
Fig. 99　第６号住居跡カマド実測図（１/30）……159
Fig. 100　第６号住居跡出土土器実測図（その１）（１/３）……160
Fig. 101　第６号住居跡出土土器実測図（その２）（１/３）……161
Fig. 102　第７号住居跡実測図（１/60）……163
Fig. 103　第７号住居跡カマド実測図（１/30）……164
Fig. 104　第７号住居跡出土土器実測図（16のみ１/２，他は１/３）……165
Fig. 105　第８号住居跡・カマド実測図（１/60，１/30）……167
Fig. 106　第９号住居跡・カマド実測図（１/60，１/30）……168
Fig. 107　第９号住居跡出土土器実測図（１/３）……169
Fig. 108　第10号住居跡実測図（１/60）……170
Fig. 109　第11号住居跡実測図（１/60）……172
Fig. 110　第11号住居跡（１～８），第12号住居跡（９）出土土器実測図（８のみ１/３，他は１/４）……173
Fig. 111　第12号住居跡実測図（１/80）……176
Fig. 112　第14号住居跡実測図（１/60）……177
Fig. 113　第14号住居跡（１），第15号住居跡（２～７）出土土器実測図（１/３）……178
Fig. 114　第15号住居跡実測図（１/60）……179
Fig. 115　第15号住居跡カマド実測図（１/30）……180
Fig. 116　第16号住居跡実測図（１/60）……181
Fig. 117　第16号住居跡（１），第17号住居跡（２～８），第18号住居跡（９）出土土器実測図（１/３）……182
Fig. 118　第17・18号住居跡実測図（１/60）……183
Fig. 119　第17号住居跡カマド実測図（１/30）……184
Fig. 120　第18号住居跡カマド実測図（１/30）……186
Fig. 121　第19号住居跡・カマド実測図（１/60，１/30）……188
Fig. 122　第１号掘立柱建物実測図（１/80）……190
Fig. 123　第１号建物（１～18），第３号建物（19），第４号建物（20～24），第５号建物（25・26）出土土器実測図（１/３）……191
Fig. 124　第２号掘立柱建物実測図（１/80）……192
Fig. 125　第３号掘立柱建物実測図（その１）（１/80）……194
Fig. 126　第３号掘立柱建物実測図（その２）（１/80）……195

Fig. 127　第４号掘立柱建物実測図（１/80）……196
Fig. 128　第５号掘立柱建物実測図（１/80）……197
Fig. 129　第６号掘立柱建物実測図（１/80）……198
〈下　巻〉
Fig. 130　第１・２号土壙実測図（１/40）……200
Fig. 131　第１号土壙(１)，第２号土壙(２～11)出土土器実測図（１/４）……201
Fig. 132　第３～５号土壙実測図（１/40）……202
Fig. 133　第３号土壙出土土器実測図（１/３）……203
Fig. 134　第４号土壙出土土器実測図（１/４）……204
Fig. 135　第５号土壙(１～３)，第６号土壙(４～８)，第７号土壙(９)，第８号土壙(10)
出土土器実測図（１/３）……205
Fig. 136　第６号土壙実測図（１/60）……206
Fig. 137　第７～９号土壙実測図（１/40）……207
Fig. 138　第10号土壙実測図（１/60）……209
Fig. 139　第10号土壙出土土器実測図（１/３）……211
Fig. 140　第11・12号土壙実測図（１/40）……212
Fig. 141　第11号土壙出土土器実測図（１/４）……213
Fig. 142　第12号土壙出土土器実測図（１/４）……215
Fig. 143　第13号土壙実測図（１/40，１/20）……216
Fig. 144　第13号土壙周溝内出土土器実測図（１/３）……217
Fig. 145　第14号土壙実測図（１/40）……218
Fig. 146　第14号土壙出土土器実測図（その１)(１/４）……219
Fig. 147　第14号土壙出土土器実測図（その２)(１/４）……221
Fig. 148　第14号土壙出土土器実測図（その３)(１/４）……223
Fig. 149　第15号土壙実測図（１/60）……225
Fig. 150　第15号土壙(１～９)，第16号土壙(10～12)，第17号土壙(13～18)，第19号土壙
(19)，第20号土壙(20)出土土器実測図（１/３）……226
Fig. 151　第16号土壙実測図（１/60）……227
Fig. 152　第19・20号土壙実測図（１/40）……229
Fig. 153　第21・22号土壙実測図（１/20，１/40）……231
Fig. 154　第21号土壙出土土器実測図（その１)(１/４）……232
Fig. 155　第21号土壙出土土器実測図（その２)(１/４）……233
Fig. 156　第22号土壙出土土器実測図（１/４）……235

Fig. 157　第23・24号土壙実測図（1/40）……237
Fig. 158　第23号土壙出土土器実測図（その1）（1/4）……238
Fig. 159　第23号土壙出土土器実測図（その2）（1/4）……239
Fig. 160　第23号土壙出土土器実測図（その3）（1/4）……240
Fig. 161　第24号土壙出土土器実測図（1/4）……241
Fig. 162　第25・26号土壙実測図（1/40，1/20）……242
Fig. 163　第26号土壙（1～3），第27号土壙（4～9）出土土器実測図（4・5・7は1/4，他は1/3）……243
Fig. 164　第27号土壙実測図（1/60）……245
Fig. 165　第29号土壙（1～5），第32号土壙（6・7）出土土器実測図（1/4）……246
Fig. 166　第33号土壙実測図（1/60）……247
Fig. 167　第33号土壙出土土器実測図（1/4）……249
Fig. 168　第35号土壙（1・2），第36号土壙（3～9），第37号土壙（10・11）出土土器実測図（1/4）……251
Fig. 169　第37・38号土壙実測図（1/40）……252
Fig. 170　第38号土壙出土土器実測図（その1）（1/4）……253
Fig. 171　第38号土壙出土土器実測図（その2）（1/4）……255
Fig. 172　C1実測図（1/100）……256
Fig. 173　C1主体部実測図（1/30）……257
Fig. 174　C1出土土器実測図（1/3）……258
Fig. 175　金場遺跡出土刀子実測図（1/2）……258
Fig. 176　C2実測図（1/30）……259
Fig. 177　C3実測図（1/100）……260
Fig. 178　C3主体部実測図（1/30）……261
Fig. 179　中原1号墳（現況）墳丘測量図（1/200）……263
Fig. 180　中原1号墳（周溝掘削後）墳丘測量図（1/200）……263
Fig. 181　中原1号墳（地山整形状況）墳丘測量図（1/200）……264
Fig. 182　中原1号墳墳丘断面実測図（1/60）……265
Fig. 183　中原1号墳石室実測図（その1）（1/60）……266
Fig. 184　中原1号墳石室実測図（その2）（1/60，1/30）……267
Fig. 185　中原1号墳出土土器実測図（1/3）……268
Fig. 186　中原1号墳出土鉄器実測図（1/2）……269
Fig. 187　その他の遺構出土弥生土器実測図（その1）（1/4）……271

Fig. 188　その他の遺構出土弥生土器実測図（その２）（１／４）……273
Fig. 189　その他の遺構出土弥生土器実測図（その３）（１／４）……275
Fig. 190　その他の遺構出土須恵器実測図（その１）（１／３）……277
Fig. 191　その他の遺構出土須恵器実測図（その２）（１／３）……278
Fig. 192　その他の遺構出土土師器等実測図（その１）（１／３）……279
Fig. 193　その他の遺構出土土師器等実測図（その２）(31・32は１／４，41は１／２，他は１／３）……281
Fig. 194　磨製石斧・石庖丁・紡錘車等実測図（１／２）……282
Fig. 195　敲石・砥石実測図（１／３）……283
Fig. 196　玉・土錘・鞴羽口実測図（１～３は実大，他は１／２）……284
Fig. 197　火山灰試料採取地点土層模式柱状図および分析結果（０～230㎝，10㎝間隔）…286, 287
Fig. 198　火山灰分析柱状資料写真……289
Fig. 199　火山ガラス顕微鏡写真……290
Fig. 200　金場遺跡の位置と筑紫平野の地形図……292
Fig. 201　金場及び比較遺跡（北部九州・韓国）の炭化米粒長・幅平均値の分布図……294
Fig. 202　金場及び比較遺跡の炭化米粒長・幅の平均値（付・95%信頼区間）の分布図…295
Fig. 203　金場遺跡の炭化米粒長の頻度分布図……296
Fig. 204　金場遺跡の炭化米……301
Fig. 205　金場遺跡の種実……307
Fig. 206　金場遺跡集落変遷図（その１）（１/800）……310
Fig. 207　金場遺跡集落変遷図（その２）（１/800）……313
Fig. 208　金場遺跡集落変遷図（その３）（１/800）……315
Fig. 209　金場遺跡集落変遷図（その４）（１/800）……317
Fig. 210　金場遺跡集落変遷図（その５）（１/800）……319
Fig. 211　Ｉ区グリッド出土石器の石材別各層位出土状況……322
Fig. 212　旧石器グリッド層位別出土石器群（その１）（３/800）……324
Fig. 213　旧石器グリッド層位別出土石器群（その２）（３/800）……325
Fig. 214　治部ノ上Ａ１号石蓋土壙墓出土管玉（実大）……329

表 目 次

〈上　巻〉　頁

Tab. 1　金場遺跡出土細石刃等一覧 ……28

〈下　巻〉　頁

Tab. 2　数量一覧表……285
Tab. 3　金場遺跡Ⅰ区グリッド㋔北壁地点ガラス濃集層準とその特徴……288
Tab. 4　稲粒（米，籾）特性の指数，指数別階級値及び特性の表現法（和佐野　1995）…291
Tab. 5　稲粒（米，籾）の粒長・粒幅指数による粒型分類（和佐野　1995）……293
Tab. 6　金場及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差……294
Tab. 7　金場及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差……297
Tab. 8　金場及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差……297
Tab. 9　金場及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表……299
Tab. 10　金場遺跡出土アワ？果実，ササゲ属種子の計測値（任意に抽出した20個を計測）…305
Tab. 11　金場遺跡出土種実（弥生時代中期初頭）同定結果……306
Tab. 12　Ⅰ区グリッド出土石器一覧……321
Tab. 13　金場遺跡出土甕形土器分類表……327

図 版 目 次

〈下　巻〉

PL. 1　金場遺跡全景（南東上空から　気球写真）
PL. 2　(1)　金場遺跡Ⅰ区全景（北西上空から　気球写真）
　　(2)　金場遺跡Ⅱ区全景（南上空から　気球写真）
PL. 3　(1)　金場遺跡Ⅲ区全景（南上空から　気球写真）
　　(2)　Ⅰ区旧石器グリッド全景（北西から）
PL. 4　(1)　Ⅰ区グリッド中央部分（北から）
　　(2)　Ⅰ区グリッド中央付近掘り下げ状況（ほぼ最下面）
PL. 5　(1)　Ⅰ区中央トレンチ東壁土層（西から）

(2)　Ⅰ区グリッド㋩東壁土層（西から）
PL. 6　(1)　Ⅰ区グリッド㋔北東隅土層（南西から）
(2)　竹村恵二氏の火山灰分析サンプル土採取状況（Ⅰ区グリッド㋔東壁）
PL. 7　(1)　竹村恵二氏の火山灰分析サンプル土採取状況（Ⅰ区グリッド㋔　南から）
(2)　Ⅰ区グリッド掘り上げ後の測量風景
PL. 8　(1)　Ⅰ区グリッド㋑完掘後（北から）
(2)　Ⅰ区グリッド㋑最下層掘り下げ状況（北から）
PL. 9　(1)　Ⅰ区グリッド㋔㋑石器出土状態（南から）
(2)　Ⅰ区グリッド南半発掘作業状況（北東から）
PL. 10　(1)　Ⅰ区グリッド㋔上半部発掘状況（南西から）
(2)　Ⅱ区北半西壁土層（東から）
PL. 11　(1)　第1号集石炉（北から）
(2)　第2号集石炉（東から）
PL. 12　(1)　第3号集石炉（西から）
(2)　Ⅰ区中央部上層遺構（西上空から　気球写真）
PL. 13　(1)　第1号竪穴住居跡・第2号土壙（北から）
(2)　第2号竪穴住居跡（南から）
PL. 14　(1)　第3号竪穴住居跡（南から）
(2)　第3号竪穴住居跡カマド（南から）
PL. 15　(1)　第3号竪穴住居跡下層（南から）
(2)　第4号竪穴住居跡（東から）
PL. 16　(1)　第4号竪穴住居跡カマド（東から）
(2)　第4号竪穴住居跡下層（東から）
PL. 17　(1)　第5・7号竪穴住居跡，第8・16号土壙（上空から　気球写真）
(2)　第5号竪穴住居跡南半部（南から）
PL. 18　(1)　第5号竪穴住居跡南半部下層（南から）
(2)　第5号竪穴住居跡北半部（南から）
PL. 19　(1)　第5号竪穴住居跡カマド（南から）
(2)　第5号竪穴住居跡下層（南から）
PL. 20　(1)　第6号竪穴住居跡北半部（西から）
(2)　第6号竪穴住居跡北半部下層（南から）
PL. 21　(1)　第6号竪穴住居跡カマド（南から）
(2)　第6号竪穴住居跡南半部（北から）

PL. 22 (1) 第6号竪穴住居跡南半部下層（北から）
(2) 第7・3号竪穴住居跡，第16・8号土壙，第2号掘立柱建物（北から）
PL. 23 (1) 第7号竪穴住居跡（南から）
(2) 第7号竪穴住居跡カマド（南から）
PL. 24 (1) 第7号竪穴住居跡下層（南から）
(2) 第8号竪穴住居跡（南から）
PL. 25 (1) 第8号竪穴住居跡カマド（南から）
(2) 第8号竪穴住居跡下層（南から）
PL. 26 (1) 第9号竪穴住居跡北東半部（南西から）
(2) 第9号竪穴住居跡北東半部下層（南西から）
PL. 27 (1) 第9号竪穴住居跡カマド（南西から）
(2) 第9号竪穴住居跡下層（南西から）
PL. 28 (1) 第10号竪穴住居跡（北から）
(2) 第11号竪穴住居跡（西から）
PL. 29 (1) 第12号竪穴住居跡（北から）
(2) 第13号竪穴住居跡（北から）
PL. 30 (1) 第14号竪穴住居跡（南から）
(2) 第15号竪穴住居跡（南から）
PL. 31 (1) 第15号竪穴住居跡カマド（南から）
(2) 第15号竪穴住居跡下層（南から）
PL. 32 (1) 第16号竪穴住居跡（南から）
(2) 第16号竪穴住居跡下層（南から）
PL. 33 (1) 第17・18号竪穴住居跡（東から）
(2) 第17号竪穴住居跡カマド（南から）
PL. 34 (1) 第18号竪穴住居跡カマド（東から）
(2) 第17・18号竪穴住居跡下層（東から）
PL. 35 (1) 第19号竪穴住居跡（東から）
(2) 第1号掘立柱建物周辺（上空から　気球写真）
PL. 36 (1) 第2号掘立柱建物，第3・7号竪穴住居跡周辺（上空から　気球写真）
(2) 第4号掘立柱建物（西から）
PL. 37 (1) 第4号掘立柱建物，第4・8・9号竪穴住居跡周辺（上空から　気球写真）
(2) 第1号土壙（西から）
PL. 38 (1) 第2号土壙（東から）

(2) 第3号土壙（東から）
PL. 39 (1) 第4号土壙（南から）
(2) 第5号土壙（北から）
PL. 40 (1) 第6号土壙（西から）
(2) 第7・14・15号土壙周辺（上空から　気球写真）
PL. 41 (1) 第7号土壙（北から）
(2) 第8号土壙（北から）
PL. 42 (1) 第9号土壙（北から）
(2) 第10号土壙（東から）
PL. 43 (1) 第11号土壙（西から）
(2) 第12号土壙（南から）
PL. 44 (1) 第13号土壙（西から）
(2) 第14（手前）・15号土壙（東から）
PL. 45 (1) 第14号土壙（東から）
(2) 第14号土壙土器出土状態（南から）
PL. 46 (1) 第14号土壙完掘後（東から）
(2) 第15号土壙（西から）
PL. 47 (1) 第15号土壙完掘後（北から）
(2) 第16号土壙（東から）
PL. 48 (1) 第17号土壙（南西から）
(2) 第17号土壙土器出土状態（南西から）
PL. 49 (1) 第18号土壙（西から）
(2) 第19号土壙（北から）
PL. 50 (1) 第20号土壙（北東から）
(2) 第21号土壙（北西から）
PL. 51 (1) 第22号土壙（北から）
(2) 第23号土壙（南東から）
PL. 52 (1) 第24号土壙（北から）
(2) 第25号土壙（東から）
PL. 53 (1) 第26号土壙（北東から）
(2) 第27号土壙（南から）
PL. 54 (1) 第28号土壙と第3号集石炉（北から）
(2) 第28号土壙内轟B式土器出土状態（西から）

PL. 55 (1) 第29号土壙（東から）
(2) 第30号土壙（東から）
PL. 56 (1) 第31号土壙（東から）
(2) 第32号土壙（西から）
PL. 57 (1) 第33号土壙（東から）
(2) 第34号土壙（西から）
PL. 58 (1) 第35号土壙（東から）
(2) 第36号土壙（東から）
PL. 59 (1) 第37号土壙（東から）
(2) 第38号土壙（南から）
PL. 60 (1) C 1 全景（上空から　気球写真）
(2) C 1 埋葬主体部（南から）
PL. 61 (1) C 1 埋葬主体部（西から）
(2) C 2 （南から）
PL. 62 (1) C 2 蓋石除去後（南から）
(2) C 3 （北から）
PL. 63 (1) 中原 1 号墳発掘前の残存状況（西から）
(2) 中原 1 号墳発掘前の残存状況（南から）
PL. 64 (1) 中原 1 号墳完掘後全景（南東から）
(2) 中原 1 号墳玄室奥壁と左壁（東から）
PL. 65 (1) 中原 1 号墳石室全景（南東から）
(2) 中原 1 号墳玄門付近（北東から）
PL. 66 (1) 中原 1 号墳前庭部土器出土状態（北東から）
(2) 中原 1 号墳北東側墳丘と周溝の土層（南東から）
PL. 67 (1) 中原 1 号墳北西側墳丘と周溝の土層（北東から）
(2) Ⅱ区第 7 号竪穴住居跡付近発掘作業状況
PL. 68 (1) Ⅰ区グリッド出土細石刃
(2) Ⅰ区グリッド出土台形様石器等
PL. 69 (1) Ⅰ区グリッド出土小型石刃・石刃・翼状剥片
(2) 同上裏面
PL. 70 (1) Ⅰ区グリッド出土ナイフ形石器・台形石器
(2) 同上裏面
PL. 71 (1) Ⅰ区グリッド出土彫器・尖頭器

(2) 同上裏面
PL. 72 (1) Ⅰ区グリッド出土掻・削器，石核
(2) 同上裏面
PL. 73 (1) Ⅰ区グリッド出土掻・削器
(2) 同上裏面
PL. 74 (1) Ⅰ区グリッド出土石核
(2) Ⅰ区グリッド出土打製石鏃
PL. 75 (1) Ⅰ区グリッド出土打製石鏃
(2) Ⅰ区グリッド出土棒状石器・磨石・凹石
PL. 76 (1) Ⅰ区グリッド出土縄文土器
(2) 上：第1号集石炉・第13号住居跡出土土器
下：第18号土壙出土縄文晩期浅鉢
PL. 77 (1) 第18号土壙出土縄文晩期土器
(2) 第28号土壙出土縄文前期轟B式土器
PL. 78 (1) 第28号土壙出土縄文前期土器
(2) 同上裏面
PL. 79 (1) 第30号土壙出土縄文前期轟B式土器
(2) 第31・34号土壙出土縄文前期・晩期土器
PL. 80 (1) その他の遺構出土縄文早・前期土器
(2) 同上裏面
PL. 81 (1) その他の遺構出土轟B式土器
(2) その他の遺構出土轟B式土器
PL. 82 (1) その他の遺構出土轟B式土器
(2) その他の遺構出土轟B式土器
PL. 83 (1) その他の遺構出土轟B式土器
(2) その他の遺構出土轟B式土器
PL. 84 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類系
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類系
PL. 85 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類
PL. 86 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A・C類
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A・C類
PL. 87 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢C類

(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B類系
PL. 88 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B類
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B3類
PL. 89 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B3類
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢D類
PL. 90 (1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢D・H類
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢直口類・柿原2C類
PL. 91 (1) その他の遺構出土縄文晩期マリB類系
(2) その他の遺構出土縄文晩期マリB1類
PL. 92 (1) その他の遺構出土縄文晩期マリA・B類
(2) その他の遺構出土縄文晩期マリE類等
PL. 93 (1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢A・B類
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢C・D類
PL. 94 (1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢C・D類
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類
PL. 95 (1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類
PL. 96 (1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類系古段階
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類系古段階
PL. 97 (1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類・鉢
(2) その他の遺構出土縄文晩期粗製深鉢
PL. 98 (1) その他の遺構出土縄文晩期粗製深鉢
(2) その他の遺構出土台形石器・尖頭器・異形石器
PL. 99 (1) その他の遺構出土尖頭器・石錐・石匙
(2) 同上裏面
PL. 100 (1) その他の遺構出土石刃，掻・削器
(2) 同上裏面
PL. 101 (1) その他の遺構出土掻・削器
(2) 同上裏面
PL. 102 (1) その他の遺構出土掻・削器
(2) 同上裏面
PL. 103 (1) その他の遺構出土石匙，掻・削器
(2) その他の遺構出土掻・削器

PL. 104 (1)　その他の遺構出土削器・石核
(2)　その他の遺構出土石核
PL. 105 (1)　その他の遺構出土打製石鏃
(2)　その他の遺構出土打製石鏃
PL. 106 (1)　その他の遺構出土打製石鏃
(2)　その他の遺構出土打欠ち石錘
PL. 107 (1)　その他の遺構出土凹石・磨石
(2)　その他の遺構出土磨石・敲石
PL. 108 (1)　その他の遺構出土磨石
(2)　その他の遺構出土磨石・砥石
PL. 109 (1)　その他の遺構出土偏平打製石斧
(2)　その他の遺構出土偏平打製石斧
PL. 110 (1)　その他の遺構出土磨製石斧
(2)　その他の遺構出土磨製石斧・砥石
PL. 111　第１・３・５・６・11号住居跡出土土器
PL. 112　第15号住居跡，第１号掘立柱建物跡，第２・４・５号土壙出土土器
PL. 113　第10・12・13号土壙出土土器
PL. 114　第14・15・17・19号土壙出土土器
PL. 115　第21号土壙出土土器
PL. 116　第21・23・24・26号土壙出土土器
PL. 117　第27・29・32・36号土壙出土土器
PL. 118　Ｃ１・２等出土刀子，中原１号墳出土土器
PL. 119　中原１号墳出土鉄鏃，中原１号墳出土鉄釘
PL. 120　その他の遺構出土土器，石剣，石庖丁，鞴の羽口，鉄滓，土錘，紡錘車，玉類
右下は治部ノ上Ａ１号石蓋土壙墓出土管玉
PL. 121 (1)　Ⅱ区発掘調査状況
(2)　発掘調査のオールスタッフ

Ⅰ 調査の経過

九州横断自動車道建設は昭和62年度には最盛期となり，朝倉町～杷木町間の埋蔵文化財発掘調査も大詰めを迎えつつあった。

昭和62年４月末～５月初旬に本金場遺跡（第34地点）の重機による試掘調査を実施した。その結果，縄文早期・晩期，弥生中期初葉，７Ｃ代の遺物・遺構の存在が多く確認された。試掘面積は680㎡のみであったが，約16,000㎡の全面について本調査が必要との結論を得た。

現地の発掘調査は，昭和63年２月１日から遺跡最上面の表土除去作業に入り，作業員を導入しての本発掘調査は年度が改まった昭和63年４月19日に開始した。以後７ケ月余をかけて調査を実施し，11月26日に終了した。以下に，日誌を抄録して調査工程を報告しておきたい。

昭和62年４月25日　第34地点の重機による試掘調査開始。
　　５月６日　同上終了。
昭和63年２月１日　重機による表土剝ぎ開始。
　　４月19日　現地本発掘調査開始。第29地点から機材移動。Ⅰ区遺構検出開始。
　　４月22日　中原１号墳の発掘調査をⅠ区と併行して開始。
　　５月２日　Ⅱ区遺構確認作業開始。竪穴住居跡を多数検出する。
　　５月16日　Ⅰ・Ⅱ区に実測用杭を全面設置。
　　５月17日　中原１号墳石室全体写真撮影。Ⅱ区から轟Ｂ式土器，石匙等が出土し，縄文時代遺構の所在が予想される。
　　７月４日　炭化ドングリピット（第20号土壙）発見。
　　７月15日　夕方，集中豪雨。この前後雨ばかりで，水揚げに手間取る。
　　７月18日　Ⅲ区斜面の遺構検出・掘り下げ作業開始。
　　８月６日　全景の気球写真撮影（フォト・オオツカによる）。
　　８月８日　Ⅰ区各竪穴住居跡の下層掘り下げ開始。
　　８月11日　Ⅱ区北半の縄文～弥生前期末の包含層掘り下げ開始。
　　10月３日　Ⅰ区中央トレンチ掘り下げ。Ⅰ～Ⅸ層の石器包含層を確認。
　　10月５日　Ⅰ区旧石器グリッドを設定し，掘り下げ開始。
　　10月20日　Ⅰ区旧石器グリッド掘り下げを中断して，Ⅱ区中央を東西に走る農道下部分の調査に入る。
　　10月29日　Ⅰ区グリッドの掘り下げ再開。
　　11月４日　京大地球物理学研究室の竹村恵二氏来訪。Ⅰ区グリッド㋔東壁・㋟東壁の土壌サンプルを採取。

11月７日　Ⅱ区南端工事用道路下の遺構調査開始。竪穴住居跡４軒等。

11月８日　Ⅰ区グリッド㋔北壁・㋟東壁・㋙北壁の土壌試料を柱状に切り取る。そのうち，㋔北壁のものを㈱京都フィッション・トラックへ，火山灰分析用に送る。

11月17日　第37号土壙から炭化米・ドングリ・他豆類等多量出土。以後，終了時まで水洗・選別作業を継続する。

11月26日　機材片付け。現場発掘作業終了。

調査範囲は，STA219～221の高速道路本線幅全体に当り，金場遺跡の発掘調査総面積は15,400㎡に及んだ。その結果，旧石器時代の小型ナイフ形石器～細石刃文化期についての細密な調査ができて，その成果は大きかった。続いて，縄文時代早期の集石炉跡や轟Ｂ式土器の多量出土，晩期中葉を中心とする夥しい土器・石器，集落の様相など，近年北部九州では稀に見る成果を得ることができた。更に，弥生中期初葉の松菊里型住居で構成される集落跡，古墳時代初～中期の石棺系竪穴式石室群，７Ｃ代のカマドを持つ竪穴住居群やしっかりした掘立柱建物群などは，山間部の単なる一集落跡などでは更々無く，拠点的性格を充分に持つ一大集落跡と考えられ，極めて注目される。以上，いずれの時期をとってみても，看過できない重要な発掘成果となった。

なお，発掘調査にあたり，日本道路公団・朝倉町教育委員会・地元の作業員の方々には，長期間にわたり，種々御協力を頂いた。厚く御礼申し上げたい。更に，㈱京都フィッション・トラックの檀原徹氏，京大地球物理学研究室竹村恵二氏には，土壌中の火山灰分析等で有意義な御教示を賜った。心から感謝申し上げたい。

昭和63年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	杉田　美昭
	臼井　　信
次　長	吉岡　康行
	進　　哲美
総務部長	進　　哲美
	堀　　義任
管理課長	副島　紀昭
管理課長代理	三野　徳博
	荒木　恒久

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	風間　　徹
副 所 長	藤田　栄三
庶務課長	大河　尋光
用地課長	松尾　伸男
工務課長	豊里　栄吉
朝倉工事区工事長	上野　　満

福岡県教育委員会

総　　括

教 育 長	竹井　　宏
教育次長	大鶴　英雄
	渕上　雄幸
指導第二部長	大平　岩男
文化課長	葉石　　勲
文化課長補佐	平　　聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏
文化課参事補佐	中矢　真人
〃　〃	栗原　和彦
〃　〃	大塚　　健
〃　〃	柳田　康雄
〃　〃	松尾　正俊

庶　　務

文化課庶務係長	池原　脩二
〃　主任主事	沢田　俊夫

調　　査

文化課調査班総括	柳田　康雄（兼）
〃　技術主査	井上　裕弘（調査担当）
〃　〃	木下　　修
〃　〃	中間　研志（調査担当）
〃　主任技師	伊崎　俊秋
〃　技　　師	小田　和利
〃　〃	水ノ江和同
〃　文化財専門員	木村幾多郎

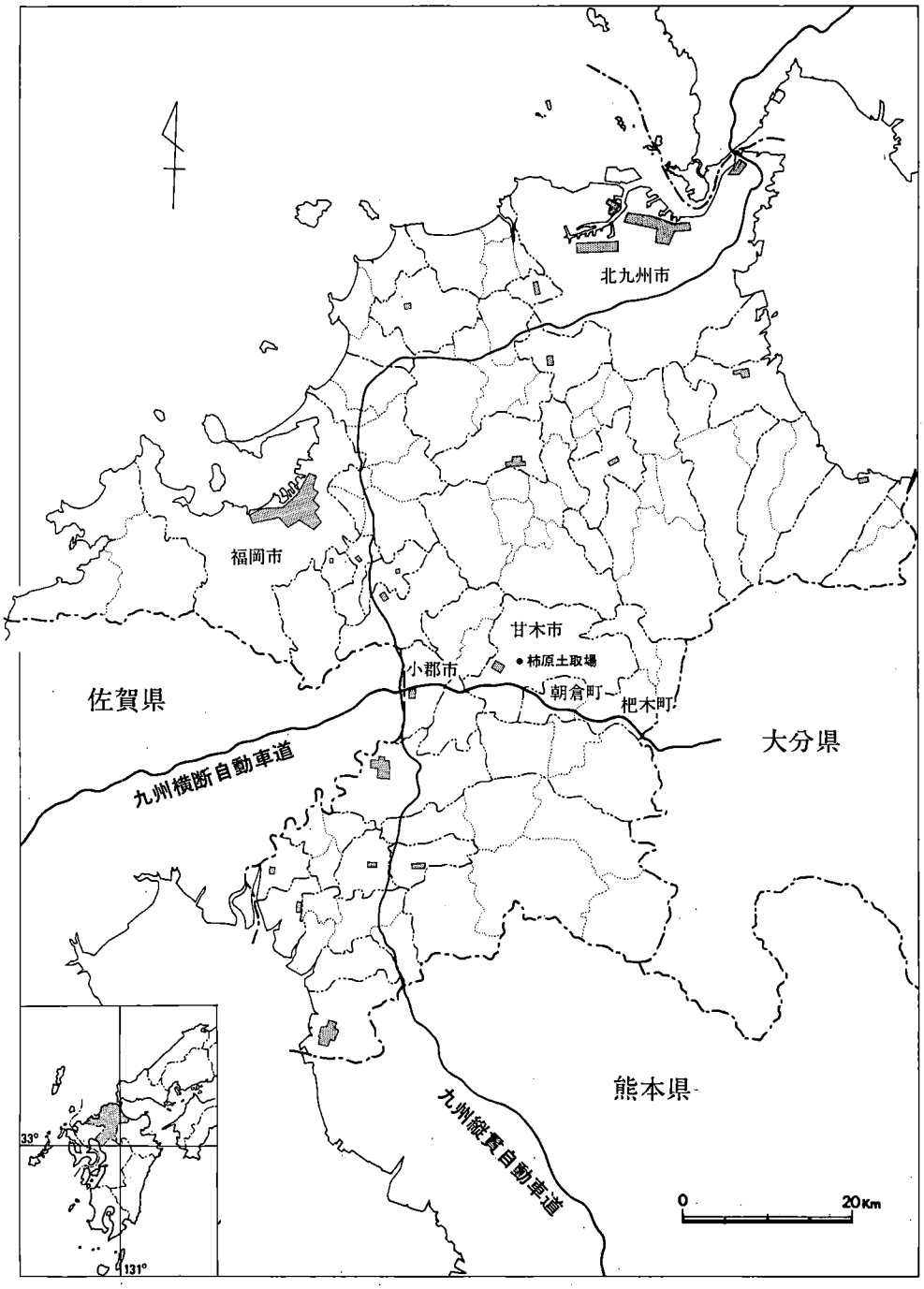


Fig. 1　九州横断自動車道路線図

〃　臨時職員　　日高　正幸
〃　調査補助員　　高田　一弘
〃　　〃　　武田　光正

発掘調査作業員

石松又次郎　篠原清彦　国武昌治　浦塚義則　半田久子　半田松子　足立シズカ
岩下スミ子　岩下陽子　岩下キヨ子　岩下トミ子　岩下ヨシ子　岩下テル子
岩下チヅ子　天野ヨシエ　松尾テル子　星野宏子　星野美代子　小林あい子
一の宮通子　大田ミヨ子　井上キヨノ　古賀フミエ　藤井ナツ子　武内タツ子
土井イト　星野禮子　本園セツ子　井上シズエ　上野チエ子　上野ミツ子　森君子
石田ミチ子　仲山シズカ　古賀サワ子　田中光子　田中久枝　林ヒロ子　江藤クニ子
鶴川安美　稲葉博香　野村けい子　渡辺輝子　牟田サエ子　矢野シズエ　高瀬セツ子
本石セツ子　（順不同）

なお，本報告書作成に係る平成10年度の組織は以下のとおりである。

日本道路公団九州支社

支社長　　青木　秀明
用地部長　　原賀　　寛
管理課長　　松尾　俊昭
管理課長代理　　酒井　正弘
〃　担当　　豊住　正哉
〃　担当　　上別府　勲

日本道路公団日田工事事務所

所　　長　　藤木　和哉
庶務課長　　大野　誠治

福岡県教育委員会

総　　括

教育長　　光安　常喜
教育次長　　藤吉純一郎
総務部長　　富永　　勲
文化財保護課長　　石松　好雄
〃　参事　　柳田　康雄

〃　課長技術補佐　　井上　裕弘
〃　課長補佐　　角　　伸幸
〃　調査第一係長　　橋口　達也
〃　調査第二係長　　佐々木隆彦

庶　務

文化財保護課管理係長　　角　　伸幸（兼）
〃　事務主査　　鶴我　哲夫
〃　主任主事　　田中　利幸
〃　〃　　佐藤　雅二

整理・報告書作成

文化財保護課参事補佐　　中間　研志（執筆担当）
整理指導員　　岩瀬　正信（遺物整理担当）
〃　　平田　春美（遺物実測担当）
〃　　豊福　弥生（製図担当）
〃　　塩足　里美（　〃　）
〃　　北岡　伸一（写真担当）
調査補助員　　松崎　卓郎（石器実測）
〃　　林　　潤也（　〃　）
〃　　福本　　寛（編集補助）

Ⅱ　位置と環境

金場（かなば）遺跡は，福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字金場722～724・726～730・736・737，字柳638・629-1・2，字長田908・912・913，字中原701・703・704・706・718番地に位置し，地目は畑・原野である。現在，大分自動車道の山田サービスエリアの東隣の本線内にあたる。

朝倉町は，福岡県のほぼ中央に位置し，筑紫太郎の異名を持つ筑後川の中流北岸にあたる。現在の朝倉町市街地の東方で，杷木町との境に近く，国道386号線の恵蘇宿の北側山麓に当遺跡は存在する。

遺跡の立地は，筑後川沖積地面から一段高くなった中位段丘の奥の方の，丘陵地裾際にあたる。遺跡の標高は51～71mであるが，うちⅠ・Ⅱ区の中位段丘の山裾の畑地は51～54mで，Ⅲ区の丘陵南斜面がそれ以上の急斜面となっている。即ち，北背後に麻底良（までら）山（標高294m）か

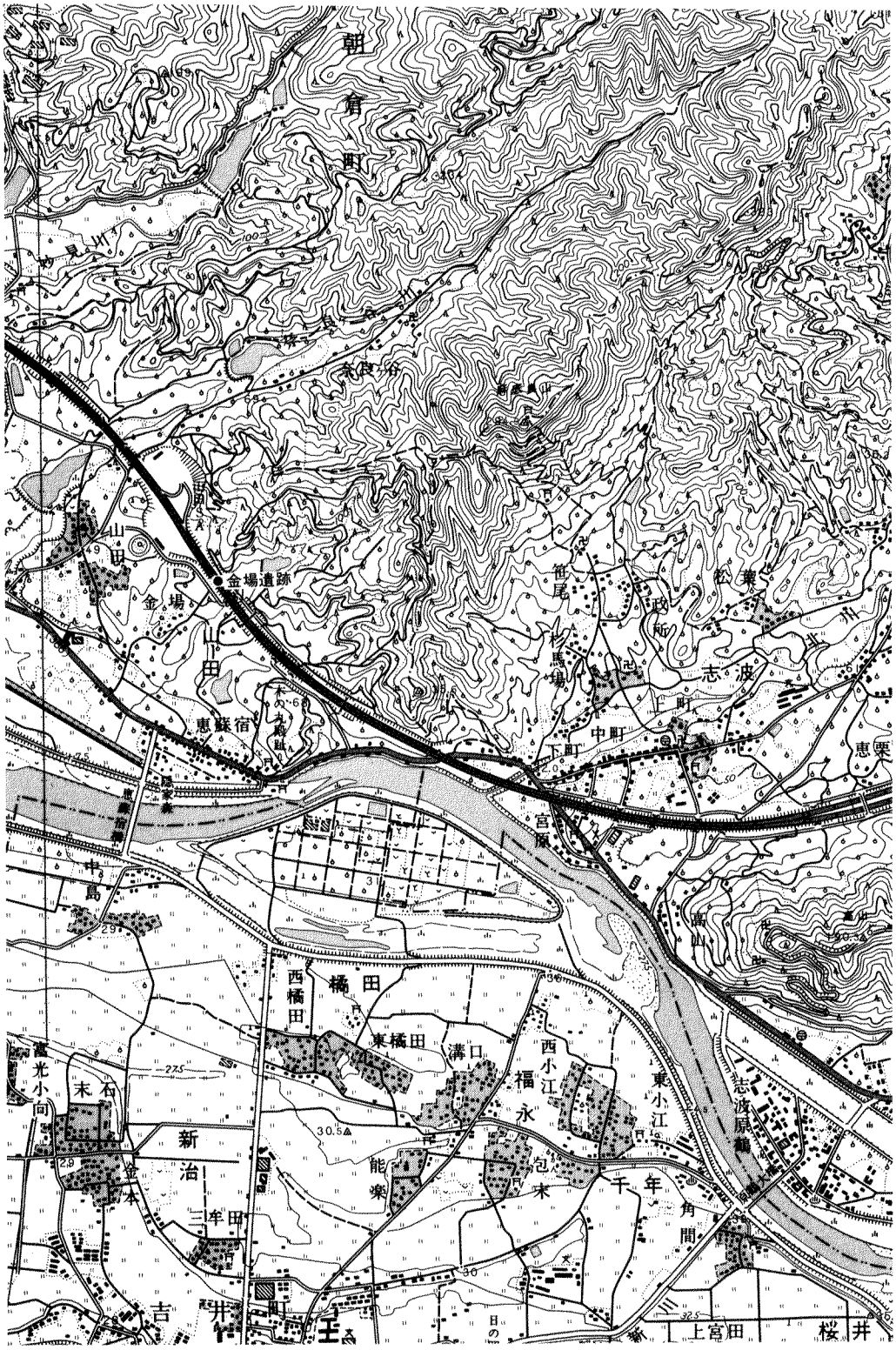


Fig. 2　金場遺跡の位置（1/25,000）

ら西南へ派生する丘陵に接し，南方に開けた中位段丘上に位置すると言える。750m南へ行くと現在の筑後川本流に至る。

金場遺跡の西隣に接して長田(おさだ)遺跡（註１）がある。縄文晩期のドングリピットや，弥生時代前期の貯蔵穴多数，円形住居跡１軒，弥生時代の長方形竪穴遺構，カマドを持つ古墳時代竪穴住居跡多数，製鉄炉１基，砂鉄貯蔵穴１基等が検出されている。金場遺跡の遺構群と比べると，縄文前期の遺物が極めて少量で，差が明確である。縄文晩期は，後葉中段階を中心とした土器の出土があり，金場遺跡と大旨共通しており，金場遺跡を集落の中心とした遺跡の拡がりと考えられよう。弥生前期末の貯蔵穴がかなりみられるが，金場遺跡では中期初葉のものが主体とされるため，時期的に両遺跡に僅かなずれが認められる。集落の移動があったと理解できるところである。古墳時代竪穴住居跡群は６Ｃ後半代を中心とするもので，金場遺跡のものが７Ｃも後半代を中心とするものと考える時，両遺跡の差が明確となる。集落の移動というよりも，全く違った原因で，新たに金場遺跡集落が形成されたと考える方が良かろう。というのも，金場遺跡では略同一時期の住居跡の規模の大小隔差が著しく，堂々とした掘立柱建物まで営まれているという，完結する拠点集落の様相を示すのに対し，長田遺跡ではほぼ均一の単純な一グループだけの集落で，派村的な状況を認めることができるからである。また，金場遺跡での古墳時代前～中期の墓地化，７Ｃ代の丘陵斜面の横穴式石室古墳の造営等は，長田遺跡にはみられず，遺跡の立地の違いを際立たせている。次に，長田遺跡の８Ｃ初葉段階の箱形製錬炉と山砂鉄貯蔵穴は，金場遺跡では全く不明の時期のものである。ただ，現在残る小字名である金場は，この近隣により大々的な製鉄・鍛冶関連集落の存在を予測させてくれる。これは今後の調査に期待できる所であろう。

長田遺跡の更に西隣の山田遺跡群（註２）は，現在の山田サービスエリアそのものの地点に当るが，旧地形が丘陵部そのものであったため，横穴式石室古墳３基と石棺・土壙墓群等の墓地のみの調査がなされている。５Ｃ代の石棺墓１基と６Ｃ後半～末の横穴式石室３基は，金場古墳群中原支群１号墳とした金場遺跡のものと共通するものであり，丘陵上～斜面の古墳群として隣あった古墳群の関係にあると言えよう。９Ｃ中頃前後とされる火葬蔵骨器は，金場遺跡Ⅲ区の丘陵斜面にぽつんと位置する第26号火葬土壙墓と共通する選地を示すと言えよう。火葬墓の集中する墓地としては，南東へ500ｍの大迫遺跡（註３）で丘陵南斜面を造成して立派な墓地を形成する類があるが，これとは異なり，山田・金場の両遺跡例では，点的に丘陵斜面に散在する様相を示している。

金場遺跡の東隣には，谷川を挟んだ向かい側の段丘上に上ノ宿遺跡（註４）が存在する。旧石器時代の小型ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器等がＡＴ火山灰の直上から出土していて貴重な成果を得ている。金場遺跡のＩ区グリッドの旧石器出土状況と比較できるもので，本文中で詳細な検討を加えてみたい。上ノ宿遺跡では縄文早・前・中・後・晩期の各時期の土器

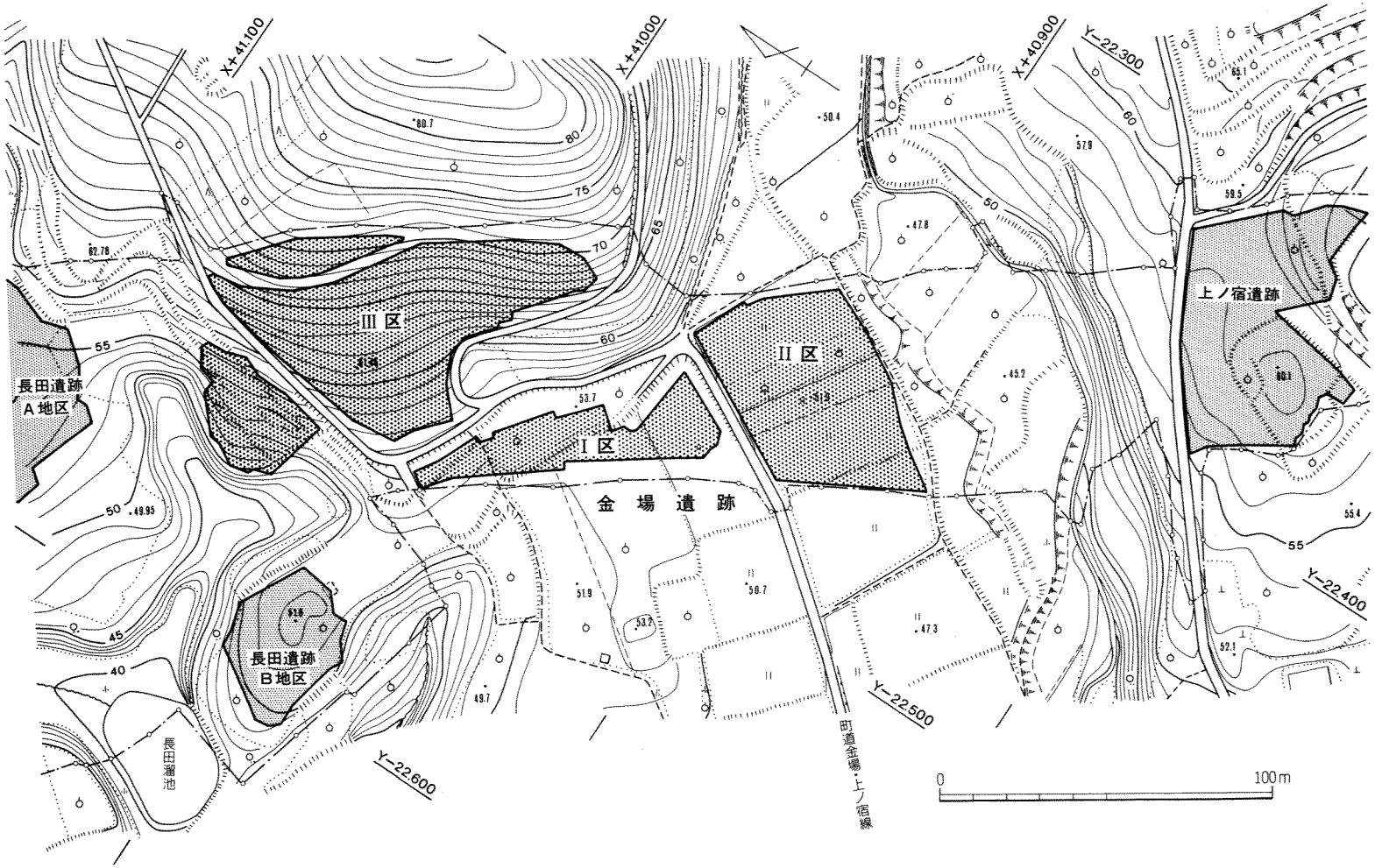


Fig. 3　金場遺跡周辺地形図（1/2,000）

が出土しているが，金場遺跡に比べ前期の土器の量が少なく，両者に差異が認められる。晩期は中葉のものを主体としており，金場遺跡と共通するものであるが，量的には少なく，集落の規模・性格が異なったものと理解できる。弥生時代中期初葉の甕棺墓地と木棺墓地が形成されており，金場遺跡での円形住居・貯蔵穴群の生活空間に対する墓地としての選地が行われており，両遺跡での役割分担が明瞭である。谷川という明確な自然の結界が生きていて，谷の東側台地上が彼岸ということであったのであろう。古墳時代に入ると石棺系竪穴式石室７基，竪穴系横口式石室１基，横穴式石室４基が営まれ，５Ｃ後半～６Ｃ末にわたる古墳群となる。これは金場遺跡での様相と同様であり，集落はより平野寄りに所在するものと考えられる。更に，７Ｃ段階では遺構・遺物が全く認められず，金場遺跡の集落最盛期の様相と全く異なる。

以上のように，ほんの隣の遺跡間での内容の異同については，全く驚嘆に価する。それ程，先人の選地意識はしっかりしたものであったと言うことができよう。勿論，各時期毎の選地条件は個々に異なるようであり，厳密に各遺跡毎の生活空間・墓地・生産地・特殊生業地等を検討してゆくべきであろう。

金場遺跡で多く出土して注目される縄文晩期の周辺遺跡の関連情報については，すでに柿原Ｉ縄文遺跡（註５），クリナラ縄文遺跡（註６）の中で詳細に検討したので参照されたい。本書での記述についてもこの両者の成果を基に報告していることをお断りしたい。

註　１）　井上裕弘・木村幾多郎・大澤正己「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―30―」福岡県教育委員会　1994

２）　小池史哲・栗原和彦・伊崎俊秋・日高正幸「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―23―」福岡県教育委員会　1992

３）　小田和利「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―24―」福岡県教育委員会　1992

４）　井上裕弘・木下修・木村幾多郎・武田光正「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―20―」福岡県教育委員会　1991

５）　中間研志「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―37―」福岡県教育委員会　1995

６）　中間「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―43―」福岡県教育委員会　1997

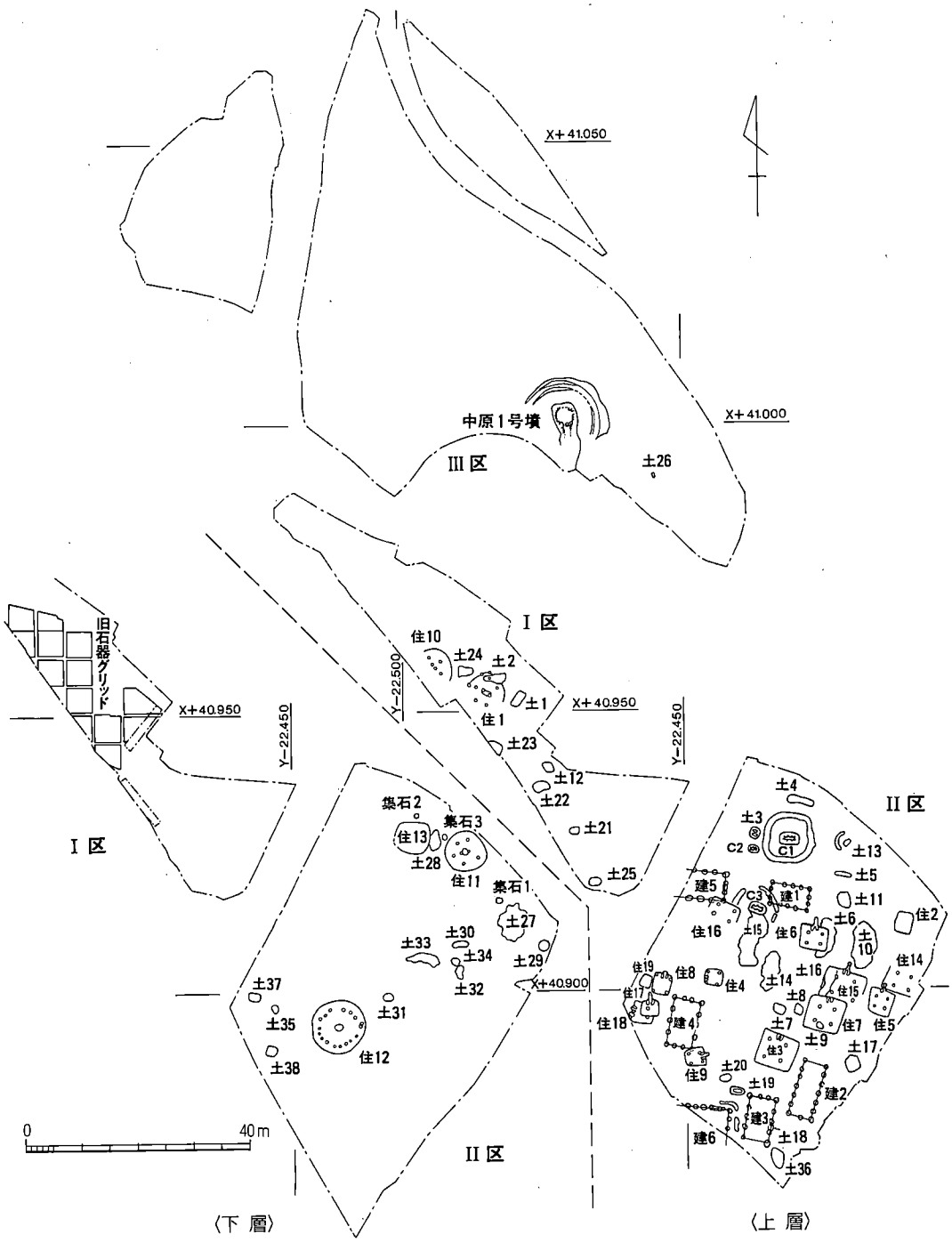


Fig. 4　金場遺跡主要遺構全体図（1/1,200）

Ⅲ　旧石器～縄文時代の遺構と遺物

A　調査の概要

旧石器～縄文時代の遺物は，当初の遺構検出作業中にⅠ・Ⅱ区から出土していた。旧石器についてはⅠ区北西半で弥生遺構の所謂地山に食い込んだものを確認したので，調査の最終段階で５ｍ方眼を組んで，Ⅰ区旧石器グリッドとして掘り下げ，一定の成果を得ることができた。

縄文時代及びそれ以降の基準層位について報告しておこう。Fig.5にⅡ区北半西壁の土層図を示した。まず厚さ20㎝程の現耕作土，その下に第３層の床土，その下が黒褐色土の７Ｃ代～縄文晩期包含層，第５層が黒色土で７Ｃ代～縄文晩期の遺構及び包含層。第６層は黄褐色土（場所によって黄茶色土）の縄文早・前期の包含層及び遺構埋土となっている。Ⅱ区においてはそれ以下は河岸段丘形成に伴う砂利層となっており，Ⅰ区グリッド付近のような旧石器包含層土壌は認められなかった。以上のことから，本遺跡では，縄文早～前期遺構の埋土は黄褐色土，弥生円形竪穴住居跡はよごれた黄褐色土，Ⅲ区東半の不整形遺構の大半も暗黄色土，黒色土は大旨７Ｃ後半代の小ピット群という状況であった。

ここでは，金場遺跡全体の遺構の総数をとりまとめておきたい。

旧石器時代後～終末期	Ⅰ区グリッドから石器多量出土
縄文時代早期	集石炉３基　陥し穴状遺構１基
縄文時代前期	土壙３基
縄文時代晩期	竪穴住居跡１軒　土壙２基
弥生時代前期末～中期初	竪穴住居跡４軒　土壙18基（殆ど貯蔵穴）
古墳時代前～中期	土壙墓２基　石棺墓１基　石棺系竪穴式石室２基

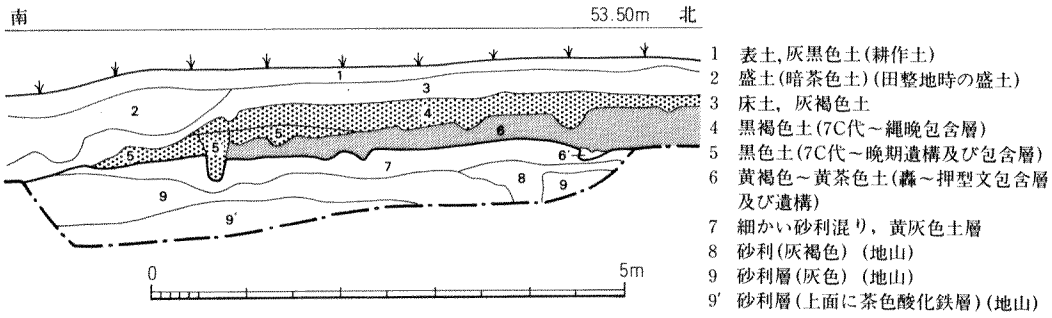


Fig. 5　Ⅱ区北半西壁土層実測図（1/80)(本遺跡基本層序)

古墳時代後期	横穴式石室円墳１基（中原１号墳） 土壙墓１基
７Ｃ後葉代	竪穴住居跡14軒 土壙墓２基 土壙８基
奈良末～平安時代	火葬墓１基 土壙２基

Ｂ Ｉ区旧石器グリッド

ここでは，Ｉ区中央部に設けたグリッドの発掘調査成果についてのみ報告する。明らかに旧石器であるが，遺構検出作業中に出土したものや，より新しい遺構に混入して出土したもの，縄文包含層掘り下げの際に出土したもの等については，厳密を期するために，その他の遺構出土石器として，別に分けて後に報告する。

グリッド設定 遺構検出作業中や第１・10号竪穴住居跡掘り下げ中に出土していた石器の分布状況を現地で判断して，更にユンボによる試掘トレンチであるＩ区中央トレンチや東トレンチの清掃・土層確認作業等の状況からみて，旧石器包含層の存在を確信して，掘り下げる決断をした。Ｘ＝＋40.940からＸ＝＋40.970，Ｙ＝－22.473からＹ＝－22.500までの範囲を，座標方向に従って５ｍ方眼に切った。北から各グリッドにいろは…の順にグリッド名を付けた。実際に掘り下げたのは，Fig.6に示すとおり，15グリッドであった。にほへの東側の空白部は，層が全体に浅くなる傾向にあったので，掘り下げることはしなかった。

遺物取り上げ 各グリッドを掘り下げてゆき，出土遺物についてはすべて原位置に残し，そのグリッドでの出土遺物が多くなり，掘り下げ作業が困難になった時点で，１/20実測図に出土位置をおとした。更に標高数字を計測・記入し，出土層位，出土品の石材・製品名をも記録した。グリッド毎に通し番号を付し，個別の位置・層位復原ができるようにした。

掘り下げ深度 掘り下げた15のグリッドはれわグリッドを除いた13グリッドにおいて，Ⅵ層までを完掘し，Ⅶ層上面を出した。その段階で，それまでの石器の出土量をみて，更にⅦ層以下まで掘り下げるグリッドを選定した。ねいぬるをの５グリッドである。これらは，Ⅶ層を完掘し，Ⅸ層上面まで出した。作業の工程上やむを得ない判断であったが，全グリッドでⅦ層を完掘できなかったことは悔やまれるところである。最後にダメ押しとして，ねいグリッドの東壁沿いと，いグリッドの南壁沿いに１ｍ幅のトレンチ状の掘り下げを行い，ⅨからＸ層中位まで掘り下げ，Ⅸ層からもサヌカイト剥片が出土することを確認できた。以上のように，発掘したすべてのグリッドで，均等に同じ層位まで掘り下げていないため，特にⅦ層の出土状況は北端と南東端の各グリッドでのデータのみであることを明記しておきたい。更にⅨ層に至っては，上述の如くごく一部のみの状況であることをお断りしておきたい。

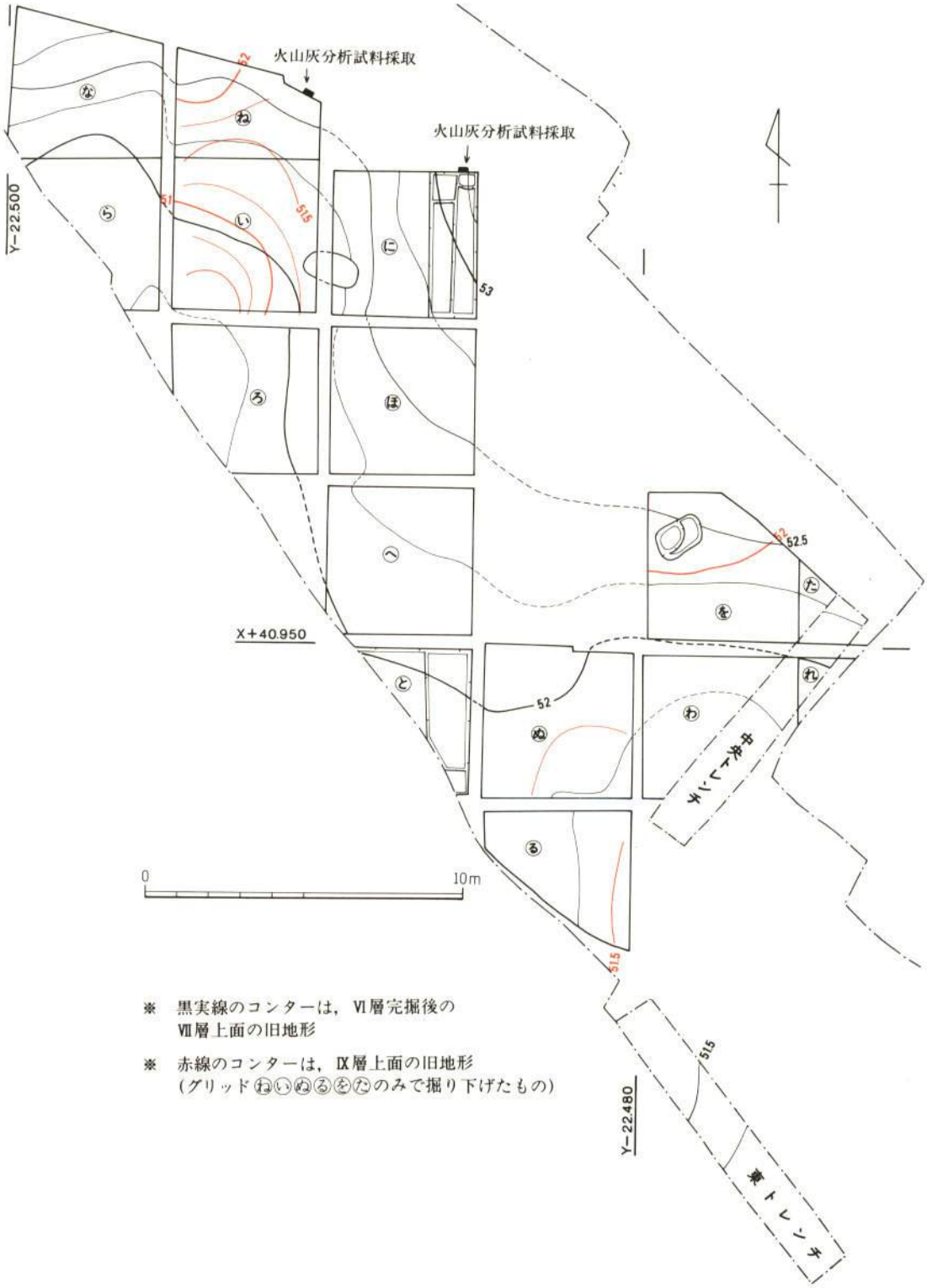
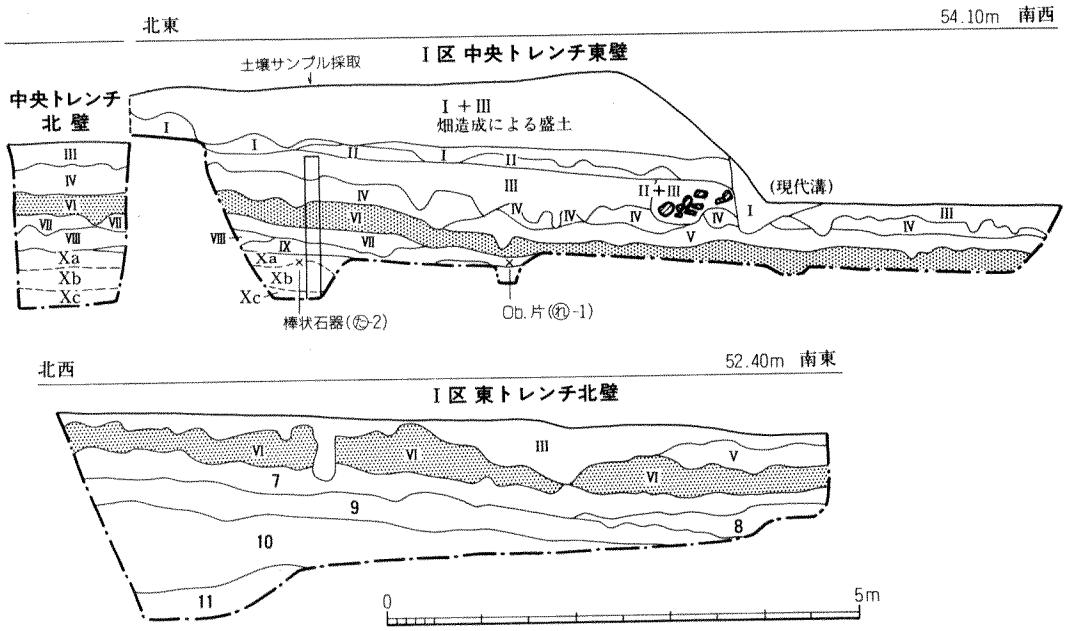


Fig. 6　Ⅰ区旧石器グリッド全体図 (1/200)



I 灰黒色土(表土)
II 灰褐色土
III 黄茶褐色土(粘性なく，小礫幾らか含む)(縄文晩～早期包含層)
IV 灰黒色土(北半では粘性あり，南半では砂っぽい。小砂礫かなり含む)
V 灰色砂質土(かなり砂っぽい)
VI 黒色粘質土(粘性強し)
VII 茶褐色粘質土
VIII 暗褐色粘質土(黒っぽい)
IX 茶黄褐色粘質土(粘性強し)(VIIと似る)(以上IV～IXは旧石器包含層)
X 黄灰色粘質土(ガチガチ)(以下無遺物層)
a 黄味強し
b やや紫がかった灰色
c 白っぽい灰色
7 暗灰色(黒混じり)シルト層(以下11まで他のトレンチに無し)
8 灰黄色シルト層(VII～IXに相当するか)
9 紫灰色シルトの中に緑がかった灰黄色シルト混入
10 灰緑色シルト層(5～1cm大の礫かなり含む)
11 明灰(黄)色シルト層
} 水成作用による

Fig. 7 旧石器グリッド周辺トレンチ土層実測図(基本層序)(1/80)

1 層位と遺物出土状況

基本層序(Fig.7) 当初，試掘用にI区中央部に2本の深掘りの重機によるトレンチを入れた。I区の上層調査終了後，このトレンチを清掃し，必要な部分については掘り下げた。その結果，I～Xまでの遺物包含層を確認した。中央トレンチでは，I・II層の表土・耕作土の下に，黄茶褐色土のIII層があり，旧石器～縄文早・晩期包含層となっている。この層はI・II区全体に拡がっており，I区の東南半とII区においては，そのIII層の上に黒色土の縄文晩期～7C代の遺物包含層が乗っかっている。さらにIV層は灰黒色土で，中央トレンチのみにみられるが，縄文期の腐植土層ではないかと推定される。ただ，I区グリッドにおいては，この層は認められない。次のV層はかなり砂っぽい灰色砂質土で，中央トレンチの南半，東トレンチの東端にみられるが，I区グリッドにおいては認められない。I区南東半へと拡がる流水作用による二次堆積層と考えられる。次のVI層は黒色粘質土で，所謂黒色バンドの一種で，I区全体

に認められる。後述するⅠ区グリッドの発掘成果の中で，最多出土量を誇る層である。ただし，旧石器遺物も多いが，まだ打製石鏃をかなり含み，純粋な旧石器時代単純層とは言い難い。Ⅶ層は，茶褐色粘質土で，Ⅰ区北半の一段高い部分にのみ認められ，東トレンチやそれ以東には拡がっていない。Ⅰ区グリッド発掘の結果，Ⅶ層上部には1点だけ打製石鏃がみられるが，それ以下は旧石器の層と考えられる。次のⅧ層は，黒っぽい暗褐色粘質土で，中央トレンチ北端に見られるのみで，他トレンチやⅠ区グリッドでは認められず，部分的な溜り状の旧石器時代腐植土層かと推定される。Ⅸ層は，粘性の強い茶黄褐色粘質土で，Ⅶ層の土質と似ている。この層までは確実に黒曜石・安山岩剥片を含んでいるが，一部しか発掘していない。次のⅩ層は，ガチガチの黄灰色粘質土で，漸移層としてその中が3層に細分できる。Ⅹa層が黄色が強いもの，Ⅹb層がやや紫がかった灰色，Ⅹc層が白っぽい灰色をなす。このうちⅩa層の下面からは中央トレンチ壁中にて，先端を使用したと思われる棒状石製品を発見している。このⅩ層も，少なくとも上半は旧石器層であった可能性が強いが，当初無遺物層と考えてごく一部しか掘り下げていないので，剥片等は出土していない。以上の中央・東トレンチの基本土層を確認した後，Ⅰ区グリッドの設定を行い，掘り下げた。各グリッドにおいては，これらのⅠ～Ⅹ層ですべて形成されていたため，これらの土層名をそのまま使用した。

Ⅰ区グリッドの土層　実際に掘り下げたグリッド部分の土層については，Fig.7～11に詳細に図示したので，ここでは簡潔にまとめてみよう。Ⅰ区北半における弥生時代の第1・10号住居跡等の遺構面は，現畑地の地形とほぼ同様に，北東から南西へ緩やかに傾斜を持っている。これは，Ⅰ区グリッド北側10m程から急傾斜で背後に立ち上がる丘陵地の旧地形の続きであったと考えられる。これにより，Ⅰ区グリッドの縄文～旧石器の包含層も，全体としては北から南へすべての層が傾斜している。Fig.6に示したⅥ層完掘後のコンターは，㊀㊁㊂グリッドにおいて密になり，㊁グリッドから北へ向かって小さな谷頭状地形を示している。一方，㊀㊃㊄の中央部南端付近は半島状に微高地が伸びた，小尾根先端状地形を示し，各土層自体が薄い部分であることがわかる。更に，その東隣の㊆㊇においては，再び浅く北へ入り込んだ谷状部をなしている。以上の事から，Ⅰ区グリッドの北西端付近の土層がかなりの傾斜を持つ部分では，遺物自体もより上方からの流れ込みによる移動も充分考えられる。後述する火山灰分析結果が示す，ATの二次堆積の可能性も否定できない状況である。しかし，一方Ⅰ区グリッド中央部南半付近においては，視覚上，殆ど水平堆積としてよい土層を示しており，遺物は大略原位置を示すものと常識的に推測できる。これらの南半地区の遺物出土状況を見ると，Ⅵ層を中心とした出土量で，打製石鏃がⅥ層で止まるなど，㊀㊄㊁㊂グリッドでの出土状況と殆ど変わることは無い。特に㊁㊂グリッドでは各層が厚く堆積しており，北・東側からの流れ込みが充分考えられるが，浅い谷頭状窪地であり，却って石器製作地としては好適地であった可能性も否定できず，遺物包含層序自体を全く意味のないものと否定し去る訳にはゆかないと考えられる。

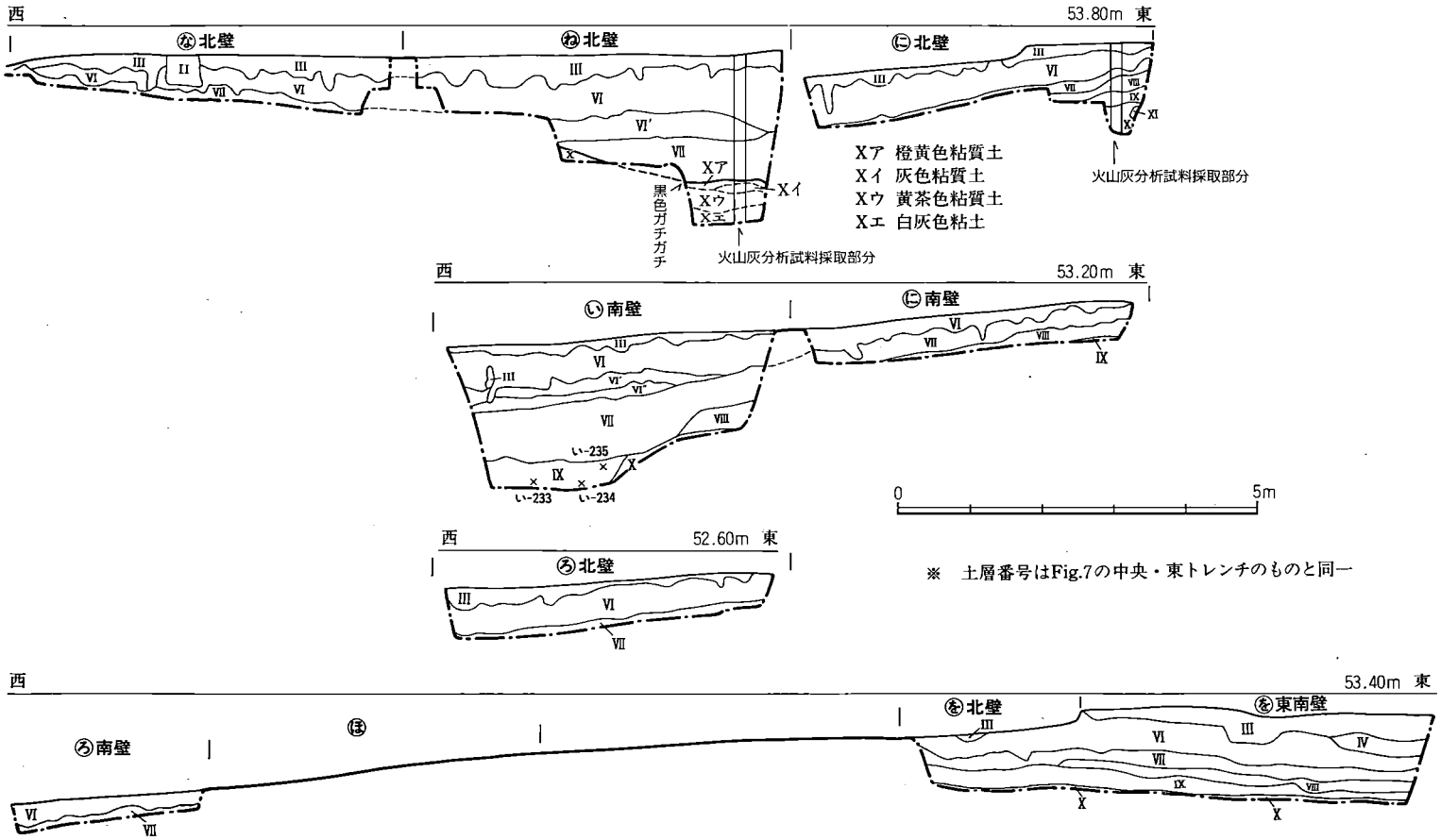


Fig. 8 旧石器グリッド東西方向土層実測図（その1)(1/100)

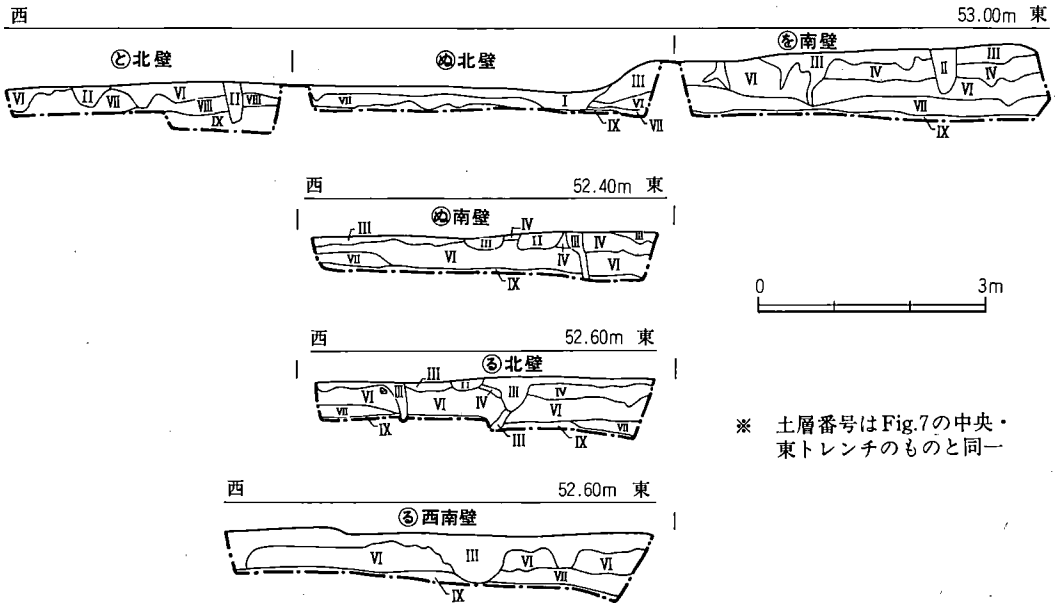


Fig. 9　旧石器グリッド東西方向土層実測図（その２）(1/100)

次に，Ⅶ層を完掘した後のⅨ層上面のコンターを見てみると，㋑㋥グリッドでは，より上層での地形よりも，もっと急傾斜になっている。より明瞭な谷状地形をなしていると言えよう。これに対して，南東側の㋮㋬㋩グリッドでは，逆に上層での地形よりもコンターが少なくなり，もっと緩やかな傾斜に止まっている。具体的には５ｍで20㎝程度の傾斜となっており，少なくともこのあたりの旧石器については原位置を保つと考えてよさそうである。

火山灰分析　金場遺跡の発掘調査当時，南九州地方で，赤ホヤと縄文早・前期との関係や，シラスとナイフ形石器との関係が注目され，火山灰層の研究自体も急速に進みつつあった。北部九州域でのこれらの火山灰層の肉眼的確認が困難であることにより，火山テフラと考古学的研究のつき合わせが極めて立ち遅れていた。そういう状況の中で，土壌中に含まれる火山ガラスの抽出・観察によって，テフラの同定が可能であるという研究状況を知るに及んで，本遺跡でもその方法を試みることにした。㈱京都フィッション・トラックに問い合わせをし，様々な御教示を得て，柱状に土壌を連続したまま切り取り，土壌資料として保存することとした。グリッド㋑と㋥の北東隅近くの北壁で各１本の柱状試料を切り取り，うち，グリッド㋑北壁のものを土壌中火山灰抽出分析試料（全深度230㎝，10㎝間隔で23試料）として送った。結果については，Ⅴ章に報告を掲載したので参照されたい。簡潔にとりまとめてみると，Ⅵ層下部～Ⅶ層上部にかけて火山ガラスが相対的にやや濃集するが，ガラス含有量が少なく，全層準を通して降灰層準を認定するのは困難であるとの結論が示されている。更に，全層準にわたってのＡＴ

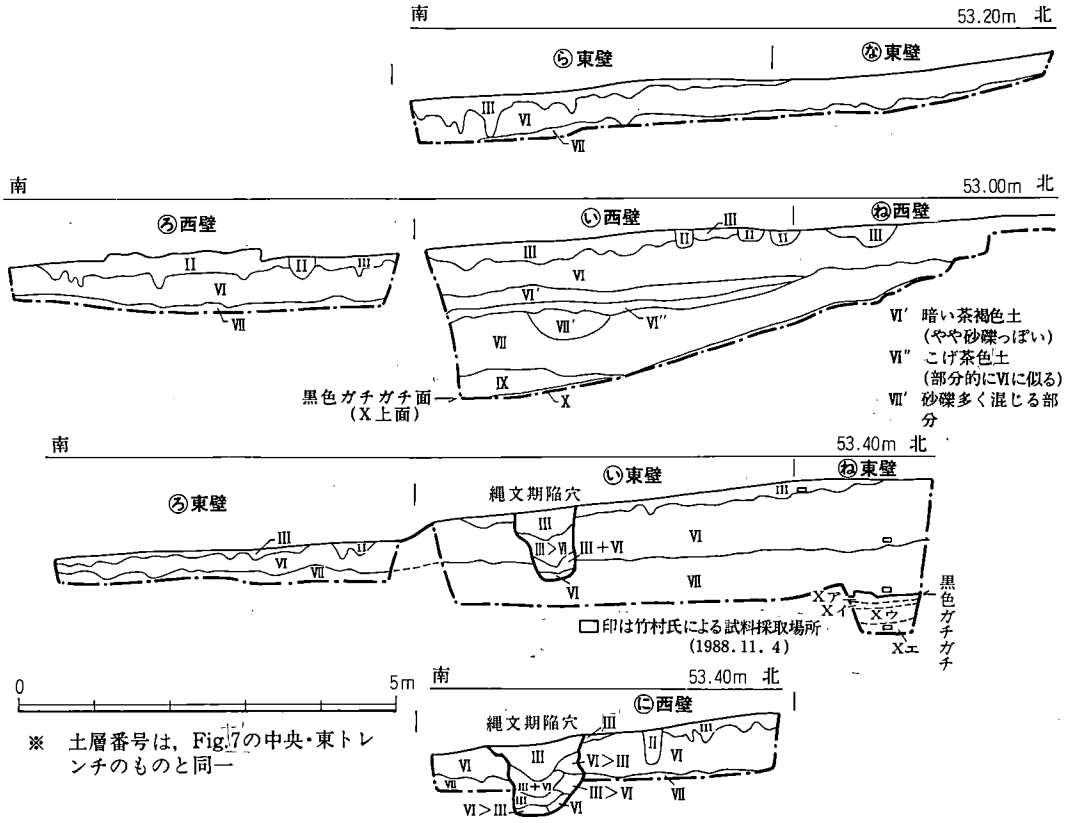


Fig. 10 旧石器グリッド南北方向土層実測図（その1）(1/100)

ガラス包含がみられることから，土壌の撹乱の恐れがあると推定されている。また，鬼界アカホヤ火山灰（K—Ah）についてはⅢ層のみに認められるが，含有量が少なく，降灰層準の認定は困難とされる。このことは，現場担当者の眼から見ると，逆に，少なくともⅥ層はアカホヤ（6,300年B.P.）以前であると理解できる。更に無遺物層であるX層下半を含めてAT火山ガラスが認められ，全層準が北側上方や東側からの流れ込みによる二次堆積土であると推定されるということは，石器群で原位置を保つものは少なくともAT以後の年代が与えられ，大ざっぱに言うとⅥ～X層は21,000(～22,000)年B.P.～6,300年B.P.の間のものとすることができる。持論，AT以前の石器が流れ込んでいる可能性を否定する訳では無い。以上のⅥ～X層の年代観は，幅が有り過ぎて遺物の編年等で特段役に立つものではないが，少なくともⅠ区グリッド発掘成果にみられる考古学的遺物の出土状況と矛盾するものでは無い。

遺物出土状況（Fig.12～16）

Ⅲ層　Ⅰ区各グリッドの全体に厚さ20cm内外で残るこの層は，上記の如くアカホア火山灰を含

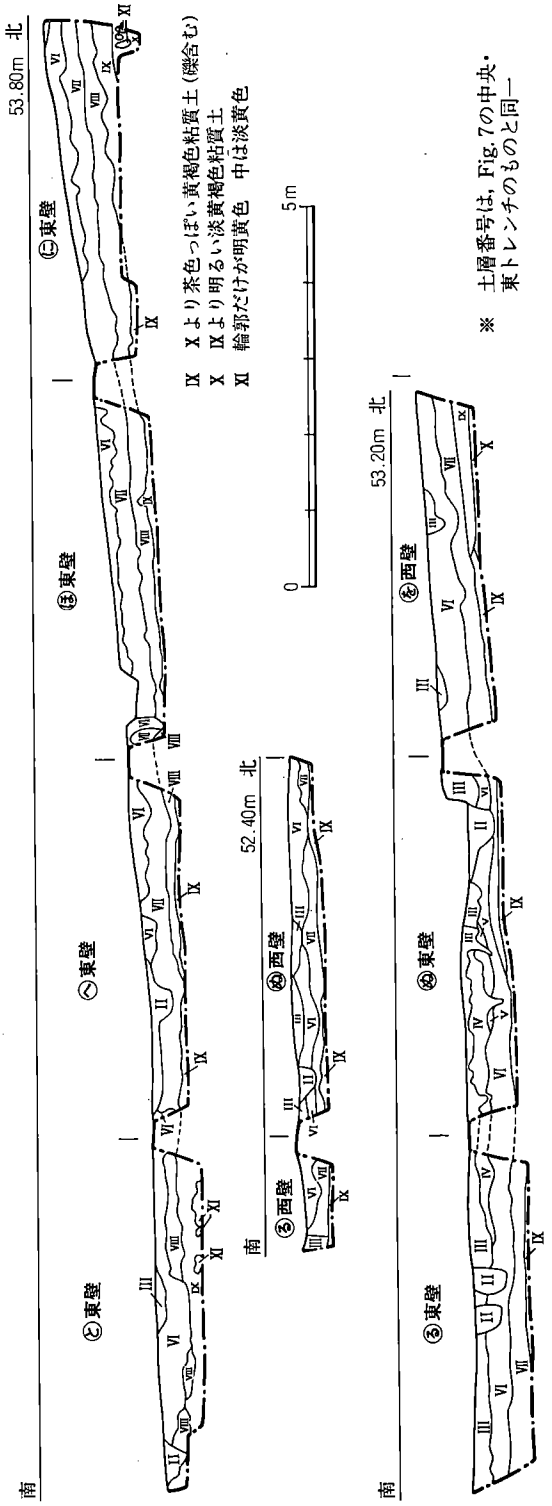


Fig. 11 旧石器グリッド南北方向土層実測図（その2）(1/100)

む層で，当然ながら，ほぼ全グリッドから縄文土器が出土している。中には晩期浅鉢片もみられるが，大半が小片で不明な点が多いが，押型文土器や厚手無文土器に突瘤文を施した類もあり，縄文でも古い段階のものを主体とすると考えられる。また，打製石鏃も5点みられるが，Ⅵ層に比べると少ない。ただ，ナイフ形石器2点，台形様石器1点，細石刃3点も出土しており，二次堆積的様相が認められる。出土石器総量（剥片・チップも含む）でみると，Ⅵ・Ⅶ層よりも少なく，打製石器製作の主体的生産の度合いは低かったと考えられる。また，このⅢ層で注目される事は，グリッド㋣の西端と，グリッド㋮の北西側に，大きな土壙状遺構が検出されたことである。特にグリッド㋣のものは陥し穴状遺構と考えてよいもので，Ⅲ層そのものの土が埋土として認められ，押型文期前後の遺構と考えられる。また，焼土塊や炭片も少量ではあるがグリッド㋮と㋯に発見されており，屋外炉的な性格を想定することもできる。遺物の集中部分は，北西側のグリッド㋩㋭と，南東端の㋬南半から㋯にかけてである。この下のⅥ層で密集するグリッド㋬㋬㋬での出土が極めて少ないのが特徴的である。

Ⅵ層　黒色粘質土のこの層は，中央・東トレンチ及びⅠ区全グリッド

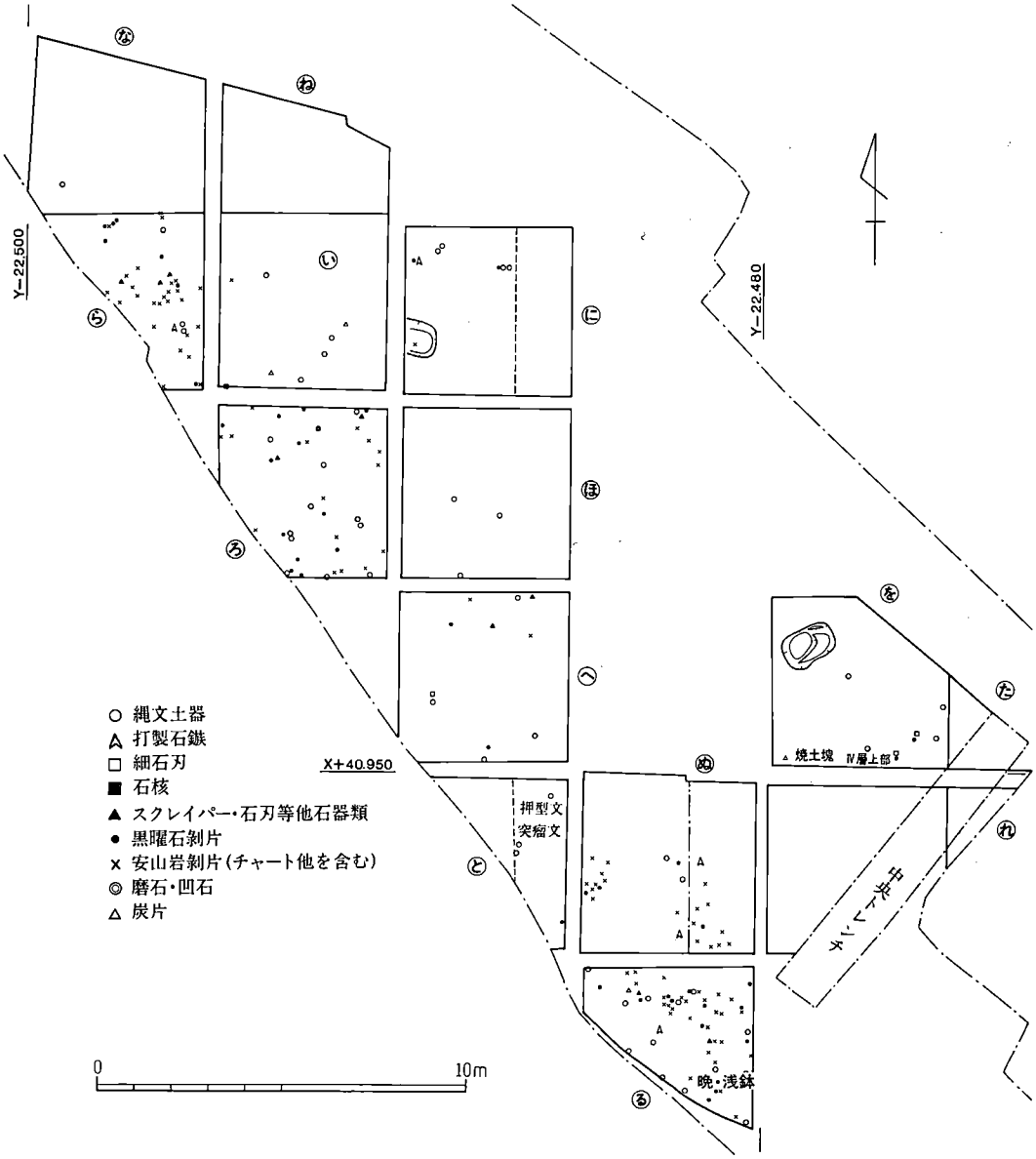


Fig. 12　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅲ層)(1/200)

のⅠ区全面に厚さ20〜40cmで平均的に拡がっている。遺物も最多量を包含しており，全体的にゆるやかな南側への傾斜を持つのみで，遺物の最も集中するねいグリッド付近でも決して急激な流れ込みを推定させるような急傾斜を持った層ではない。そういう意味で，この層出土の遺物はかなり原位置を保っているのではないかと理解される。更に，既述の火山灰ガラスの分析からみると，アカホヤ以前との年代が可能と考えられる。出土遺物は，まだ縄文土器小片が13

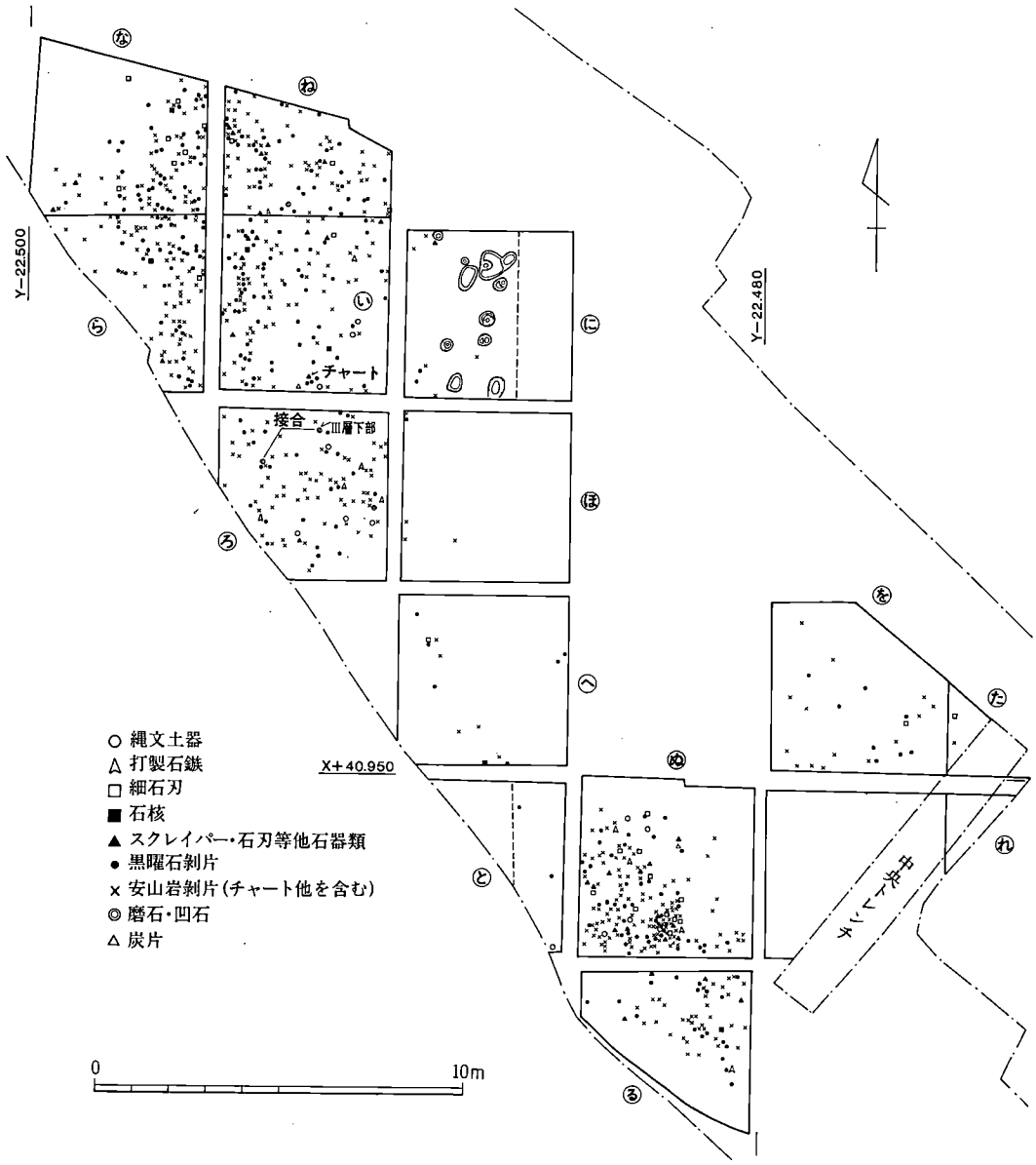


Fig. 13　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅵ層)(1/200)

点ほどあるが，すべて小片で実測に耐え得るものは1点のみである。この1点はⓘグリッド172で，Ⅵ層最下部出土品であるが，後述（Fig.28—4）の如く，塞ノ神式土器口縁であり，早期のものとしてアカホヤ以前ということが，この出土層位からも明らかになった。この点から，Ⅵ層の形成時期が縄文早期にほぼ限定できそうである。また，打製石鏃もⅥ層上部を中心として11点出土している。ナイフ形石器・台形石器・台形様石器・細石刃もこの層から多く出

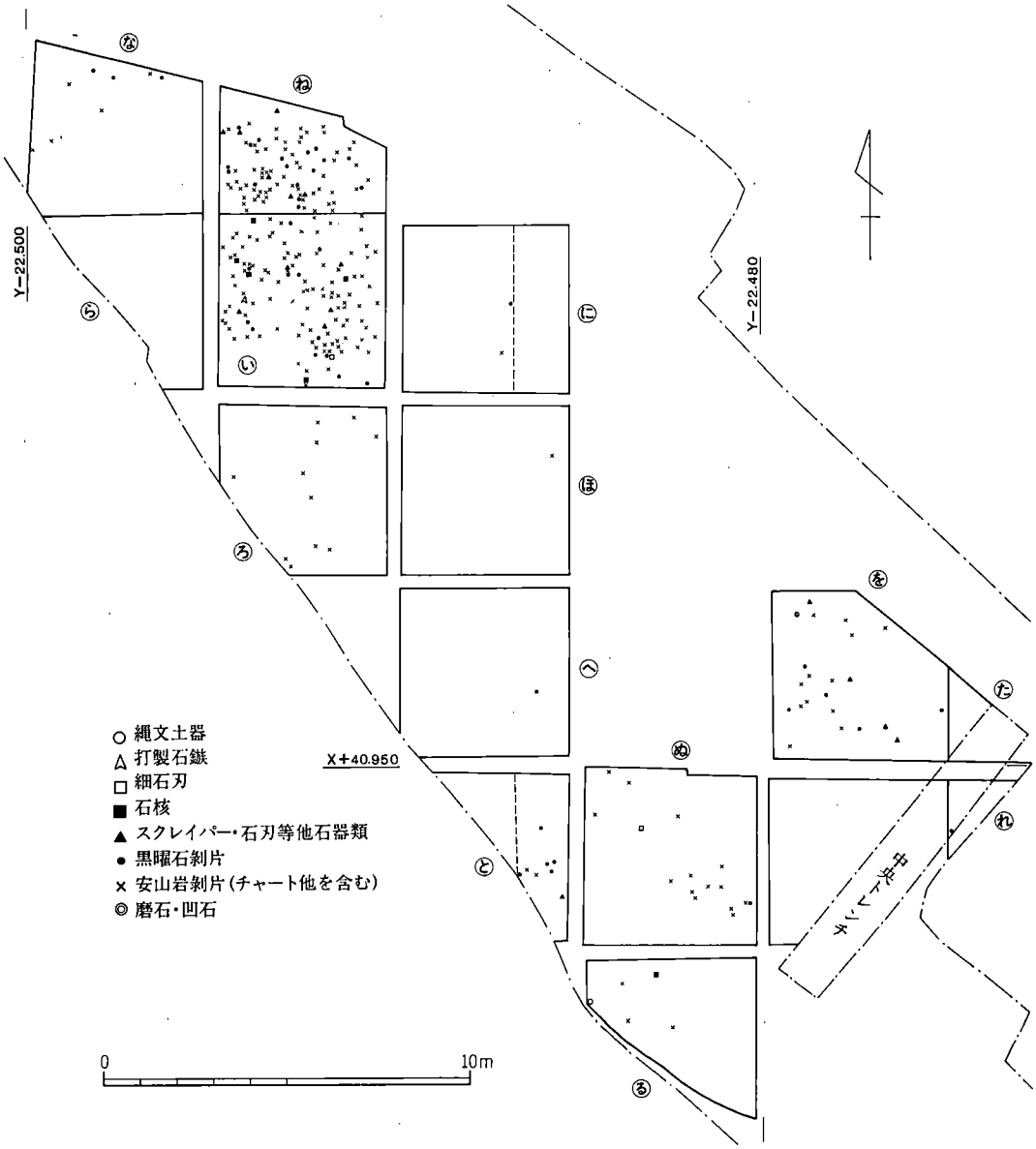


Fig. 14　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅶ層）(1/200)

土しており，二次堆積分がかなりあろう。遺物の集中状況を見てみると，Ⅲ層であまり出土の見られなかったなねいグリッドで，極めて集中した出土状況を示す。更に南方のぬるグリッドではⅢ層に引き続き集中しているが，よりⅥ層の方が密集度が高くなる。をグリッドでは散漫な出土ではあるが，一応１グループは在りそうである。またこのⅥ層下面の遺構として，にグリッドにおいて10個の小ピットが検出されたが，柱穴等として配置されている類ではない。

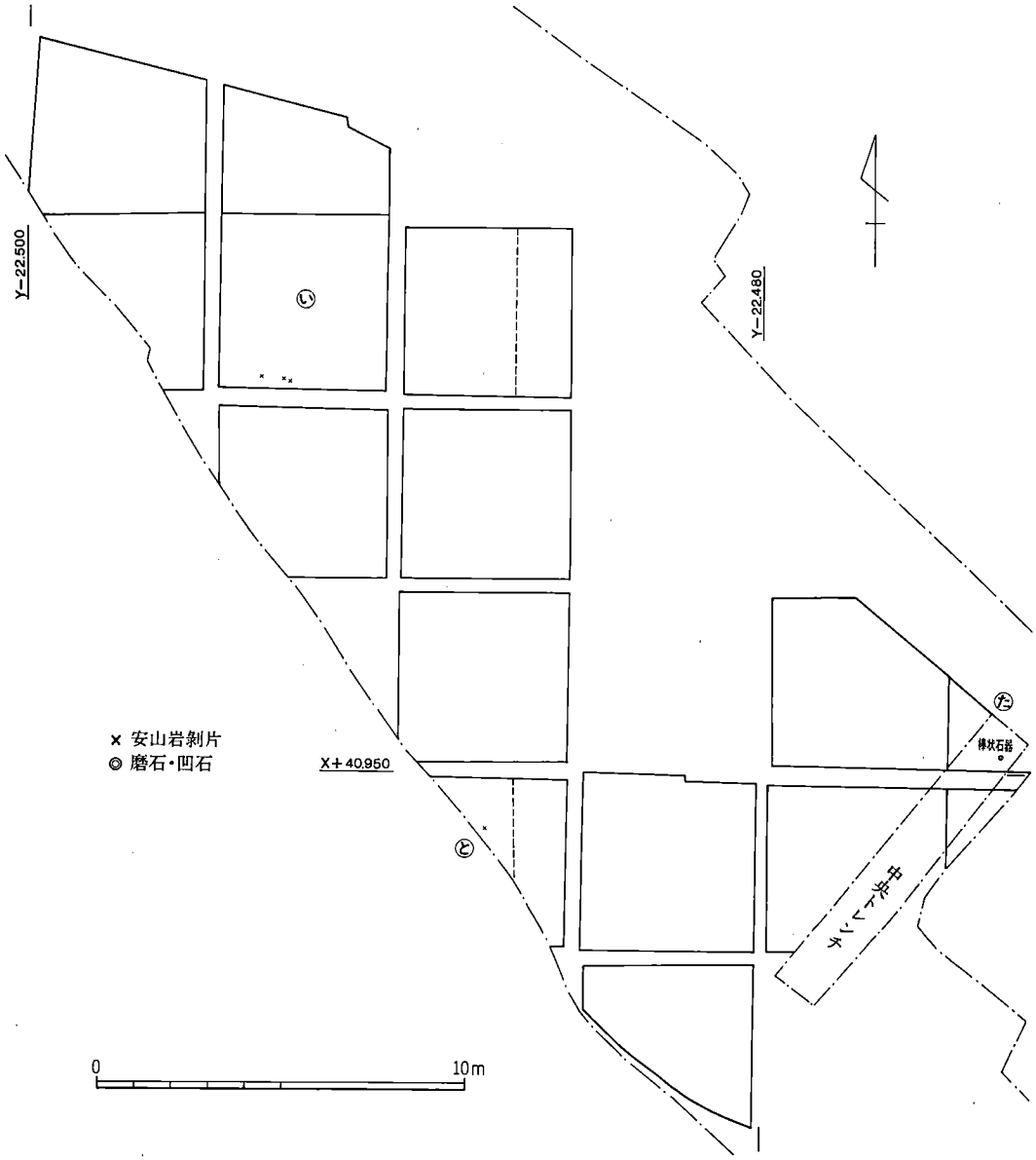


Fig. 15　旧石器グリッド遺物出土状態（Ⅸ層）(1/200)

Ⅶ層　茶褐色粘質土のこの層はⅥ層と同様に，ほぼⅠ区グリッド範囲内全体に堆積してはいるが，均一ではない。即ち，グリッドねいの北西端部ではその基底面であるⅨ層上面が大きく南側へ落ち込んでいるため，Ⅶ層自体は最大厚さ80cm程も堆積しており，一方南東端のぬるグリッドにおいてはほぼ水平層だが，層自体が切れ切れになって堆積が薄くなっている。遺物出土状況はFig.14に見る如く，極めて集中部位の限られたような状況を示しているが，実は，

既述した如く，Ⅵ層の遺物出土状態を見て更にⅦ層を掘り下げるグリッドを限定した理由にもよる。つまり，グリッド㋑㋺㋥㋟㋠㋡のみでⅦ層を完掘したので，Ⅵ層の出土分布と単純に比較することはできない。なお，グリッド㋣の東壁沿いは2ｍ幅のみをトレンチ的に掘下げて完掘して更にⅨ層中位まで至っている。以上の制約の中で出土状況をみてみると，㋑㋺グリッドではⅥ層と同様に集中度が高いが，Ⅵ層よりも密集域がより東側へ拡がっている様相が認められる。これらに対して南端の㋠㋡グリッドでは，Ⅵ層での密集度と打って変って，散漫な分布状況を示す。出土遺物の内容は，打製石鏃1点（Fig.26—99）がⅦ層上部で出土しているが，検討が必要であろう。ナイフ形石器・台形様石器・台形石器・彫器がⅦ層中部まで出土しているのに比べ，細石刃がⅦ層上部までで以下には出土が認められないのは示唆的である。剥片・チップを含めた石器総量では，Ⅵ層中位で最多であったものが，下層に行くに従って激減していっている。以上のことから，Ⅶ層は上部に打製石鏃・細石刃を残すことから，旧石器終末期～縄文草創期が上部に，中部～下部が後期旧石器後半代頃となるか。

Ⅸ層　粘性の強い茶黄褐色粘質土であるこの層は，㋑グリッドには見られず，㋺グリッドの西南半に堆積し，更にⅠ区グリッド中央の高い部分の各グリッドには20㎝厚さ程で認められる。という事は，㋺グリッド西南半の深い部位に堆積したものは，より東側の高い部分のⅨ層が流れ出して急斜面には堆積せずに，一番下に溜ったものとも解釈できる。というのも，X層上面は㋑㋺グリッドで急斜面をなし，その面はガチガチのマンガンの凝固層となっており，水成作用によるものと推定されるからである。このⅨ層は，グリッド㋺の西南半で完掘したのと，グリッド㋣で中途まで掘ったもの，中央トレンチ北半で完掘したものしか，発掘していない。よって，遺物包含状況を把握することは困難と言わざるを得ない。ただ，上記3ケ所の狭い範囲であったとは言え，各々少量の安山岩剥片を得ることができ

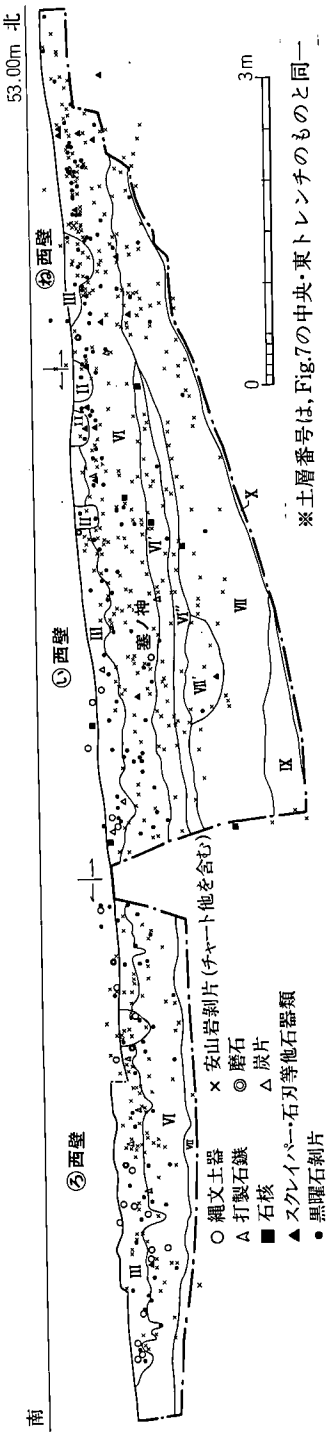


Fig. 16　グリッド㋑㋺㋥出土遺物垂直分布（1/75）

たのは，幸いであったと同時に，他グリッドでの掘り下げをなし得なかった後悔も著しい。この層から出土した安山岩剥片４点は図示しなかったが，いずれも風化が著しい不定形小型剥片である。時期的には，剥片からは推定困難であるが，層位的にはより下のＸ層までＡＴ火山ガラスが含まれている為，土層自体はＡＴ以後で，更にⅦ層下部の石器群からみて，後期旧石器後半までの間と推定される。ただ，Ⅸ層の剥片がⅦ層下部の石器群より古いとは現状では言及できないので，後期後半を含む可能性もある。

２　Ｉ区グリッド出土石器

細石刃（Fig.17，Tab.1）

打面再生剥片１点（16），スポール２点（４・９）を含めて，29点が出土している。出土層位は，Ⅲ層下部が３点，Ⅵ層が24点（上部７点，中部10点，下部７点），Ⅶ層上部が２点で，Ⅵ層に集中する。ナイフ形石器，台形石器，台形様石器等がⅦ層中部まで出土しているのに対し，この細石刃はより上層での出土に止まっているのが特徴である。

個々の詳細な計測値等は，Tab.1に記載したので参照されたい。残存部位は，完形のままのものが４点，上半部が10点，上下端を有しないもの７点，下半部８点となり，どちらかと言うと下半部の無いものが多い。剥片尾端の屈曲を折断して，真直な細石刃を得ようとしたものであろう。

折断時の加撃方向は，上端では表面からの加撃によるものが多く，下端では主要剥離面側からの加撃によるものが多い。この折断加撃方向については，当遺跡出土例に見る限り，特別な傾向は見られないようである。

長幅等の法量は，幅が平均5.9㎜と，他遺跡例からするとやや幅が狭い特徴がみられる。長さも長めのものが多く，全体に細身で長い点が特色と考えてよい。

石材は，安山岩製１点の他はすべて腰岳系良質の黒曜石製で，北部九州域での一般的特色を良く示している。

剥ぎ取りの打点が残っているもののうち，１・２・５・７・８・９・10・11・18は，細かい打点調整が施されており，６は自然面を打面としている。

また，表面に残された細石刃剥ぎ取り痕跡から判断される剥ぎ取り順序は，図中に１～４の古→新の順序で表示したが，うち１～３まで判断できるものを見てみると，打面上面から見て時計廻り方向のもの４例，逆時計廻り方向のもの５例となっている。これだけでは規則的な剥ぎ取り順序があったとは考えられない。

以下，個別毎に補足的説明をしておきたい。１の表面左上端の抉り状剥離は新しいガジリに

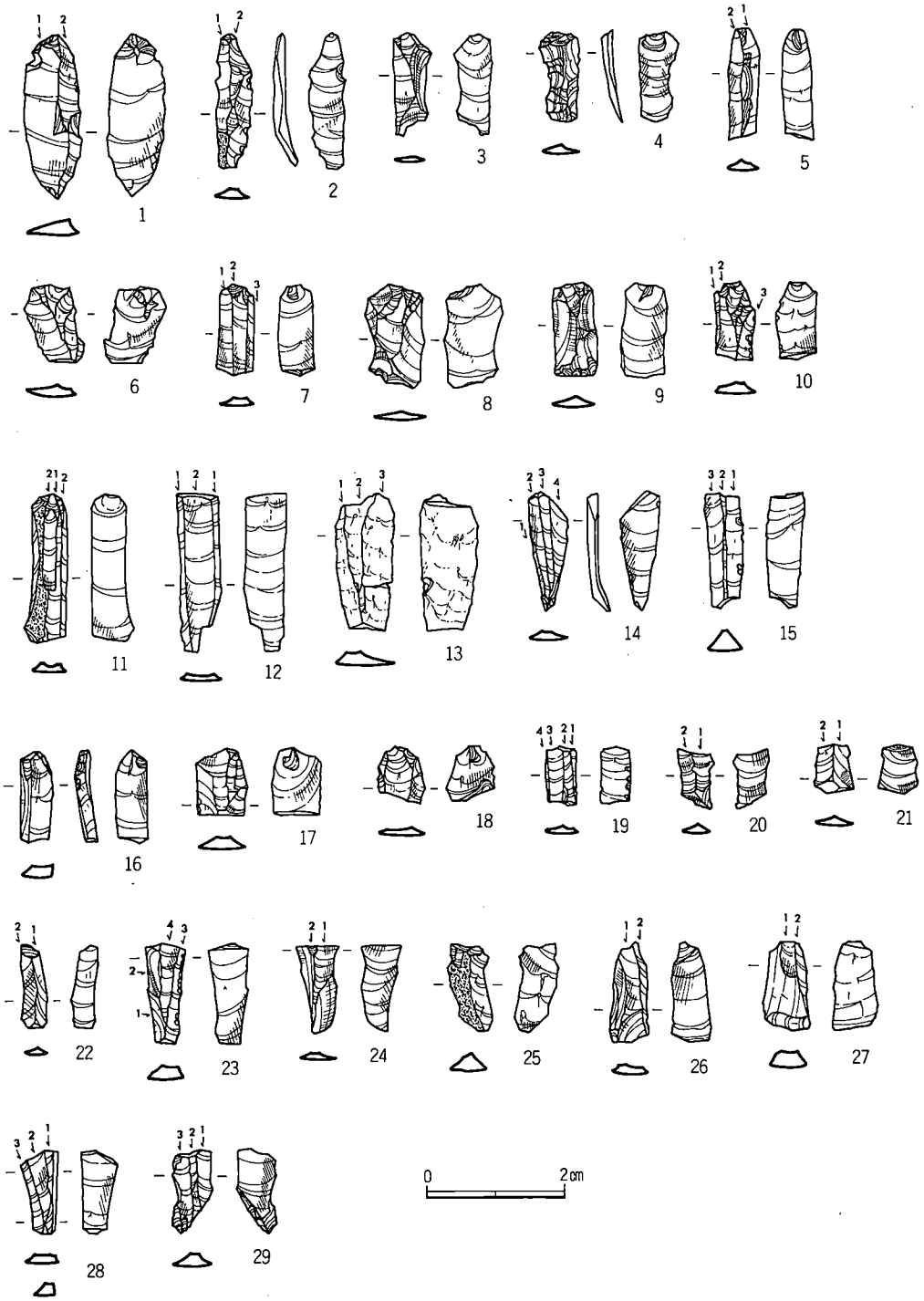


Fig. 17　Ⅰ区グリッド出土細石刃等実測図（実大）

Tab.1　金場遺跡出土細石刃等一覧

（単位：mm，g）

図番号	取上げ番号	出土層位	残存部位	折断方向 上端	折断方向 下端	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	風化状況	備考
1	い-38	Ⅵ層中部	完形	—	—	23.5	8	2.5	0.4	腰岳系良質黒曜石		使用刃こぼれ
2	へ-3	Ⅲ層最下部	〃	—	—	19	5	1.7	0.1	〃		〃　側面再生剥片
3	ね-38	Ⅵ層下半	〃	—	—	15	6	1	0.1	〃	やや	側面再生剥片的
4	な-47	Ⅵ層	〃	—	—	13	6	1.5	0.1	〃		スポール
5	ぬ-125	Ⅵ層下部	上半	—	↓	16	4.5	1.6	0.1	〃	やや	右側面寄り
6	へ-19	〃	〃	—	↑	11	7.5	2	0.2	〃		右側面寄り
7	ぬ-78	Ⅵ層上部	〃	—	↓	13.3	5.2	1.5	0.1	〃		折断のためにノッチ
8	ぬ-166	Ⅵ層下部	〃	—	↑	15	8	1.5	0.2	〃　かなり透明	やや	側面再生剥片，折断用にノッチ
9	Ⅰ区グリッド	Ⅵ層中部	〃	—	↑	13.5	6.3	2	0.2	〃	やや	下端細調整，打面再生剥片
10	ぬ-178	Ⅶ層上部	〃	—	↑	11.5	6	1.8	0.1	〃　かなり半透明		使用刃こぼれ
11	ぬ-99	Ⅵ層上部	〃	—	↑	21	6	1.5	0.2	〃	かなり	自然面残す
12	ぬ-109	Ⅵ層下部	下半	↑	—	23	6	1	0.1	〃　かなり半透明		
13	ね-11	Ⅵ層中部	中途	↑	↑	19.5	8	2	0.3	安山岩	やや	
14	を-23	Ⅵ層	下半	↑	—	17	6	1.4	0.1	腰岳系良質黒曜石	やや	折断のためにノッチ
15	な-42	Ⅵ層	中途	↑	↑	16.5	5	3	0.2	〃	極めて	
16	ぬ-78	Ⅵ層上部	上半	—	↑	13	4.5	1.8	0.2	〃		打面再生剥片
17	ぬ-85	〃	〃	—	↓	9.5	7	2	0.2	〃	かなり	側面再生剥片
18	な-61	Ⅵ層	〃	—	↓	9	6.5	1	0.1	〃		
19	ぬ-155	Ⅵ層下部	中途	↓	↓	8.5	4.4	1	0.1	〃	やや	使用刃こぼれ
20	な-15	Ⅵ層	下半	↓	—	9	5	1.1	0.1	〃　かなり透明		
21	ぬ-61	Ⅵ層上部	中途	↓	↑	7	6	1.3	0.1	〃	かなり	右側面寄り
22	ぬ-102	〃	下半	↓	—	12	3.2	1	0.1	〃	かなり	右側面寄り
23	た-4	Ⅵ層	中途	↓	↑	14.5	6	2	0.2	〃		左側面寄り，使用刃こぼれ
24	を-12	Ⅲ層下部	下半	↓	—	13	6	1	0.1	〃　かなり半透明		右側面に食い込む
25	い-126	Ⅶ層上部	下半	↑	—	13	5	2.5	0.1	〃	やや	自然面(左側面)に食い込む
26	ぬ-36	Ⅵ層上部	下半	↓	—	15	5.5	1.5	0.1	〃　かなり半透明	やや	左側面寄り
27	ね-46	Ⅵ層	下半	↓	—	13	6.8	2.1	0.2	〃	極めて	左側面に食い込む
28	を-13	Ⅲ層下部	中途	↓	↓	12	5.5	1.9	0.1	〃		右側面寄り
29	ぬ-170	Ⅵ層下部	〃	↓	↓	12	5.5	2	0.1	〃	やや	
			完形4 上半10 中途7 下半8	↑5 ↓10	↑10 ↓7	平均 14.1 mm	平均 5.9 mm	平均 1.7 mm	平均 0.15 g			

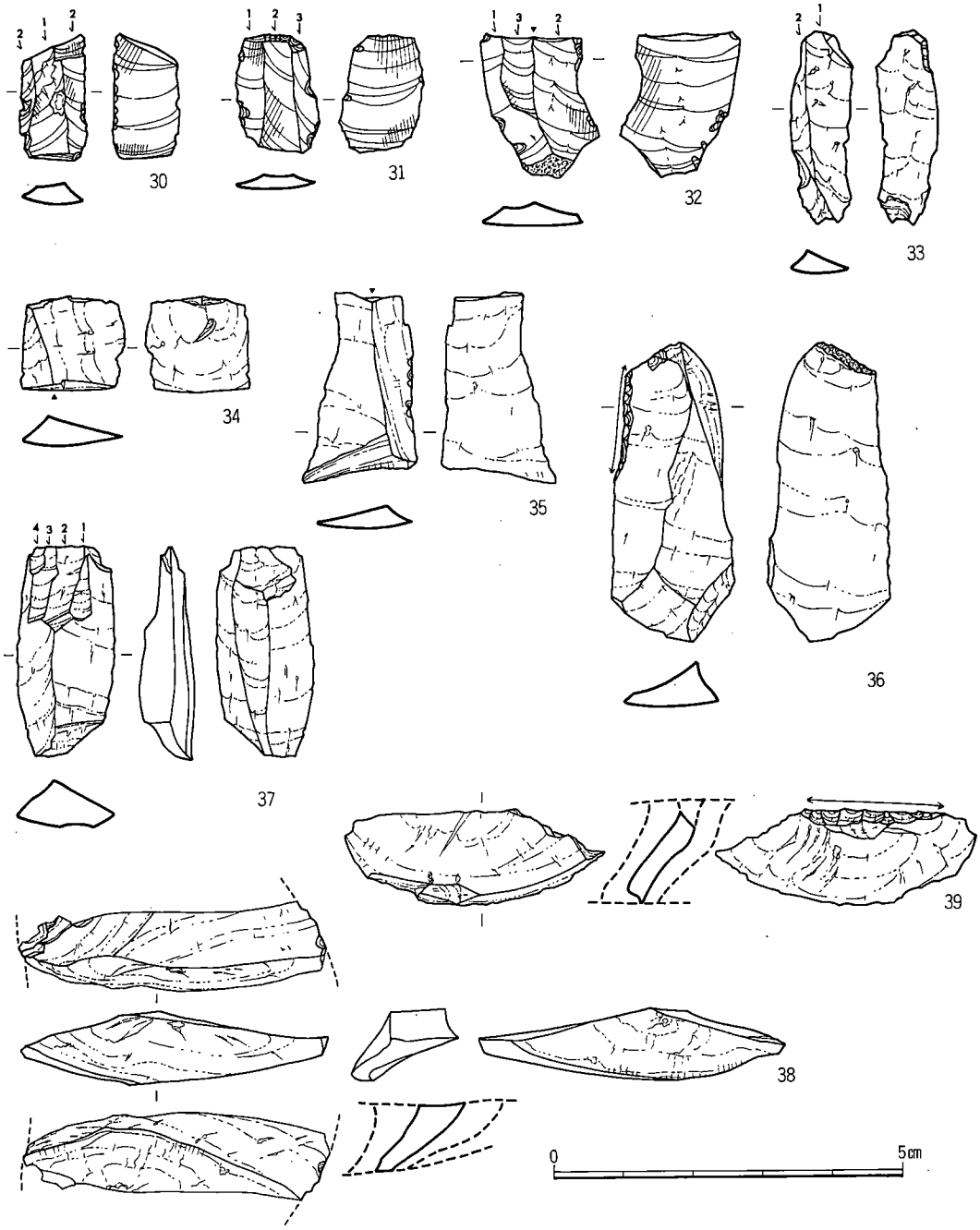


Fig. 18　Ⅰ区グリッド出土石刃・翼状剥片等実測図（実大）

よるもの。2の表面左側下端には礫面を残しており，石核の右側面下半部の剝ぎ取り面再生剝片であろう。3は右側面の剝ぎ取り面再生剝片であろう。4はスポールだが，薄手であり，打面のものの可能性が高い。7の下端面片側には折断のためのノッチ状調整痕がみられる。8の表面下端左側にも同様のノッチがみられる。9はスポール状だが，打面再生のものかと思われる。下端部には細調整が施されている。11・12はほれぼれとするような端麗な細石刃そのもの。14の表面左上端には打断用かと思われるノッチ状加工がみられる。15は断面正三角形をなして厚みを持つがスポールではない。16は打面再生剝片そのものであり，表面上端から右側辺上端にかけて細石刃剝ぎ取り痕が残る。右側面は細石刃核左側面であり，これらから復原できる細石刃核は，打面幅が10㎜程で，打面が後方へ傾斜する小ぶりのものになるだろう。24は石核の下端付近のもので，右側面に食い込んで剝ぎ取られている。

以上の細石刃についてまとめてみると，まず層位的にはⅥ層を中心としてⅦ層上位まで出土していることがある。これはⅦ層中部までナイフ形石器・台形石器・台形様石器が出土していることとの差異に意味があるのかもしれない。次に，本遺跡では細石刃核の明瞭なものが発見されていないことも注目される。後述する安山岩製の再利用品1点の他は，黒曜石製が全くみられない。この理由にもよって，細石刃技法そのものの理解が得られないのは残念である。しかし，細石刃そのものは，細身で長く，細石核左右側面まで切り込んで剝ぎ取られたものが多いことから，細石核の剝ぎ取り面自体が狭いものであったと推定される。それでなおかつ長いものが有るということは，円錘形石核或いは舟底形石核でも小型で縦長のものであった可能性が考えられよう。

細石刃核（Fig.18-37）

安山岩製の厚みのある剝ぎ取り面再生剝片を再利用した細石刃核とみられる。グリッド㋑111（Ⅵ層出土品）で，長さ29.5㎜，幅13.5㎜，厚さ7.5㎜，重さ2.7g。やや風化しており，細石刃を剝ぎ取った順序は打点上面からみて時計廻り方向となっている。細石刃核はこれ1点のみで，黒曜石製細石刃採取用石核は発見できなかった。

石刃状縦長剝片（Fig.18-30～36）

30は小型石刃で，グリッド㋚127（Ⅶ層上部出土品）で，腰岳系良質の黒曜石製。長さ19㎜，幅9.5㎜，厚さ3㎜，重さ0.6g。上端は表からの加撃による折断で，右側辺には刃こぼれがみられる。やや風化している。

31はグリッド㋚108（Ⅶ層上部）で，腰岳系良質の黒曜石製。長さ17㎜，幅11㎜，厚さ2㎜，重さ0.4g。上下端ともに裏面側からの加撃による折断がみられ，上端は更に細調整が施されていて，エンドスクレイパー的使用が考えられる。

32は㊁143（Ⅵ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製縦長剥片で，やや風化する。上端は表側中央稜線上を打点とした打撃による折断。長さ19.5㎜，幅14㎜，厚さ3.5㎜，重さ1.1g。両側辺に若干使用刃こぼれがみられる。

33は㊁23（Ⅵ層中部）で，やや風化した安山岩製縦長剥片で，細石刃に入れても良い大きさである。長さ27㎜，幅８㎜，厚さ３㎜，重さ0.8gとなる。上端は，新しいツブシ状ガジリ。下端も打ち欠かれている。

34は㊁44（Ⅵ層上部）で，石材は玻璃質安山岩。上端面は調整打面で，下端は表面稜の位置を打点として折断している。長さ13.5㎜，幅14㎜，厚さ4.5㎜，重さ1.1g。かなり風化。

35は㊁６（Ⅲ層）で，やや大型石核の石核調整後の剥ぎ取り第１打の剥片。安山岩製で，やや風化している。長さ28㎜，幅16㎜，厚さ３㎜，重さ1.3g。上端は表面稜の位置を打点とした打撃による折断。

36は㊁28（Ⅵ層下半）で，安山岩製で極めて風化している。長さ42㎜，幅17㎜，厚さ６㎜，重さ3.6g。打点は礫面で，上端左側と左辺上半には微細なリタッチがみられるが，この部分のみあまり風化しておらず，おそらくは縄文期に入ってから再利用したものと思われる。

翼状剥片（Fig.18-38・39）

38は㊁51（Ⅵ層中部）で，安山岩製の瀬戸内技法による横剥ぎの剥片で，かなり風化している。石核素材も横長剥片かと思われ，石核は長さ50～60㎜，幅45㎜，厚さ11㎜のものであったと推定される。打面の図の左上端には石核整形時の縁辺調整痕が残る。長さ11㎜，幅45㎜，厚さ12㎜，重さ3.5gとなる。打面の反対側の裏面の打点は，図の左寄りで当剥片よりあまり離れていない位置に推定できる。技法の判かる貴重例である。

39は㊁80（Ⅵ層）で，安山岩製のこれも瀬戸内技法によると思われる翼状剥片。バルブカットがみられ，打面は残っておらず，明らかに剥片採取時より新しい時期のブランティング的リタッチが施されており，再利用と考えられる。やや風化しており，長さ14㎜，幅37㎜，厚さ３㎜，重さ２gとなる。ブランティングが新しいため，一応ナイフ形石器からははずした。

ナイフ形石器（Fig.19-40～47）

40は㊁10（Ⅲ層下部）で，腰岳系黒曜石製。縦長剥片を素材として，表面の右側縁と左側縁上端に鈍角なブランティングが施されている。基部調整は裏面左側のみ。現存長19㎜，幅11㎜，厚さ４㎜，重さ0.8g。やや風化している。

41は㊁74（Ⅲ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製小型ナイフ。表面は古い剥離面で，右側辺基部側には自然面を残す。左側辺と右側辺上半には鈍角の丁寧なブランティングが施されている。長さ21㎜，幅11㎜，厚さ３㎜，重さ0.6g。縦長の不定形剥片を素材としており，やや風

化がみられる。

42は㋑170（Ⅶ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。縦長素材を用いて，基部の左側辺は平坦剥離細調整，右側辺基部は鈍角のブランティング，右側辺上半は平坦剥離。現存長27㎜，幅14㎜，厚さ４㎜，重さ1.8g。右側辺上半には，上方からの，欠損後に施された樋状剥離がみられる。かなり風化している。

43は㋺131（Ⅵ層下部）で，翼状剥片を素材とした安山岩製ナイフ。基部端と左側辺基部寄りには細調整が施され，右側辺上半はブランティング，その下半は平坦剥離気味となる。現存長34㎜，幅12㎜，厚さ4.5㎜，重さ1.7g。全体に極めて風化。

44は㋭94（Ⅵ層最下部）で，玻璃質安山岩製の厚みのある異類だが，ナイフとしてよかろう。やや縦長の不定形剥片を素材とし，左側辺から基部にかけて急角度のブランティングを施す。長さ34㎜，幅21㎜，厚さ７㎜，重さ4.4g となる。かなり風化している。

45は㋩105（Ⅵ層）で，翼状剥片を素材とするナイフ形石器の基部側であろう。黒い縞が多く入る黒曜石製で，松浦地方産のものか。側縁と基部のブランティングは丁寧で，かなり急傾斜である。全体にかなり風化している。現存長17㎜，現存幅11㎜，厚さ４㎜弱，重さ0.7g。

46は㋮38（Ⅶ層）で，安山岩製の小型ナイフ。左側縁は直角に近いぐらいの急傾斜ブランティングが丁寧に施され，その順序は先端から基部側へ向けて行なわれている。縦長剥片を素材とし，かなり風化している。長さ23㎜，幅10㎜，厚さ５㎜，重さ１g。

47は㋯151（Ⅵ層下部）で，安山岩製の小型ナイフ。翼状剥片で，瀬戸内技法の剥ぎ取り第１打目の剥片を素材とする。片側縁のみを調整しただけのものだが，一応ナイフとしておく。かなり風化しており，長さ20㎜，幅９㎜，厚さ４㎜，重さ0.4g。

台形石器（Fig.19-48・49）

48は㋰80（Ⅵ層）で，黒っぽい筋が入る姫島産かと思われる黒曜石製。やや幅広の縦長剥片を折断したもの。折断は両端とも裏面側からの加撃による。左側辺と基部辺，先端辺の各一部分に細かい調整が僅かに認められる。長さ15㎜，幅11㎜，厚さ４㎜弱，重さ0.6g。かなりの風化がみられる。

49は㋮37（Ⅶ層）で，安山岩製の不定形剥片の両端を折断したもの。やや大きめであるが，形態・技法上から一応台形石器と考えておく。折断は上端が表面側から，下端が主要剥離面側からの加撃による。基部にわずかな調整が認められる。長さ23㎜，幅21㎜，厚さ５㎜，重さ2.4g。極めて風化しており，やはり古いのではないかと思わせる。

台形様石器（Fig.19-50・51，20-52～57）

50は㋯158（Ⅵ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。礫面を持つ厚みのある不定形小剥片を

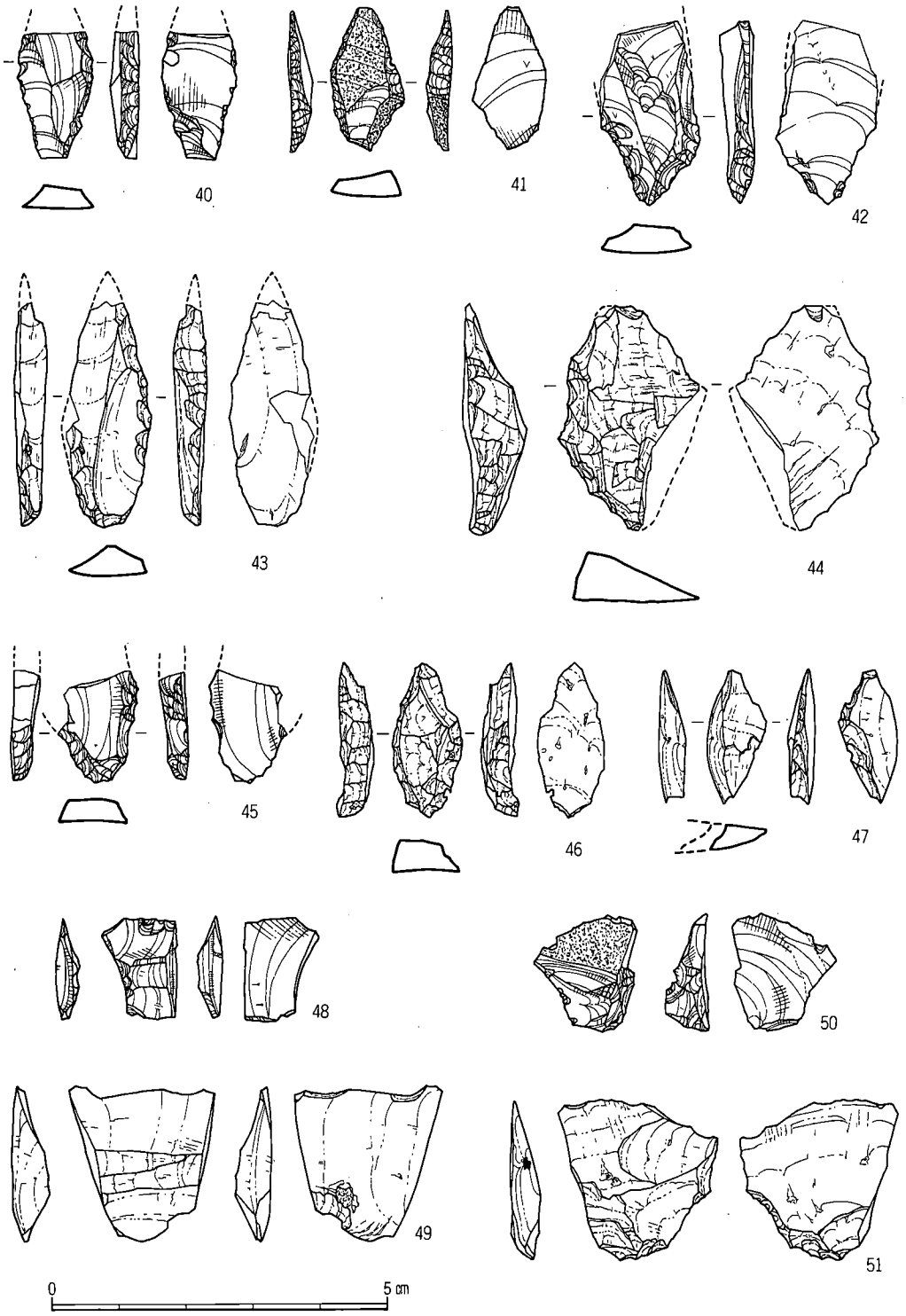


Fig. 19　Ⅰ区グリッド出土ナイフ形石器・台形様石器等実測図（実大）

素材とし，基部端から右側縁にかけて雑な基部調整が施されている。長さ18㎜，幅15㎜，厚さ6㎜，重さ0.8g。

51は㋣108（Ⅵ層）で，安山岩製。横長気味の不定形剥片の片側を表面側からの加撃により折断している。基部調整は，表面の基部付近は平坦剥離だが，主要剥離面側はやや鈍角のブランティング的。長さ24㎜，幅24㎜，厚さ4㎜，重さ2.3g。やや風化している。

52は㋺16（Ⅵ層最下部）で，安山岩製。礫面を打面とした不定形剥片の下半を折断し，折断面を鈍角にブランティングしている。左側の打面は現状の角度のままが都合が良かったのか，そのまま利用して未調整のままとなる。長さ30.5㎜，幅18㎜，厚さ11㎜，重さ5.7gで，極めて風化が著しい。

53は㋾45（Ⅶ層）で，安山岩製。不定形剥片の上半を折断した後，基部側の両側のみを簡単に調整しただけの小型台形様石器。やや風化しており，長さ16㎜，幅11㎜，厚さ5㎜，重さ0.7gとなる。

54は㋑175（Ⅶ層上部）で，腰岳系黒曜石製。不整形剥片を折断して，基部と右側縁に雑な調整を施したもの。長さ15㎜，幅6㎜，厚さ5.5㎜，重さ0.5gとなる小型品。

55は㋩6（Ⅲ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。不定形剥片の尾部を刃部として使用している。右側縁と基部には細かいブランティングが施されている。長さ13㎜，幅12㎜，厚さ2㎜，重さ0.2g。確実に刃潰し石器であるが，薄手の小片であり，理論上は台形様石器で良いが，疑問も感じられる。使用剥片の一種とした方が妥当かもしれない。

56は㋾36（Ⅶ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。右側縁と左側縁上半に急角度のブランティングを施し，ナイフ的技法がみられるが，刃部が先端部になることや，基部に裏面からの加撃による折断がみられることから，台形様石器の一種としてよいかと思われる。長さ11㎜，幅6.5㎜，厚さ3㎜，重さ0.3gとなる。かなり風化している。

57は㋑114（Ⅵ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。厚みのある不定形剥片の上下両側を折断し，右側縁上半にブランティングを施したもの。左上辺が刃部となっており，刃こぼれがみられる。先端部からの1回の樋状剥離がみられるが，素材の用い方からみて，彫器というよりも刃部を用いるナイフ的使用の台形様石器と言えよう。長さ25㎜，幅19㎜，厚さ10㎜，重さ3.7gで，全体にやや風化している。

彫　器（Fig.20-58～60，21-61・62）

58は㋑196（Ⅶ層）で，安山岩製。厚みのある不定形剥片を縦に半裁したもので，先端部に樋状剥離が5～6回施されている。長さ49㎜，幅23㎜，厚さ13㎜，重さ15.5gとなる。裏面右側辺基部側には雑な調整剥離が施されるが，意味は不明。極めて風化著しい。

59は㋑36（Ⅵ層上部）で，濃灰色で黒い筋が入る淀姫産黒曜石製。礫を半裁した後，厚みの

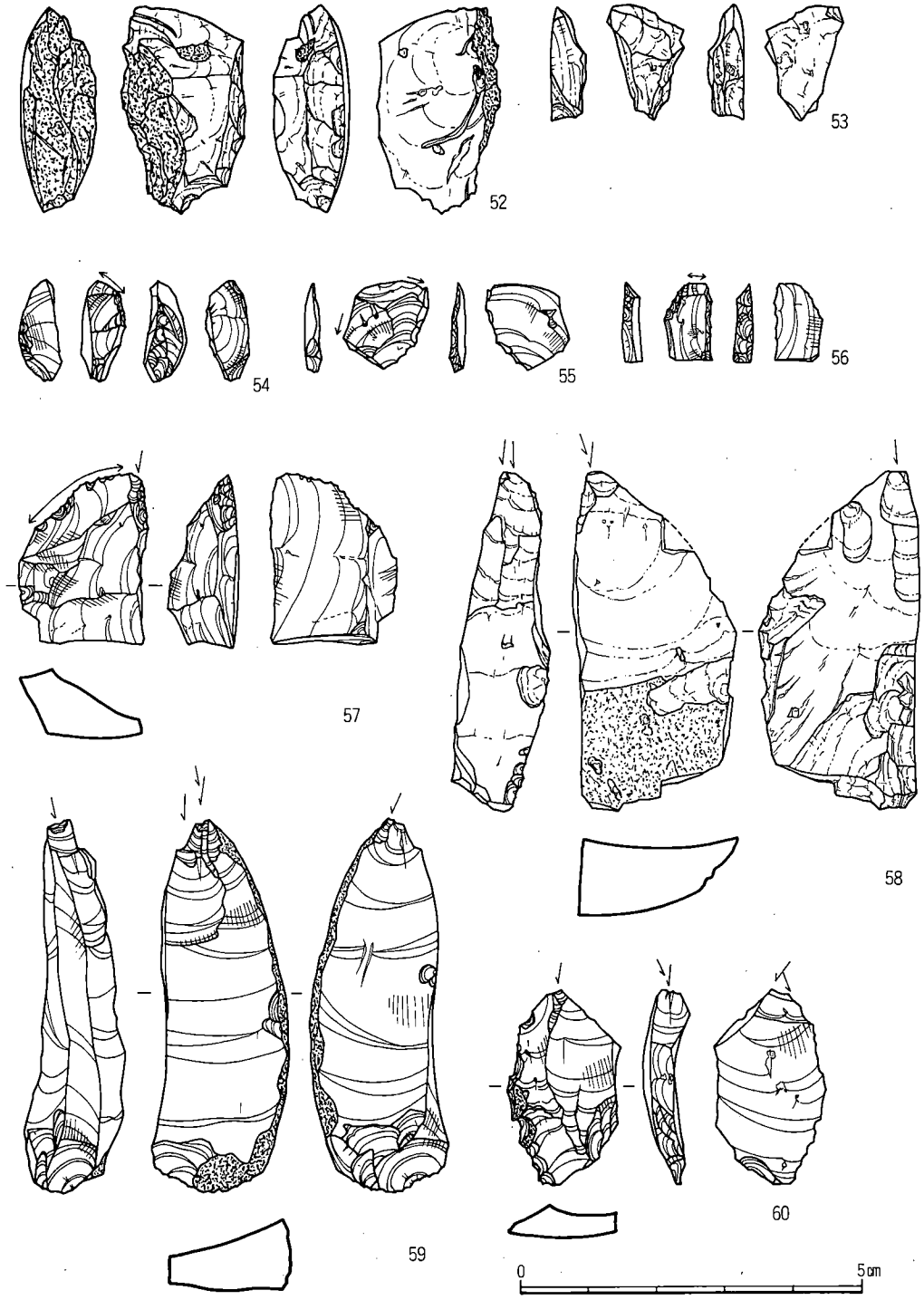


Fig. 20　Ⅰ区グリッド出土台形様石器・彫器実測図（実大）

ある剥片を縦位に剥ぎ出したものを素材としている。右側面は凹孔の多い礫面のままである。先端の打点付近の表面と左側面に小さな樋状剥離が5回施されている。基部付近は雑な整形剥離が施されている。長さ55㎜，幅18㎜，厚さ13㎜，重さ12.2gとなる。

60は㋣25（Ⅲ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。不定形剥片の右側の一部を折断し，更にバルブカットを行い，樋状剥離を4回施したもの。表面の一部には礫面を残し，左側縁にはいくらか縁辺のチッピングがみられ，使用された可能性もある。長さ28㎜，幅16㎜，厚さ5㎜，重さ2.2gで，かなり風化している。

61は㋛145（Ⅶ層上部）で，玻璃質安山岩製。横長の不定形剥片を半裁して，半裁面上端の素材打点側に樋状剥離を施している。上辺から右側辺上半にかけては，どちらかと言うと刃潰し的なチッピングが施されている。長さ41㎜，幅32㎜，厚さ6㎜，重さ9gで，かなり風化している。

62は㋑224（Ⅶ層上部）で，玻璃質安山岩製。礫面を一部に残した横長不定形剥片を素材として，左端側を折断してから，交叉状に樋状剥離を施している。下端辺と左側辺中央付近には簡単な細調整が施され，エンドスクレイパー的な性格も有するのかもしれない。長さ39㎜，幅31㎜，厚さ11㎜，重さ9.7gで，かなり風化している。

尖頭器（Fig.21-63・64）

63は㋛37（Ⅵ層下半）で，姫島産黒曜石製。厚みのある横長剥片の縁辺に細調整を丁寧に施したものだが，形態上は三稜ポイントに近い。右側縁辺の細調整は鈍角でブランティングそのもの。主要剥離面も打点側からの平坦剥離がかなり施されている。長さ21㎜，幅8.5㎜，厚さ5㎜，重さ0.8gで，やや風化している。

64は㋩7（Ⅲ層最下部）で，安山岩製の翼状剥片を素材とする。バルブカットが行われ，左側縁上半部には密なチッピングが施されているが，これはあまり鈍角でなく明確なブランティングではない。ナイフ形石器にしては厚みがある上に，ブランティングが不充分であり，剥片尖頭器にしてはかなり反り身になっていることから，いずれの器種にするかは判断に苦しむ。長さ34㎜，幅16㎜，厚さ8㎜，重さ4gで，やや風化がみられる。

掻・削器，使用剥片（Fig.21-65～Fig.23-78）

65は㋒20（Ⅲ層下部）で，安山岩製。不定形大型剥片の縁辺に細調整を加えただけのもの。打面はおそらく礫面だろうが，打点付近の上辺も表裏から調整を施している。左右両端（図中▲印）には，明らかに意図されたノッチ部を作っており，広義の石匙に含まれよう。長さ62㎜，幅60㎜，厚さ12㎜，重さ39.7g。かなりの風化が認められる。

66は㋣6（Ⅲ層下部）で，安山岩製の縄文期スクレイパー片。おそらく横長剥片の薄手のも

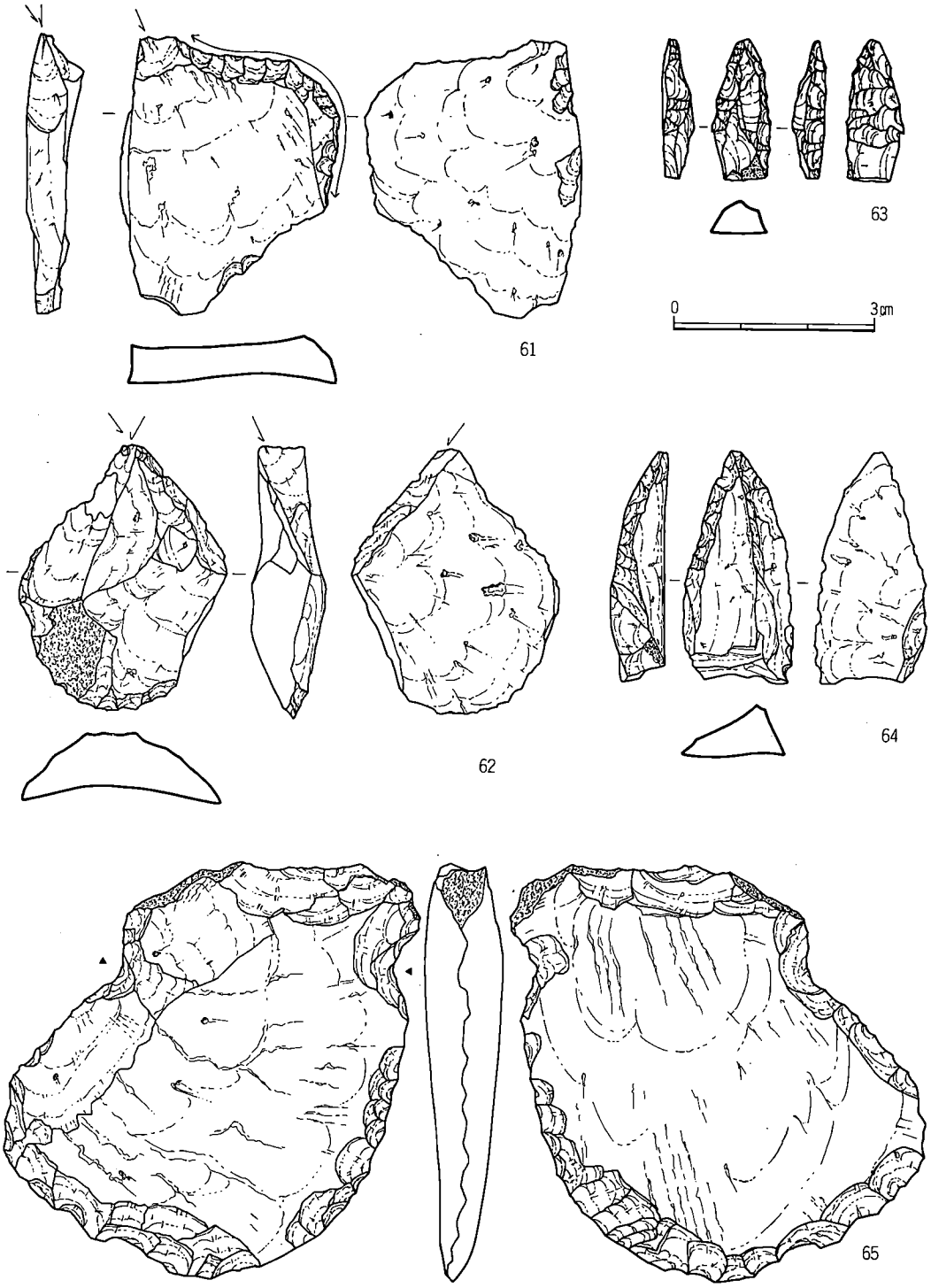


Fig. 21　Ⅰ区グリッド出土彫器・尖頭器等実測図（実大）

のを素材としており，下辺縁にわりと丁寧に調整剥離を施している。現存長37㎜，幅20㎜，厚さ５㎜，重さ3.2g となる。

67は㊁169（Ⅵ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。厚みのある不定形剥片の下辺付近に雑な細調整を加え，刃部としたもの。左側辺主要剥離面側は，使用による刃潰れ状が顕著であり，この部分を掻器状に使用したものであろう。長さ20㎜，幅27㎜，厚さ17㎜，重さ３g。

68は㊁101（Ⅶ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。表裏ともに中央に幾らか素材剥離面を残すが，全周使用可能な縁辺調整を施す。現存長18㎜，幅31㎜，厚さ９㎜，重さ4.8g。

69は㊁44（Ⅵ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。厚手の不整形剥片を素材とし，頂部の礫面以外は刃部として使用可能である。現存部範囲内では調整は雑で，縁辺の細かいチッピングは見られない。現存長17㎜，幅32㎜，厚さ9.5㎜，重さ3.7g となる。

70は㊁48（Ⅵ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。やや縦長の厚みのある素材の下半を折断して，全周使用可能になるように雑な調整を施したもの。素材剥離面は風化しているが，調整面はやや新しく，縄文期の再利用によるものかと考えられる。長さ25㎜，幅24㎜，厚さ10㎜，重さ4.8g。

71は㊁271（Ⅶ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。下辺各所に刃潰れがみられ，掻器的使用によるものと考えられる。全体にかなり風化しており，長さ17㎜，幅25㎜，厚さ10㎜，重さ3.6g となる。

72は㊁108（Ⅵ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。表面の縁辺調整等からみると打製石鏃的だが，裏面が全く異っており，スクレイパーの欠損品であろう。現存長11㎜，幅18㎜，厚さ4.5㎜，重さ0.6g。かなり半透明。

73は㊁27（Ⅵ層下半）で，良質の腰岳系黒曜石製で，裏面の調整状況からみて，打製石鏃ではなく，スクレイパーかナイフ形石器の破片であろう。裏面下辺の縁辺調整はブランティング的である。現存長10㎜，幅７㎜，厚さ３㎜，重さ0.2g となる。

74は㊁19（Ⅶ層最上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。右側縁に一部礫面を残した縦長剥片の左側辺を刃部とした使用剥片類である。左側辺上半には微細なチッピングを施した部位がみられる。長さ30㎜，幅14㎜，厚さ６㎜，重さ1.5g となり，全体に極めて風化している。

75は㊁144（Ⅵ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。調整面を打面とする小型不定形剥片の右側辺に，微細なチッピングを施しただけの使用剥片である。長さ20㎜，幅14㎜，厚さ４㎜，重さ0.7g となる。

76は㊁102（Ⅵ層）で，かなり半透明の腰岳系黒曜石製。打面を調整面とする縦長不定形剥片の表面右側辺に若干の細調整を施しただけの使用剥片である。長さ26㎜，幅18㎜，厚さ３㎜，重さ1.5g となる。

77は㊁128（Ⅵ層下部）で，安山岩製。礫面を打面とする不定形剥片の右側縁下半に刃部調

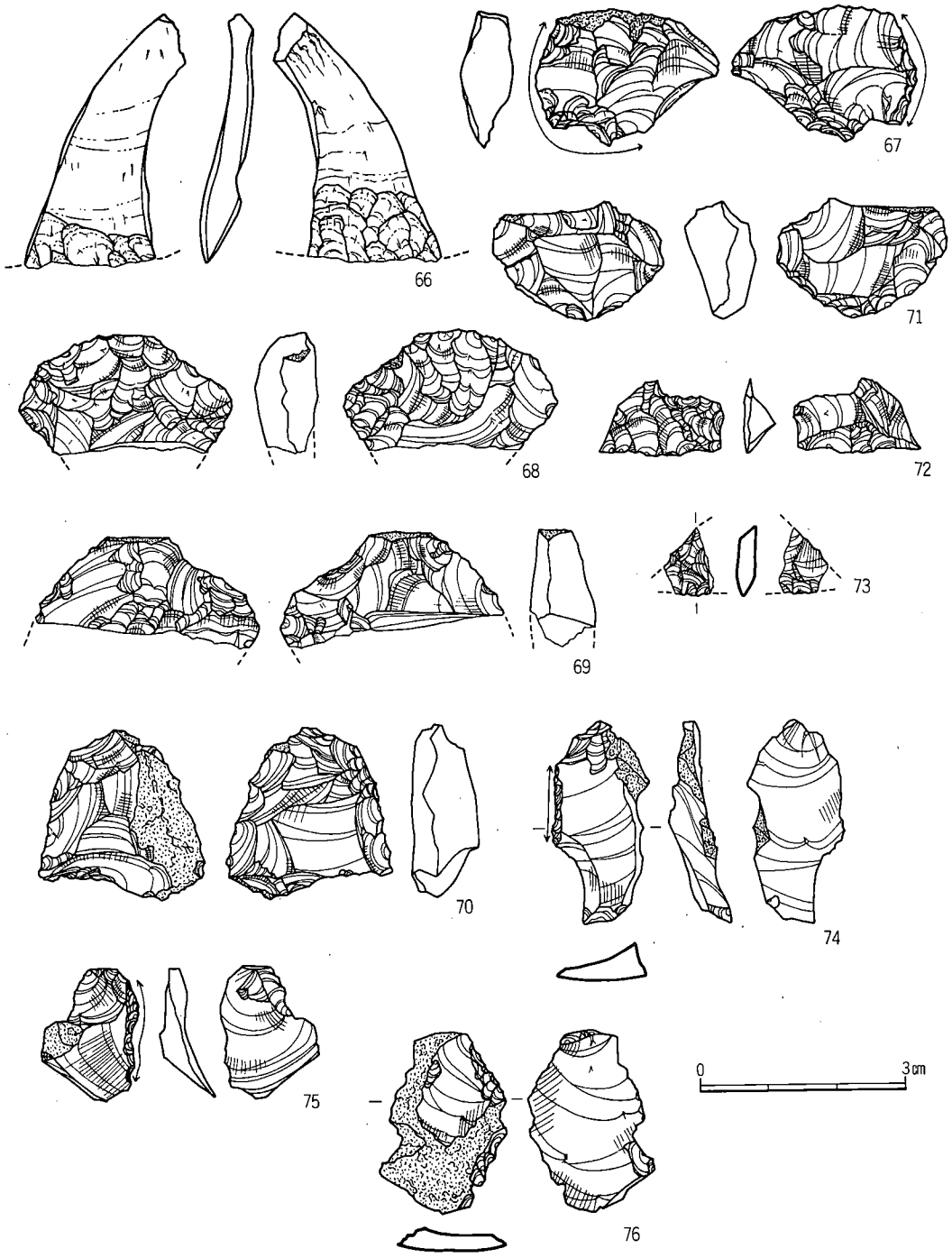


Fig. 22　Ⅰ区グリッド出土掻・削器実測図（実大）

整を施したもの。この部分のみが使用可能刃部である。長さ36㎜，幅31㎜，厚さ10㎜，重さ9.9gとなり，やや風化している。

78は㋑123（Ⅵ層）で，乳白色の蛋白石的な石材。調整面を打面とした不定形剥片の下辺に若干の調整剥離を施し，エンドスクレイパー的使途を持たせたもの。右側縁にも刃こぼれがみられ，刃部として使用している。長さ42㎜，幅29㎜，厚さ8㎜，重さ8gとなる。

石　核（Fig.23-79～Fig.25-87）

79は㋑2（Ⅵ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製。端正な最長20㎜の縦長剥片採取用の小型石核だが，両側面や下端に礫面を残すなど，実際にはあまり剥ぎ取りは進んでいない。打面は背面側へ傾斜を持つ特徴を見せ，打面調整は丁寧である。長さ20㎜，幅28㎜，厚さ17㎜，重さ10gとなる。

80は㋩93（Ⅵ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。縦長の不定形剥片採取用の廃核に近いもので，下端裏面側に縁辺調整がみられることから，廃核を利用したエンドスクレイパーとも考えられる。打面調整が施されており，打面は背面側へ急角度で傾斜を持つ。かなり風化しており，長さ27㎜，幅18㎜，厚さ10㎜，重さ4.1gとなる。

81は㋑221（Ⅶ層上部）で，良質の腰岳系黒曜石製小石核。厚さ1×3㎝前後，長さ3㎝強の小さな偏平円礫状原石を，縦位に折断した後，皮剥ぎ的に1回だけ剥ぎ取っただけのもの。よって折断面と剥ぎ取り面以外の背面と側面は礫面のままである。下端には若干の調整が施され，上端部は潰れ状態にあり，彫器的な使用があったのかもしれない。長さ29㎜，幅13㎜，厚さ10㎜，4.4gとなる。

82は㋑142（Ⅶ層上部）で，安山岩製の最長31㎜の石刃採取のための石核。打面は背面側から再生されており，再生後は左側面の1回の剥ぎ取りが行われただけとなる。剥ぎ取り順序は図に示した1→3（古→新）の順である。底面は背面に対しての打面となっており，最も風化が著しく，石核にとっての原材面とも考えられる。長さ35㎜，幅22㎜，厚さ12㎜，重さ10.2gとなる。全体に極めて風化している。

83は㋩113（Ⅶ層上部）で，安山岩製。打面が横剥ぎで，瀬戸内技法剥ぎ取り面かとも考えたが，その石核としては横幅が短く，打角もほぼ直角であり，疑問と言わざるを得ない。そうでなく縦長石刃状剥片採取用の石核と考えると，各剥離面にはいずれも打点が残らず，打面再生した後には剥ぎ取りは行っていないということになる。また，両側面の上・下から樋状剥離がみられるが，形態上彫器の可能性は少ない。長さ32㎜，幅34㎜，厚さ11㎜，重さ15.7gとなる。全体に極めて風化している。

84は㋑217（Ⅶ層最下部）で，安山岩製の寸詰まりの縦長剥片採取用石核。底面は図中の2′あたりを打点として舟底的調整を施している。打角は鋭角となり，打面は接する剥離面との関

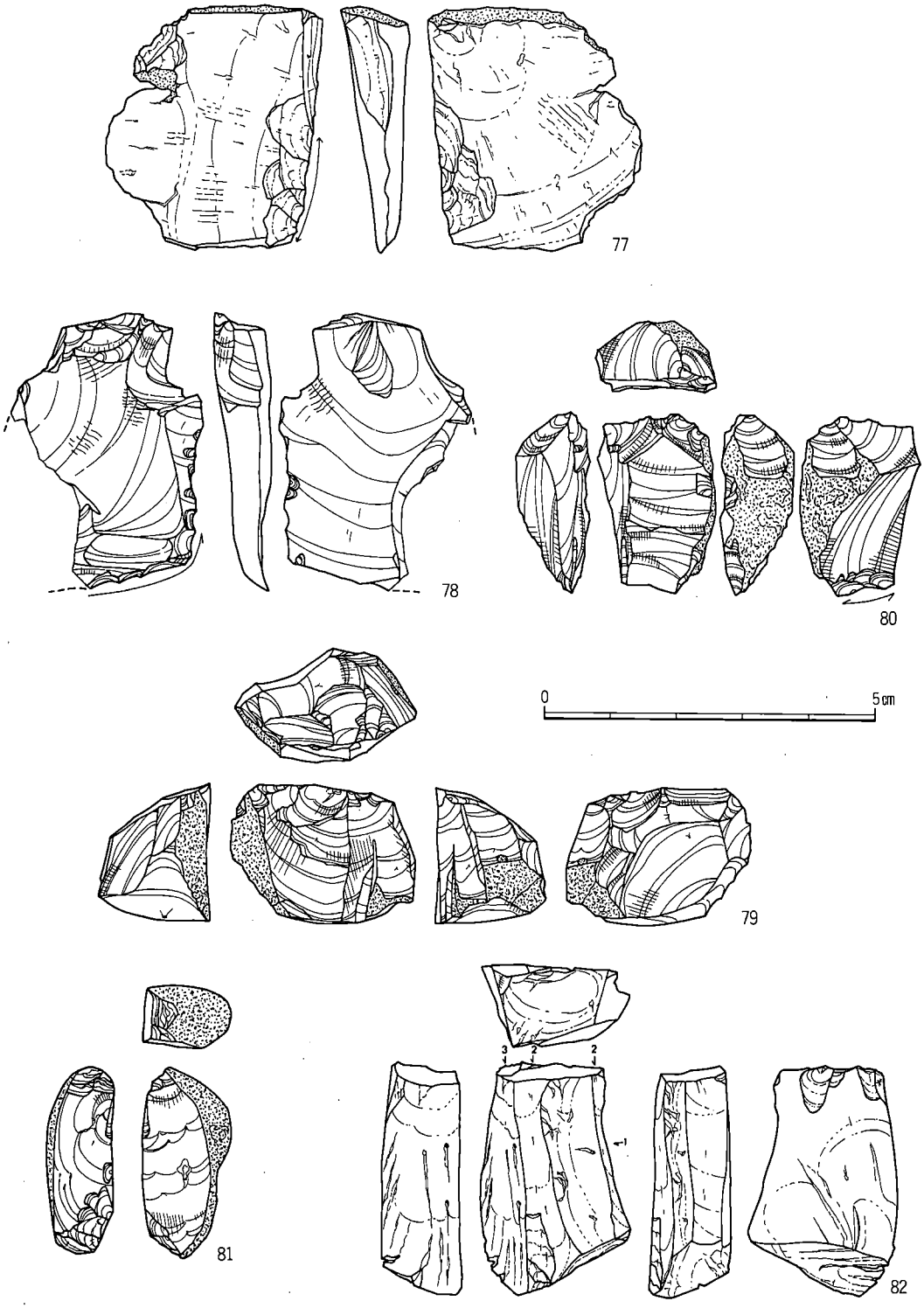


Fig. 23　Ⅰ区グリッド出土掻・削器，石核実測図（実大）

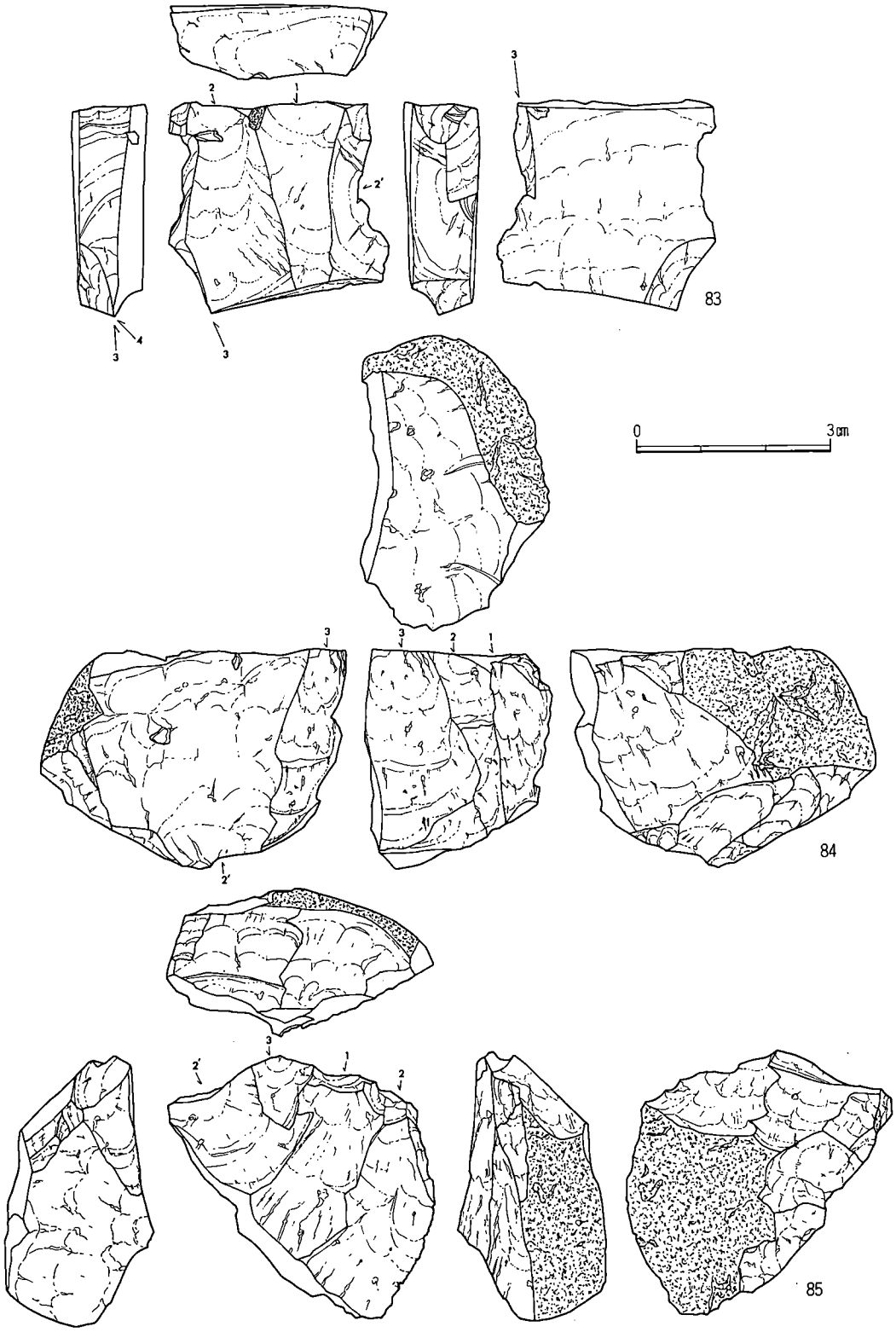


Fig. 24　Ⅰ区グリッド出土石核実測図（実大）

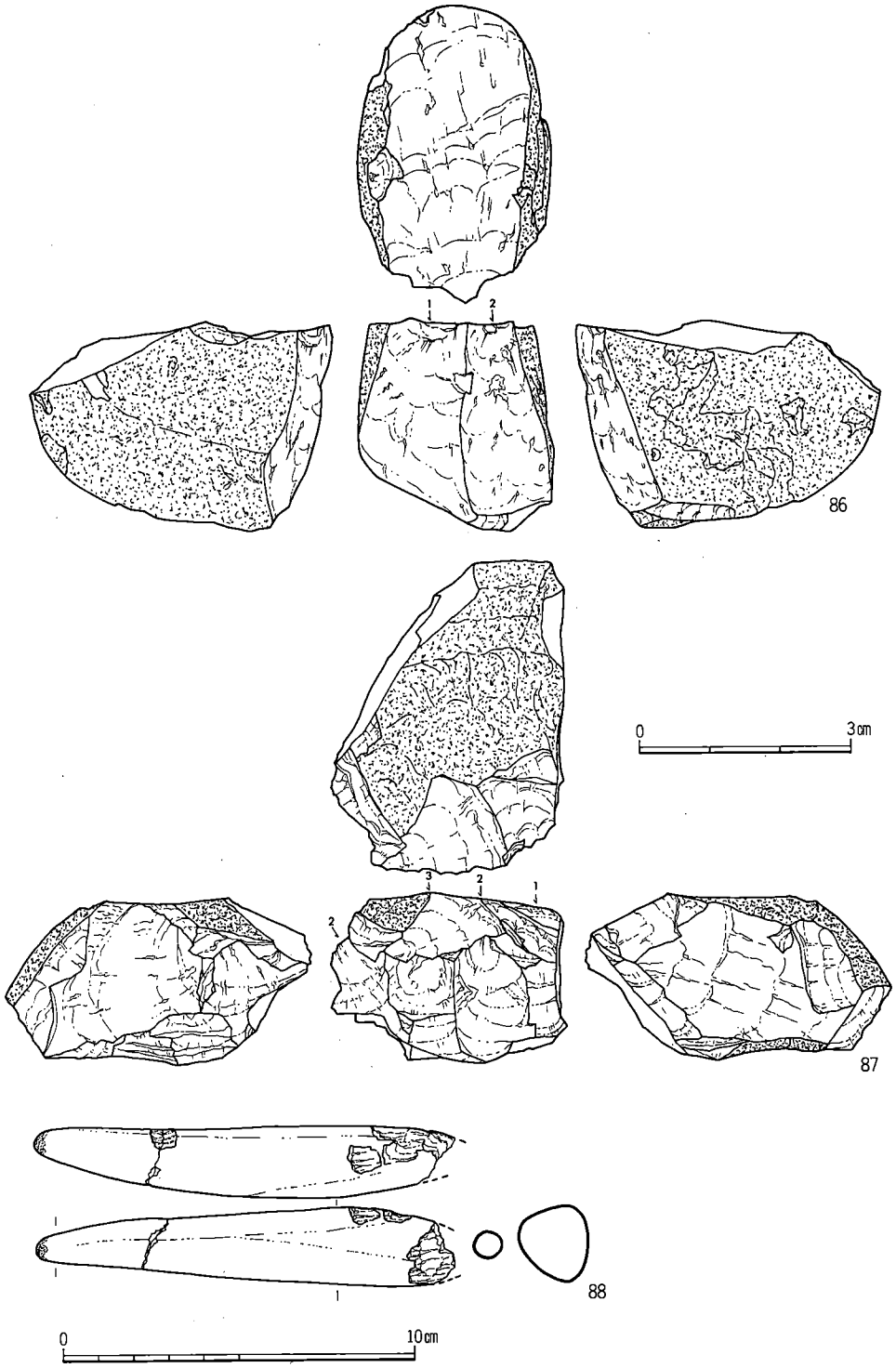


Fig. 25　Ⅰ区グリッド出土石核・棒状石器実測図（88は1/2，他は実大）

係の中で最も古い剥離である。背面から右側面上半にかけては大きく礫面を残したままである。高さ34㎜，幅29㎜，厚さ45㎜，重さ46.8g。かなり風化している。85と同一個体であろう。

85はⓘ232（Ⅶ層上部）で，安山岩製の不定形小剥片採取用石核。打面は背面に向かって急傾斜をなし，打点側からの打面調整がなされている。背面には大きく礫面を残す。84と同一個体になると思われるが，接合はしない。長さ41㎜，幅41㎜，厚さ22㎜，重さ28g となる。

86はⓘ4（Ⅲ層下部）で，玻璃質安山岩製の最長29㎜の縦長剥片を採取する石核。小円礫を縦に半裁し，その面を打面としている。剥ぎ取り面以外の両側面・背面・底面は礫面のままである。高さ29㎜，幅28㎜，厚さ42㎜，重さ35.9g となる。

87はⓝ77（Ⅵ層最下部）で，赤茶色のチャート質石材の小さな不定形剥片を採取する石核。両側面は剥ぎ取り面側からの打撃により大きく整形剥離されている。打面と剥ぎ取り面はかなり鋭角をなす。打点ラインを刃部とした礫石器の可能性もある。高さ24㎜，幅34㎜，厚さ44㎜，重さ37.9g となる。

棒状石器（Fig.25-88）

88はⓣ2（Ⅸ層）で，緑色片岩の自然石を使用したもの。上端が潰れ状となっており，その付近の断面が丸いので，木・皮等への穿孔用工具とも考えられる。中央付近は断面が三角形に近い。長さ119㎜，最大径21㎜，重さ56.9g となり，全体にかなり風化している。この遺物の出土した意味は，他グリッドのⅨ層から僅かに安山岩剥片が出土していることと合わせて，この古い層での剥片出土が単なる流れ込みによるとか，偶然的な遺物散乱ということではなく，やはり，生活痕跡が確実にみられるのだという方向に考えておきたい。

打製石鏃（Fig.26）

Ⅰ区グリッドから出土した打製石鏃は全部で17点で，うち安山岩製が12点，黒曜石製が5点となる。この石材使用傾向は剥片を含んだ石器全体の両石材の比率にほぼ等しい。また，出土層位を見てみると，Ⅵ層上部が6点，Ⅲ層下部が4点，Ⅵ層下部が3点，Ⅵ層中部が2点，Ⅲ層中部とⅦ層上部が各1点ずつと，Ⅵ層上部をピークとして，その上下方向に少なくなっている。以下個々に説明を加えたい。

89はⓝ103（Ⅵ層最下面）で，安山岩製の凹基鏃。裏面も縁辺チッピングが少なく，全体の調整は雑だが，整形等の作りはうまい。右脚端が僅かに欠損している。長さ28㎜，幅17㎜，厚さ4.5㎜，重さ1.4g となる。かなり風化している。

90はⓡ38（Ⅲ層最下部）で，安山岩製の平基鏃である。表・裏面ともに丁寧な調整を施している。先端はやや稚拙であり，鋭利ではない。かなり風化しており，長さ21㎜，幅14㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.9g となる。

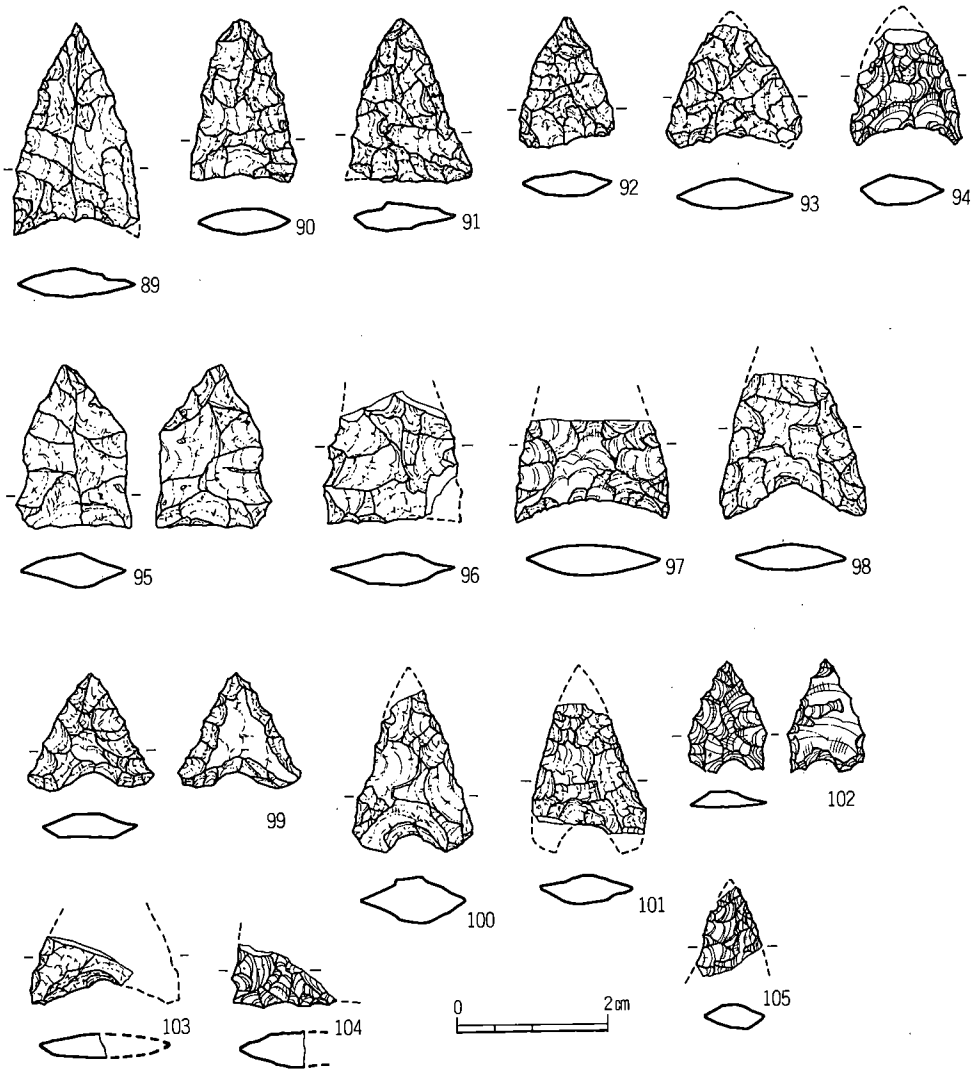


Fig. 26　Ⅰ区グリッド出土打製石鏃実測図（実大）

91は㊋27（Ⅲ層下部）で，安山岩製の平基鏃。左右辺が対称的でなく，表裏面ともに階段状剥離がいくらか見られる等，調整は雑である。かなり風化しており，左脚端部を僅かに欠損している。長さ21㎜，幅16㎜，厚さ４㎜，重さ0.9g となる。

92は㊋195（Ⅲ層最下部）で，安山岩製の小型平基鏃。基部下辺がしっかりとした直線になっておらず，左右側辺の長さが異るなど，作りはうまくない。表裏面ともに調整剥離も雑である。かなり風化しており，長さ17㎜，幅12.5㎜，厚さ３㎜，重さ0.5g となる。

93は㊌106（Ⅵ層）で，安山岩製の凹基小型鏃。先端と右脚端が僅かに欠損する。裏面の調

整剝離は雑だが，全体の作りはうまい。かなり風化しており，長さは16㎜，幅18㎜，厚さ４㎜，重さ0.8g となる。

94は㊐５（Ⅲ層最下部）で，良質の腰岳系黒曜石製。脚端部が小さく尖る類の小型凹基鏃で，先端部を新しいガジリで欠損するが，左辺上端は古い欠損であるため，先端も使用時の欠損であった可能性が高い。表裏面ともにやや雑な調整を施している。現存長15㎜，幅14㎜，厚さ４㎜とやや厚手品。重さは0.7g となる。かなり風化している。

95は㊁68（Ⅵ層上部）で，安山岩製。平基五角形鏃だが，表裏ともにおおらかな整形剝離のままで，縁辺細調整が殆どみられない。風化が極めて著しいため，剝離状況は不明確である。長さ21㎜，幅15㎜，厚さ５㎜，重さ1.3g。

96は㊋53（Ⅵ層上部）で，安山岩製の平基鏃。右脚部端と先端側が欠損している。表裏面ともに調整剝離は雑で，現存長17㎜，幅18㎜，厚さ４㎜，重さ1.3g となる。かなり風化。

97は㊀98（Ⅵ層下半）で，良質の腰岳系黒曜石製の凹基鏃。上半を欠損しているが，表裏ともに実に見事な押圧剝離技術の粋を見せてくれている。現存長14㎜，幅20㎜，厚さ４㎜，重さ1.1g となる。極めて風化している。

98は㊁63（Ⅵ層上部）で，安山岩製の基部が逆Ｖ字に切り込まれる類。表裏ともに調整剝離は雑だが，全体の整形はうまい。先端を欠損するが，現存長19㎜，幅19㎜，厚さ3.5㎜，重さ1.1g となる。極めて風化している。草創期。

99は㊀229（Ⅶ層上部）で，安山岩製の鍬形系の浅い凹基小型鏃。裏面には大きく主要剝離面を残す。極めて風化著しいため，詳細な剝離状況は不明確である。長さ15㎜，幅16.5㎜，厚さ３㎜，重さ0.5g となる。草創～早期。

100は㊋２（Ⅵ層上部）で，安山岩製の中央だけ凹基となるタイプ。表裏ともに極めて雑な調整で，階段状剝離が幾らかみられる。先端は欠損しており，現存長21㎜，幅16㎜，厚さ６㎜，重さ1.4g。幾らか風化している。

101は㊁34（Ⅵ層上部）で，安山岩製の凹基鏃。先端と両脚端を欠損する。裏面は調整がやや雑だが，安山岩にしては縁辺リタッチが丁寧で精品である。現存長17㎜，現存幅15㎜，厚さ４㎜，重さ0.8g となる。かなり風化している。

102は㊁27（Ⅲ層）で，良質の腰岳系黒曜石製特小型鏃である。五角形的な形態に近いが，典型的な薄手剝片鏃である。長さ19㎜，幅10㎜，厚さ２㎜，重さ0.2g となる。

103は㊋76（Ⅵ層上部）で，安山岩製の凹基鏃。裏面の調整剝離は表よりも丁寧である。全体の整形は良さそうである。現存長９㎜，現存幅14㎜，厚さ３㎜，重さ0.3g となる。かなり風化している。

104は㊋127（Ⅵ層下部）で，良質の腰岳系黒曜石製平基鏃。やや雑な作りで，現存長８㎜，現存幅14㎜，厚さ4.5㎜，重さ0.3g となる。基部片だけであり詳細は不明。

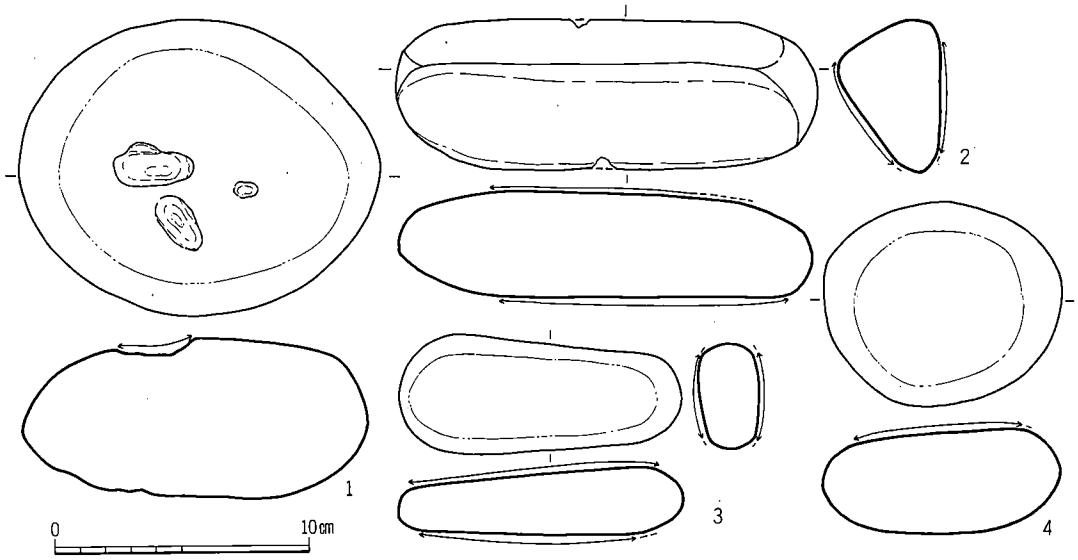


Fig. 27　Ⅰ区グリッド出土凹石・磨石実測図（1/3）

105は㋣118（Ⅵ層）で，良質の腰岳系黒曜石製。先端部を欠くが，表裏ともに丁寧な調整剥離を施している。現存長11㎜，現存幅９㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.2g となる。かなり風化。

凹石・磨石（Fig.27）

１は㋛18（Ⅵ層中部）で，凝灰岩質の河原石の片面の中央より片寄った位置に凹部を持つもの。他に２ケ所，小さな凹部がみられる。直径143×118㎜，最大厚さ61㎜，重さ1,243g。

２は㋝74（Ⅲ層最下部）と，㋝76（Ⅵ層上部）とが接合したもので，凝灰岩質の長い河原石を磨石として使用したもの。断面が三角形をなし，うち２面が磨面となっている。長さ166㎜，幅60㎜，厚さ41㎜，重さ537.6g となる。

３は㋝75（Ⅵ層上部）で，凝灰岩質の細長い河原石の表裏両面を磨石として使用したものである。表裏とも良く使用しており，長さ112㎜，幅47㎜，厚さ28㎜，重さ184.3g となる。

４は㋑６（Ⅲ層最下部）で，凝灰岩質の河原石の片面のみを磨石として使用したもの。直径94×80㎜，厚さ41㎜，重さ370g。

以上の凹石・磨石は，形態上から縄文期の通有のものと変わることは無く，出土層位からも積極的に旧石器時代のものであるという確証は得られないことから，縄文期の所産であろうと推定される。

3　I区グリッド出土土器

I区各グリッドからは石器多量と同時に縄文土器少量が出土した。当初，旧石器のみであろうと予想していただけに，下のⅥ層にまでも縄文土器小片が包含されている事実に，正直なところ若干の失望の感もぬぐえなかった。ただ，正確に事実を記録して報告する姿勢には変わりなかったが。

土器の出土状況は既に前項で報告したので，ここでは簡単にとりまとめてみると，Ⅲ層で51点がほぼ全グリッドから出土し，Ⅵ層では北西側のグリッドと南端のグリッドから計13点が出土している。これらは殆ど極く小片であり，実測に耐え得るものは図示した9点にすぎない。土器の時期は，縄文早期（厚手突瘤文，塞ノ神），縄文晩期中葉中～後葉古段階である。中でもⅥ層最下部から出土した塞ノ神A式土器は，この層の時期推定に有意義である。

縄文早期土器（Fig.28）

厚手突瘤文土器（1・2）1はI区グリッド㋣6（Ⅲ層下部）で，2と同一個体であろう。口縁端部が丸く，器壁が1.6cmと厚く，外面からの棒状工具による深さ1cm程の刺突が横位に連続施文されている。刺突部の内側はごく僅かに瘤状にふくらみをみせる。内外面ともにナデており，胎土に細砂粒を多く含み，金雲母片が目立つ。焼成やや不良で，内外面ともに明るめの茶褐色をなす。2は㋣5（Ⅲ層下部）で，1と同一個体。調整・胎土等1と同じ。ただ，刺突部の内側は殆どふくらみを見せない。この2点は縄文早期前半の厚手無文土器に，草創期の突瘤文手法が残ったものと理解される。

塞ノ神式土器（4）I区グリッド㋥172（Ⅵ層最下部）で，内湾して開く口縁となり，口唇上面はシャープな面取り状となる。内外面ともに器表が剥落しているが，丁寧なつくりと思われる。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成不良で内外面ともに淡黄褐色をなす。この土器は全容が判からないので詳細な分類は明確にできないが，口唇部のシャープな面取りの具合や，内湾する特徴を示していること等から，塞ノ神式土器の中でも前半の塞ノ神A式となろう。

縄文晩期土器（Fig.28）

浅鉢（3・6～9）3はI区グリッド㋭Ⅲ層下部出土品で，体部から大きく開く口縁の内外両面に段をつくる類で，明らかに波状口縁となる。体部外面はやや雑な横位ヘラナデだが，他の内外面は横位ナデを施す。細砂多く含み，焼成不良で内面は褐色，外面はこげ茶色をなす。晩期中葉中段階の精製浅鉢であろう。6はI区グリッド㋱33（Ⅲ層）で，開いた口縁の内面直下がわずかにへこみ，外面には沈線を巡らす。内外面ともにヘラ磨きで，胎土精良，焼成良好で内外面ともに淡黄褐色をなす。晩期後葉古段階のクリナラ編年での浅鉢C2類となろう。7は

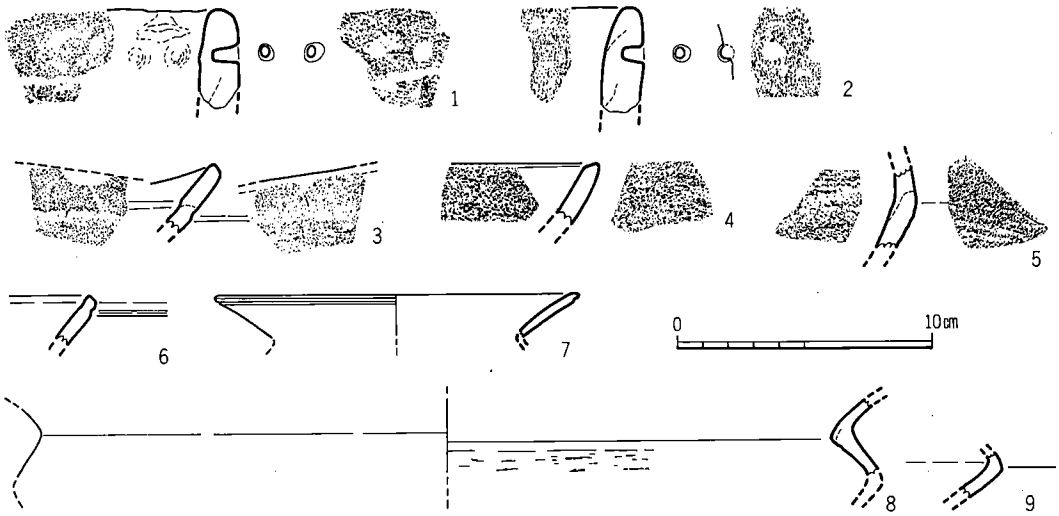


Fig. 28　Ⅰ区各グリッド出土縄文土器実測図（1/3）

㋐7（Ⅲ層下部）で，復原口径14.4cmとなる小型品である。口縁外面に浅い沈線1条を巡らし，内外面ともにヘラ磨き仕上げ。極めて薄手精製品であり，胎土精良。焼成不良で内面は茶褐色，外面は暗茶褐色をなす。強く開く口縁形態からみて，晩期後葉中段階の浅鉢D3類の小型品と考えられる。8は㋓30（Ⅱ層）で頸部復原径32cmとなる大型品である。頸部内面にしっかりした稜をつくり，外面は横ヘラ磨き，内面下半は横位擦過，上半はヘラ磨きかと思われる。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成不良で内外面ともに暗い黄土色をなす。晩期後葉古段階の精製浅鉢C1類かC2a類となろう。肩部の張りが短くて，A4類的な古い様相を残している。9は8と同じ地点出土の㋓30（Ⅱ層）であるが別個体である。外面はかなり磨滅するが，内外面ともにヘラ磨きであろう。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は茶褐色をなす。晩期中葉新～後葉古段階の，浅鉢A3～A5，或いはD2類と思われる。

深鉢（5）Ⅰ区グリッド㋐82（Ⅲ層最下部）で，外面に丸っこい稜をつくる。内面は横ヘラ磨き，外面上半は丁寧なナデ，下半は横位条痕。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成やや良好で内面は灰黒色，外面は暗褐色をなす。晩期中葉を中心とする定型深鉢と考えておく。

C　縄文時代の竪穴住居跡

第13号竪穴住居跡（Fig.29，PL.29）

Ⅱ区の北端近くの西寄りに位置する略方形住居である。南西隅で石棺系竪穴式石室C1に切

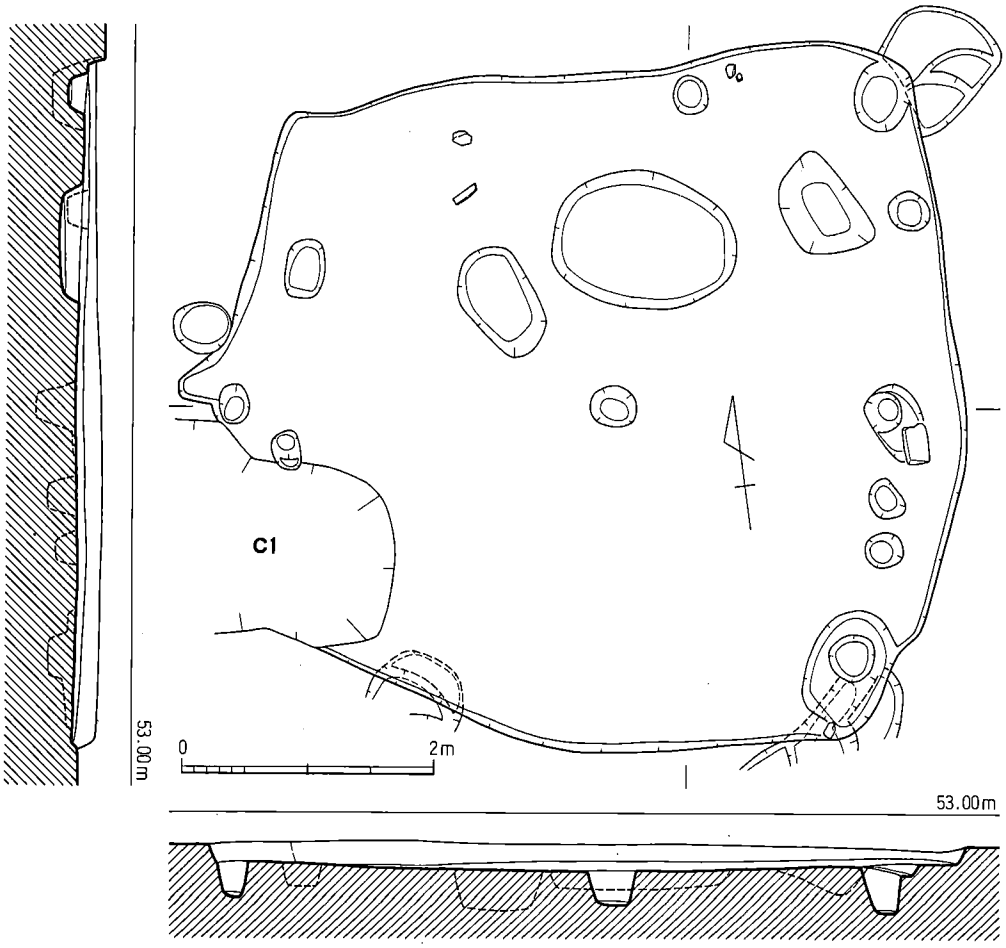


Fig. 29　第13号住居跡実測図（1/60）

られ，東壁際中央付近で轟Ｂ式期の第28号土壙を切る。南北420～538㎝，東西488～592㎝の規模で，面積は25.9㎡となる。南西隅以外の３つのコーナーは角がわりとしっかりと残っているが，西辺が短いため全体としては台形状プランとなる。その上，南辺と東辺の壁が外方へ丸く張り出すため，かなり歪つな平面形となっている。柱穴は住居内に11個の小穴がみられるが，主柱穴配置を示す類ではない。東壁沿いに６個の小穴が並び，壁構造に関る柱穴群かと思われたが，他辺には見られない。図の東西断面図に示した，中央小穴を含む一直線上に並ぶ３穴が主柱穴となるものか。類例が無いので確定はできない。床面は中央部がややへこみ気味になっている。また，炉は検出されていない。

出土遺物

浅鉢（Fig.30-１・２）１は口唇部を断面四角的な玉縁状に作る類で，内外面とも横ヘラ磨き

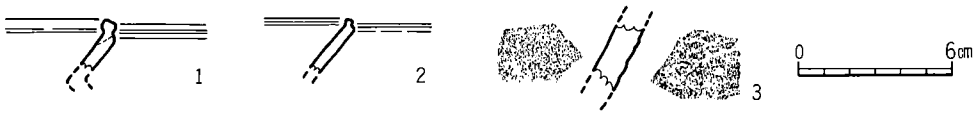


Fig. 30　第13号住居跡（1・2），第1号集石炉（3）出土縄文土器実測図（1/3）

の精製浅鉢片。胎土に粗砂僅か，細砂幾らか含み，焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。2は口唇端を小さな玉縁状に作る類で，内外面横ヘラ磨きの薄手精製浅鉢片。胎土精良で焼成やや不良。内面は暗茶褐色，外面は黒褐色をなす。1・2ともに，縄文晩期後葉古段階の浅鉢C1～C2a類（「クリナラ分類」による）となろう。

打製石鏃（Fig.76-185，Fig.77-206）185は良質の腰岳系黒曜石製。先端部を欠損しており，調整剥離は雑である。長さ23㎜，幅17㎜，厚さ3.5㎜，重さ1gとなる。206は腰岳系黒曜石製の五角形鏃で，表裏に大きく素材面を残す広義の剥片鏃。長さ31㎜，幅19㎜，厚さ4.5㎜，重さ2.6gとなる。

掻器（Fig.68-133）厚みのある小縦長剥片の下半部を使用したもの。良質の腰岳系黒曜石製で，上端折断面を除く全周縁に，ブランティング的な鈍角のチッピングが施されている。左辺と下縁に潰れ気味の部位がみられ，掻器的使用が考えられる。ナイフ形石器基部とも考えたが，上半が細くなりすぎることや，尾部側の返りが強すぎること，縁辺調整が特に基部だけを意識した類ではなく全周均一的であること等から，掻器の類と判断した。長さ24㎜，幅11㎜，厚さ7㎜，重さ1.6gとなる。

以上の出土遺物からみて，当竪穴住居跡は縄文晩期後葉古段階のものと考えられる。石器類も矛盾は無く，打製石鏃もこの時期の特徴を極めて良く示している。本遺跡で検出した晩期住居跡はこれ1軒のみであるが，周辺に拡がる包含層や同時期の土壙群，全体から出土した土器の多さ等を見ると，この至近に大規模な晩期集落が存在する事は容易に推測できる処である。

また，近辺の遺跡調査例で当該時期の竪穴住居跡を探すと，杷木町クリナラ遺跡の集落が特記される。本遺跡の住居と比較すると，平面形は両者ともに方形のややくずれたような形で酷似している。面積は金場例がひと廻り大きい。柱穴はクリナラ例がかなりの住居に壁構造を示す壁沿いの小柱穴群が並ぶ類であるのに対し，金場はあまり判然としない。床面はいずれも中央が低く下がる類。炉もしくは焚火痕の焼土が住居中央よりやや片寄った位置に認められたクリナラ例に対し，金場例ではその痕跡が認められない。以上の両遺跡間の住居跡に関する異同については，資料の蓄積が進まない現状では，単なる集落の違いによるものか，個性差の著しい社会を示すものなのか等の断定はなし得ない処である。金場遺跡での周縁遺跡発掘調査がこれらを解決してくれるのかもしれない。

D　縄文時代の集石炉

第１号集石炉（Fig.31-１，PL.11）

Ⅱ区の北東端近く，第27号土壙の北西隣に位置する。下層検出の遺構である。掘方の南西端を縄文晩期の穴に切られる。東西91cm，南北81cm，深さ15cmの浅い穴を掘り，その壁に扁平な黒色片岩を並べ，その内側に砂岩質の河原石や黒色片岩小片が投入されたような状況であった。壙底面に敷かれたような石は見られなかった。壙内の埋土は暗褐色土であったが，炭粒等は検出できなかった。中の石の半数以上は火熱を受けて赤変していたが，壙壁に斜めに置かれた石には顕著な赤変は見られなかった。集石の間から押型文土器小片１点が出土した。

出土土器（Fig.30-３）

押型文土器　横位施文の楕円形押型文（６～７×２～2.5mm）で，内面はナデている。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成不良で，内面は暗灰黄色，外面はこげ茶色をなす。

この土器は，押型文期の前半，早水台期に比定でき，当集石炉の時期を示すものであろう。

第２号集石炉（Fig.31-２，PL.11）

Ⅱ区の北端近く，第13号住居跡の北隣に位置する。東西97cm，南北81cm，深さ13cm程の穴の中に石英質の礫２点，片岩３点，砂岩系の塊石・河原石11点が投棄された状況で発見された。壁に斜めに置かれたような石が数点あるが，花弁状に敷かれた状況ではない。炭粒は検出できなかったが，８個の石は加熱を受けて赤変していた。西南半を縄文晩期の柱穴状の深い穴で切られている。

第３号集石炉（Fig.31-３，PL.12）

Ⅱ区北端の下層で検出され，第28号土壙と第11号住居跡に挟まれた位置に所在する。南北に100cm，東西に66cm，深さ９cmの浅い穴を掘り，その中に黒色片岩・安山岩・砂岩の角礫を集めたもの。礫は他の第１・２号集石炉のものと比べて明らかに小さく径10cm前後のものが多い。礫のうち半数は赤く焼けている。礫は敷き詰められた状況のものは無く，第１号集石炉のものと様相が異る。炭片は検出できなかった。集石群中から土器小片１点が出土したが，その型式は全く判断できない。埋土は暗茶色土で，第１号集石炉のものとほぼ同じである。

以上の３基の集石炉は，Ⅱ区の北端の丘陵裾沿いに一直線に並んで検出され，西端の第２号から東隣の第３号までが５m，第３号から東端の第１号までが12m離れている。この一帯に集石炉が営まれたのは偶然ではなく，やはりこの山裾沿いを意識して，北風を避け，東隣の谷川

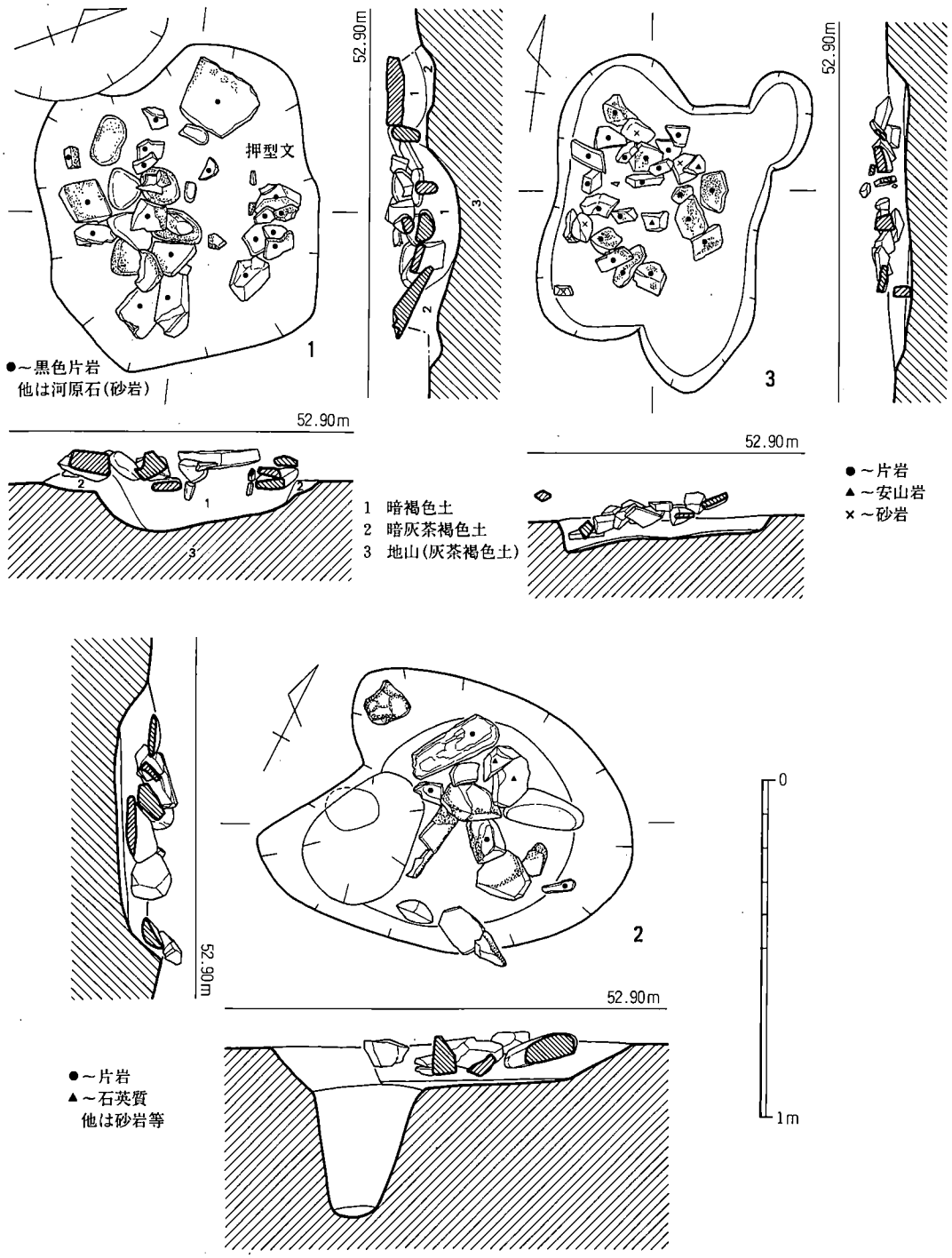


Fig. 31　第1～3号集石炉実測図（1/20）

からすぐ登ってこられる場所が選ばれたのだと考えたい。集石炉自体の性格としては，石の配置や大きさからみて，第1・2号と第3号とは性格が異ると思われる。第1・2号集石炉は，原の東遺跡で見られる如く，底石を敷き，壙壁に斜めに花弁状に石を並べる類と同じ系統と考えられる。ただこの金場遺跡例では，壙底の敷石が明確でなく，一部が敷石だとしてもきちんと敷き詰めた類ではなく，簡単に放り込んだような類である。一方，第3号集石炉は小礫を集めただけという感じで，敷いた状況は無い。以上の3基からは，いずれも炭片等検出できず，現地で火を焚いたとは思えないが，石はいずれもかなり焼けており，正確に称するならば，焼石集積土壙と言えるだろう。時期的には，第1号集石炉で押型文土器小片1点が出土したのみであるが，これが当遺構の時期を示すと考える。というのも，本金場遺跡では，縄文前期・晩期の土器片はかなり大量に出土しており，どの遺構・小穴等にも混入している状況がみられたが，押型文土器に限っては本書に図示した都合2点のみの僅かな出土状況であった。そのうちの1点が集石中にて検出された事は，恐らくキャンプ的な性格しか無かった生活痕跡として集石炉が残された事と符合して，意味有りと判断する。また第1・2号集石炉が各々，縄文晩期の穴に切られており，少なくともそれ以前の遺構であるという事，更に近隣の原の東遺跡等での集石炉が殆ど押型文期の所産である事からも，時期的判断が推定できる。

E　縄文時代の土壙

第18号土壙（Fig.32，PL.49）

Ⅱ区の南端に3×4間の立派な第3号掘立柱建物が発見されたが，当土壙はその柱穴のひとつであるP390に切られて検出された。直径90cmの略円形プランをなし，壁はほぼ直で，深さ32cmとしっかりしている。底面は中央がやや下がり気味で，北半に小穴が2個みられるが，性格は明らかでない。中からは晩期浅鉢・深鉢片・黒曜石小原石・河原石・片岩片等が多く投棄された状況で出土した。

出土土器（Fig.33）

浅鉢（1）直径51.6cmに復原できる大型品で，体部屈折稜から内傾して頸部で再び折れてから大きく開く口縁となる類。口唇部内面に段，外面にシャープな沈線を巡らす。調整は，外面はすべて丁寧な横ヘラ磨き，口縁の開いた部分の内面は丁寧な横ヘラ磨き，以下の体部屈折稜までの内面は横位擦過の上を雑な横ヘラ磨き。体部内面は横位ヘラ磨きで，下半は雑で斜位のヘラ磨きとなる。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成やや良好で，内面は黒色，外面は暗黄褐～暗褐色をなす。晩期中葉後半（中～新段階）の浅鉢A類だが，頸部が長く伸びる点では古相を

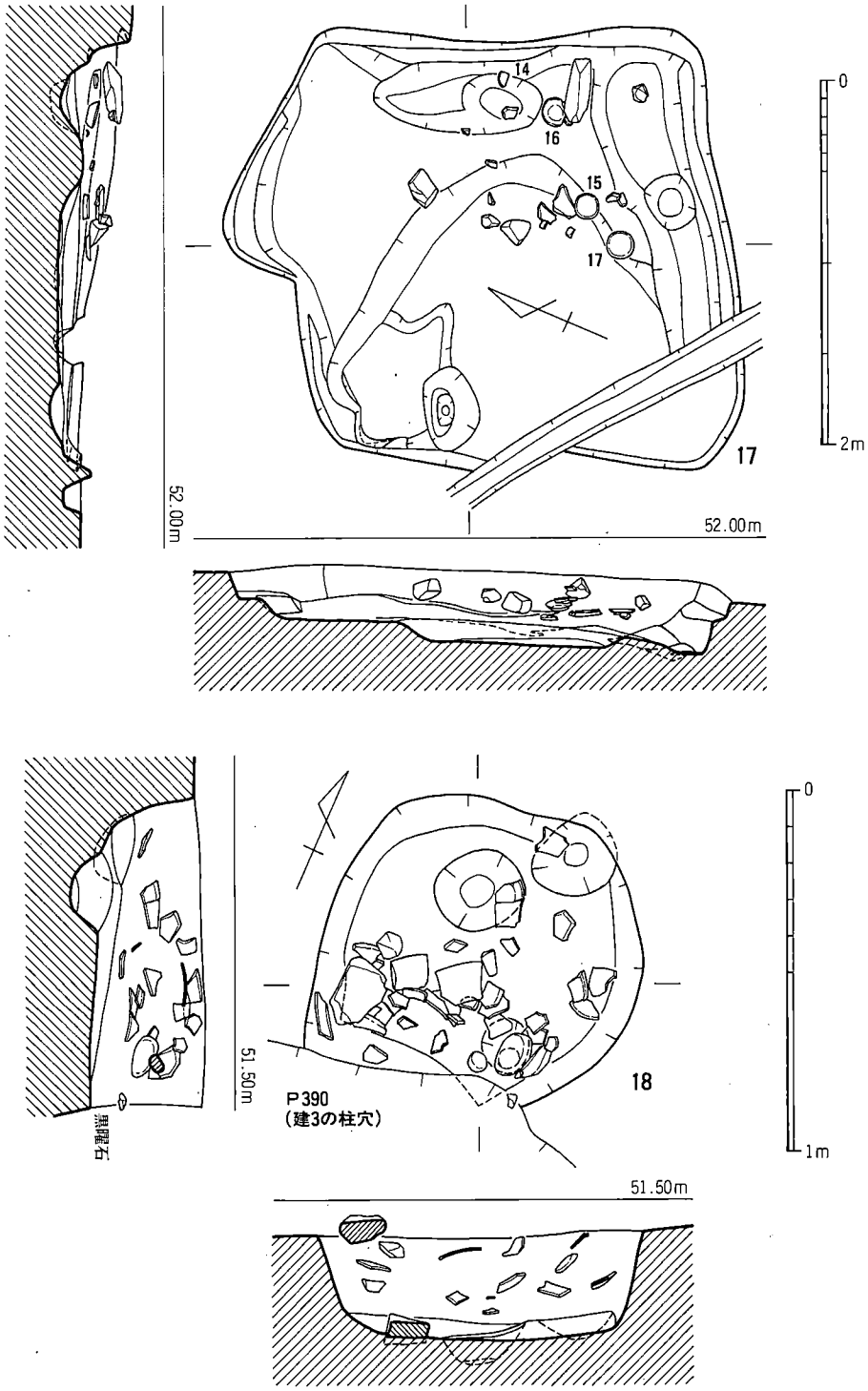


Fig. 32　第17・18号土壙実測図（1/40，1/20）

示しており，中葉中段階のＡ２類的である。

深鉢（２～４）２はやや内湾気味に開き，波状口縁となる類で，外面は横位擦過の上をナデ，内面は横位擦過のままとなる。胎土に粗・細砂粒をかなり含み，焼成良好で内面は淡黄茶褐色，外面は煤が付着して黒褐色をなす。晩期中葉新段階の深鉢Ｄ３類となる。３は内湾気味に開き波状口縁となる類で，内面はナデで中位程が横位ヘラナデ状となる。外面は横位擦過の上をナデており，内外ともにやや凹凸がある。胎土に細砂粒をかなり含み，内面は黄茶～暗褐色，外面の地は淡褐色だが，上半は煤がこびり付く。晩期中葉新段階の深鉢Ｄ３類である。２と同一個体かもしれない。４は復原底径９㎝で，中央部分が僅かな上げ底状となる。内外面ともにナデ調整で精製深鉢底部となる。胎土に細砂粒をいくらか含み，焼成良好で内外面ともに暗橙褐色をなす。

以上の出土土器からみて，当土壙は縄文晩期中葉新段階のものと考えられる。遺物の出土状態は当土壙廃棄後にごみ捨場になったことを示している。土壙自体の性格は，小規模ながら，明らかにしっかり掘り込まれたものであり，貯蔵穴と考えられる。近辺の各遺跡で同様の遺構が晩期後葉まで営まれているので，各論の項で詳述したい。

第28号土壙（Fig.34，PL.54）

Ⅱ区の北端中央に位置し，西端を第13号縄文晩期住居に切られている。土壙の掘り込みは不整形で，西端に片寄って深くなっている。中には片岩系・安山岩系の礫が落ち込んだ状態で検出されている。土器は殆ど上面からの出土である。南北径328㎝，幅230㎝，深さ111㎝となる。壁の形状等からみて，当土壙は風倒木痕の可能性も否定できない。

出土遺物（Fig.35）

轟Ｂ式土器（１～４）１は口径26.6㎝，器高25㎝程に復原できるもので，外面の口縁直下に指つまみ上げの絡縄凸帯的隆線を４条，胴部中位に２条付ける。外面の凸帯以外は丁寧なナデ調整を施し，口縁内面は横位ナデ，以下の内面は横位条痕の上をヘラ削り的な横位擦過で仕上げている。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成不良で内面は淡黄褐色～濃灰色，外面は淡褐色で煤も一部に付着している。２は第11号住居跡出土品と接合したもので，復原口径27.8㎝となる。口縁外面に３条の細身で断面カマボコ形の細隆線を付ける。隆線部分から口縁上端内面にかけては横位ナデ，外面の隆線以下は斜位条痕の上を雑なナデ。内面は斜位条痕の上をナデ。内外面ともに部分的に斜位条痕が残る。胴部には焼成後の穿孔がみられ，径13.4～７㎜の両面穿孔。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成やや不良で，内外面ともに淡茶褐～暗褐色をなす。３は低くだらけた連接隆線２条を付ける胴部中位片。外面は横位ナデ，内面は横位条痕の上をナデている。胎土精良で焼成不良。内面は淡褐色，外面は灰褐色をなす。４は胴部下半にかかる部位で，やや高くあまりシャープではない隆線１条を付ける。内外面ともにナデており，胎土には細砂

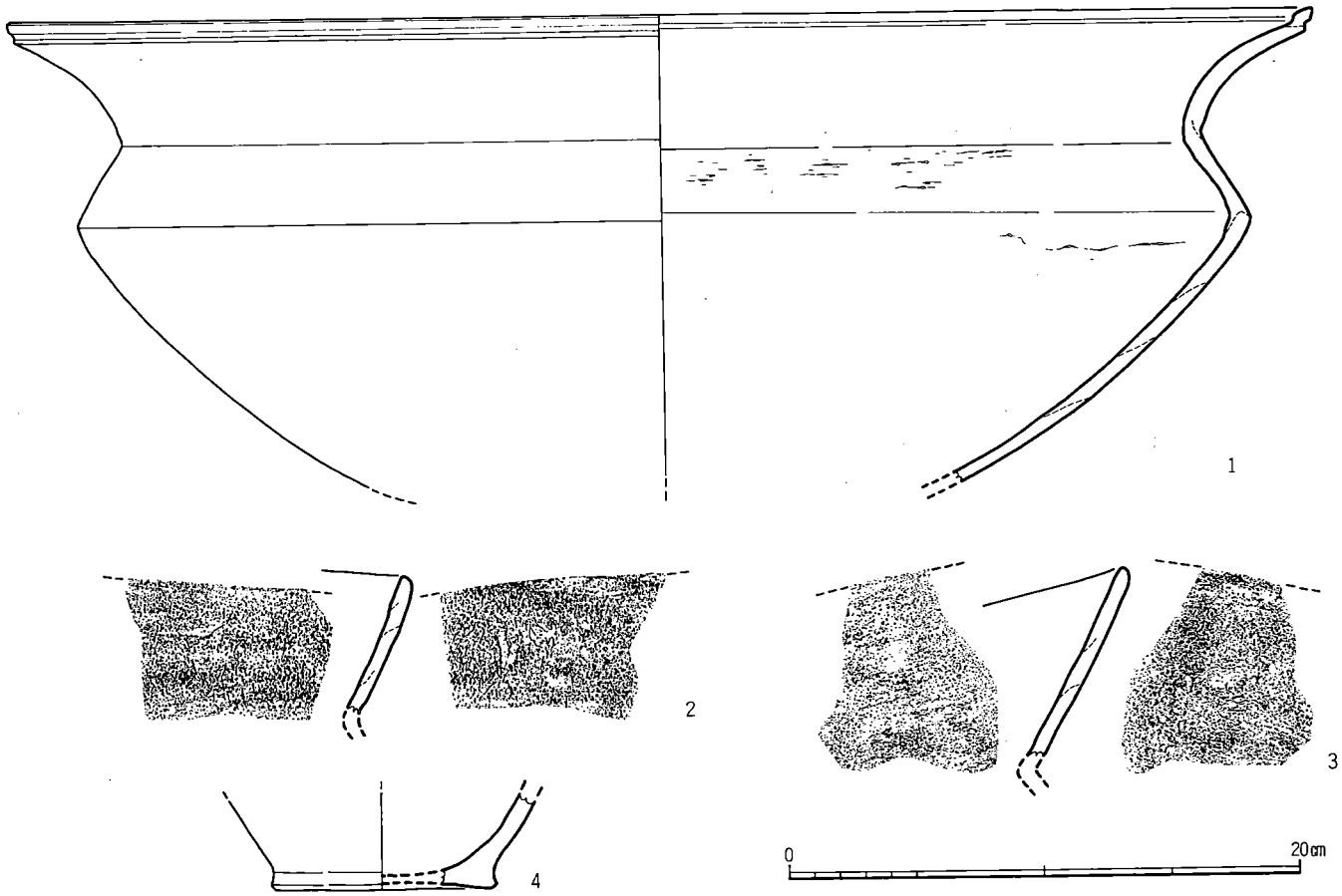


Fig. 33　第18号土壙出土縄文土器実測図（1/3）

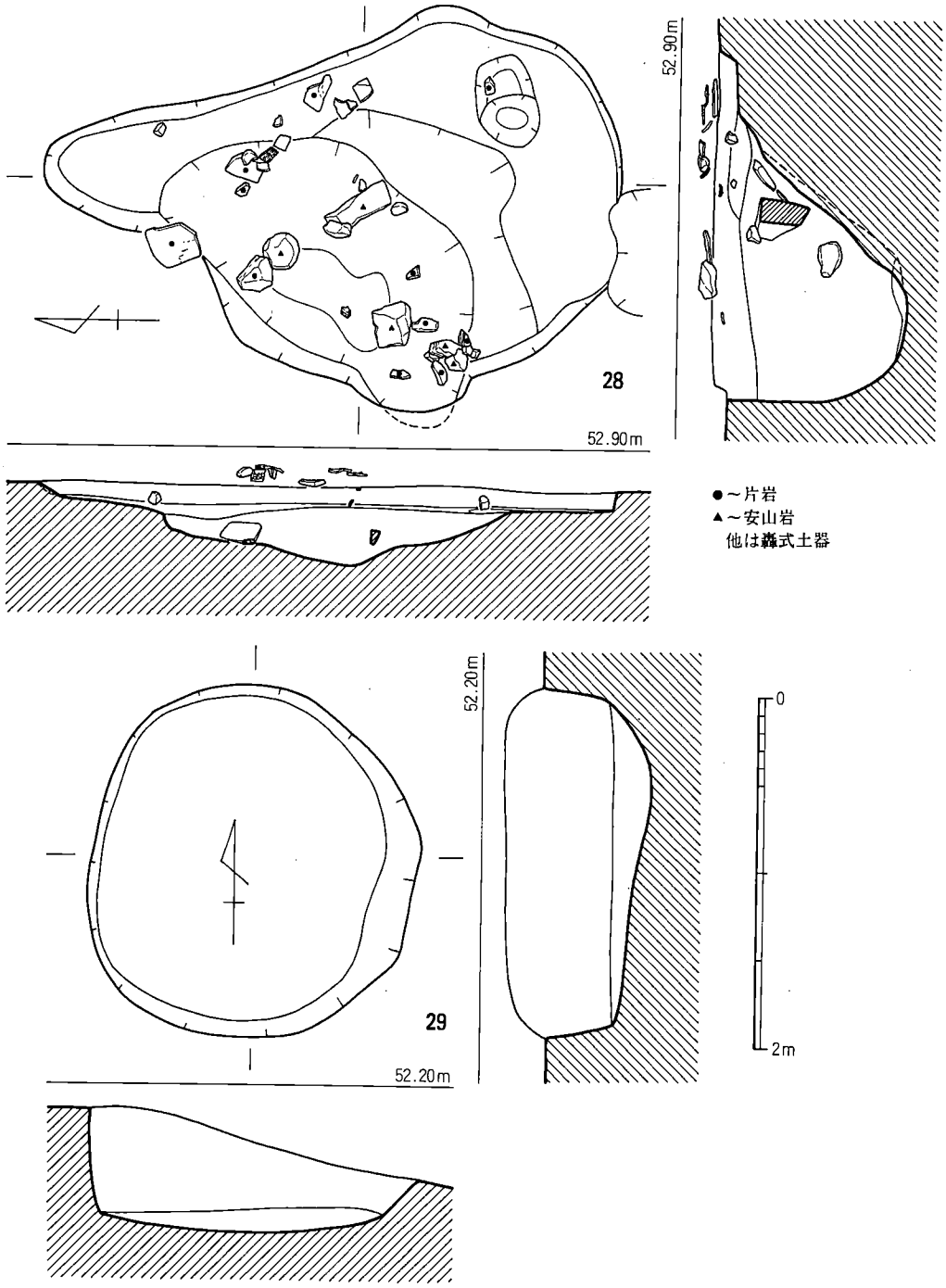


Fig. 34　第28・29号土壙実測図（1/40）

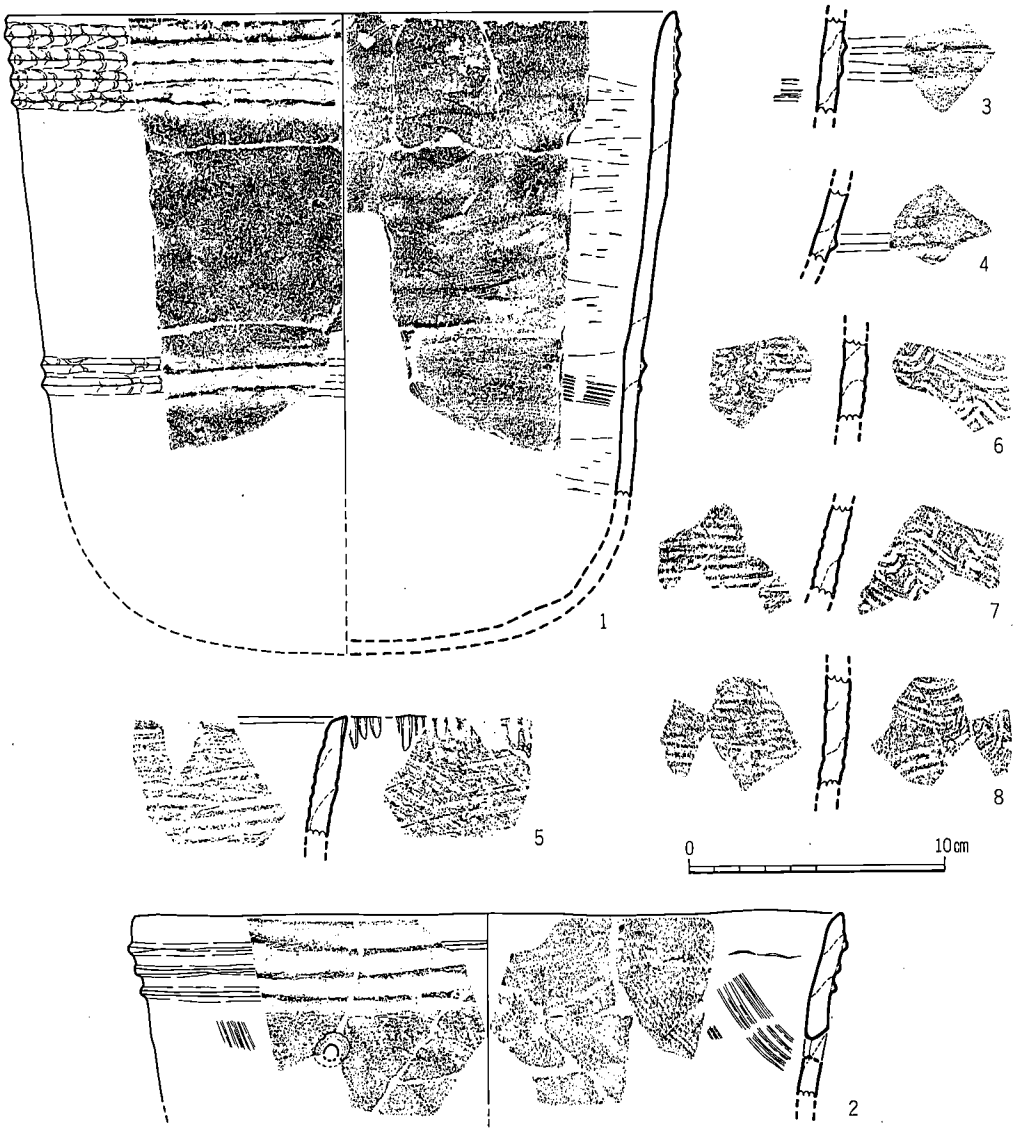


Fig. 35　第28号土壙出土縄文土器実測図（1/3）

を幾らか含むのみ。焼成不良で，内面は灰黄褐色，外面は暗褐色をなす。

条痕文土器（5～8）5は口唇部を斜めにしっかりと面取りし，外面に細い棒状工具による短線状刻目を施す。調整は，外面に文様効果を明らかに意図した，斜位の綾杉状アナダラ条痕が施され，内面には横位の深いアナダラ条痕を施し，これも文様帯を構成しているものと思われる。粗・細砂粒を多く含み，焼成不良で内面は暗灰褐色，外面は煤がこびり付いて黒～淡褐色

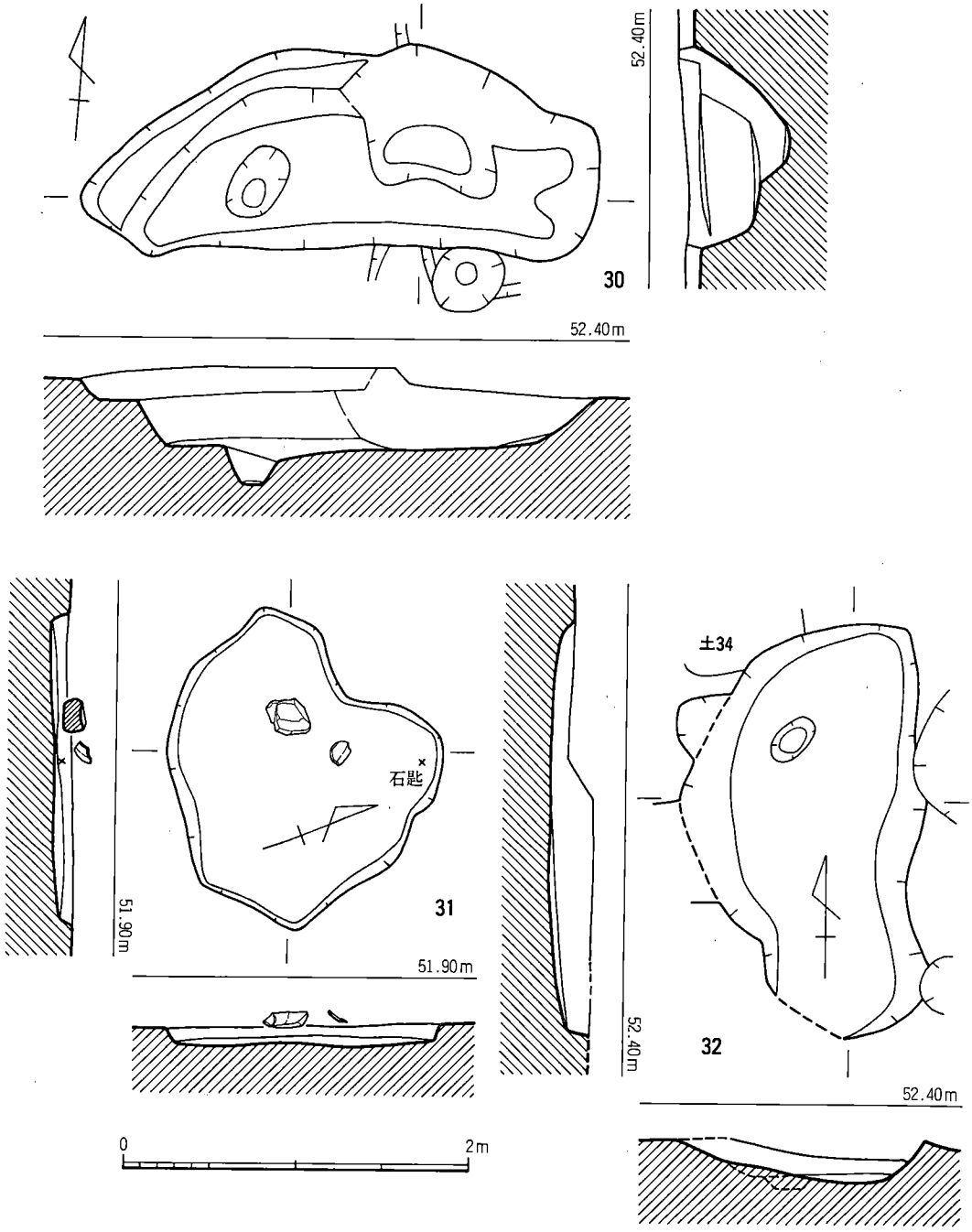


Fig. 36　第30～32号土壙実測図（1/40）

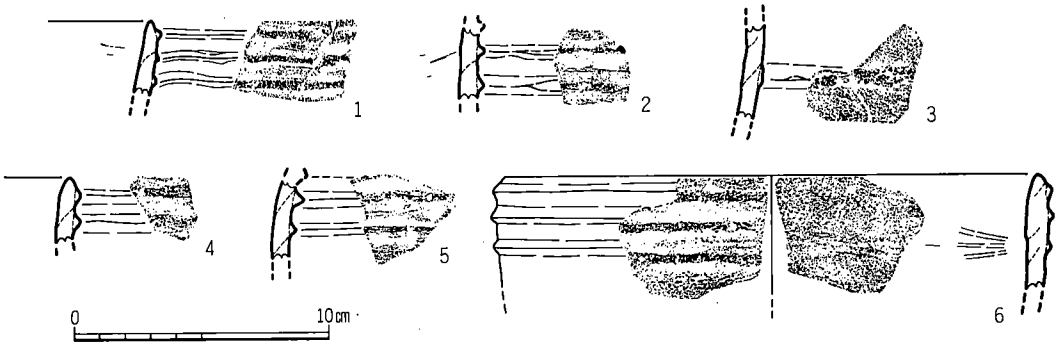


Fig. 37　第30号土壙出土縄文土器実測図（1/3）

をなす。6・7・Fig.40-7と同一個体の可能性が強い。6は，内面に横位アナダラ条痕，外面にアナダラ条痕による波状曲線文を施す。粗・細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は炭化物がこびり付いて黒褐色，外面は暗黄褐色をなす。7は，内外の調整・文様は6と同じ。胎土に粗砂粒を多く含み，焼成不良で内外面ともに暗褐～黒褐色をなす。8は内面横位アナダラ条痕，外面はアナダラ条痕による曲線文を施す。胎土に粗砂僅か，細砂粒をかなり含む。焼成やや良好で，内面は暗褐色，外面は淡茶褐色をなす。

磨石（Fig.80-21・24）21は凝灰岩質の河原石の片面のみを磨石として使用したもの。また，側面の一端には敲打による打欠き部がみられる。現存径75×63㎜，厚さ50㎜，重さ441.7g。24は角閃石・長石を多く含む凝灰岩質の河原石の片面のみを磨石として使用したもの。現存径101×79㎜，厚さ53㎜，重さ441.8gとなる。

以上の出土遺物のうち，轟B式土器の1は，指つまみ上げの細身連接隆線を付けた優品で，古段階を示すものであり，他の2～4は隆線もややだらけており，1よりも明らかに新しい中段階のものと考えられる。5～8の条痕文土器は，条痕文系轟式土器の文様系譜を示し，原曽畑式に相通ずる類と解釈することもできる。この土壙の性格や出土状態を考える時，必ずしも出土品を一括品として扱い得ないのではないかと思われるので，以上のような型式上時期差のみられるものが混在するのであろう。

第30号土壙（Fig.36，PL.55）

Ⅱ区北半のやや東寄りに位置し，東側を第10号土壙に切られる。東西に長く，平面形は三日月形的である。壁は北側が穏やかで南壁が急傾斜となる。長さ300㎝，幅116㎝，深さ64㎝となり，形態から風倒木痕の可能性を考えることができる。

出土土器（Fig.30）

轟B式土器（1～6）1は細身類だがシャープではない隆線を3条付ける類で，下2条は蛇

行している。内面は横位擦過の上をナデている。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成やや良好で，内外面ともに黄茶～黒褐色をなす。2は細身で高い隆線を離して付けた類で，口縁下の文様帯片であろう。内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位ナデ。粗砂僅かに含み，焼成やや良好で内面は暗褐色，外面は淡茶色をなす。3は胴部中位片で，低く粗雑な隆線を付ける。内面はかなり磨滅するが，内外面ともにナデ調整であろう。胎土に細砂粒をいくらか含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は暗茶褐色をなす。4はやや高めの隆線を2条以上付ける類。内外面ともに横位ナデか。胎土に粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は黒褐色，外面は茶褐色をなす。5は，高くシャープな隆線を付ける類で，内面は丁寧なナデ，外面は横位ナデ。胎土に粗・細砂，赤褐色粒子を多く含み，焼成はやや良好。内面は黒褐色，外面は暗茶褐色で部分的に煤が付着する。6は直径21.2cmに復原できる小ぶり品で，口縁外面に細身だがやや丸身をおびる隆線3条を付ける。内外面ともに横位条痕の上を横位ナデ。胎土に粗砂粒を僅か，細砂粒を多く含む。角閃石も目立つ。焼成やや良好で，内面は茶褐色，外面は黒褐色をなす。

以上の出土土器は，第28号土壙の轟B式とは異って，隆線が細身だがシャープさが無く，間隔を置いて付けられたものが多く，明らかに後出的様相を持つ。以上のことから，轟B式中段階のものと考えられる。

第31号土壙（Fig.36，PL.56）

Ⅱ区の中央部で第14号土壙の東隣に位置し，下層段階で検出された。不整形プランで，南北に158cm，東西に188cm，深さ14cmと浅い。中央のやや西寄りの位置に大きな砂岩の塊石が浮いた状態で発見され，小型浅鉢の半欠品がやや北寄りにて見付かった。また，北隅の底面近くで石匙が出土したが，現在，現物が行方不明中で報告する事ができない。

出土遺物

浅鉢（Fig.38-1）全周に4ケ所の頂部を持つ波状口縁類小型品で，最大径18.6cm，器高5.7cmとなる。内外面ともに磨滅しているが，丁寧なヘラ磨きであろう。口縁部は頂部に近付くにつれて器壁が薄くなっている。内面にはやや幅広い凹線が巡らされるが，一部にそれがずれた部分がみられる。胎土精良で焼成不良，内外面ともに灰白褐色をなす。

打製石鏃（Fig.77-208）腰岳系黒曜石製の平基鏃。表裏に素材面を部分的に残すが，調整は丁寧。長さ20mm，幅16mm，厚さ3mm，重さ0.8gとなる。

以上の出土遺物のうち，浅鉢は縄文晩期中葉新～後葉古段階の浅鉢D2類であり，かつ，マリA2類（後葉古段階）に通じる器形をなす。土壙自体は，浅く不整形のため，性格を明らかにする事は困難だが，強いて言えば廃棄土壙とされようか。

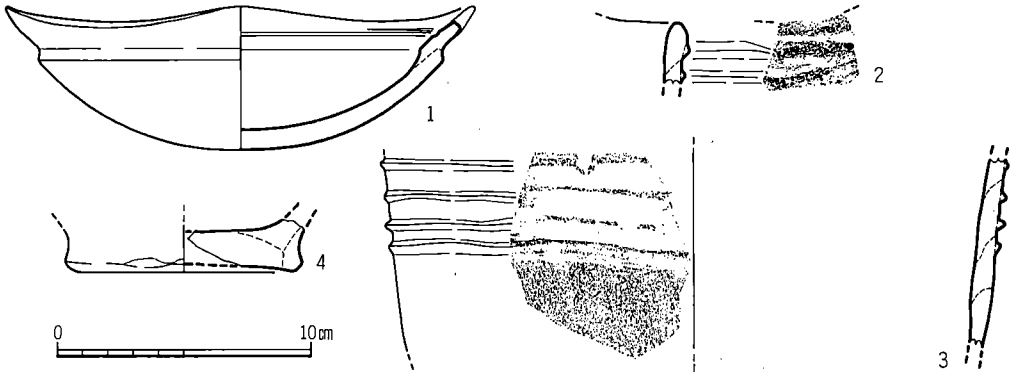


Fig. 38　第31号土壙（1），第34号土壙（2～4）出土縄文土器実測図（1/3）

第34号土壙（Fig.39, PL.57）

Ⅱ区の北半やや東寄りに位置する。黄色土埋土の不整形土壙で，南端を弥生時代の第32号土壙に切られる。南北の長さ170cm，東西の幅138cm，深さ34cmとなる。北半の上～中層下半にかけて土器片が出土した。

出土土器（Fig.38-2～4）

轟B式土器（2・3）2は断面がカマボコ形に近い隆線2条分が残るもので，上の1条は右端が下方へ下がるように見える。口縁も右端で上がっており，波状となるものか。外面は横位ナデ，内面はナデ調整となるか。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。3は復原最大径24.9cmの中型品で，細身の隆線4条を間隔を置いて付けている。隆線は稜はシャープな部分も多いが作りは雑である。胴部外面は雑な横位ナデ，内面は丁寧なナデを施す。胎土に粗・細砂粒をかなり含み，角閃石も目立つ。焼成不良で，内外面ともに黒褐色をなす。

底部（4）底径9.4cmとなる縄文晩期定型深鉢の底部片である。全体が浅い上げ底状となる類で，底外面は雑なナデ，外側面は横位ナデ，内面はナデ調整。粗・細砂粒を多く含み，焼成やや良好で，内面は暗黄～暗褐色，外面は暗灰黄色をなす。

以上の出土土器のうち，2・3の轟B式土器はいずれも中段階のものであるが，2はやや新段階に近い様相を見せている。当土壙の時期としては4の晩期中～後葉段階とせざるを得ないであろう。

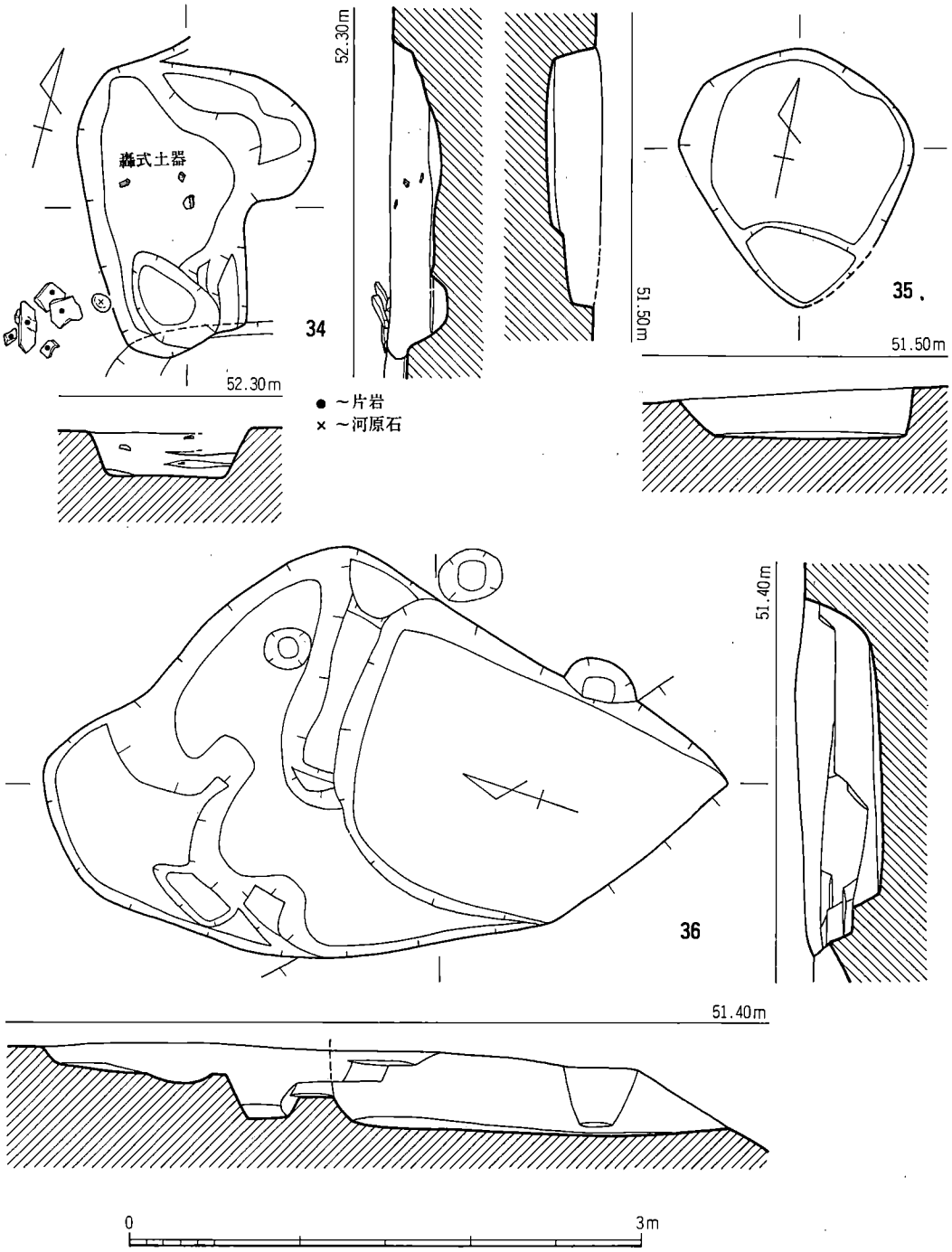


Fig. 39　第34～36号土壙実測図（1/40）

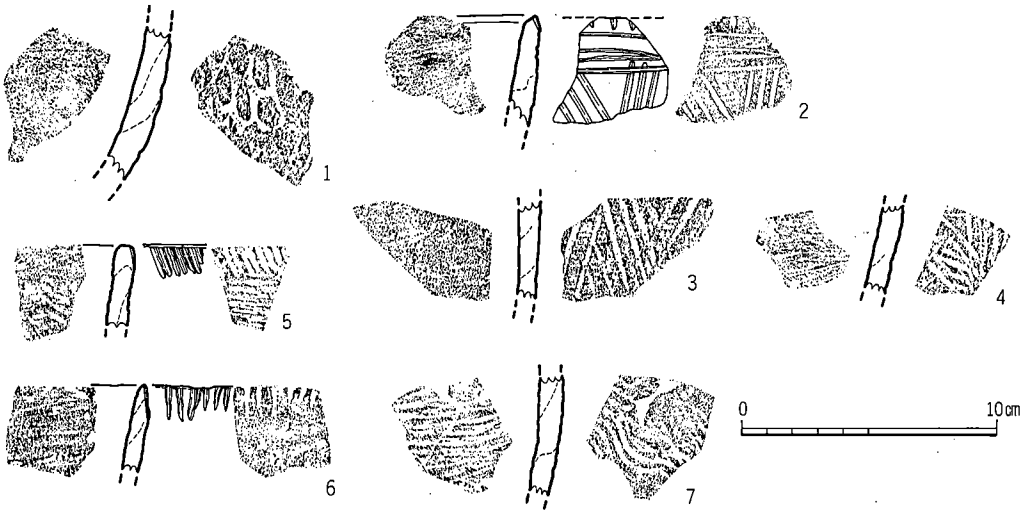


Fig. 40　その他の遺構出土縄文早・前期土器実測図（1/3）

F　その他の遺構出土縄文土器

縄文早期（Fig.40）

押型文土器（1）P837出土品で，外面に縦位の大きい楕円形押型文（15×5～6㎜）を施す類である。内面は横位ナデ。胎土に粗・細砂粒を多く含み，焼成不良で，内面はこげ茶色，外面は茶褐色をなす。押型文後半でも新段階。

縄文前期（Fig.40）

曽畑式土器（2～4）いずれも滑石を含まない類である。2はP1068出土品で，口縁内端を斜めに面取りして，外面上端には刻目を施す。外面には横位条痕の地に細身の沈線による幾何学文様が飾られる。内面の上端付近は横位ナデ，以下は横位条痕をナデ消し。細砂粒を僅か，微細砂粒をかなり含む。焼成良好で内面は茶色，外面は暗褐色をなす。3はP1065出土品で，外面に横位条痕の上に斜位の幾何学沈線文を施す。内面は横位条痕で，胎土に粗砂僅か，細砂かなり含む。焼成やや良好で，内外面ともに茶褐色をなす。4はP634出土品で，外面にはやや斜位の条痕の地に，斜・縦位の沈線でややくずれ気味の幾何学文を施す。内面は横位条痕。細砂多く含み，焼成不良で，内面は暗褐色，外面は茶褐色をなす。

条痕文土器（5～7）5はⅡ区南半の茶色包含層出土品で，口唇上面は平坦面をなし，外端に斜位の短沈線の刻目を密に施す。外面には横位条痕を強く施している。内面上端はナデており，

それ以下の内面は横～斜位の条痕を施す。胎土に粗・細砂を多く含み，焼成良好で内面は灰黄茶色，外面は茶色をなす。6は第11号住居跡に混入していたもので，口唇外端に長めの沈線状刻目を施す。以下外面はナデており，やや凹凸がみられる。内面は横位ヘナタリ条痕。細砂を少量含み，焼成良好で内面は黒褐色，外面は淡茶～黒灰色をなす。7はP834出土品で，外面にアナダラ条痕による曲線文を施し，内面には横位アナダラ条痕が明瞭。粗・細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は淡褐～暗褐色をなす。

以上の土器のうち，2～4は曽畑式土器としたが，口唇部上面に刻目や刺突文が施されている通有の曽畑式土器とも異り，また，外面の地文に横位条痕を残したままである点など，条痕文土器としての様相を強く残しており，原曽畑式土器に接する類と考えられよう。また，5～7は，第28号土壙出土（Fig.35）の5～8と共通，或いは同一個体と思われるものもあり，原曽畑式土器として位置付けることができる。

轟B式土器（Fig.41～43）

本遺跡からは，縄文土器の出土量では晩期中葉段階のものが最多であるが，その次の出土量を誇るものがこの轟B式土器である。まとまりのある出土量であり，当地域での出土遺跡としては杷木町天園遺跡（「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―42―」福岡県教育委員会　1996）に次ぐ良好な資料と言えよう。

ここでは，隆線の特徴により，以下の7類に分類した。これは上記天園遺跡での細分と同じにして，両遺跡間での様相を比較検討し易いようにしたためである。

1類：指つまみ上げ状の隆線につくるもの
2類：低く細身の隆線が連接して密に施されるもの
3類：細身でシャープな隆線が間隔を置いて付けられるもの
4類：隆線がやや大きめの中程度のもの
5類：隆線が細身の断面カマボコ形のもの
6類：隆線が太い断面カマボコ形のもの
7類：隆線が曲線文帯をつくるもの

ただし，上記の細分類のうちの7類の曲線文のものは，分類の視点が違うため，隆線の断面形態で見ると2～5類のものがほぼ含まれている。以下の説明の中で7類の細分類的な区別を記してゆきたい。

1類（1～4・20）1は第6号住居跡東側の黄褐色土包含層出土品で，復原口径32.4cmとなる。口縁外面に5条の低く指つまみ上げ部分がかなり見られる隆線を付ける。内面はかなり器表が荒れているが，ナデ調整か。外面はやや凹凸があり，ナデか。胎土に粗・細砂かなり含み，角閃石も目立つ。焼成不良で内面は黄茶色，外面は黒褐色をなす。2は第6号住居跡周辺黄褐色

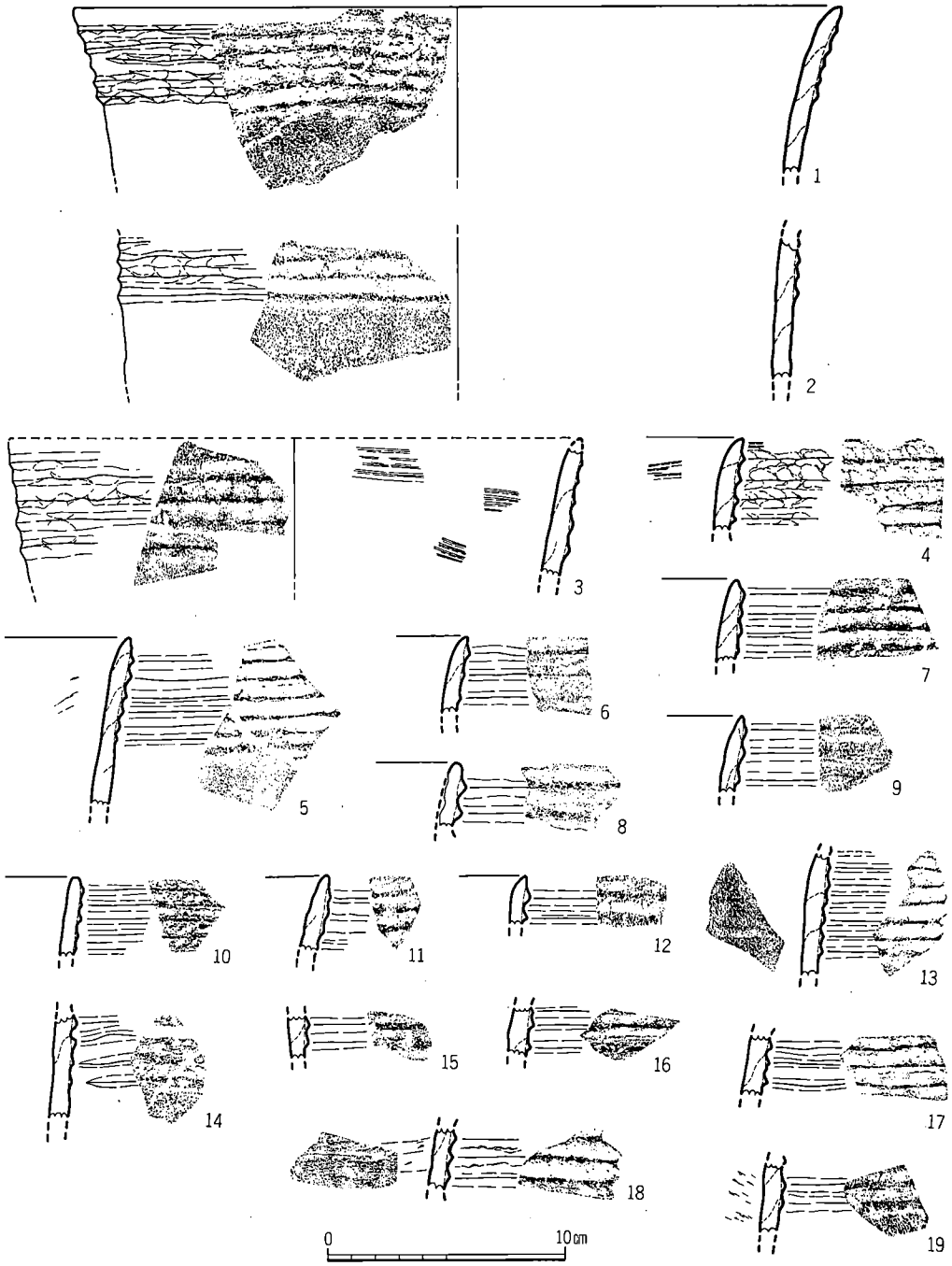


Fig. 41　その他の遺構出土轟Ｂ式土器実測図（その１）(1/3)

包含層出土品で，外面にわりとシャープな連接細身の隆線を付ける。部分的に指つまみ上げがみられる。内面はナデ，外面は雑なナデ。胎土に粗砂幾らか，細砂かなり含む。角閃石も多い。焼成やや不良で，内外面ともに淡茶褐色をなす。3は暗褐色包含層出土品で，口縁下に低く，つまみ上げ部が幾らか見られる隆線5条を付ける。内面は横位条痕の上をナデ，外面はナデ調整。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成良好で内面は茶～暗褐色，外面は黒～こげ茶色。4は第11号住居跡に混入していたもので，低く稜がシャープな，指つまみ上げ部分が大半となる隆線4条以上を付ける類。内面は部分的に横位条痕を残す横位ナデ，外面上端には横位条痕がみられる。細砂幾らか含み，焼成不良で，内面は暗灰褐色，外面は煤が付着して黒褐色をなす。20はP60出土品で，外面に指つまみ上げの低く稜がシャープな隆線4条を付ける。隆線間が空いており，口径19cmとなるやや小型品。内面は明らかな板状工具による横位擦過。口唇内外面は横位ナデ。隆線はかなり上下によたっており，古拙的。胎土に粗砂僅か，細砂かなり含み，角閃石も目立つ。焼成良好で，内外面ともに暗～黒褐色となる。

2類（5・7・9～16・18・19・26・42）5はP872出土品で，外面に6条の典型的連接細身類の隆線を付けるが，それ程シャープではない。外面の隆線周辺は横位ナデ，以下胴部は丁寧なナデ。内面は斜～横位擦過の上を横位ナデ。胎土に細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は暗黄褐色をなす。7はP140出土品で，外面に4条以上の細身連接隆線を付ける。磨滅しており，稜がかなりすれて低くなっている。胎土に細砂かなり含み，焼成やや良好で，内面は灰黄色，外面は淡黄褐色をなす。内面調整は横位擦過か。9は第6号住居跡周辺出土品で，細身連接隆線を3条以上付けるが，磨滅してかなり低くなっている。内面はナデか。細砂幾らか含み，焼成良好で内外面ともに黒茶褐色をなす。10は，Ⅱ区包含層出土品で，口唇部が角張り，直線的に立ち上がる口縁となる。細身の連接隆線5条以上を付け，内面はナデか。細砂幾らか含み，焼成良好で内面は暗黄茶褐色，外面は黄茶色をなす。11はP871出土品で，低く連接する隆線4条以上を付ける。内面は横位擦過か。細砂僅かに含み，焼成不良で，内面は暗褐色，外面は淡褐色をなす。12は第29号土壙に混入していたもので，シャープに尖った口唇部を持つ。細身連接類隆線を2条以上付けるが，稜はやや磨滅している。内面はナデか。細砂幾らか含み，焼成不良で内外面ともに暗灰茶褐色をなす。13は取り上げ時のラベルを紛失したもので，細身連接の隆線6条以上を付ける。内面は横位擦過，乃至は強い横位ナデ。細砂かなり含み，焼成不良で内面は灰褐色，外面は淡褐色をなす。14は第16号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，細身で低く指つまみ上げ風の古拙な感じの隆線4条以上を付ける。内面はナデか。細砂を幾らか含み，焼成やや不良で，内面は暗茶褐色，外面は黒褐色をなす。15は第15号住居跡北側包含層出土品で，連接する細身隆線を付ける。細砂粒を僅かに含むのみで，内面はナデ調整か。焼成不良で，内外面ともに暗黄褐色をなす。16は第11号住居跡西側の暗褐色土包含層出土品で，わりとシャープな連接隆線を付ける。微砂粒を僅かに含み，焼成不良で内外面とも

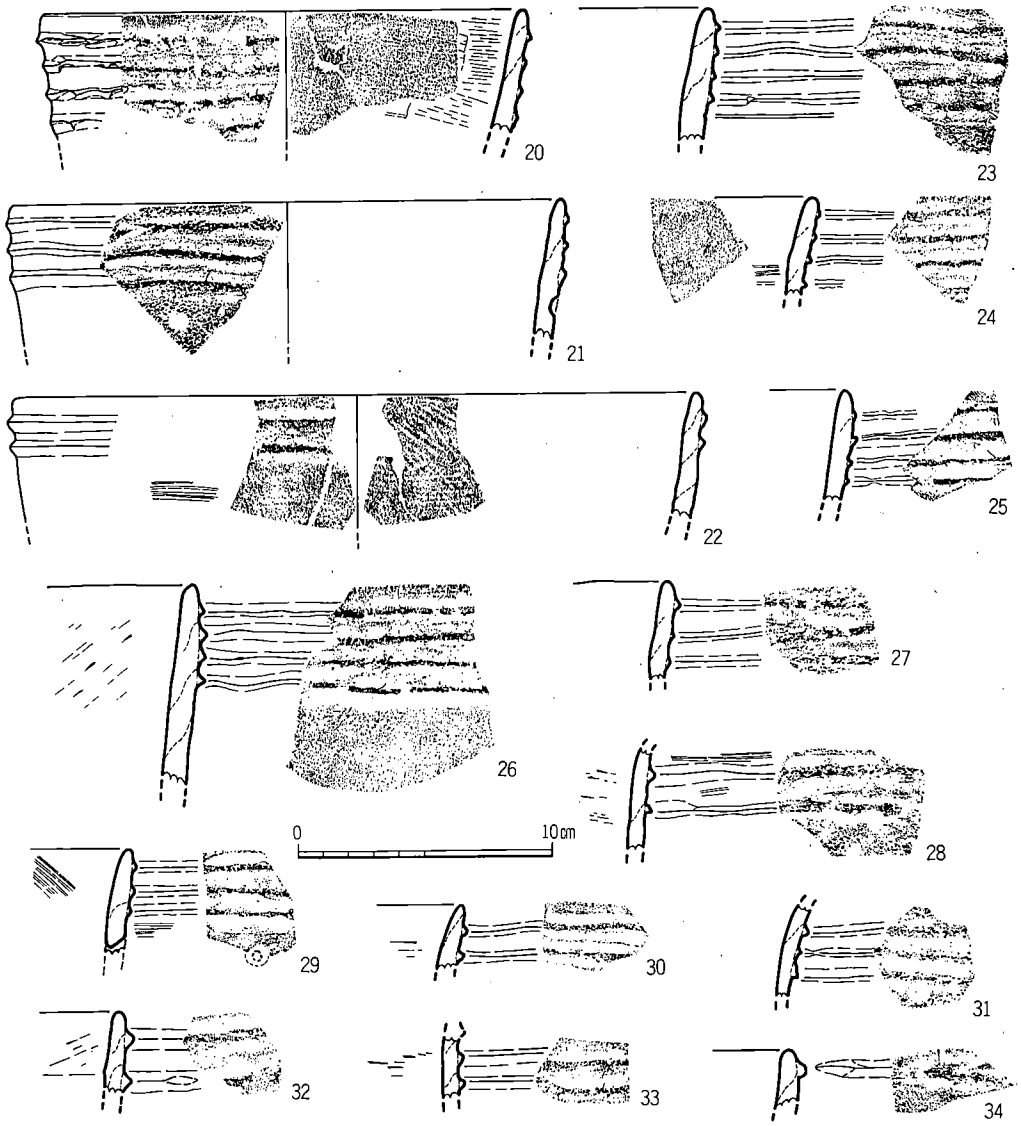


Fig. 42　その他の遺構出土轟Ｂ式土器実測図（その２）(1/3)

に暗褐色をなす。外面には煤がこびり付く。18は暗褐色包含層出土品で，シャープな稜を持つ連接隆線を付ける。内面は強い横位指ナデ。細砂粒を幾らか含み，焼成不良で外面は淡褐色，内面は暗灰褐色をなす。19はP153出土品で，低く連接する隆線を付ける。内面は斜位擦過，外面は横位ナデ。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成不良で，内面は淡褐色，外面は暗黄褐色をなす。26は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，細身でシャープだが蛇行し部分的に指つまみ

上げ状となる隆線4条を付ける類。隆線帯以下の外面は横位条痕の上を横位ナデ，内面は左下がり斜位擦過の上をナデているが，かなり平滑。細砂・金雲母を多く含み，焼成良好で内面は灰茶褐色，外面は暗黄茶褐色をなす。42は第6号住居跡東側の黄褐色包含層出土品で，胴部下半片。2条の連接隆線を付けるが，著しく磨滅して低くなっている。外面はナデ，内面は磨滅。粗・細砂粒幾らか含み，焼成やや不良で，外面は黒褐色，内面は茶褐～灰暗褐色をなす。

3類（6・17・21・23・27～31・33・36・45）細身でシャープな隆線が間隔を置いて付けられるもので，6は第6号住居跡周辺黄褐色包含層出土品。口唇部がシャープに尖り，かなり磨滅して低くなっている隆線3条を付ける。内面は磨滅。細砂をかなり含み，焼成良好で内面は暗茶色，外面は黒褐色をなす。17は第6号住居跡の西側黄褐色土包含層出土品で，細身でシャープな隆線を付ける。内面はナデか。細砂幾らか含み，焼成不良。内面は暗灰黄色，外面は黒褐色をなす。21は第33号土壙に混入していたもので，復原口径21.6cmの中型品。細身だがあまりシャープではない隆線3条を付け，内外面ともに横位ナデ。外面に未貫通の焼成後穿孔がある。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗灰褐色，外面は淡褐色をなす。23は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，低いが細身でシャープな隆線4条を付ける。隆線帯の下方に沈線1条が施されているが，文様帯割付用のものか。内面は丁寧なナデで，胎土に細砂かなり含む。焼成良好で内面は黒褐色，外面は灰黄茶色をなす。27は第16号土壙に混入していたもので，細身の隆線だがかなりつぶれている。内面は器表剝落しているがナデ調整か。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒色，外面は茶褐色をなす。28はP1067出土品で，やや上下によたる細身の隆線を付ける。上端は磨滅して低くなっている。外面は横位条痕の上をナデ，内面は横位擦過の上をナデか。粗・細砂幾らか含み，角閃石も目立つ。焼成不良で内面は暗褐色，外面は茶色。直径20cm前後となろう。29は第11号住居跡上面出土品で，かなり細身であまりシャープでない隆線3条を付ける。外面は横位条痕の上をナデ，内面は斜位条痕の上をナデ。破片下端に焼成後穿孔が見られる。胎土に粗砂僅かに含むのみで，焼成不良。内面は淡黄褐色，外面は暗灰黄褐色をなす。30は第15号住居跡に混入していたもので，細身だがあまりシャープではない隆線を付ける。内面は横位擦過の上をナデ。細砂粒を幾らか含むのみで，焼成不良。内面は淡灰褐色，外面は淡黄褐色をなす。31は第10号土壙に混入していたもので，器壁が薄く，細身だが磨滅して低くなっている隆線を付ける。内面はナデか。細砂幾らか含み，焼成不良で外面は茶褐色，内面は暗褐色をなす。細砂粒を幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は茶褐色をなす。33はP105出土品で，低いがシャープな隆線を付ける。内面は横位擦過の上をナデ。細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は灰黒色，外面は淡褐～暗褐色をなす。36は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，シャープな稜を持つ類。上から2・3番目の隆線が曲がっているが，曲線文類（7類）にはならないだろう。内面は横位擦過の上をナデ。細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は黒色をなす。45はP829出土品で，胴部下半片。低いが細身でわ

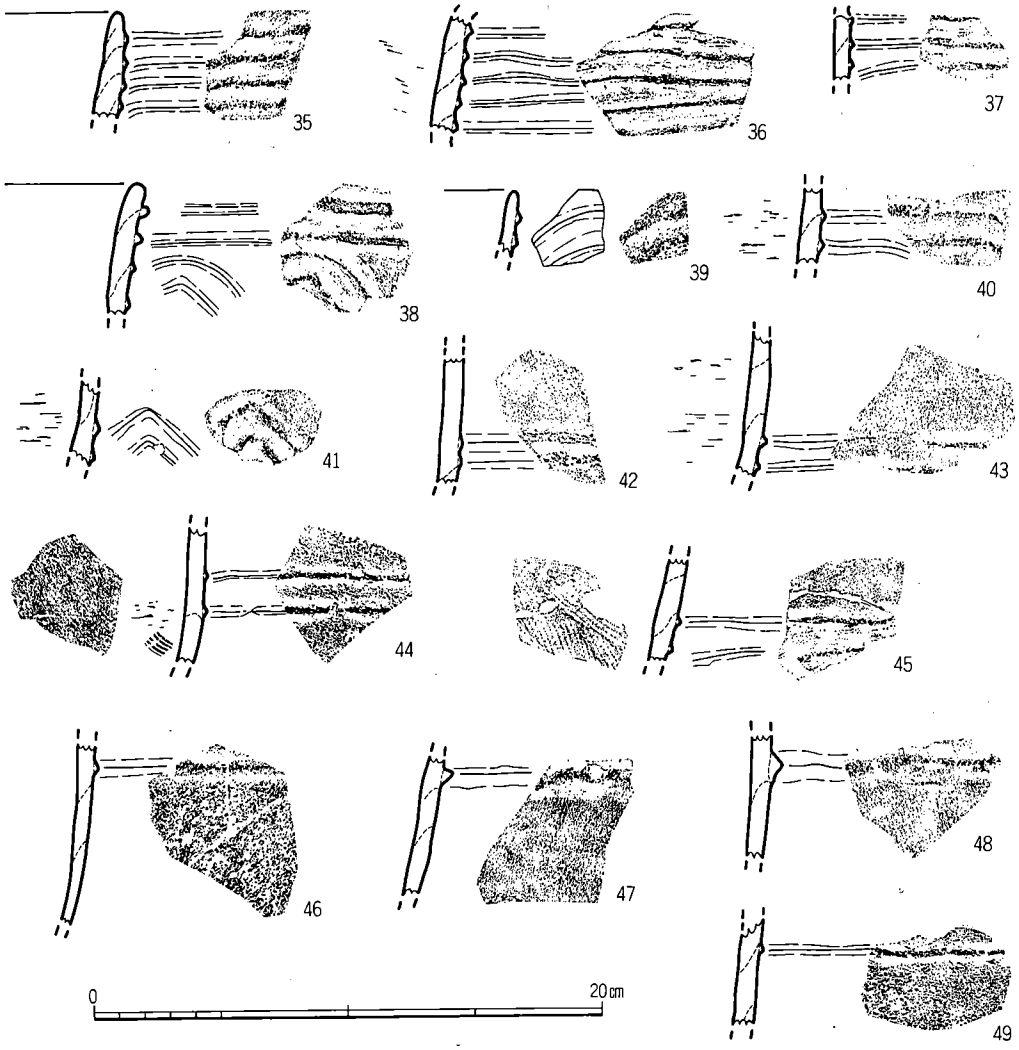


Fig. 43　その他の遺構出土轟B式土器実測図（その3）(1/3)

りとシャープな隆線2条を付け，内面は斜位条痕，外面の隆線部分は横位ナデ，それ以上は縦位条痕の上をナデ。細砂粒を幾らか含み，焼成不良で内外面ともに淡褐色をなす。

4類（8・22・32・46～48）隆線がやや大きめの中程度のもので，8は第11号土壙に混入していたもの。やや太めでシャープではない隆線を付け，胎土に細砂粒を僅かに含み，焼成不良で内外とも黄茶褐色をなす。22は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，復原口径26.8cmとなる。稜がシャープな2条の隆線を付け，内面は斜～横位条痕，外面は横位条痕の上をナデ。粗砂僅か，金雲母をかなり含む。焼成良好で内面は暗褐色，外面は茶褐色をなす。32はP948出土品

で，やや大きめの高い隆線を付ける。外面は横位ナデ，内面は斜・横位擦過の上をナデ。細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は淡茶色，外面は煤が付着して暗茶褐色をなす。46はC3南方黄褐色包含層出土品で，胴部中位片。隆線は磨滅して丸っぽくなっている。内外面ともに磨滅。粗・細砂を幾らか含み，焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は暗茶色をなす。47は暗褐色包含層出土品で，胴部中位片。高くてやや大きめの隆線を付ける。内外面ともに丁寧なナデで，細砂幾らか含む。焼成不良で内面暗茶色，外面は黒褐色をなす。48は第6号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，胴部中位片。やや大きめの隆線を付け，内外面ナデ。細砂幾らか含み，焼成やや不良で，内外面ともに茶褐色をなす。

5類（24・25・43・44・49）隆線が細身で断面がカマボコ形のもので，いずれも隆線間の間隔が開いている。24はP818出土品で，極めて細身だがシャープではない隆線を付ける。内面は横位条痕の上を横位ナデ，外面は横位ナデ。粗砂僅か，細砂幾らか含み，焼成不良で内外面ともに淡褐～黒色をなす。25は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，細身類の隆線4条以上を付ける。内面は丁寧なナデ。粗砂僅か含み，焼成良好で内外面ともに橙茶色をなす。43は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，胴部下半に2条の細身カマボコ形隆線を付ける。内外面横位擦過で隆線範囲は横位ナデ。粗砂僅か，細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐～淡褐色，外面は黒褐～暗灰褐色をなす。44は第2号住居跡の上面出土品で，細身で丸っこい隆線2条を胴部中位に付ける。内面は条痕の上を横位擦過，外面はナデ。微細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は黄褐色。49は第11号西側暗褐色土出土品で，細身で丸っこい小さな隆線を付ける胴中位片。内外面ナデで，細砂幾らか含み，焼成不良。内外面ともに淡灰黄褐色。

6類（34）隆線が太い断面カマボコ形のもので，34は取り上げ時のラベルを紛失してしまったもの。口縁外面直下に太くて丸っこい隆帯を付ける。隆線の左端は切れている。内外面ナデで，細砂幾らか含み，焼成不良で内外面ともに黄茶色をなす。

7類（35・37～41）隆線が曲線文をなす類。35は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，細身類だがシャープではなく，やや指つまみ上げ部分もある隆線（3類）を付ける。下3条が曲線文を構成するであろう。内面はナデ。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成やや良好で内面は灰黄褐色，外面は黄茶褐色をなす。37は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，かなり細身でシャープな3類隆線を付けるが，下の1条は曲線文をなすだろう。器壁が薄く，内面は丁寧なナデ。外面の隆線間には横位条痕が僅かに残る。破片上端は擬口縁的。胎土に細砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は淡褐色。38は第11号住居跡西側の暗褐色土出土品で，外面の隆線は上2条が横位平行で断面カマボコ形で5類，下2条が曲線文をなし，稜がシャープで3類となる。内面は丁寧なナデで，粗砂少量，細砂かなり含む。角閃石も目立つ。焼成やや不良で，内面は灰黄茶色，外面はややこげ茶色的。39はⅡ区表採品で，細身だが磨滅して低くなった隆線（2類）を付ける。口縁下に水平の隆線を付けずに，曲線文だけの類。器壁が薄く小型

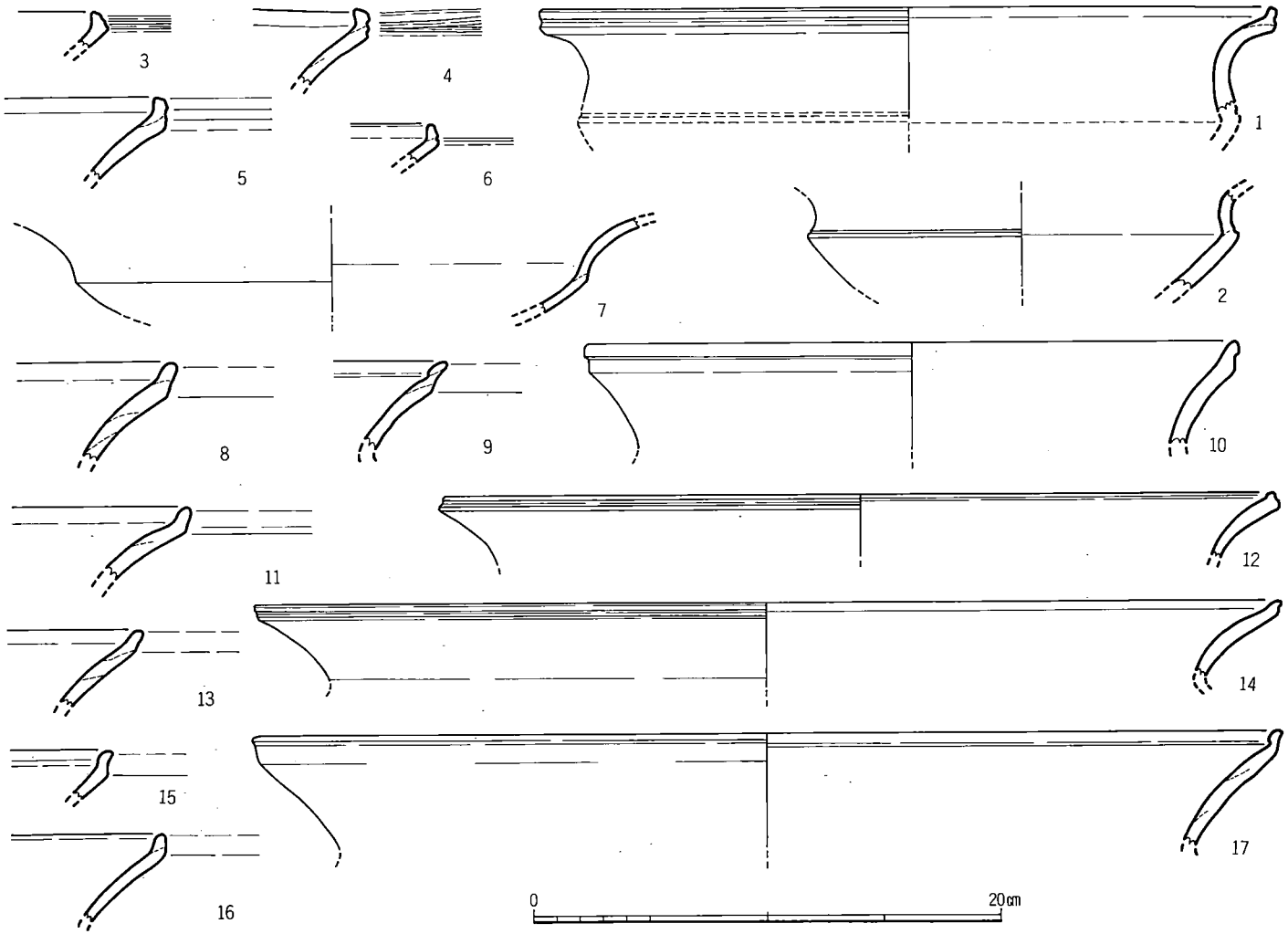


Fig. 44　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その１）(1/3)

類であるためか。細砂粒を僅かに含む。焼成良好で茶褐色をなす。40は第11号住居跡西側暗褐色土出土品で，細身でやや磨滅して低くなっている隆線（3類）を付ける。2条とも右端が下がっており，曲線文となろう。内面は横位擦過。胎土に細砂粒を幾らか含む程度。焼成やや不良で，外面は淡灰茶褐色，内面は暗褐色をなす。41は第11号住居跡西側の暗褐色土出土品で，38と同一個体となろう。外面に山形の曲線文隆線を付ける。シャープな稜をなすが，作りは雑。内面は横位擦過，外面はナデ。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は灰褐色，外面はこげ茶色をなす。

縄文晩期浅鉢（Fig.44～53）

以下の縄文晩期浅鉢・マリ・深鉢の分類・編年観は「クリナラ分類」（「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―43―クリナラ縄文遺跡」福岡県教育委員会　1997）と，「柿原分類」（「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―37―柿原Ⅰ縄文遺跡」福岡県教育委員会　1995）に従う。クリナラ・柿原Ⅰ両遺跡出土品では縄文晩期中葉中～末葉の各段階が明らかにされており，この時期の幅の中では新たに分類・編年し直す必要は無い。ただ，今回この金場遺跡で，晩期前葉のもの少量と中葉古～中段階のものが多く出土したため，この間の編年を追加しなければならない。ただし，器種細分類においては，「クリナラ分類」各類の古相を示すものや，祖形を示すものが大半であるため，取り敢えずここではクリナラ分類を援用して，各類の古段階類と称して報告しておきたい。

浅鉢Ａ類系古段階類（1～6・8・9）1はP88出土品で，復原口径31.7㎝。直立する短い口縁外面にしっかりした沈線を巡らす。内外面ともに横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は暗灰褐色，外面は暗黄褐～灰褐色をなす。晩期前葉新段階。2は第11号住居跡に混入していたもので，屈折稜部径18.6㎝のやや小型類となる。屈折稜直上に浅い沈線を巡らす。内外面ともに横ヘラ磨き。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は淡灰黄色～黒色をなす。晩期前葉の後半代のもの。3は第33号土壙出土品で，外面に2条の凹線を巡らす。内外横ヘラ磨きで，細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は黒褐色，外面は暗褐色をなす。晩期前葉古段階か，初葉まで上るかもしれない。4はⅠ区包含層出土品で，波状口縁となる。外面の深い沈線は頂部で2条となる。内外面横ヘラ磨きで，細砂幾らか含み，焼成良好で内面は暗灰黄色，外面は暗黄土色をなす。晩期中葉古(～中)段階のＡ1類前段階のもの。5は第24号土壙出土品で，上端は面取り，外面には浅い凹線を巡らす。内外横ヘラ磨きで，大型品となろう。細砂かなり含み，焼成良好で内面黒褐色，外面は暗黄褐色をなす。晩期中葉古段階。6はP142出土品で，外面に細く深い沈線1条を巡らす。胎土精良，内外面横ヘラ磨きで，丁寧なつくり。焼成不良で内面は黒色，外面は灰黒～淡褐色。晩期前葉後半～中葉古段階。8はⅡ区検出時包含層出土品で，口縁外面は明らかにへこむが，沈線ではない。内外面ともに丁寧な横ヘ

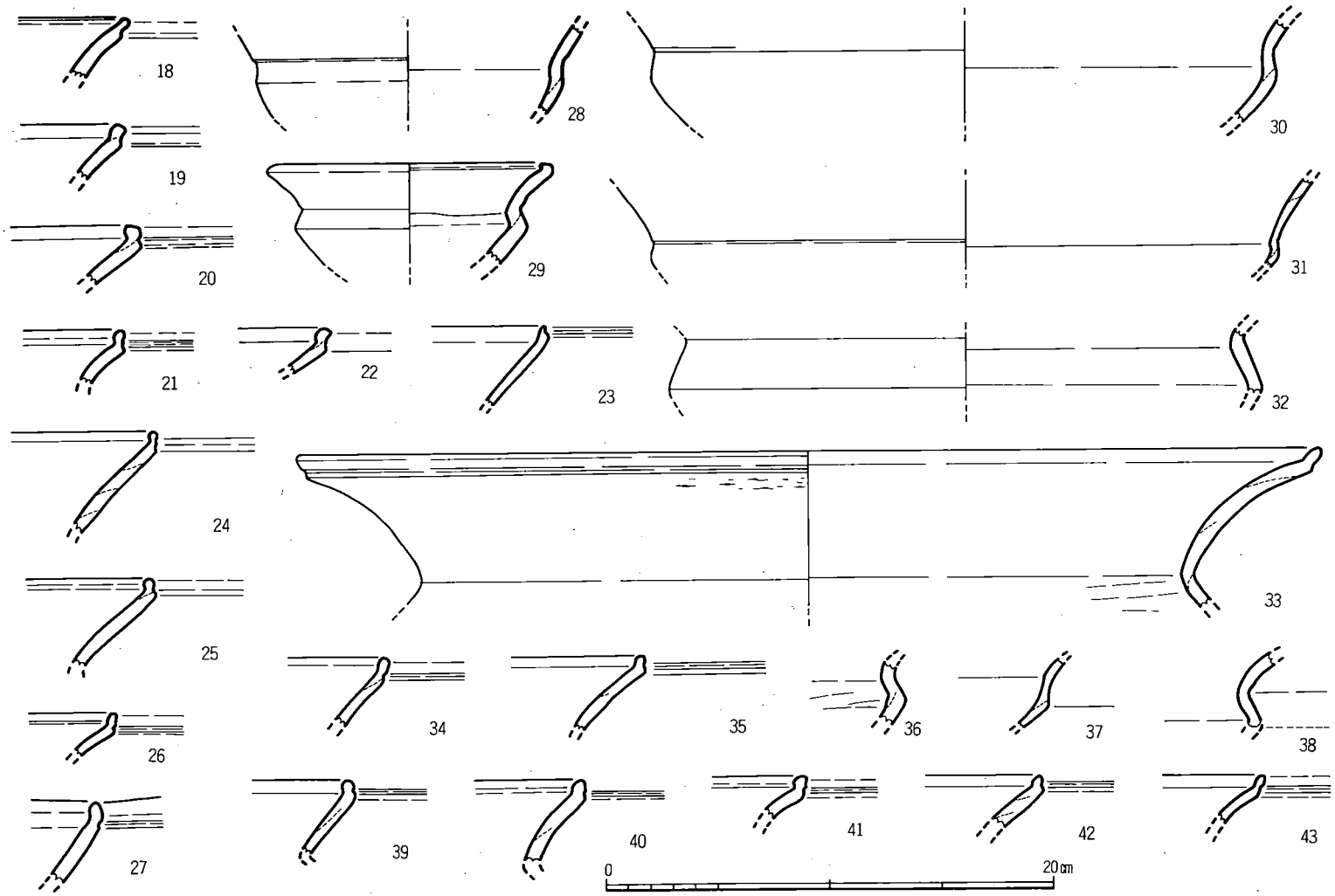


Fig. 45　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その２）(1/3)

ラ磨き。細砂多く含み，焼成やや不良で内外面ともに黒色をなす。かなりの大口径で，晩期中葉古～中段階。9はP820出土品で，内面に丸っこい段を作り，波状口縁になる可能性が高い。内外ともに横ナデで凹凸が多い。細砂多く含み，焼成不良で茶色をなす。全体に作りがやや雑で，晩期中葉中段階。

浅鉢A類（7・10～38・40～57）口縁が長く外反して伸び，端部が沈線や玉縁状に飾られる類をA類とした。晩期前半代の，伝統的に変化してゆく代表的器種である。中は更に6種に細分されるが，それらの説明は省略する。（クリナラ分類を参照されたい。）7は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，屈折稜部径22cm。内外ともに丁寧な横ヘラ磨きで，細砂僅かに含むがかなり精良。焼成不良で内面黒褐色，外面は暗褐～褐色をなす。薄手精製品で，晩期中葉中段階の浅鉢A1かA2類。10は第11号住居跡出土品で，口径27.6cm。口縁外面にしっかりした段を作り，内外面横位ナデで，粗砂少量，細砂多く含む。焼成良好で内面は茶褐色，外面は暗褐色をなす。晩期中葉中～新段階の浅鉢A2～A4類。11はⅡ区検出時包含層出土品で，口縁外面は僅かにへこむのみ。内外面横ヘラ磨きで，細砂かなり含む。焼成不良で内面は淡褐～暗褐色，外面は黒色をなす。晩期中葉新段階の浅鉢A4類。12は第2号土壙出土品で，復原口径33.4cm。口唇内面に小さな段を作り外端面にしっかりした沈線を巡らす。内外面とも丁寧なヘラ磨きで，細砂少量含む。焼成良好で内外面ともに明黄褐色をなす。晩期中葉中(～新段階）の浅鉢A1～A4類のどれかとなろう。13は暗褐色包含層出土品で，口縁外面は凹状となる。内外とも横ヘラ磨きだが，外面は雑。細砂少量含み，焼成不良で内面は暗灰褐色，外面は淡褐色をなす。晩期中葉中段階の浅鉢A類の変種か。14はⅡ区遺構検出時出土品で，復原口径44cmの大型類。内外かなり磨滅。微細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐～黒褐色，外面は黄褐～暗褐色。晩期中葉中(～新）段階の浅鉢A2（A3）類。15はP875出土品で，細砂少量含む。内外面ヘラ磨きか。焼成良く，内面は黒褐色，外面は淡褐色。晩期中葉中段階A1類。16は第3号土壙出土品で，内外面は恐らくヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は灰褐～淡褐色。外面は淡褐色。晩期中葉のA1類の無沈線類，或はもっと古式か。17は第24号土壙出土品で，口径44cmとなる大型品。口縁内面に9と似た段を作り，外面はへこむ。内外横ヘラ磨きだが，外面はやや雑。細砂かなり含む。焼成やや良く，内外面ともに暗褐～黒褐色をなす。外面の一部に煤がこびりつく。晩期中葉中段階のA2～A3類。18は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内外面ともに丁寧なナデか。細砂かなり含み，焼成不良で内面はこげ茶色，外面は淡茶褐色。晩期中葉中段階の浅鉢A2類。19は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，口唇上端は面取り，外面は凹線的。内外横ヘラ磨きだが，外面はやや雑。細砂かなり含み，焼成良好で内外面ともに淡褐色をなす。晩期中葉中段階の浅鉢A1～A2類。20は第10号住居跡出土品で，外面に浅めの沈線を巡らす。内外面ともにヘラ磨きか。細砂かなり含み，焼成良好で内面は暗褐色，外面は橙茶褐色。晩期中葉中段階のA1類。21は暗褐色包

含層出土品で，口縁外面は沈線２条的。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成やや不良で内面灰黒色，外面淡褐色。晩期中葉中段階浅鉢Ａ類のいずれか。22は溝１出土品で内外面ヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成良好で内面は淡灰褐～黒褐色，外面は暗黄褐～黒褐色。晩期中葉中～新段階の浅鉢Ａ２類か。23はⅡ区遺構検出時出土品で，薄手品。内外面横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で内面は暗灰黄色，外面は黒～黄灰色をなす。晩期中葉新～後葉古段階の浅鉢Ａ２～Ａ４類。24はP813出土品で，外面はヘラによる上下２回の押しあてで凹状となる。内外面ともに密な横ヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐～淡褐色，外面は暗褐色。中葉中段階の浅鉢Ａ１（Ａ２）類。25は第１号住居跡出土品で，内外面ともに横ヘラ磨き。細砂・金雲母を多く含み，焼成やや不良で内面は暗茶褐色，外面は暗黄茶色。中葉中～新段階のＡ２～Ａ３類。26は第11号住居跡出土品で，内外面ともに横ヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成不良で内外灰黒色をなす。27はP387出土品で，波状口縁となる。内外横ヘラ磨きで細砂かなり含む。焼成不良で内面は淡茶～暗褐色，外面は暗褐色。晩期中葉中段階の浅鉢Ａ２類，または深鉢Ｄ３類の変種か。28は暗褐色包含層出土品で，屈折部径13.8cmの小ぶり類。頸部下位に段を作る特徴を示し，外面は横位ヘラナデ，内面上半はヘラナデか，下半は横位指ナデ。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成不良で内面は淡褐～灰褐色，外面は黒褐色。晩期中葉中～新段階の浅鉢Ａ３類か，或は胎土・器形からみてＢ３類の古相を示すものか。29はP18出土品で，口径12.8cmの小型品。内外面横ヘラ磨きで，粗・細砂僅かに含む。焼成やや不良で，内外面ともに黒～暗褐色をなす。中葉新段階の浅鉢Ａ４類に共通する小型類。30はP813出土品で，屈折部径28cm。頸部下端に僅かな段的ななごりがみられ，内外面横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は黒褐～淡褐色，外面は暗褐～茶褐色。晩期中葉新段階の浅鉢（Ａ３～）Ａ４類。31は第11号土壙出土品で，頸部下端に小さな段を作る。外面横ヘラ磨き，内面は磨滅。胎土精良，焼成やや不良で内面は淡白灰～灰黒色，外面は淡黄灰褐色をなす。薄手精製品で，晩期中葉中段階の浅鉢Ａ３類。32は第11号土壙出土品で，内外面ともに磨滅。細砂少量含むが大旨精良。焼成不良で内面は灰褐色，外面は淡茶灰褐色。中葉新段階の浅鉢Ａ４類。33は第11号住居跡周辺暗褐色包含層出土品で，口縁外面は浅い凹線状となる。外面は横ヘラ磨きだが口縁直下には横位擦過痕が残る。内面上半は丁寧な横ヘラ磨きで，胴部内面は雑なヘラナデ。細砂かなり含み，焼成やや不良で内外面ともに黒褐色。外面上半には煤がこびり付く。口径46cmとなる大型品で，晩期中葉新段階の浅鉢Ａ４類。34はⅡ区包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂僅かに含むが大旨精良。焼成不良で内面は暗褐色，外面は灰黄褐色をなす。35はⅠ区包含層出土品で，内外ヘラ磨きか。細砂少量含み，焼成良好で内面は暗灰褐色，外面は暗黄褐色をなす。中葉中段階のＡ１類。36はP892出土品で内外ヘラ磨きか。内面下半には強い指頭ナデ痕。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐色。晩期後葉古段階の浅鉢Ａ５類か，晩期前葉の古相を持つ類。37は暗褐色包含層出土品で，内外にシャープな稜線を作

る類。内外面ともに横ヘラ磨き。細砂少量含むのみで，焼成不良。内面は黄灰褐色，外面は灰黒～淡褐色。薄手品で，晩期中葉中段階の浅鉢Ａ２類とＡ３類の中間形態。38はP798出土品で内外面横ヘラ磨き。外面上半の稜は不明瞭。細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は淡褐色。晩期中葉新段階の浅鉢Ａ４類。40は第12号土壙出土品で，内外面ともに横ヘラ磨き。胎土精良で金雲母多し。焼成やや良好で内面は黒色，外面は淡褐色をなす。晩期中葉新段階の浅鉢Ａ３～Ａ４類。41はP141出土品で内外横ヘラ磨き。細砂少量含み，焼成不良で黒褐色をなす。晩期中葉中段階のＡ１類。42は第11号土壙出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成やや不良。内面は暗灰黄色，外面は暗黄褐色。晩期中葉中～新段階でＡ３類ぐらいか。43はP32出土品で内外ヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は茶褐色。晩期中葉新段階のＡ３～Ａ４類。44は茶色包含層出土品で，内外面磨滅。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成不良。内面は黒色，外面は淡褐色。晩期中葉古～中段階の浅鉢Ａ１類。45は第10号住居跡出土品で内外磨滅。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡茶褐色，外面は上半が黒色，下半が淡褐色。晩期中葉新段階の浅鉢Ａ３～Ａ４類，またはＣ１類。46はP775出土品で，口唇上～内面に小さな瘤状貼付文が施される類。胎土精良で内外面ともに横ヘラ磨き。焼成やや良く暗褐色をなす。中葉中～新段階のＡ２類か。47は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内外面ヘラ磨きであろう。細砂幾らか含み，焼成不良で内面淡茶褐色，外面は淡灰黄褐色をなす。中葉新段階のＡ３かＡ４類。48は第11号住居跡出土品で，外面頸部に段をつくり，その上方に粘土紐を貼り付けて断面カマボコ形の曲線文で飾っている。内外とも横位ヘラナデ風の磨きで，微細砂を幾らか含む。焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐～黒褐色をなす。頸部の内面稜はシャープではない。晩期中葉(中～)新段階の浅鉢(Ａ２～)Ａ３類。49はＣ１周溝内出土品で，口縁外面は沈線ではなく，ヘラで押さえて平坦面を作ったもの。内外横ヘラ磨きであろう。細砂少量含み，焼成不良で淡褐色。中葉新のＡ３～Ａ４類。50は取り上げ時のラベルを紛失したもので，内外横ヘラ磨き。微細砂含むが大旨精良。焼成やや不良で内面は淡灰黄色，外面は暗黄灰色。中葉新段階のＡ３かＡ４類。51はⅡ区遺構検出時出土品で，内外に沈線を施すもの。内外面横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で内面は黒褐色，外面は暗黄灰色。中葉新～後葉古段階の浅鉢Ａ３・Ａ４・Ｃ１類のいずれか。52はⅠ区包含層出土品で，外面に浅い沈線を施す。内外ヘラ磨きで，細砂かなり含む。焼成不良で外面は暗黄褐色，内面は黒色。晩期(中葉新～)後葉古段階の浅鉢(Ａ４～)Ａ６類。53はⅡ区包含層出土品で，内外ヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良。内外黒褐色。中葉新～後葉古段階のＡ４～Ｃ１類。54はP864出土品で，内面に浅めの沈線，外面は段状につくる。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成やや不良で内面は淡褐色，外面は黒褐色。薄手精製の異類口縁類で，波状口縁となる。晩期(中葉新～)後葉古段階の浅鉢(Ａ３～)Ａ６類。55はⅡ区包含層出土品で，口縁内面に小さくシャープな段をつくる。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成良く内面は灰茶～暗褐色，外面は濃

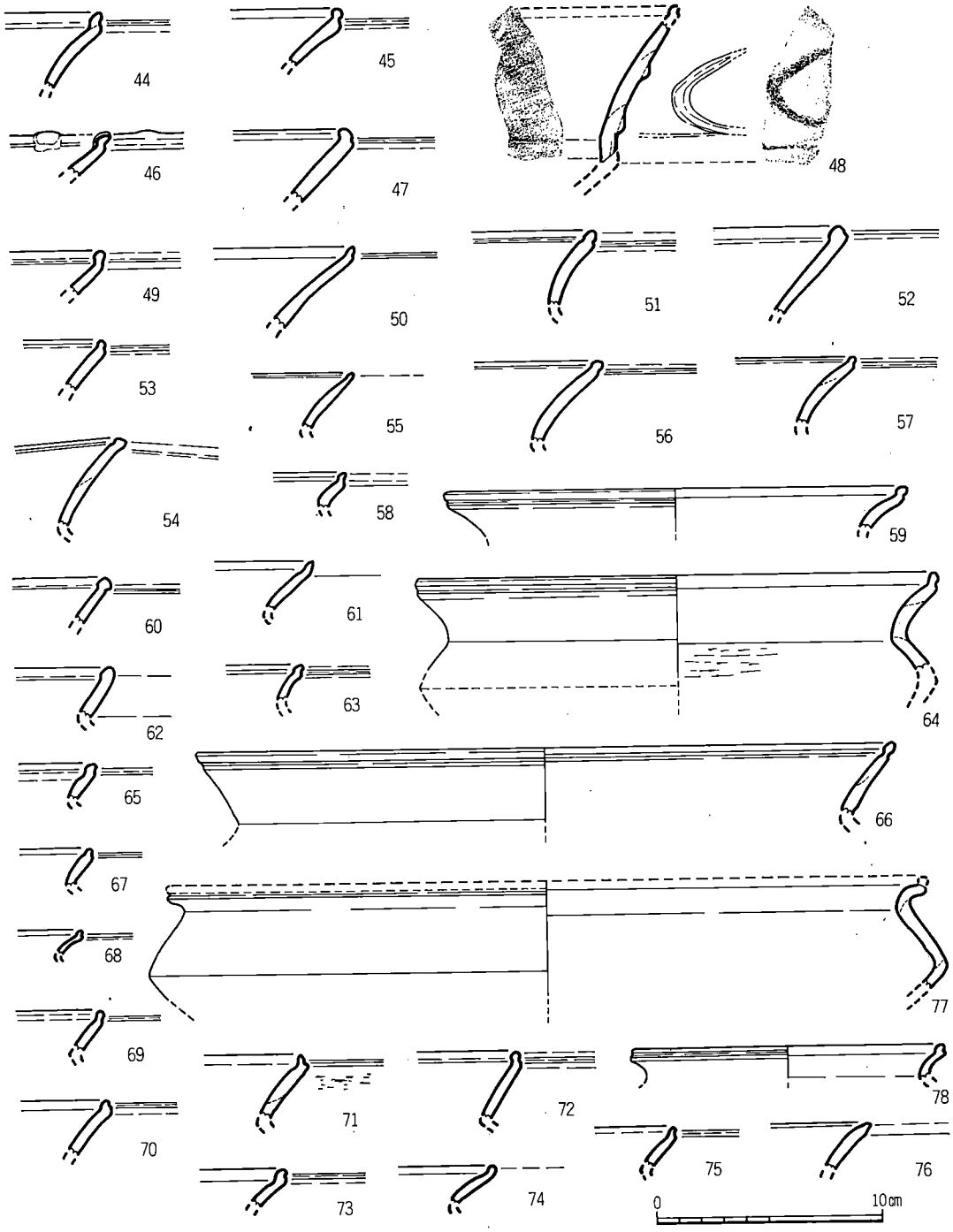


Fig. 46　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その３）(1/3)

茶色。外面には煤がこびり付く。薄手精製品で，中葉新～後葉古段階の浅鉢Ａ４・Ｃ１類ぐらいか。56はⅡ区包含層出土品で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面暗褐～茶褐色，外面は暗褐色。中葉新段階前後の浅鉢Ａ４（～Ｃ１）類。57は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面は黒褐色，外面上端は黒色，以下赤茶色。薄手精製品で，中葉新（～後葉古）段階の浅鉢Ａ４（～Ｃ１）類。

浅鉢Ｃ類（39・58～89）晩期後葉黒川式土器の典型的器種として丸く胴張りする浅鉢をＣ類とした。Ａ４類から変化して丸く胴張りしてゆく各段階があり，５種に細分できる。39はＩ区包含層出土品で，内外面平滑でヘラ磨きか。細砂かなり含み，焼成不良で暗黄褐色をなす。晩期後葉古段階の浅鉢Ｃ１類か。58は第６号住居跡周辺出土品で，内外磨滅。細砂幾らか含み，焼成不良。内外とも黄褐色。後葉古段階の浅鉢２ｂ類。59は第11号住居跡出土品で，復原口径20.6㎝。内外面横ヘラ磨きで細砂多く含む。焼成不良で暗茶褐色。後葉古段階Ｃ２類か。60はP176出土品で，内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良好。内外面ともに暗褐色で，外面には煤付着。後葉古段階のＣ２類。61はP798出土品で，磨滅著しいが，口縁外面には本来沈線があったかもしれない。胎土精良で焼成不良。内面は黒色，外面は淡茶褐色。晩期後葉古段階浅鉢Ｃ２類。62は第16号土壙出土品で，内面に段を作るのみ。内外磨滅して，胎土に細砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。後葉古段階浅鉢Ｃ２ａ類。63は第１号住居跡出土品で，内外面ともにヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内外面ともに黄褐色をなす。後葉古段階浅鉢Ｃ２ａ類。64は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，復原口径24㎝。外面と内面上半は横ヘラ磨き，内面の稜以下は横位擦過状指ナデ。細砂多く含み，焼成やや良好で，内面は黒～淡褐色，外面は黄茶褐～暗褐色をなす。後葉古段階浅鉢Ｃ２ａ類。65はP666出土品で，内外面ヘラ磨きであろう。細砂僅かに含み，焼成良好。内外面暗黄褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類。66はⅡ区南半包含層出土品で，口径31.2㎝。内外面とも横ヘラ磨きで，胎土精良。焼成良好で内外暗褐色。後葉古段階浅鉢Ｃ２ａ類。67はP136出土品で内外面丁寧なヘラ磨き。胎土精良で焼成良好，内外淡褐色。後葉古段階浅鉢Ｃ２類。68はP142出土品で，極めて薄手。内外ヘラ磨きか。細砂少量含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類の小型品か。69はラベルを紛失したもので，内外面ともに横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面は灰黄褐色，外面は暗褐色。外面には煤付着。後葉古段階の浅鉢Ｃ２類。70は第11号住居跡出土品で内外ヘラ磨き。焼成やや不良で内面は白褐～黒褐色。外面は茶色。後葉古段階の浅鉢Ｃ１かＣ２ａ類。71はP127出土品で，口唇外面にシャープな沈線を施し，内外面横ヘラ磨き。外面上半には横位擦過痕残る。細砂幾らか含み，焼成やや不良で，内外面ともに暗黄茶褐色をなす。後葉古段階の浅鉢Ｃ類。72はP24出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面は磨滅。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は黄褐～灰黒色。後葉古段階の浅鉢Ｃ１かＣ２ａ類。73はP834出土品で，内外横ヘラ磨き。胎土精良，焼成良好で内面は明茶色，外面は淡黄褐色をなす。

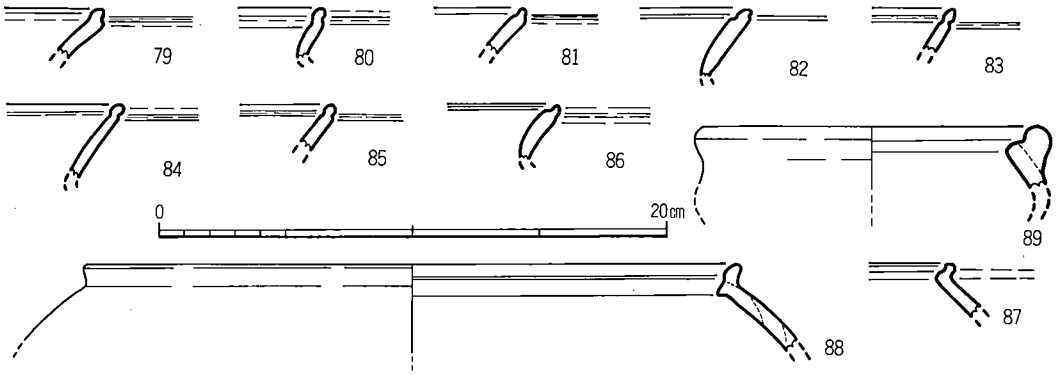


Fig. 47　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その４）(1/3)

後葉古段階の浅鉢Ｃ２類。74はP820の出土品で，内外面ともに横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面は黒色，外面は茶色。精製品薄手で後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類。75はⅡ区包含層出土品で，内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良。内面は淡褐色，外面は茶褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２類。76は第10号住居跡内のＰ４出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂少量含み，焼成不良で内外面黄土色。後葉古段階Ｃ２類。77は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，復原口径34cm。内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良，内外黒色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類。ただ，胴の稜はＣ２ａ的。78は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，復原口径14cmの小型類。内外面横ヘラ磨きで，胎土精良。焼成良好で内外面ともに暗灰褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類。79は第11号住居跡出土品で，口唇外面に細いが深い沈線を施す。内外面横ヘラ磨きで，細砂多く含む。焼成良好で内外暗褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ１かＣ２ａ類。中葉新段階でもよいか。80は第１号住居跡出土品で内外磨滅。胎土精良で焼成不良。内外面暗黄褐色。内面は広い凹線。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ａ類。81は第１号溝出土品で，内外ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面は黒色，外面は灰黒～淡褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２類。82は第２号土壙出土品で，内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内外暗黄褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ａ類。83は第１号掘立柱建物Ｐ３出土品。内外磨滅しており，細砂幾らか含む。焼成良好で内面茶褐色，外面は暗褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２類。84はⅡ区包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良好。内面は白茶褐色，外面は灰黄茶色。後葉古段階の浅鉢Ｃ１かＣ２類。85は第11号住居跡出土品で，内外面磨滅。胎土精良で焼成やや不良。内外面淡茶褐色。後葉古段階のＣ２類。86は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内外横ヘラ磨き。外面は浅い凹線状。細砂少量含み，焼成不良。内面は黒色，外面は暗褐色。後葉古段階の浅鉢Ｃ２ｂ類。87は第11号土壙出土品で，外面は横ヘラ磨き，内面はナデか。胎土精良で，焼成不良。内外暗黄褐色。晩期後葉新段階の浅鉢Ｃ３類だが，口縁部が細身で典型例ではなく古い様相を示すものか。88は第33号土壙出土品で，口縁内面の段はシャープ。内外横ヘラ磨きであろう。復原口径26cmで，

細砂少量含み，焼成良好で内面は黒色，外面は暗灰褐～暗黄褐色をなす。晩期後葉新段階の浅鉢Ｃ３類。89はⅡ区包含層出土品で復原口径14cmとなる小型品。内外磨滅するが，外面は凹凸がある。粗・細砂多量含み，焼成やや不良。内面は暗褐色，外面は灰茶褐色。晩期後葉新段階の浅鉢Ｃ３類系統の小型マリか。後期の可能性もある。

浅鉢Ｂ類系古段階類（Fig.48-90～99）口縁が長く直線的或は内湾気味にやや立ち気味に開き，大きく波状口縁となるものが浅鉢Ｂ類であるが，ここではその前段階のものを報告する。口縁がまだ短く，外面に平行沈線文で飾るもので，晩期中葉中段階に位置付け得る類である。うち，口縁がやや長めになり内面に段を作る類（96～99）は，中葉新～後葉古段階のマリＡ１類へと継がるもので，注目される。以下個別に説明する。90は第13号土壙周溝内出土品で，復原口径32.4cmとなる。口縁外面には口縁に沿って波状に沈線が１条，下のくびれ部直上に１条，細いヘラ沈線が施される。外面は横ヘラ磨き，内面は丁寧な横ナデ。内面の稜は丸っこい。細砂粒を多く含み，焼成不良で内面は茶色，外面は暗茶色をなす。晩期中葉中段階の浅鉢だが，中葉新段階以降のマリＡ類へと継がる類。91はⅡ区包含層出土品で，波状口縁となり，浅く細い沈線３条を持つ。内外面ナデであろう。細砂多く含み，焼成良好で暗黄褐色をなす。中葉中～新段階で，浅鉢Ｂ１類に継がるものか。92は第６号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，波状口縁類。ヘラによる細沈線で飾り，内外面ナデ。内外ともに凹凸あり。細砂多く含み，焼成不良で内面は灰褐色，外面は淡茶褐色。内面有段（マリＡ１類）に継がるものか。中葉古段階。93は第33号土壙出土品で，波状口縁となる。３条の沈線で飾り，頂部付近片。内外ナデか。粗砂僅かに含むが大旨精良。焼成不良で内面は淡褐色，外面は茶褐色。中葉中(～新)段階の精製浅鉢で，浅鉢Ｂ１類に継がる小型類。94はP233出土品で，水平沈線上に押点を施し，その下に斜位の沈線文帯を構成する。微細砂幾らか含むが胎土精良。焼成やや不良で内面は黒色，外面は淡褐色。晩期前～中葉の精製浅鉢。95は第11号住居跡出土品で，内外面丁寧なナデ。外面に細沈線４条を施し，細砂かなり含む。焼成やや良好で内外淡茶褐色。内面上端にも沈線を入れており，有段類と継がる類か。96は第33号土壙出土品で，内面に段を持ち，外面には５条のしっかりしたヘラ先による沈線を施す。内外面ともにヘラ磨きで，胎土精良。焼成やや不良で内面は灰黄～暗黄褐色，外面は灰黄～暗褐色。中葉中段階で，マリＡ１類に継がるもの。97はP480出土品で，内面に段を持ち，外面にはしっかりした丸断面の沈線を施す。内外面横ヘラ磨きで，微細砂をかなり含む。焼成不良で内面は黒色，外面は茶褐～黒褐色をなす。中葉中段階のもので，マリＡ１類へと継がってゆくもの。98はラベル無しで，内面に段を持つ波状口縁類となる。外面に３条の沈線を施し，内外面ともにヘラ磨きか。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒色，外面は茶褐色。中葉中段階のもので，マリＡ１類に継がってゆく類。99はP1035出土品で，外面にしっかりした丸断面の沈線を施す類である。内外面ともにヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良。内外面ともに暗茶褐色。中葉中段階のもので，精製浅鉢Ｂ１

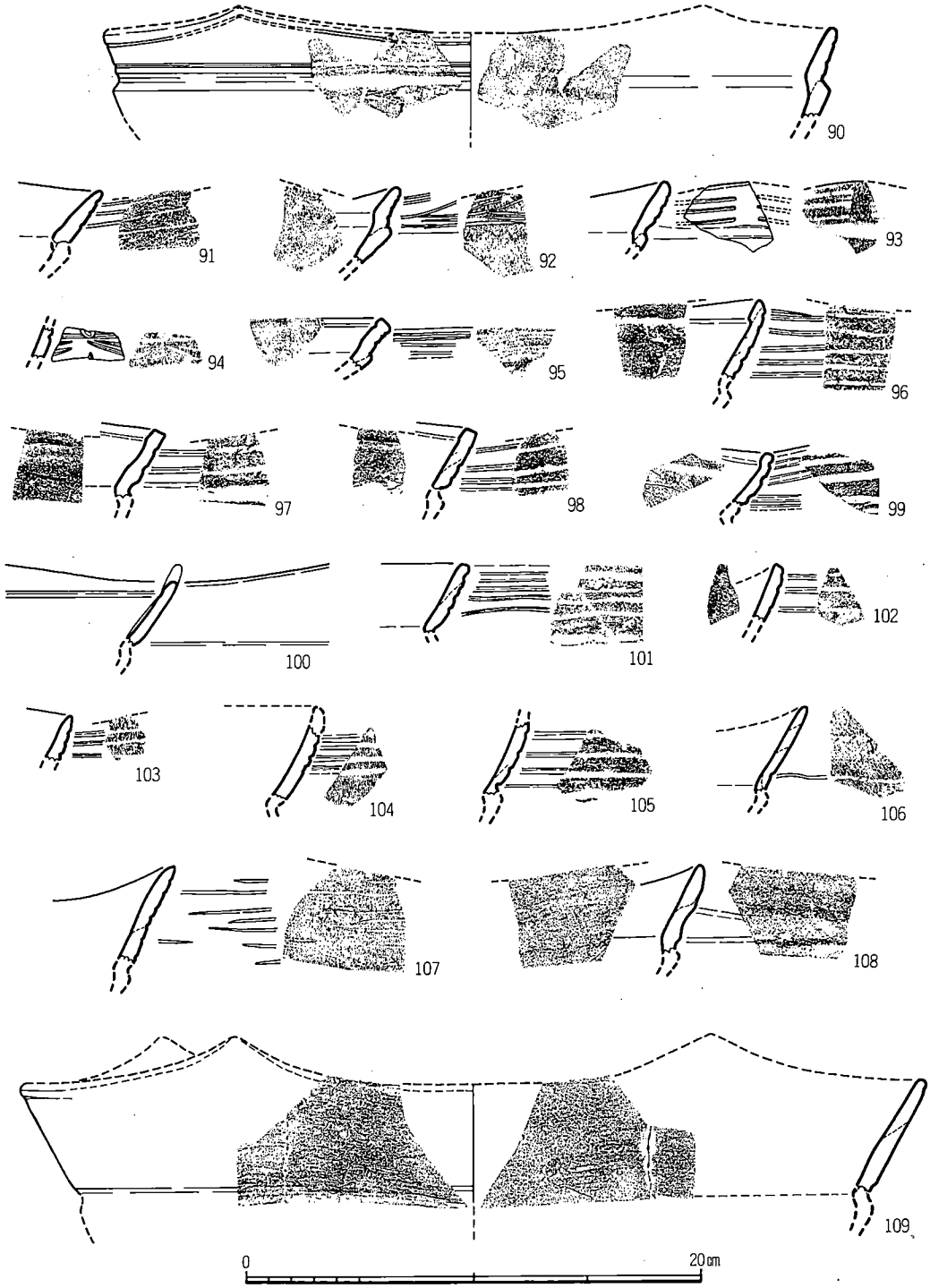


Fig. 48　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その５）(1/3)

類とG類が合わさったような類。

浅鉢B類（100～135）口縁が長く直線的或は内湾気味にやや立ち気味に開き，大きく波状口縁となる類。体部との境の屈曲は僅かで，その外面に太い線を入れるのが特徴である。また，胎土に細砂粒を含むものが多い点も見逃せない。精製深鉢の中にもこの器形のものがあり，口縁小破片の場合には区別し難いものも含まれる。装飾の有無等で3種に細分した。以下個別に説明する。100は第16号住居跡周辺茶色包含層出土品で，内面に凹線を巡らす波状口縁類。やや内湾しており，内外面ともにヘラ磨き。細砂幾らか含むが大旨精良，焼成やや良好で内外淡黄茶褐色。晩期中葉中～新段階の浅鉢B類の古相類。101はP975出土品で，外面に4条の沈線を施すが，一番上のものだけが太い。内外面ともに丁寧なナデ。細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は淡茶褐色，外面は黄茶褐色。中葉新段階の浅鉢B1類。102は第6号住居跡床面出土品で，内外面とも丁寧なナデ。胎土精良で焼成やや良好。内外とも淡茶褐色。中葉新段階の浅鉢B1類となろう。103はP67出土品で，細身でシャープな沈線を施す。内外ともナデか。細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は暗褐色，外面はこげ茶色をなす。中葉新段階の浅鉢B1類。104は茶色包含層出土品で，外面にシャープなヘラ沈線を施す。内面下半は横位ナデで，他内外面は恐らくヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内外面こげ茶色。精製品で，中葉新段階の浅鉢B1類。105はP6出土品で，外面にヘラによるシャープな沈線を入れる。内面は横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は茶褐～暗褐色。中葉新段階の浅鉢B1類。106はP325出土品で，外面下端にやや波打った沈線を施す。内外面ナデか。細砂幾らか含むがかなり精良。焼成不良で内面は暗褐色，外面は淡褐色をなす。薄手で晩期中葉の浅鉢B3類。107は第11号住居跡出土品で，内外著しく磨滅しており外面の7条の沈線も途切れてしまっている。粗・細砂多く含み，焼成不良で内面は黄褐～黒色，外面は肌色をなす。中葉新段階の浅鉢B1類。108は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面は横位指ナデで，下半が凹部となる。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は茶褐色，外面は煤が付着してこげ茶色をなす。中葉新段階で浅鉢B3類。109は11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，復原口径40cmとなる。内外面とも丁寧な横ヘラ磨きで，細砂僅かに含むが大旨精良。焼成不良で内面は暗褐色，外面はかなりの範囲に煤がこびりつき，半分は黒斑，半分は淡褐色，内面は暗褐色。晩期中葉新～後葉古段階の浅鉢B3類と思われるが，口唇断面が丸～角張り気味で典型例ではない。中葉中段階の特徴を残した中葉新段階の，この類としては古いタイプかもしれない。110はP798出土品で，内外ヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良，内面は白褐～灰黒色，外面は淡褐～暗灰褐色。中葉中段階の浅鉢B3類の古い様相を示すもの。111は第17号住居跡出土品で，内外面ともに丁寧なナデ。細砂多く含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は淡褐色。精製浅鉢B3類か。112はP899出土品で，内外面ともに雑なヘラナデ状で凹凸多し。胎土に粗砂少量含む。片岩片が目立つ。焼成良好で内面は明るい肌色，外面は濃

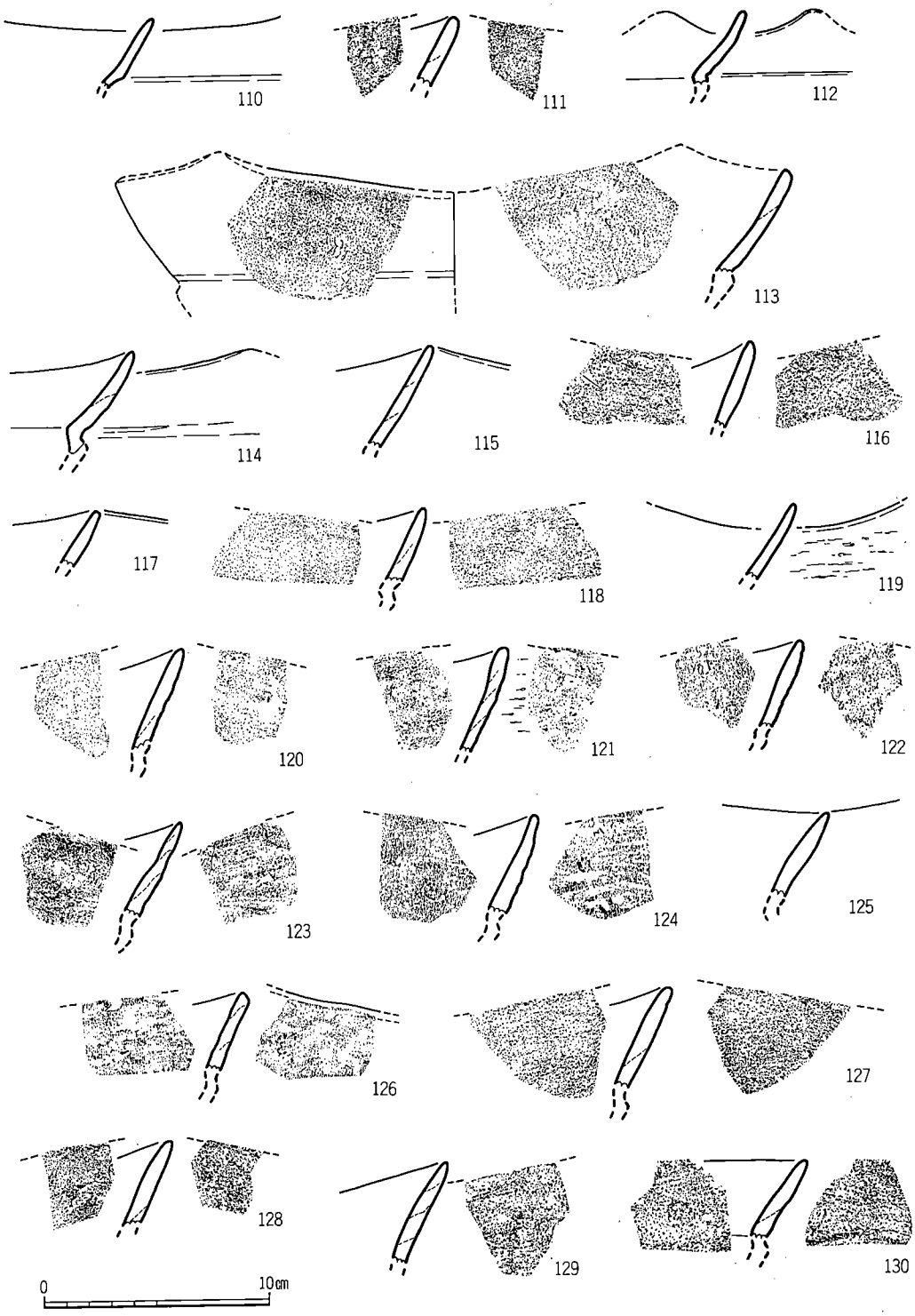


Fig. 49　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その６）(1/3)

灰褐色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類でわりと小型類。113はＣ１周溝内出土品で，復原口径30cm。内面は横ヘラ磨きで極めて平滑，外面はナデで僅かに凹凸がある。粗・細砂僅かに含むが，大旨胎土精良。焼成やや良好で内面は淡褐～黒褐色。外面は灰黄茶褐色。作りはとても良く，浅鉢Ｂ３類。114はⅡ区表採品で，内面は丁寧なヘラ磨き，外面は雑な横位ヘラ磨き。粗砂少量，細砂幾らか含み，片岩片も目立つ。焼成やや不良で，内面淡灰茶色，外面暗黄灰色をなす。中葉新～後葉古段階の浅鉢Ｂ３類。115はⅡ区包含層出土品で，内外面ヘラ磨きか。細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面は茶～黒褐色。外面は淡褐色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。116は第11号住居跡出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面はナデ。細砂多く含み，焼成不良で内面はこげ茶色。外面は茶褐色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。117は第６号住居跡周辺出土品。内外かなり磨滅し，胎土に細砂粒を多量含む。焼成不良で内面は黒色，外面は暗褐色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。118は第11号住居跡出土品で，内面はナデ，外面は横位擦過か。やや凹凸あり。細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は淡茶褐色，外面は暗褐色。中葉新段階浅鉢Ｂ３類。119はP970出土品で，内面はヘラ磨き，外面は横位擦過の上をヘラナデ。粗・細砂幾らか含み，焼成良好で内外面赤茶色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。120はＣ１に混入していたもので，内面は横位ヘラ磨き的。外面は雑な横位ナデ。粗砂幾らか含み，焼成不良で内面は黒褐色，外面は淡褐色をなす。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。121はP20出土品で，内面はナデ，外面は横位擦過の上をナデ。凹凸多し。粗・細砂幾らか含み，焼成良好で内外茶褐色をなす。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類か。122は第11号住居跡出土品で内面は横ヘラ磨き，外面は極めて雑な横位擦過。粗砂幾らか，細砂多く含む。焼成不良で内面は黒色，外面はこげ茶色。浅鉢Ｂ３類か。123はラベル無しで，内面はナデでやや凹凸あり。外面は雑な横位擦過で凹凸著しい。粗砂僅か，微細砂幾らか含み，焼成良好で内面は茶色，外面は暗茶褐色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。124はⅡ区南半包含層出土品で，内面は横位ヘラ磨き，外面は一部に横位条痕を残し，雑な横位擦過。胎土かなり精良で，焼成良好。内面は黒褐色，外面は茶褐色。中葉新段階前後の浅鉢Ｂ３類。125は第15号住居跡北側包含層出土品で，内外面ナデか。粗・細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は灰黒色，外面は茶褐色。後葉古段階の浅鉢Ｂ３類。126はラベル無しで，内面はやや雑な横位ヘラナデ状，外面は横位擦過の上を横ヘラ磨き。微細砂幾らか含み，焼成不良で内外面黒色をなす。胎土・調整や薄手であることから，中葉新段階浅鉢Ｂ３類となろう。127はⅠ区包含層出土品で，内面は丁寧なナデ，外面は横位擦過の上をナデ。細砂多く含み，焼成不良で内外黄褐色をなす。浅鉢Ｂ３類。128はP317出土品で，内外面ともに丁寧なナデ。細砂多く含み，焼成良好で外面は茶色，内面はこげ茶色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。129はP116出土品で，内面は丁寧なナデで平滑。外面は横位擦過の上をナデ。微細砂かなり含み，焼成良好。作りは丁寧で浅鉢Ｂ３類となろう。130は第11号住居跡上面出土品で，内面は横位擦過の上をナデか。外面は横位擦過でやや雑。細砂かなり含み，浅鉢Ｂ３類となるか。131はⅡ区包含層出

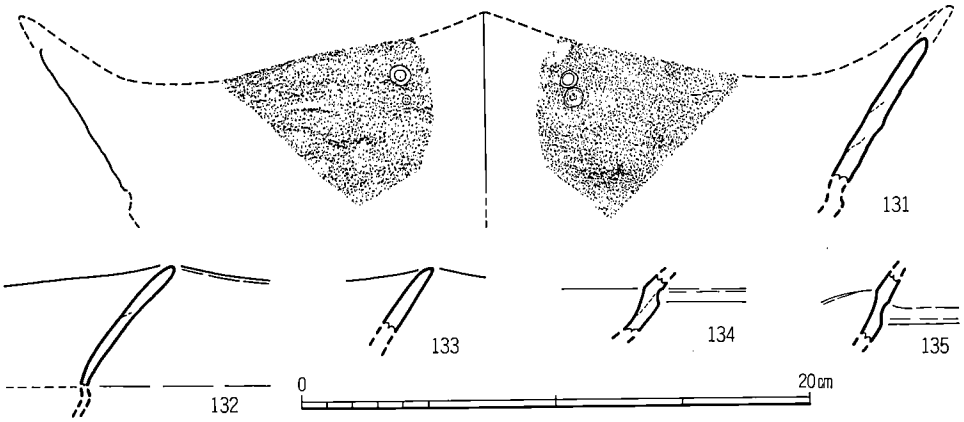


Fig. 50　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その７）(1/3)

土品で，復原口径37.6cmとなる。内面は横位擦過の上をナデ，外面は雑な横位指ナデで凹凸多し。焼成やや良好で，胎土に細砂・金雲母多く含む。内面は暗黄褐～茶色，外面は暗茶褐色をなす。焼成後の補修孔が２個みられるが，うち下の１個は未貫通で，裏面にも小さな穿孔し始めた穴がみられる。晩期中葉新(～後葉古)段階の浅鉢Ｂ３類。132は第11号住居跡周辺暗褐色包含層出土品で，細砂多く含み，焼成不良で内面は暗茶褐～淡褐色，外面は暗褐色をなす。晩期後葉古段階の浅鉢Ｂ３類。133はP205出土品で，内外面ともにやや磨滅しているが，ヘラ磨きか。細砂多く含み，焼成不良で内面は灰黒～灰白色，外面は灰白色。後葉古段階の浅鉢Ｂ３類。134は第33号土壙出土品で，内外面ともに横ヘラ磨き。粗・細砂粒をかなり含み，焼成不良で内面暗黄褐色，外面は明黄白色。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。135は第15号住居跡出土品で，内面の稜は左の方に斜めに下がる。波状口縁に関るものか。内外面ヘラ磨きで，細砂多く含む。焼成良好で内面は暗褐色，外面は茶色をなす。中葉新段階の浅鉢Ｂ３類。

浅鉢Ｄ類等（Fig.51-136～151）浅い体部から２段に短く屈折して，外方へ開く長めの口縁を持つ類をＤ類とした。口唇部は尖るのが特徴で玉縁を作らない。器形全体としては果物皿状の浅く広い形状と言えよう。口縁部が長いものから短いものへ，屈折部が１回のものから２段屈折へ，さらにその折れ曲り角度がきつくなるものへと変化がみられ，３種に細分される。この類は胎土に細砂粒を含むものが多いのも特徴で，同じく口縁端が尖るＢ類と同様で，両者の強い関連性が覗われる。ここでは，この系列の古い段階のものではあろうが，直接には関係ないもの（136・137）も含めて報告しておきたい。以下，個々に説明をする。136は第11号住居跡出土品で，口唇部を片玉縁に作る類。頸部は丸く屈曲外反し，古相を示す。内外面ともにヘラ磨きで，細砂粒を幾らか含む。焼成不良で内面は黒～淡褐色，外面は暗灰褐～淡褐色。晩期前葉新(～中葉古)段階の浅鉢。137はP912出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂僅かに含み，

焼成良好。内面は黄褐色，外面は暗褐色。晩期前葉後半段階の精製浅鉢。138はⅡ区表採品で内外面磨滅。体部外面稜での直径21㎝。細砂多く含み，焼成不良で内面は黄白褐色，外面は黄白～黒色。晩期中葉中段階の浅鉢Ｄ１ａ類，或は中葉新段階の浅鉢Ａ３類の段の無い類か。139はP400出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面の稜より上はヘラナデ状，稜以下は横位擦過の上をヘラナデ。粗・細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は明赤茶色。晩期中葉新段階の浅鉢Ｆ２類とＤ２ｂ類との中間形態。140はP133出土品で，内外面ともに丁寧な横ヘラ磨き。作りはシャープで，体部上端の鋭い稜部での直径26.6㎝。細砂僅かに含み，焼成良好で内面は茶～黄褐色，外面は暗茶～暗黄褐色をなす。中葉新～後葉古段階の浅鉢Ｄ２類。141は，Ｃ１に混入していたもので，内外面磨滅。細砂幾らか含み，焼成良好で内面は淡灰褐色，外面は暗褐色。後葉古段階の浅鉢Ｄ２類。142は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，内面の稜は部分的に丸味があり，外面の稜は大部分が丸っこい。内面はヘラ磨きだが稜直下付近だけが雑な横位ナデ。細砂かなり含み，焼成不良。内面は黒色，外面は淡褐色。分類上ぴったりくる器形が無いが，(中葉新～)後葉古段階の浅鉢Ｄ２ａ類が近い。143はP813出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒色，外面は暗褐色をなす。中葉新段階の浅鉢Ｄ２ｂ類。144はP177出土品で，外面稜端での直径30㎝の大型品。外面は横ヘラ磨き，内面の稜直下付近は横ナデ，以下はヘラ磨きか。粗砂僅か，細砂多く含み，焼成良好で内面は明橙褐色～淡灰黄色，外面は煤がこびりついて橙茶～黄灰～黒褐色をなす。中葉新段階頃の浅鉢Ｄ２類，或はＡ３類であろう。145はP118出土品で内外面横ヘラ磨き。外面稜部での直径18㎝となる小型類。細砂かなり含み，焼成良好で内面は淡灰褐色，外面は黄褐～暗褐色。晩期中葉の浅鉢Ｄ２類，或は後葉中段階の浅鉢Ｄ３類か。146は暗褐色包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良。内面は暗黄～淡茶褐色，外面は淡茶～灰黒色。中葉新～後葉中段階の浅鉢Ｄ２～Ｄ３類。147は第10号土壙出土品で，内外面ともにヘラ磨きであろう。細砂幾らか含み，粗石英も僅かに見られる。焼成良好で内面は茶～黒褐色，外面は灰黄褐色。中葉新段階の浅鉢Ａ３かＤ２類。148は第11号土壙出土品で，内外面ヘラ磨きであろう。細砂かなり含み，焼成やや良。内面は茶褐色，外面は淡茶～暗茶褐色。晩期前葉新～中葉の精製浅鉢。149はP374出土品で，細砂幾らか含み，焼成やや不良で内面は暗灰褐色，外面は黄灰褐色。後葉古段階の浅鉢Ｄ２・Ｄ３類，或はＡ５類。150は第６号住居跡出土品で，口唇上面は面取り状で，波状口縁となる。内外面横ヘラ磨きで，胎土精良。焼成良好で内面は明橙茶～暗褐色，外面は暗褐～茶褐色をなす。薄手精製品で，中葉新段階前後の浅鉢Ｄ３類の系列であろう。151は暗褐色包含層出土品で，口縁内面は殆ど段に近い。内外横ヘラ磨きで，細砂かなり含む。焼成良好で内外暗灰黄褐色。中葉新～後葉古段階の浅鉢Ｄ２類の一種か。

浅鉢Ｈ類（Fig.51-152）器全体が大きく単純に開くだけの類で，大口径になる。各遺跡とも量は少ないが晩期後半代に出土している器種であり，特殊な用途があったと推定される。152

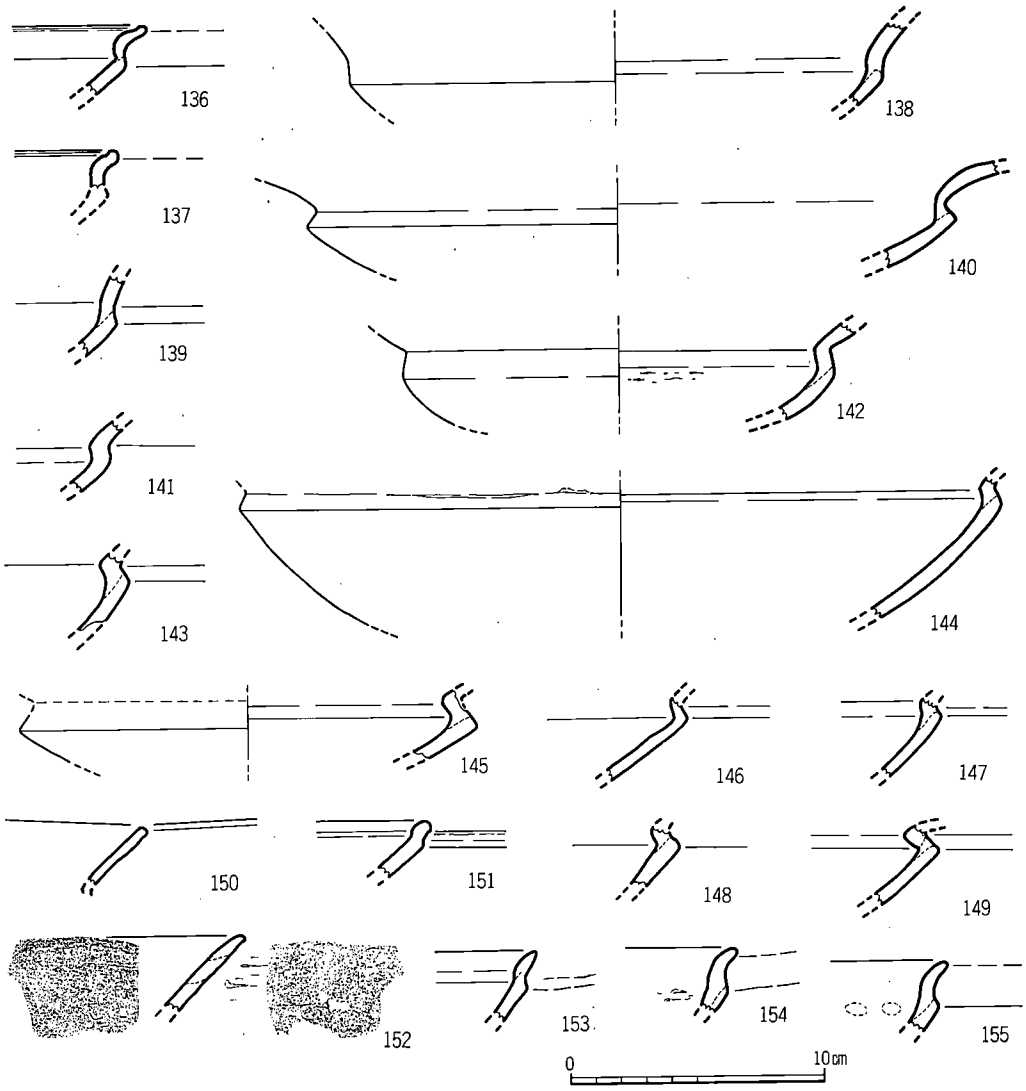


Fig. 51　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その８）(1/3)

は第11号土壙に混入していたもので，内面はやや雑な横位ヘラ磨き，外面は横位擦過のままとなる。胎土に粗砂を僅かに含むのみで，焼成は不良。内面は黒色，外面は煤がこびりついており，こげ茶色をなす。大口径になりそうで，晩期後葉代か。

浅鉢Ｆ類（Fig.51-153～155）開いた体部の上に短かく屈折反転して開く口縁を持つ類で，口唇部は尖り気味となり，作りはやや雑で，晩期後葉新～末葉のものが多い。弥生早期の高杯や鉢へと継がってゆく類と思われる。153は第６号住居跡出土品で，外面の稜より上は雑な横ナデ，以下は雑な横ヘラ磨き。内面はナデか。細砂多く含み，焼成やや不良で内面は淡褐色，外

面は暗褐色。作りは雑で晩期後葉新～末葉の浅鉢Ｆ１ｂ類か。154は第11号南側暗褐色包含層出土品で，内外雑な横位ナデだが，内面下半は横位擦過痕残る。内外面凹凸多し。粗・細砂幾らか含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は茶褐色。作りは雑で晩期末葉か。155は第11号住居跡上面出土品で，内外とも雑な横位ナデ。粗・細砂少量含み，焼成やや良好で内面は橙茶～淡褐色，外面は煤が付着して暗茶褐色をなす。内外とも凹凸著しく，作りはやや雑。晩期末葉前後となる浅鉢か。

直口類浅鉢（Fig.52-156～160）直立して上端で僅かに開く形状の口頸部を持つ類で，今まで柿原Ⅰ縄文遺跡やクリナラ遺跡では見られなかったので，分類名が与えられていない。胴部の形態は各々異ると思われるので，全器形の判然としない現段階での細分類や時期の確定は止めておく。注口土器の可能性が強いものも見られるため，今後当地方での資料の増加を待つことにしよう。156は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，復原口径14.2cmとなる。口縁内外に沈線を入れて玉縁状につくる。内外面ヘラ磨きで，内面下半はやや凹凸がある。胎土精良で焼成不良。内面は明橙茶～灰黄色，外面は橙茶色。口縁の玉縁形態からみて，晩期後葉古段階を中心とする時期のものか。157はⅡ区南半包含層出土品で，内外磨滅するがヘラ磨きかと思われる。復原口径14cmで胎土精良。焼成不良で内面は淡灰褐色，外面は灰黄褐色をなす。晩期後半代か。158は第１号掘立柱建物Ｐ５出土品で，復原口径25.8cm。内面は横ヘラ磨き，外面は丁寧なナデか。粗・細砂を幾らか含み，焼成良好で内面は暗黄褐色，外面は明茶橙色。口縁内面に沈線を施すなど，イメージとしては晩期末葉の浅鉢Ｃ４ａ類的だが，勿論器形が異り，時期的にも簡単には判断できない。159は第１号住居跡出土品で肩の張る器形となる。肩部径22.6cmとなり，内面は横ヘラ磨き。外面は上半が丁寧なヘラ磨き，下半は横位擦過の上をヘラ磨き。胎土精良，焼成不良で内面は暗灰褐色，外面は淡白褐色をなす。晩期前半代の注口土器となるか。精製品。160はⅡ区包含層出土品で，口唇部は玉縁的だが，内側のふくらみは粘土はみ出し的。内外面とも横位擦過の上をナデか。焼成やや良好。内面は灰褐色，外面は暗黄褐色。器種の判断に苦しむが，浅鉢Ａ４～Ａ６類の可能性もある。

柿原２Ｃ類（Fig.52-161～167）口縁が長く大きく開き，体部で屈折して底へ至る。口縁内端を突出させて玉縁状口縁とするのが特徴で，甘木市柿原Ⅰ縄文遺跡出土品に多く見られたので，その呼称をそのまま用いる。161は第11号住居跡周辺暗褐色包含層出土品で，整美な大きいリボン状突起を付ける。内外面横ヘラ磨きで，細砂幾らか含み，焼成やや良好。内面は暗褐色，外面は煤がこびりつき暗黄黒色をなす。晩期中葉新段階の柿原２Ｃ１類にリボンが付いたものか。或はリボンの形状から見て後葉中段階前後となるか。162はP152出土品で，小さな丸い突起がみられ，内面の肥厚部に沈線が走るもの。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で内面は暗灰紫色，外面は淡褐色。突起はリボン状となる可能性もあり，浅鉢Ａ類の系統なのかもしれない。163は第11号住居跡出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面は磨滅。胎土精良で焼成不良。

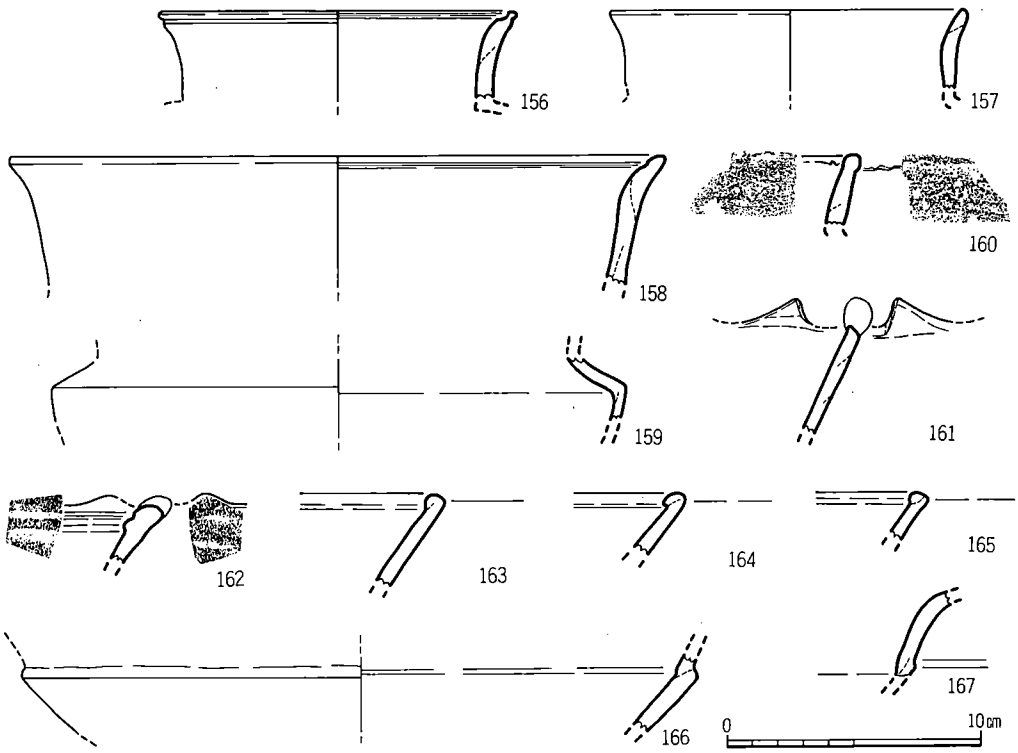


Fig. 52　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その９）(1/3)

内面は黒色，外面は白褐色。晩期後葉新段階の精製浅鉢柿原２Ｃ２類。164は第11号土壙出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂僅かに含み，焼成不良で内面は黒色，外面は灰褐色をなす。晩期後葉新段階の浅鉢柿原２Ｃ２類。165は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面は暗褐色，外面は暗茶褐色。晩期後葉新段階の浅鉢柿原２Ｃ２類。166は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，外面は横位ヘラナデ状，内面は磨滅するがヘラ磨きか。屈折部稜部径26.6cmで，胎土に細砂多く含む。焼成不良で内面は淡褐色，外面は淡褐～暗褐色。晩期後葉新段階の柿原２Ｃ類。167はP283出土品で，内外面ナデか。粗砂幾らか，細砂かなり含み，焼成良好。内面は淡褐色，外面は暗黄褐～灰黒色をなす。晩期後葉新段階柿原２Ｃ類の浅鉢。

浅鉢底部（Fig.53-168～180）168はⅡ区南半包含層出土品で，大きく上げ底になる類。底径9.6cm，内外磨滅。焼成良く，淡茶～暗茶褐色をなす。晩期前葉か。169は第１号掘立柱建物Ｐ３出土品で，底径10.5cm。内底面は丁寧なナデ，底外面は擦過上をナデ。外面はナデで凹凸多し。粗砂僅かに含むのみで，焼成良好。内面は淡黄褐色，外面は橙茶褐色。170は第１号住居跡出土品で，底径8.6cm。底外面は擦過，他内外面は丁寧なナデ。細砂かなり含み，焼成良好

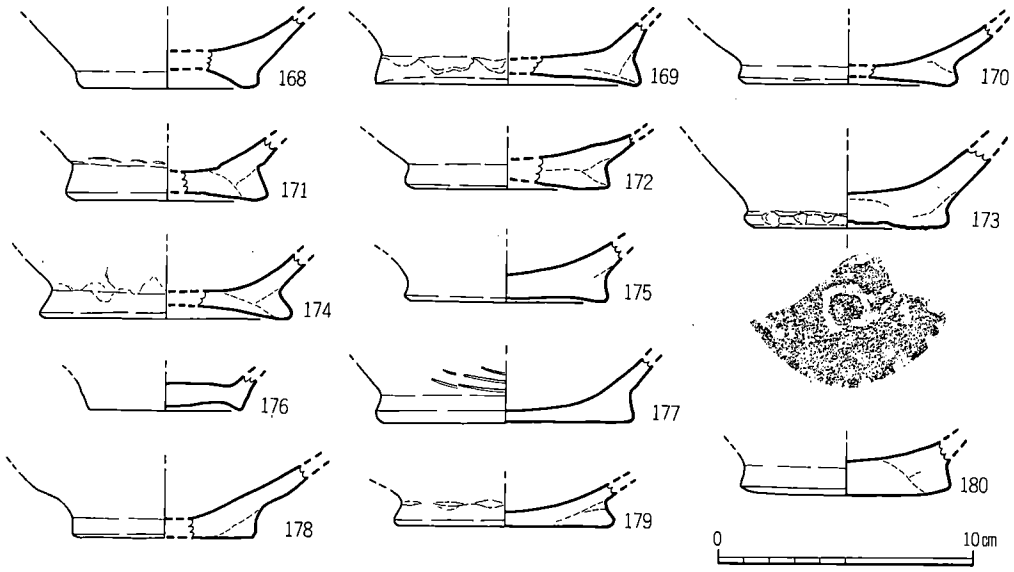


Fig. 53　その他の遺構出土晩期浅鉢実測図（その10)(1/3)

で内外とも淡茶～黄褐色をなす。171はⅡ区表採品で，底径８㎝，体部外面は丁寧なナデ。底外面にはやや小さめの圧痕が幾らか見られるが，詳細は不明。微細砂を多く含み，黒曜石片１点も含む。焼成不良で内面は淡褐色，外面は茶～暗褐色。172は第27号土壙出土品で，底径８㎝。内底面はヘラ磨きか。底外面は擦過の上をナデか。体部外面はわりと丁寧なナデ。細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は淡黄灰色，外面は茶色をなす。173はⅡ区包含層出土品で，底径８㎝。内外面ともに横ヘラ磨きで，底外面は蛇目状になり，外周部はザラついて小さな凹凸がある。砂でも敷いたか。内側には豆粒状の圧痕が多くみられるが，原体は不明。焼成やや不良で外面は茶褐色，内面は黒～褐色。胎土はわりと精良。174はP776出土品で，底径10㎝。内面は雑な横ヘラ磨き，外面はナデ。細砂幾らか含むのみで，焼成良好。内面は黄白色，外面は黄茶褐色。175は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，底径８㎝。内面は丁寧なヘラ磨き，底部側面はナデ，底外面は擦過の上をナデ。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成良好で内面は黒褐～淡褐色，外面は茶褐～黄灰褐色。作りは丁寧。176は暗褐色包含層出土品で，底径６㎝の小型品。磨滅するが内外ナデか。赤褐色粒を多く含み，焼成良好で内外面ともに淡茶褐色。177は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，底径10.2㎝。磨滅するが薄手品。焼成良好で茶褐色をなす。178はP470出土品で，底径7.2㎝。内面はヘラ磨きか。外面横位ナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面は黒色，外面は茶～暗茶褐色。作りは丁寧。179はⅡ区包含層出土品で，底径8.8㎝。内面はヘラナデ状，底部側面はナデで指押さえ痕多し。底外面は丁寧なナデ。細砂幾らか含み，焼成やや良好で，内面は暗灰黄褐色，外面は茶褐色。180は第10号土壙出土

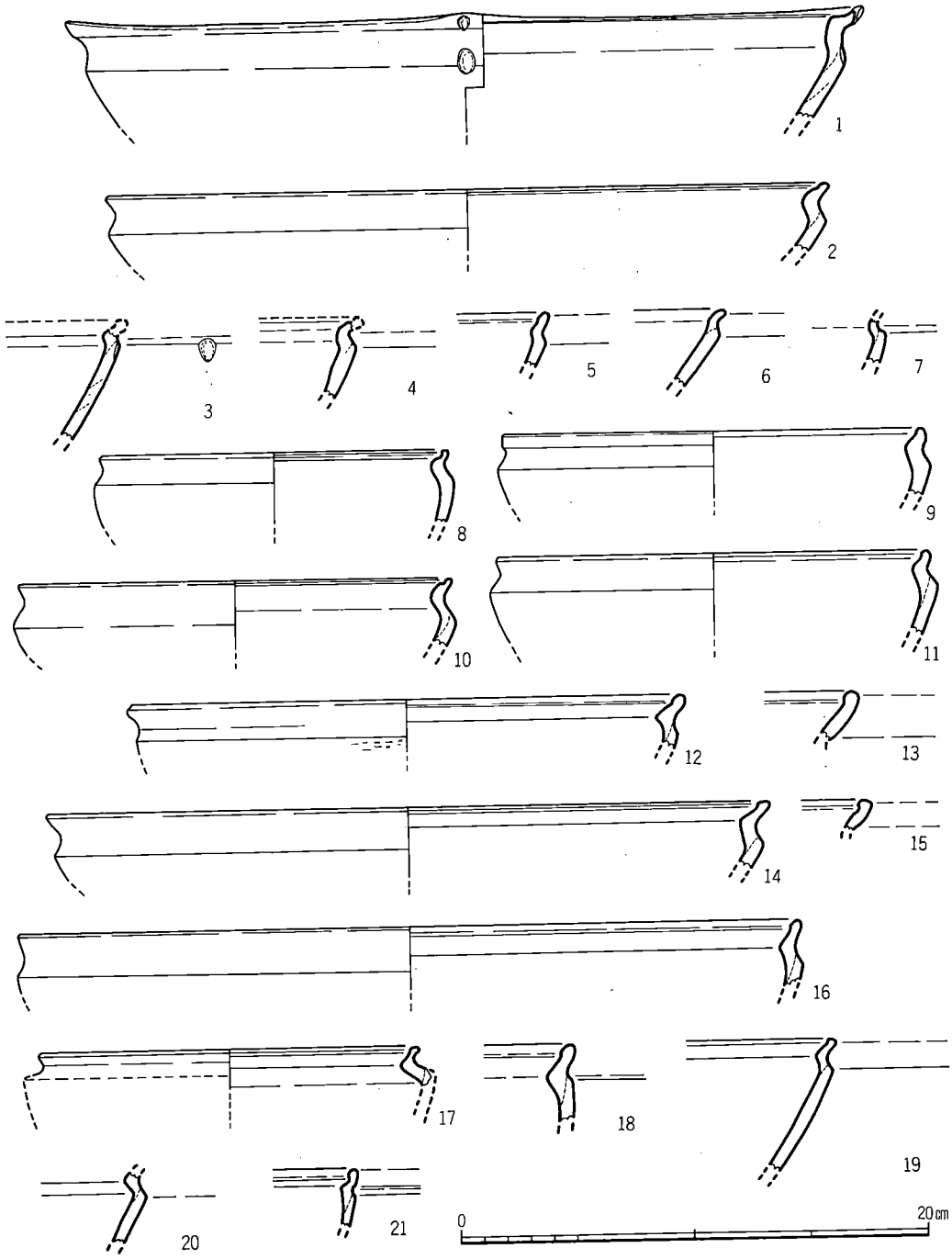


Fig. 54　その他の遺構出土晩期マリ実測図（その１）(1/3)

品で，底径8.2cm。これのみ底面が凸状となり，内外面ともに丁寧なナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面はこげ茶色，外面は赤茶色。全体に作りは丁寧。

縄文晩期マリ（Fig.54・55）

口頸部が小さくくびれて，屈曲反転し，深い体部となる底面丸底のマリ形土器は，縄文晩期前葉段階の浅鉢段階から分化して，中～後葉では独立した器種となる。一方，単純な半球形のボール状器形のものは畿内地方との交流を示した沈線文様帯を持つものとして，前葉段階で盛行し，中葉段階まで残る。単純な無文のもの，或は口縁外面に1条の沈線を施しただけのものは晩期末葉まで残る。ここでは，「クリナラ分類」に従って分類報告する。特にマリB1類の古い段階のものが多く出土している為，これの祖型となる前段階の浅鉢も掲載した。

マリB類系古段階類（Fig.54-1～3）晩期中葉のマリB1類の成立へと継がる浅鉢で，頸部の丸く屈曲する部分がまだ長くて，凹点を施文したり，体部がまだ浅鉢そのものの開き方をしているもの。1はP735出土品で，口径34.2cm。波頂部の外面の上下に深めの縦長楕円形の押点を施す。内外面ともに横ナデの上を横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は黒色，外面は暗黄褐色。マリB1類の祖形となるもので，晩期前葉新～中葉古。2はP639出土品で，口径31cm。内外面横ヘラ磨きで，口縁内面の沈線はほぼ段に近い。細砂かなり含み，焼成不良で内外黒色。外面下半には煤がこびり付く。器形は浅鉢だが，マリB1類の前段階のもので晩期中葉中段階。3は第27号土壙出土品で，横位擦過の上をヘラ磨き。縦長の押点がみられ，細砂少量含む。焼成不良で内面は暗茶褐色，外面は煤がこびり付いて暗褐色。マリB1類の祖形で晩期前葉新段階前後か。

マリB類（Fig.54-4～21，Fig.55-22～30・38）体部上端外面に稜を作り，そこから短く屈曲反転して片玉縁口縁となるものをB類とした。口頸部が短いのが特徴的である。4はP857出土品で内外横ヘラ磨き。細砂少量含み，焼成不良で暗褐色をなす。晩期中葉中～新段階のマリB1類。5はP129出土品で，内外ヘラ磨きか。微細砂をかなり含み，焼成やや不良。内外ともに淡褐～暗灰褐色。晩期中葉新段階のマリB1類。6はII区包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内外面暗茶褐色。晩期後葉新段階の浅鉢F1b類的でもあるが，作りが良過ぎるので，中葉のマリの系統とした方が良いかもしれない。7は第12号住居跡出土品で，内外面磨滅。細砂幾らか含み，焼成良好。内面は橙褐色，外面は茶褐色。中葉中段階のマリB1類。8は第11号土壙出土品で，口径15cmの小ぶり品。内外面横ヘラ磨きで，微細砂をかなり含む。焼成不良で内面は暗灰黄～明黄白色，外面は暗褐～淡褐色。晩期中葉新段階のマリB1類。9は第10号土壙出土品で，口径18.2cm。内外面ともにヘラ磨き。微細砂をかなり含み，焼成やや不良で内面は暗褐色，外面は暗褐～暗黄灰色。中葉新段階のマリB1類。10はII区南半包含層出土品で，口縁内面にシャープなヘラ沈線を施す。口径18.8cmで，内外面横ヘラ

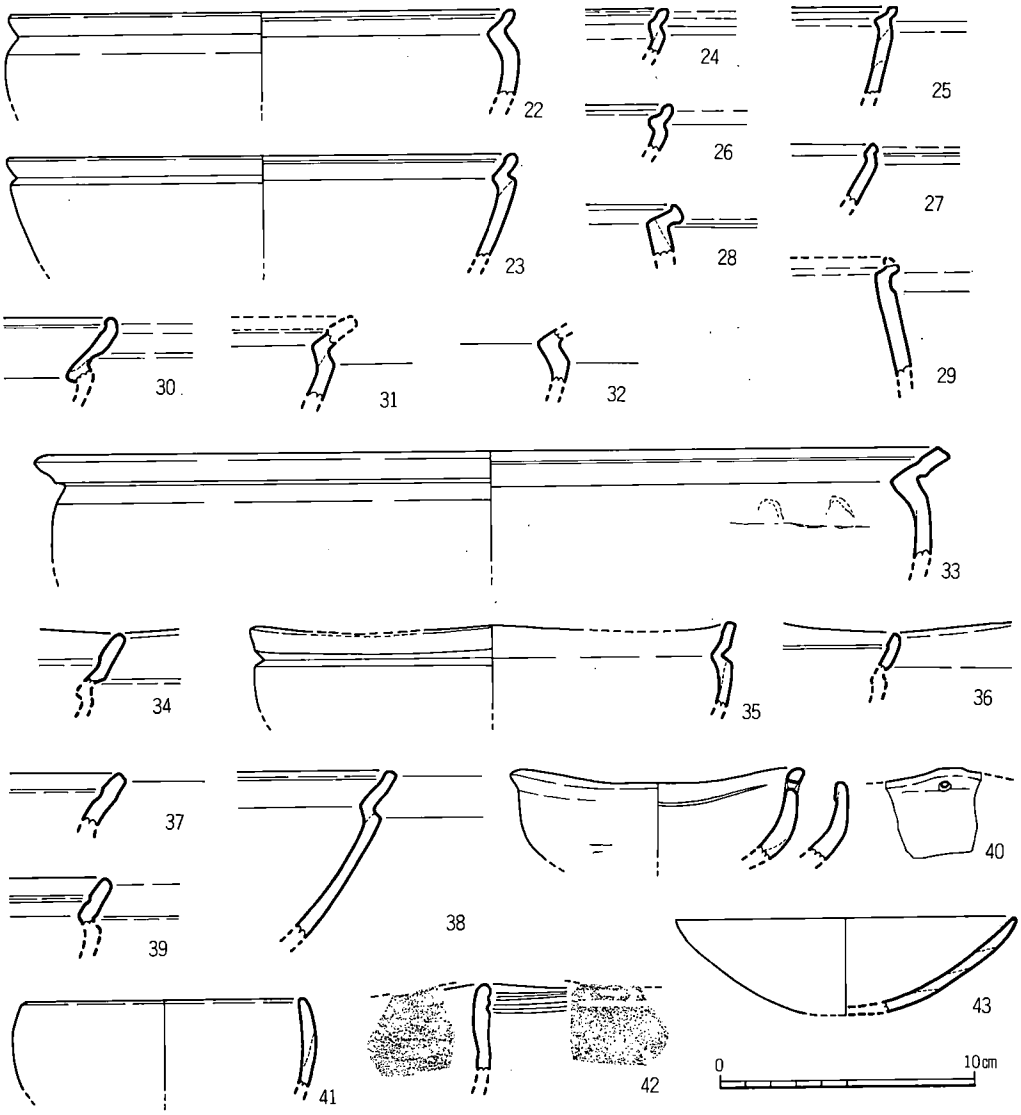


Fig. 55　その他の遺構出土晩期マリ実測図（その２）(1/3)

磨き。細砂多く含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐色。口唇部が玉縁でない点ではマリＡ１類となるが，器形的に見て明らかに中葉新段階のマリＢ１類の一種と考えた方が良い。11は第11号住居跡出土品で，口径18.6cm。内外面ヘラ磨きで，粗砂少量，細砂幾らか含む。焼成良好で内面は暗黄褐色，外面上半は茶色，稜より下は黒褐色。中葉新段階のマリＢ１類。12は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，口径24cm。内面の稜が鋭く内側へ張り出すマリＢ１類後半段階の典型例。内面は横ヘラ磨き，外面上半は雑な横ナデ，稜以下は横位擦過。細砂僅

かに含むが，大旨胎土精良。焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐～黒灰色をなす。晩期後葉中～新段階のマリＢ１類。13はP965出土品で，内外ヘラ磨きか。微細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は淡灰茶褐色，外面は淡褐色。中葉新段階のマリＢ１類。14はラベル無しで，口径31cmとなり，内外ヘラ磨き。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐～灰褐色，外面は煤がほぼ全面にこびり付き，暗褐～黒褐色。作りとしては中葉新段階マリＢ１類だが，器形的には浅鉢的。15はP123出土品で，内外ヘラ磨きか。細砂少量含み，焼成良好で内外淡褐色をなす。中葉新段階マリＢ１類。16は第８号住居跡内Ｐ１出土品で，波状口縁になるかもしれない。器表磨滅。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は暗灰褐色。中葉新段階のマリＢ１類。17はP832出土品で，口径16.4cm。内外横ヘラ磨きで細砂幾らか含む。焼成良好で内面は暗褐～茶色，外面は暗茶褐色。晩期中葉新段階のマリＢ１類小型品。18は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，内外横ヘラ磨きであろう。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗灰色，外面は淡褐色をなす。中葉中～新段階のマリＢ１類。19はⅡ区包含層出土品で，内外横ヘラ磨き。微細砂を幾らか含むが大旨精良。焼成やや不良で，内外面とも暗灰褐色。中葉新段階のマリＢ１類。20はⅡ区包含層出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂僅かに含むが大旨精良。焼成不良で内面は黒褐色，外面は灰褐色。中葉新段階のマリＢ１類。21はⅡ区包含層出土品で，内外面横ヘラ磨きであろう。外面のくびれ凹部は角張っており沈線的。胎土精良で焼成不良。内面は淡褐～淡茶色，外面は暗黄褐色。後葉古～中段階のマリＢ１類。22は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で口径20cm。内外面横ヘラ磨きで細砂少量含む。焼成不良で内面は黒褐色，外面は暗灰褐色。中葉中～新段階のマリＢ１類だが，外面の稜がシャープでなくなっており，Ｂ２類に近い。23は第27号土壙出土品で，口径20.2cm。内外横ヘラ磨き。各角がシャープで，胎土精良。焼成やや不良で暗黄灰褐色をなす。後葉古(～中)段階のマリＢ１類だがＢ２類に近い。24はP101出土品で，内外磨滅しており，胎土に細砂僅かに含む。焼成やや良く，内面は茶色，外面は淡茶褐色をなす。後葉古段階前後のマリＢ１類だがＢ２類に近付いている。25は第６号住居跡出土品で，内外面ヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良。内面は黒褐色，外面は暗褐色。後葉古～中段階のマリＢ２類に近いもの。26はⅡ区包含層出土品で，内外ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面は淡褐色，外面は暗褐色。後葉古段階のマリＢ２類。27はⅠ区包含層出土品で，内外面ヘラ磨きか。細砂かなり含み，焼成不良で内外黄白色。後葉中(～新)段階のマリＢ類の一種か。28は第15号土壙出土品で，内外磨滅。細砂僅かに含み，焼成不良で内外灰黄色。後葉中(～新)段階のマリＢ３類。29は第15号住居跡カマド横東側出土品で，内外面横ヘラ磨き。細砂少量含み，焼成不良。外面の一部に煤が付着し，内外面ともに暗褐色をなす。中葉新段階のマリＢ１類の胴張り類。30は第19号土壙出土品で，波状口縁になる可能性がある。内外面横ヘラ磨きで胎土精良，焼成不良。全面黒褐色。中葉中段階ぐらいのマリＢ１類，或は口縁が長い事からマリＡ１類の内面肥厚部の未発達類か。または浅鉢Ｂ類の祖形的なものか。

38はⅡ区南半茶色包含層出土品で，内外磨滅。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は茶褐色をなす。中葉新段階のマリＢ１類。

マリＡ類（Fig.55-31～37・39）口縁部が長く，内面に段や沈線を入れる類。なお，この類の祖形・前段階のものと考えられる古段階類（Fig.48-96～99）は既に報告したのでここでは省略する。（「浅鉢Ｂ類系古段階類」の項参照）31はラベルを紛失したもので，内外面横ヘラ磨き。細砂僅かに含み，焼成やや不良で内外淡灰黄褐色をなす。中葉新段階マリＡ１類。32は第11号土壙出土品で，内外ヘラ磨きであろう。細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗灰褐色，外面は黒褐色。33はP20出土品で，復原口径36.2cmとなる大型品。内面と外面上半は横ヘラ磨きだが，内面頸部稜直下は雑な横ナデ。外面下半は横位擦過の上を横ヘラ磨き。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒色，外面は茶褐～暗褐色。中葉新段階マリＡ１類。34は第18号住居跡出土品で，内外ヘラ磨き。細砂僅かに含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は暗褐色。中葉中段階のマリＡ１類に継がる波状口縁類。35はP950出土品で，口径19.2cmとなる波状口縁類。内外面ヘラ磨きで細砂幾らか含む。焼成良好で内面は赤茶色，外面は煤がこびり付いて暗茶褐色。後葉古段階のマリＡ２類。36はP955出土品で，内外面横ヘラ磨きであろう。細砂幾らか含み，焼成不良で内外面ともに暗褐～淡褐色。後葉古段階前後のマリＡ２類。37は暗褐色包含層出土品で，外面はナデ，内面磨滅。細砂多く含み，焼成良好で灰黄褐色をなす。中葉新段階のマリＡ１類となろう。39はP77出土品で，口縁内面中途に沈線を施す類。内外面ヘラ磨きか。粗・細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は茶色，外面は灰褐色。波状口縁の可能性あり。後葉古段階のマリＡ２類。

マリＥ類等（Fig.55-40～43）半球形の単純な椀形のものをマリＥ類とした。ここではそれ以外の分類しようのない類や，皿状のものをまとめて報告する。40は第２号住居跡出土品で，波状口縁となるが突起部は２ケ所となろう。突起部下に細身の穿孔を施し，内面には小さな段を作る。復原口径11.8cmの小型品で，内面は丁寧なナデで平滑。外面はナデか。細砂多く含み，焼成やや不良で，内面は暗灰黄褐色，外面は淡黄褐色をなす。定型品では無く，晩期中葉のものか。41はⅡ区包含層出土品で，口径11cm。内面は横～やや斜位のヘラ磨き，外面もヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良。内面はこげ茶色，外面は暗灰茶褐色。後葉以降のマリＥ３類。42は第11号土壙出土品で，波状口縁の可能性が強い。２条のヘラ沈線を施し，外面はナデ，内面は横ヘラ磨きか。細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒色，外面の上半は黒色，下半は淡茶褐色。中葉ごろのマリＥ１類か。43はP740出土品で，復原口径13.4cmの小皿状器形。内面はヘラ磨きか。外面は幾らか凹凸がありナデか。幾らか細砂含むがわりと精良。焼成やや良好で内外面ともに灰黒～淡灰褐色。時期は確定できないが，晩期後半代か。

縄文晩期定型深鉢（Fig.56～61）

深鉢を精製深鉢と粗製深鉢に大別する事は広く行われているが，実際の土器の中には，きち

んと定型化した類でありながら，半精製・半粗製と呼ばざるを得ないものもかなり見られる。更には，精製深鉢でありながら胴部外面が粗雑な調整のままになっており，その破片のみを見ると，あたかも半粗製・粗製の類そのものと思われる場合も多い。以上のような不都合を考えると，精製・半精製・半粗製深鉢で型式分類可能で一定の限定した時期を示すものを，定型深鉢と呼ぶことにしたい。縄文晩期の深鉢をまず大別して，定型深鉢と粗製深鉢に2分して，整形・調整の精粗は，各型式の中での特徴として把えることにしたいという事である。さて，本遺跡からは，浅鉢やマリと同様に晩期中葉を中心とした深鉢類がかなりのまとまりを持って出土した。更に晩期前葉のものもあり，これらは「クリナラ分類」では扱わなかった古相類であり，分類呼称を与えていなかった。ここではこれらのクリナラ各類に先行する祖形・前段階のものを分離して報告するが，未だ細分類出来る状態ではないので，それらをまとめて各系古段階類と称して，個別の中で各時期を記しておくこととした。晩期中葉中段階以降の定型深鉢については「クリナラ分類」をそのまま使用した。

定型深鉢A類系古段階類（Fig.56-1～10，Fig.59-67）直立或は内傾して立ち上がる口縁の外面に凹線・沈線を施す，晩期前葉の典型的精製深鉢である。中葉段階での口縁が長く外開きする類をB類としたので，それの前段階のものである。もちろん中葉の古段階にはA類が多く残り，B類へと変化して行く訳で，極めて大雑把に言うと深鉢B類系古段階類でも間違いは無く，理解はし易い。実際はA類の無文化したものが中葉中段階まで残る為に，ここではA類系古段階類と正確を期して称することにした次第である。以下個別に説明してゆく。1はI区包含層出土品で，波頂部下方に細いヘラ先による刺突文を施す。内面に横ヘラ磨き，外面は丁寧なナデ。細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は淡褐色。晩期前葉の小型精製類。2は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で内外面ナデ調整。外面にはヘラによるが凹線に近い2条の広い沈線を施す。細砂かなり含み，焼成不良で内面は白褐色，外面は淡茶色。晩期前葉の古～中段階。3はII区遺構検出時出土品で，内面は丁寧な横ナデ。外面下端の角はシャープ。細砂僅かに含み，焼成不良で内外こげ茶色。前葉中段階の典型タイプの精製品。4はP813出土品で，外面にヘラによる浅い沈線を施す。内外面ナデか。細砂多く含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面は淡茶褐色。晩期前葉。5は第11号住居跡出土品で，細砂多く含み，焼成良好で内面は白橙色，外面は橙茶褐色。晩期前葉。6は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，外面にヘラ沈線2条を施す。内外磨滅。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成やや良く，内面はこげ茶色，外面は茶褐色。晩期前葉新～中葉古段階。7は第11号住居跡出土品で，外面に丸っこく浅い沈線2条を施す。内面に明瞭な段を作る。内外面ナデか。細砂幾らか含み，焼成不良で，内面は暗灰茶褐色，外面は淡黄褐色をなす。前葉後半代か。8はII区包含層出土品で，外面に横位アナダラ条痕を施し，内面は横ヘラ磨き，外面下半は横位擦過。粗砂少量，細砂かなり含み焼成良好で外面は茶色，内面は淡黄茶色。晩期前葉末～中葉古段階。9はP862

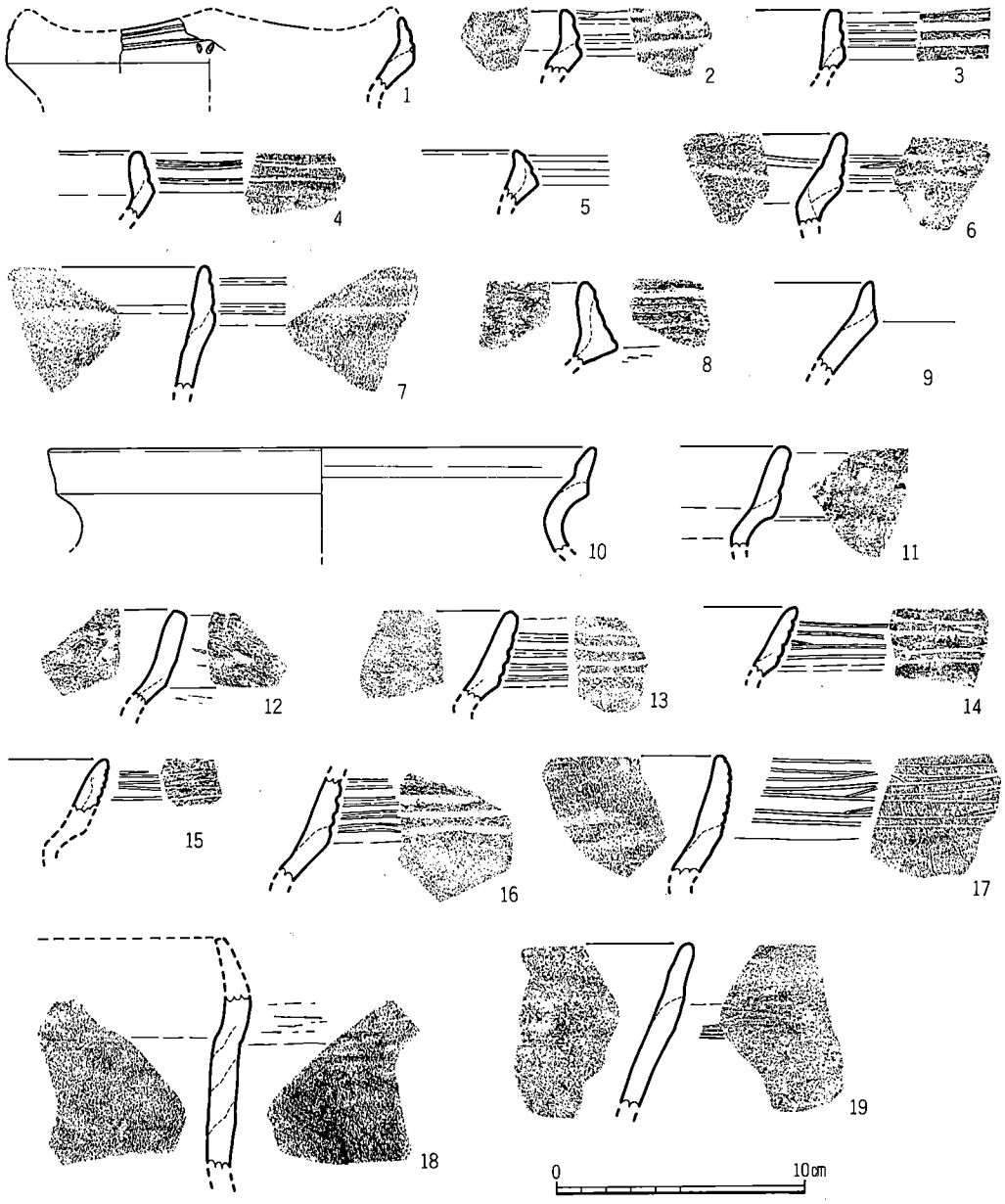


Fig. 56　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その１）(1/3)

出土品で，外面は横ヘラ磨き，内面は横位ヘラナデ。細砂多く含み，焼成やや良好で内面は淡黄灰色，外面は暗褐色。晩期中葉（古～）中段階の精製深鉢でＡ類。10は第１号溝出土品で，口径22cm。内面は丁寧なナデ，外面上半は横ナデ，下半は横ヘラ磨き。粗砂僅か，細砂かなり

含む。焼成不良で内外面ともに黄灰褐～灰黒褐色。晩期前葉新段階（～中葉古）の精製深鉢。67はP798出土品で，体部稜の直上に細く浅い沈線を施す。外面稜部径26.6cm。内面は丁寧な横ナデ，外面もナデか。細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は暗茶褐色，外面は淡黄茶褐色をなす。薄手小ぶり精製品で，晩期中葉古段階。

定型深鉢A・B類（Fig.56-11～19）晩期中葉中段階まで残ったA類は，口縁外面が無文化・条痕施文等になり，頸部との境の屈折も不明瞭化してくる。同時に口縁が長く外傾化して外面に多条沈線で飾るB類が確立し，器形全体のプロポーションもA類とは一線を画し，中葉新段階のC・D類へ継がる形状となる。11はP815出土品で，外面は横位擦過，内面はナデ。粗砂幾らか含み，焼成やや良好で外面は明茶色，内面は暗黄褐色。中葉中段階の深鉢A類。12はⅡ区包含層出土品で，外面は横位擦過の上を横位ナデ，内面はやや雑なナデで凹凸あり。粗砂幾らか含み，焼成良好で内外茶色をなす。中葉中段階深鉢A類。13は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面はナデ，外面には丸断面の沈線4条を施し，その下方は横位ナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面は暗茶褐色，外面は淡茶褐色。中葉中段階精製深鉢B類。14は第14号土壙出土品で，外面にヘラによる細沈線4条を施し，内面はナデ。細砂かなり含み，焼成良好で内面は淡橙色，外面は淡褐色をなす。中葉中段階深鉢B類。15はP182出土品で，外面に細く鋭いヘラ沈線5条以上を施し，内面は丁寧なナデ。細砂いくらか含み，焼成良く茶色をなす。中葉中段階の深鉢B類。16は第11号住居跡上面出土品で，外面に丸断面の沈線4条以上を施し，内外面丁寧なナデ。細砂多く含み，焼成良好で内外茶褐色。中葉中段階の精製深鉢B類。17はP326出土品で，外面にシャープな細沈線を7条施し，右端方向に山形文様帯を構成するようで，波状口縁となりそうだ。内面は横位条痕の上をナデ，外面下半は横位ヘラナデ。細砂多く含み，焼成不良で内面は明茶色，外面は暗茶色。中葉中段階の深鉢B類。18はP239出土品で，外面屈折部以上は雑な横位擦過，以下は斜位のヘラ磨き。内面は横位擦過の上をナデ。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は暗褐色。中葉の定型深鉢A類系か。19はⅡ区包含層出土品で，口縁内外面横位ナデ，内面は横位擦過の上を丁寧な横位ナデ，外面の稜付近には僅かに横位条痕が残る。以下外面は横～斜位のやや雑な擦過。細砂多く含み，焼成良好で内面は茶色，外面は煤が付着して暗茶～黒色。中葉中～新段階の定型深鉢A類か。

定型深鉢C類（Fig.57-20～27）中葉中段階の深鉢B類の口縁外面肥厚の特徴を残すが，外面は条痕・無文化し，頸部が締まり，肩が張った器形となる類。つまり，中葉新段階で確立盛行する定型深鉢D2・3類の，口縁外面にまだ肥厚部を有する類と言える。20は石棺墓のC3に混入していたもので，復原口径40cm。内面は横位擦過の上をナデ，外面肥厚部は横位擦過の上を雑にナデておりやや凹凸あり。粗・細砂かなり含み，焼成良好で内面は暗褐～淡褐色，外面は淡褐色。晩期中葉新段階の定型深鉢C2類。21はⅠ区包含層出土品で，内面は丁寧なナデ，外面は極めて雑な指ナデのまま。細砂多く含み，焼成やや良好で内面は暗褐色，外面は煤がこ

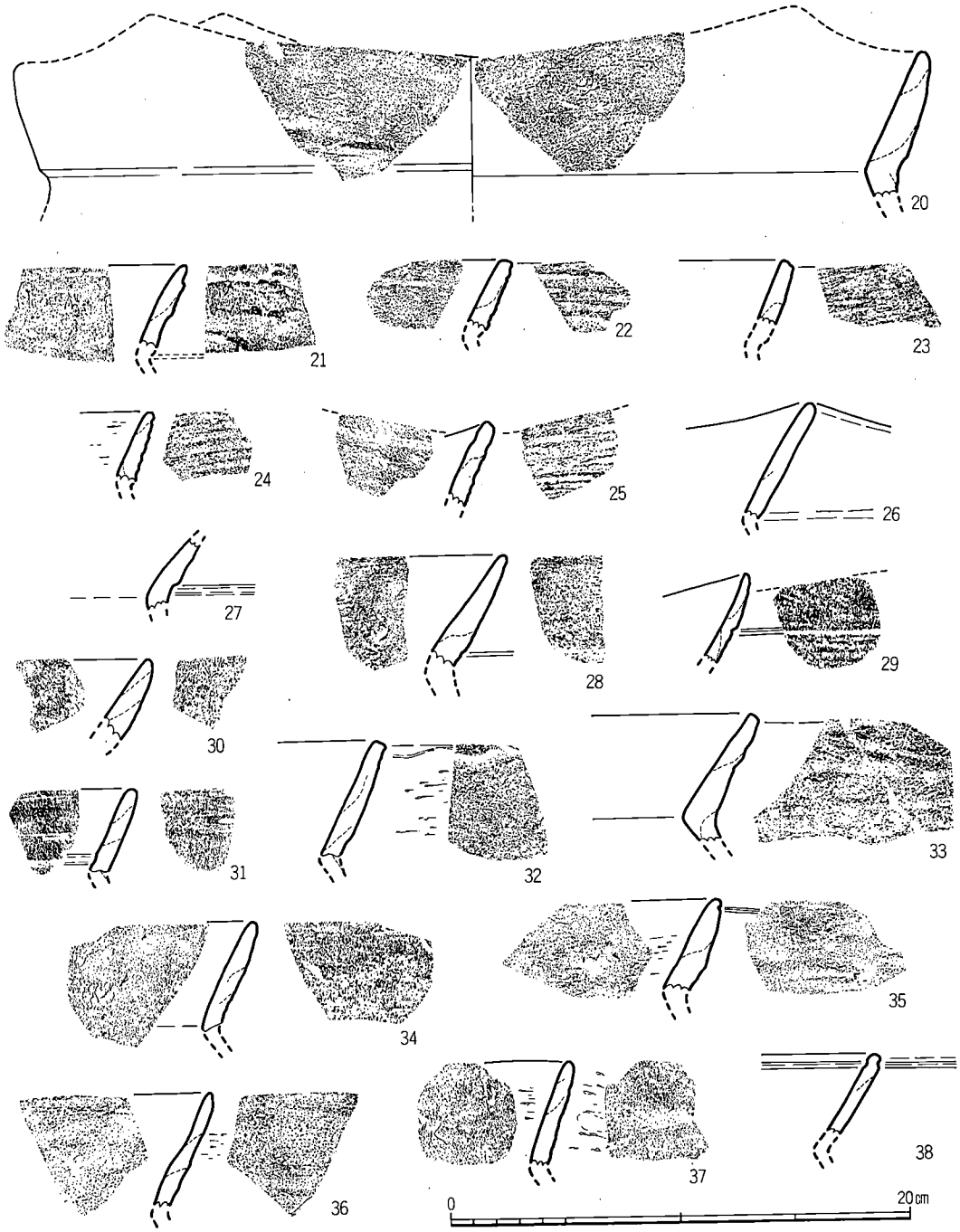


Fig. 57　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その２）(1/3)

びりつき黒褐色。中葉新段階の精製深鉢Ｃ１類。22はP212出土品で，内面はナデ，外面は横位条痕。細砂幾らか含み，焼成良好で内面は橙褐～暗褐色，外面は淡橙褐色。中葉新段階の深鉢Ｃ類となろう。23は第２号住居跡出土品で，内面は丁寧な横位ナデで平滑，外面は横位条痕。粗砂少量含むのみで，焼成不良で内外とも黒褐色。作りが丁寧なことから中葉新段階の深鉢Ｃ類となろう。24は茶色包含層出土品で，内面は横位擦過，外面は横位アナダラ条痕。細砂かなり含み，焼成不良。内外淡灰褐色。中葉新段階深鉢Ｃ類であろう。25は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面は横位条痕の上をナデ消し，外面はアナダラ条痕。粗・細砂幾らか含み，焼成不良で内面は淡黄灰色，外面は暗灰褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類かＣ２類。26は第11号住居跡出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面も横ヘラ磨きだが凹凸が多い。細砂多く含み，角閃石も目立つ。焼成不良で内面は黒色，外面は暗褐色。中葉新段階の精製深鉢Ｃ２類。27は第11号住居跡上面出土品で，外面肥厚部は雑なナデで凹凸多し。以下外面はヘラナデ。内面は磨滅。粗・細砂かなり含み，焼成良好で内面は明黄褐色，外面は淡茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｃ類となる。

定型深鉢Ｄ類（Fig.57-28～38，Fig.58-39～57，Fig.59-58～66・68～70，Fig.60-72）口縁部が長く延びて開き，頸部と胴部で明瞭に２段「く」の字状屈折をみせる類。28はP540出土品で，内面は丁寧なナデで平滑。外面上半はやや雑な横位ナデ，下半は雑な横位ヘラナデ状。粗・細砂をかなり含み，焼成やや不良で内面は黒色，外面は淡褐色。晩期中葉新段階の定型深鉢Ｄ２類。まだ口縁外面の肥厚がみられる。29はP47出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面はシャープなヘラ沈線より上が凹凸の多い雑なナデ。以下が横位条痕。口唇上面は面取り状。粗砂少量，細砂多く含み，焼成良好で内面は暗褐色，外面は明茶色。外面下半が沈線で区画された文様帯を形成しており，中葉中段階の精製類で，定型深鉢Ｄ３類の前段階のものか。30はⅡ区包含層出土品で，内面は丁寧な横位ナデで平滑。外面は雑な擦過で凹凸多し。粗砂幾らか含み，焼成やや不良で内面は黒褐色，外面は暗黄灰色。中葉新段階の深鉢Ｄ２類であろう。31はⅡ区包含層出土品で内面は横位擦過の上をナデ。外面上半は横位擦過のままで，下半はナデ。細砂僅かに含むのみで焼成不良。内面は暗褐色，外面は暗茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ類かと思われる。32はⅡ区包含層出土品で，内面は丁寧なナデで平滑，外面は雑な横位擦過の上をナデ。凹凸がある。細砂多く含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は灰茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ２かＤ３類。33はP820出土品で，内面はナデでやや内湾している。外面は凹凸の多い雑な横位擦過。粗砂多く含み，焼成やや不良で内面は淡黄白色，外面は暗茶褐色。かなり大口径になりそうで，中葉新段階の深鉢Ｄ２かＤ３類。34は第11号住居跡上面出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は極めて雑な横位擦過状ヘラナデ。粗・細砂をかなり含み，焼成やや不良。内面は暗黄褐～こげ茶色。外面は煤がこびり付いて黒褐色。中葉新段階の定型深鉢Ｄ２類。35はＩ区表採品で，内面は横位擦過で上半はナデ消し，外面は雑な横位ナデで凹凸が多い。

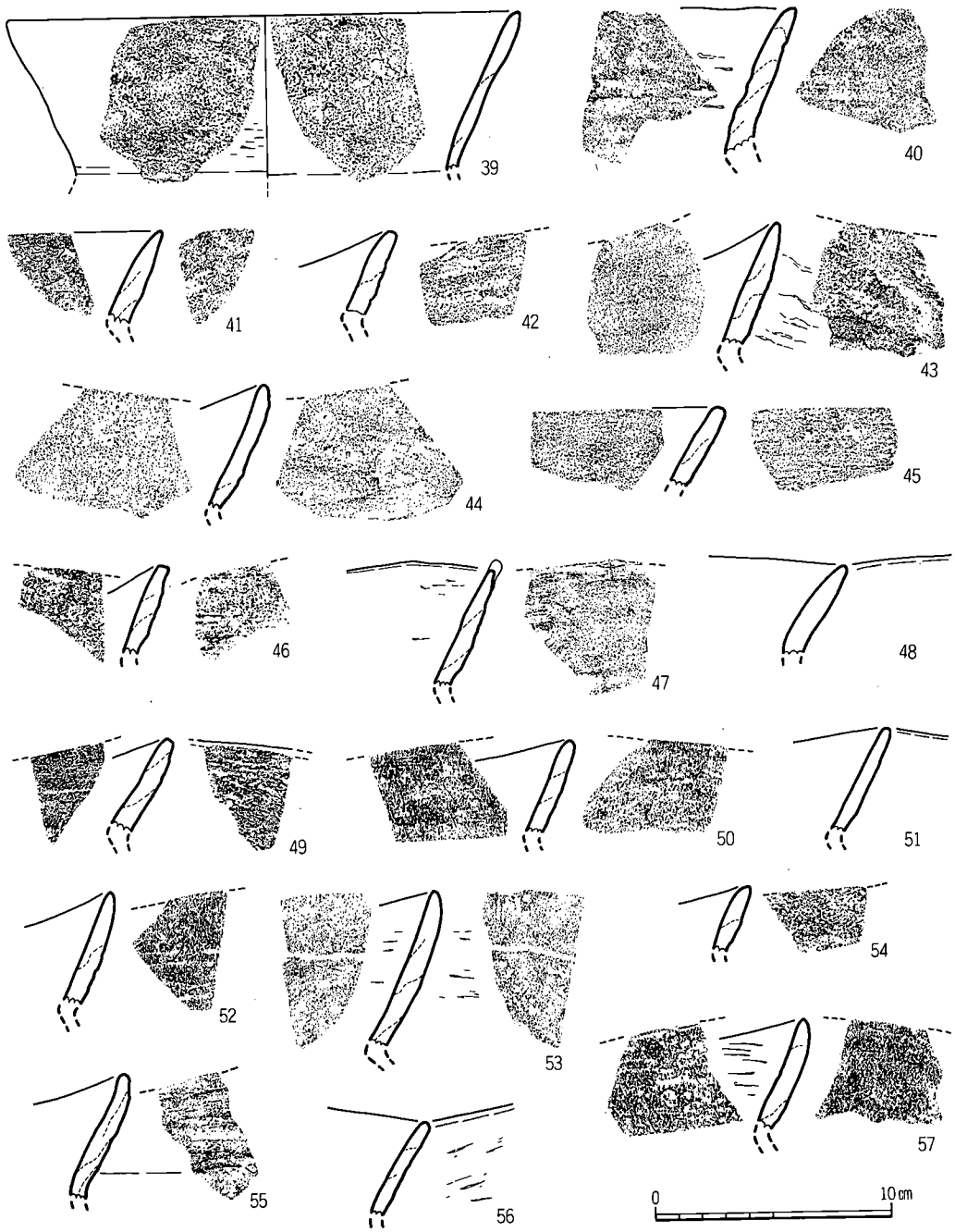


Fig. 58　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その３）(1/3)

細砂多く含み，焼成やや良好で内面は暗黄褐色，外面は一部に煤が付着して暗褐色。中葉新段階の定型深鉢Ｄ２（Ｄ３）類。36は第１号住居跡出土品で，内面は雑なナデ，外面は横位擦過の上を雑なナデ。細砂多く含み，焼成良好。内面は暗黄褐色，外面は暗灰黄褐色。内外凹凸多く，中葉新段階の定型深鉢Ｄ２類。37は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は極めて雑な横位擦過のまま。細砂多く含み，焼成やや良く内面は暗褐色，外面は黒褐色。中葉新段階の定型深鉢Ｄ２類。38は第16号住居跡Ｐ３出土品で，内外面ともに雑な横ヘラ磨き，粗・細砂かなり含み，片岩片も目立つ。焼成やや不良で内面は暗黄褐色，外面は淡灰褐～灰黒色。全体に作りは雑で，精製浅鉢ではなく，中葉新段階頃の深鉢Ｄ２類の異種か。39は第11号住居跡出土品で，口径21.8cm。内面は丁寧なナデで平滑。外面は横位擦過の上をナデ。凹凸多し。細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は明黄茶褐色，外面は煤がこびり付き，こげ茶～黒色。薄手で波状口縁になるか。中葉新段階の精製深鉢Ｄ３（Ｄ２）類。40はＣ１に混入していたもので，波状口縁の可能性あり。内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位条痕の上を雑なナデ。粗・細砂多く含み，焼成不良で，内面は暗褐色，外面は淡灰褐色。かなり粗雑だが大ぶりの深鉢Ｄ２類となろう。41は第33号土壙出土品で，内面はヘラ磨き，外面はナデでやや凹凸がある。細砂多く含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐色をなす。中葉新段階頃の精製深鉢Ｄ２かＤ３類。42は第11号住居跡出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面は凹凸著しい未調整風指ナデ。口唇上面はシャープな面取り。細砂幾らか含むが深鉢としては精良。焼成不良で内面は黒色，外面は褐色～黒褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。43はＣ１に混入していたもので，内面はナデでわりと平滑。外面は極めて雑な斜位指ナデ。粗砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は暗褐色，外面は一部に煤が付着しており，淡灰褐～黒色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。44は第11号土壙出土品で，内面は横位擦過か。外面は未調整風横位ヘラナデで極めて凹凸がある。粗砂幾らか，細砂多く含む。焼成良好で内面は橙茶色，外面は茶～暗茶褐色をなす。やや薄手であるが作りも粗いため浅鉢Ｂ３類ではなく，中葉新段階の深鉢Ｄ３類と思われる。45はP226出土品で内面は丁寧な横位ナデ，外面は横位擦過のまま。粗砂少量，細砂かなり含み，焼成やや良好。内面茶褐色，外面暗褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ２・Ｄ３類であろう。46はP834出土品で，内面はナデ，外面は横位擦過の上をナデ。粗・細砂かなり含み，片岩片目立つ。焼成不良で内面は淡白褐色，外面は淡黄褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。47は第29号土壙出土品で，内面は横位擦過の上をナデか。外面は横位擦過でかなり凹凸がある。口縁波頂部は上方と外面下方に僅かにふくらみをみせる。細砂多く含み，焼成不良で内面は明黄褐色，外面は暗灰褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。48はⅡ区包含層出土品で，内外面ともに横位ヘラナデ状。粗砂僅か細砂かなり含み，焼成不良。内面は淡茶黄～灰黒色，外面は淡黄灰色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。49はＣ１に混入していたもので，内面は丁寧なナデ，外面は雑な横位擦過のまま。口唇上面はシャープな面取り。細砂幾らか含み，焼成不良。内面は

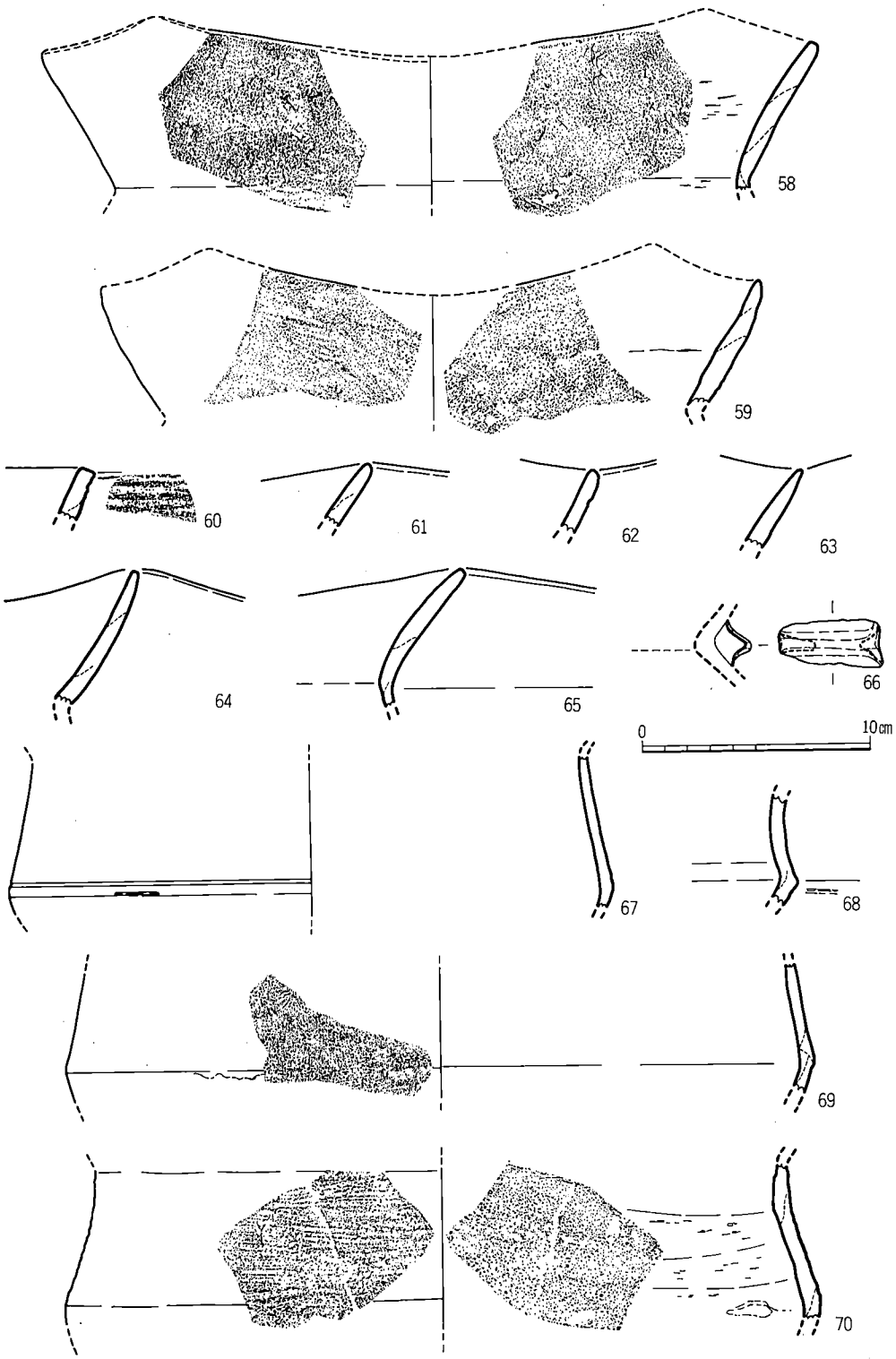


Fig. 59　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その４）(1/3)

灰茶褐色，外面は暗茶～黒褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。50はP842出土品で内面は横位ナデ，外面は横位擦過の上を雑なナデ。凹凸多し。細砂多く含み，焼成不良で内面は黒色，外面は一部に煤がこびり付き暗黄褐色。中葉新段階深鉢Ｄ３類。51はP702出土品で，内外面横位ナデ。粗砂少量・細砂かなり含み，焼成良好で内面は黄褐～灰黒色，外面は暗黄褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。52は茶色包含層出土品で内面は丁寧なナデで平滑。外面は横位擦過の上をナデ。細砂多く含み，焼成不良で内外面ともに暗黄褐色をなす。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。53は暗褐色包含層出土品で，内面は横位擦過の上を丁寧にナデており平滑。外面は横位擦過の上をナデ。粗・細砂幾らか含み，焼成やや不良。内外面ともに暗灰黄茶色。中葉新段階の深鉢Ｄ３（Ｄ２）類。54は第６号住居跡周辺出土品で，内面はナデか。外面は横位擦過の上をナデか。細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は黄茶褐色，外面は黒～暗褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。55は第１号掘立柱建物P11出土品で，内面は斜位ヘラナデ状，外面は横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は煤が付着して暗茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。56はⅡ区包含層出土品で，内面は丁寧なナデか。外面は擦過的な雑な横位ヘラナデ。細砂多く含み，焼成不良で，内面は淡黄褐色，外面は茶赤色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。57は暗褐色包含層出土品で，内面は横位擦過，外面はかなり丁寧な横位擦過の上をナデ。細砂かなり含み，焼成不良で内面は淡茶褐色，外面は淡灰黄色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。58は第１号住居跡出土品で，口径34cm。内面は横位擦過の上をナデ，外面は横～斜位の擦過の上をナデておりやや凹凸あり。粗砂幾らか，細砂多く含み，焼成不良で内外面ともに明茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。59はⅡ区表採品で内面はナデ，外面は横位条痕の上を雑にナデており凹凸が多い。細砂多く含み，焼成良好で内面は灰茶褐色，外面は茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。60はⅡ区包含層出土品で，内面は横位ナデ，外面は雑なヘラ先ナデで凹凸多し。細砂多く含み，焼成やや良く内面は茶褐色，外面はこげ茶色。中葉新段階の深鉢Ｄ２・３類となるか。61は第６号住居跡床面出土品で，内外面ともに丁寧なナデ。細砂かなり含み，焼成良好で内面は淡黄褐色，外面は暗黄褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。62はP20出土品で，内外面ナデか。微細砂多く含み，焼成良好で内面は淡茶色，外面は煤がこびり付いて黒褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。63は第２号住居跡出土品で，外面はやや凹凸があり，内外ともナデであろう。細砂多く含み，焼成不良。内面黒褐色，外面淡褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。64は第11号住居跡周辺暗褐色包含層出土品で，内面は平滑で，内外面ナデか。粗砂幾らか，細砂かなり含み，片岩片も目立つ。焼成やや良好で内面は灰黒色，外面は上端が黒色，以下は淡茶褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。65は暗褐色包含層出土品で，内外面ともに丁寧なナデ。粗砂幾らか，細砂多く含み，焼成良く，内面は茶褐～黄茶色，外面は暗褐色。中葉新段階の深鉢Ｄ３類。66はⅡ区包含層出土品で，深鉢Ｄ３類の頸部外面に付けられた蝶ネクタイ状突起。長さ4.4cm，幅2.2cm，高さ1.6cm。左右両端から途中までの未貫通穿孔がみられ，形式的な穴となっていた事が判かる。

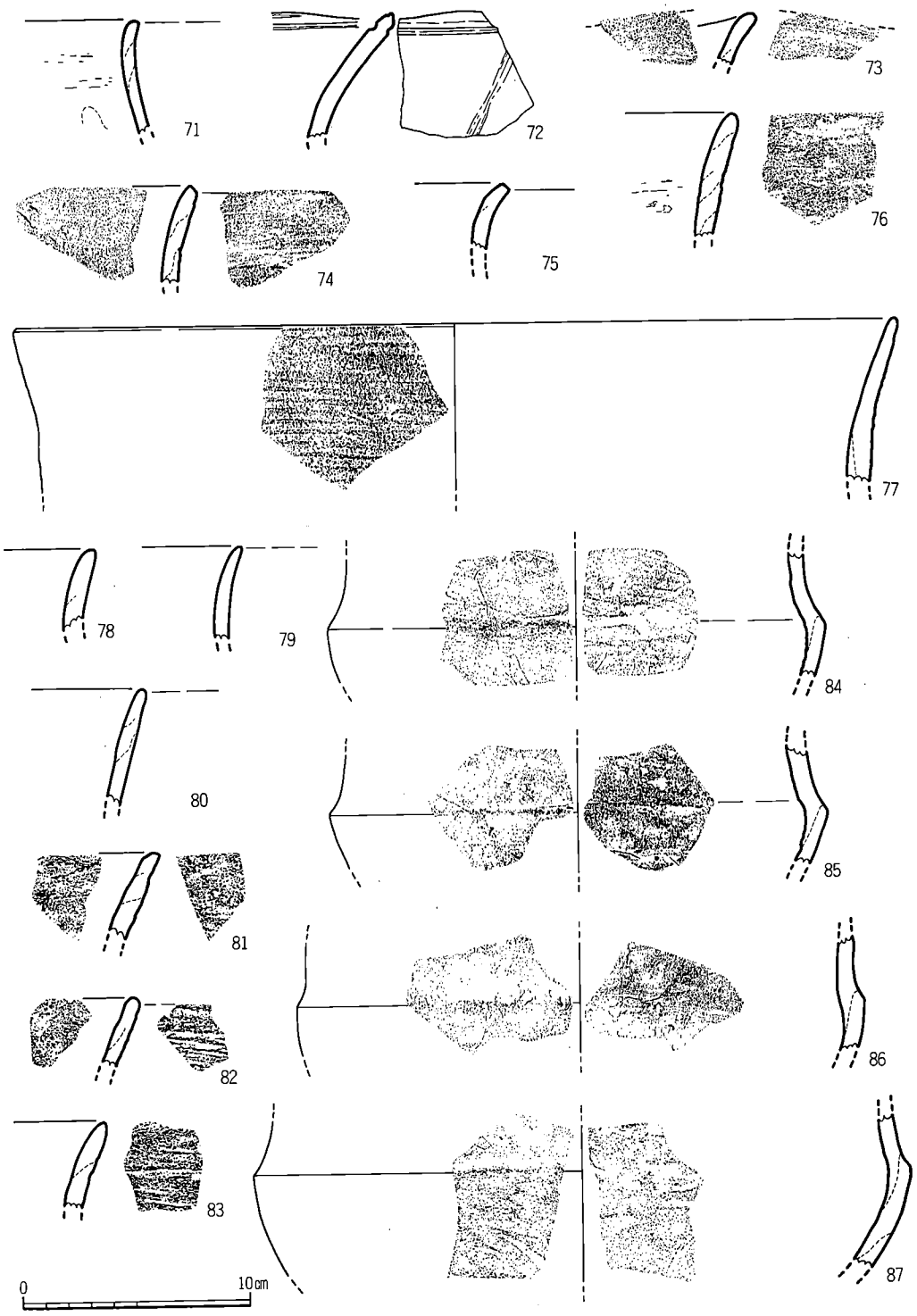


Fig. 60　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その５）(1/3)

粗砂少量，細砂幾らか含み，焼成良好で淡茶褐色をなす。68は第15号住居跡出土品で内外面ナデであろう。外面下端には条痕が僅かに残る。細砂多く含み，焼成不良で内面は暗灰色，外面は黄茶色をなす。中葉新段階の深鉢D3類か。69はP13出土品で，外面稜部径33cm。内面は横～斜位擦過の上をナデか。外面上半はナデか。稜以下は横位擦過。細砂多く含み，焼成不良で内面は白褐色，外面は暗茶～黒灰色。薄手精製で，晩期中葉中～新段階の深鉢A～D類のいずれか。70はⅡ区遺構検出時出土品で，内面上端はナデ，以下は横位擦過，外面は横位条痕。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は淡灰黄褐色，外面は煤がこびりついて淡茶～黒色をなす。中葉新段階の深鉢D類となるか。72は中原1号墳盛土中出土品で，内外磨滅。粗・細砂少量含み，焼成良好で淡褐色をなす。外面に斜位沈線があるかもしれない。中葉新段階の精製深鉢D3類になるか。

定型深鉢E類系古段階類（Fig.60-71・73～80・84～87，Fig.61-91・94）晩期後葉古段階から定型深鉢E類が盛行するが，ここでは，これに先行する直接の祖形・前段階類という意味ではなくて，深鉢E類に器形は似ているが，どちらかというと，晩期初葉の御領式深鉢の系統が残ったものをまとめてみた。この系統が確実にずっと残れば，後葉古段階の深鉢E類へ継がることになるが，当地方の資料を眺めている限り，この御領系深鉢は中葉段階では極く少量となり，深鉢の主流では決して無くて，むしろ，この時期に途切れているように感じている。やはり後葉古段階のE類深鉢は，その前代のD類深鉢の漸移変化したものと理解するのが順当であろう。以下個別に説明する。71は暗褐色包含層出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は横ヘラ磨き。細砂多く含み，焼成不良で内面は明茶色，外面は暗褐色。晩期（初～）前葉古段階の御領式系精製深鉢。73はP109出土品で内面は丁寧なナデ，外面は横位擦過の上をナデ。細砂かなり含み，焼成良好で内面は褐～茶褐色，外面は暗褐色。晩期前～中葉の小型精製深鉢。74は暗褐色包含層出土品で，内面は丁寧な横位ナデで平滑，外面は雑な横位擦過のまま。口唇面は平坦面をなす。粗・細砂を幾らか含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は煤が付着して黒褐色をなす。晩期前～中葉の精製深鉢。75はP815出土品で，内外面ともに丁寧な横位ナデ。口唇面はしっかりした面取り。細砂多く含み，焼成やや不良で内面は淡黄褐～灰黒色，外面は茶褐～暗褐色。作りは丁寧な小ぶり品。晩期前～中葉前半か。76は第10号土壙出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位擦過のままで凹凸がある。粗砂幾らか，細砂多く含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は暗灰茶褐色。晩期前～中葉の定型深鉢。77は第11号土壙出土品で，復原口径39cm。内面は丁寧なナデ，外面は横位アナダラ条痕。粗・細砂多く含み，焼成やや良好で内面は暗黄褐色，外面は茶褐～暗褐色。晩期前葉（～中葉）の定型深鉢。78はⅡ区表採品で，内外面横位ナデか。粗・細砂多く含み，焼成不良で内面灰茶褐色，外面は淡茶褐色。晩期前葉か。79はP152出土品で，内面は磨滅，外面は丁寧なナデか。細砂多く含み，焼成不良で内面は淡褐色，外面は淡黄褐色。晩期前葉の小型精製深鉢か。80はⅡ区包含層出土品で，

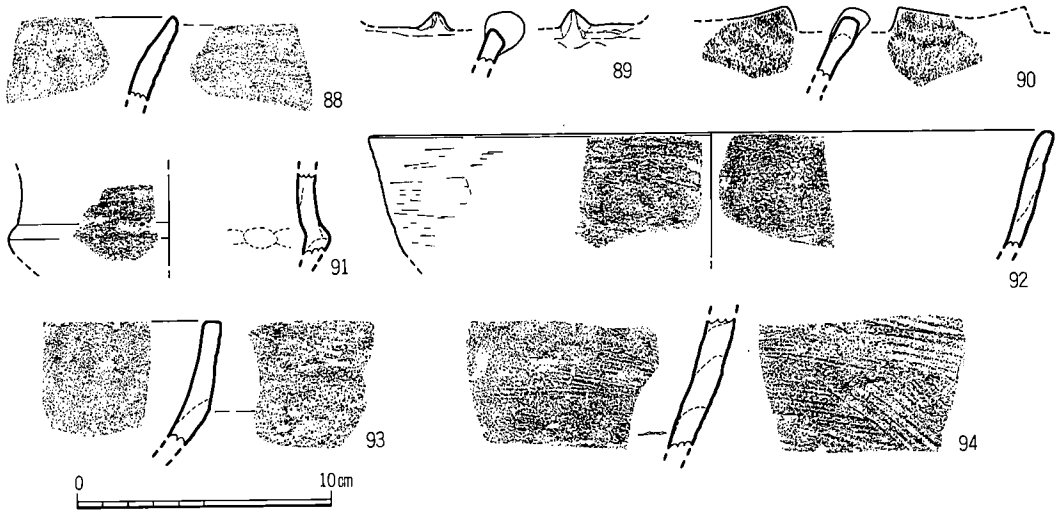


Fig. 61　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その６）(1/3)

内面はナデの上を雑な横ヘラ磨き，外面上端は横ヘラ磨き，以下は右下がり斜位のヘラ磨き。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は茶褐色，外面は暗褐色。晩期前葉の前半代の精製深鉢。84は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面はかなり雑な横ヘラ磨き，外面上半は横ヘラ磨き，下半は横位擦過の上を横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面上半は褐色，下半は煤が付着して黒褐色。晩期前葉の小型精製深鉢。85は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面は雑な横ヘラ磨き，外面上半は丁寧なやや斜位のヘラ磨き，下半は雑なヘラナデ風横ヘラ磨き。細砂かなり含み，焼成不良で内面は暗褐色，外面の稜より上はこげ茶～褐色，以下は煤付着して黒褐色。晩期前葉の小型精製深鉢。84と同一個体。86はⅡ区包含層出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面は横位擦過の上を雑なナデ。粗砂僅かに含み，焼成やや不良。内面は黒褐～暗褐色。外面は灰黄褐色。晩期前～中葉の精製深鉢。87はⅡ区包含層出土品で，内面は横位ナデ，外面上半は丁寧な横ナデ，稜直下までは丁寧なナデ。下半は雑な斜位ヘラ磨き。粗砂幾らか，細砂多く含み，焼成良好で内面は暗褐色，外面は茶褐色だが下端は煤が付着して黒変。作りは丁寧で晩期前葉精製深鉢。91はP652出土品で，径12.8cmの小型品。内面は雑なナデで，外面は横位擦過の上を雑なナデ。粗砂僅か含み，焼成良好で内面は暗黄褐色，外面は淡黄褐色。晩期前～中葉の小型品。94はP126出土品で，内面は横位条痕の上をナデ消し。外面は横～斜位のアナダラ条痕を丁寧に施している。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成良好で内外ともに茶褐～暗褐色。晩期前葉の定型深鉢胴部下半。

定型深鉢Ｅ類（Fig.60-81～83，Fig.61-88～90）晩期後葉古段階～中段階に確立・盛行する定型深鉢Ｅ２類は，所謂黒川式土器の深鉢として有名である。ただし，本遺跡出土土器の中心は晩期中葉であるので，この類の出土数は少い。81は第32号土壙出土品で，内面上半は横位の

ヘラ削り状擦過，下半はナデ，外面は横位擦過の上をナデ。細砂かなり含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡褐色。82はＣ１に混入していたもので，外面下半はアナダラ条痕，他内外面は条痕の上をナデ。粗・細砂多く含み，焼成不良で内面は淡黄褐色，外面は暗褐色。83は第１号溝出土品で内面は丁寧なナデ，外面は粗雑な横位擦過。細砂かなり含み，焼成やや良好で内面は淡褐色，外面は煤が付着して灰茶褐色をなす。88は第11号住居跡上面出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位条痕の上をナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面は灰褐色，外面は暗茶褐色。89は第11号土壙出土品で，雑な作りのリボン状突起部である。内外とも雑なナデで，細砂僅かに含む。焼成やや良好で内面は黒褐色，外面は白黄褐色。半粗製的。90はＣ１内混入品で，リボン状突起部分。内外磨滅。細砂僅かに含み，焼成不良。内面は黒褐色，外面は黄茶褐色。以上の各土器は小片すぎて確実に晩期後葉代の定型深鉢Ｅ類と言い切れないものも多いが，時期的には後葉古段階を中心とするものであろう。

縄文晩期鉢（Fig.61-92・93）

ここでは，精製の部類であり乍ら，深鉢ではなくボール状の器形となる類を報告しておく。浅鉢に入れても良いが，厚さや製作法が深鉢のそれと同一であることから区別した。92は第29号土壙出土品で，復原口径27cm。内面は丁寧な横ヘラ磨き，外面は雑な横位擦過のまま。細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は黒色，外面は暗茶褐色。93は第15号住居跡の床面下層出土品で，内面は縦方向のナデでかなり平滑。外面は上半の一部に横位条痕を残すが全体に横位擦過。胎土に粗砂幾らか，細砂多く含み，焼成やや良好。内面は黒色，外面は茶褐～暗黄褐色。

縄文晩期粗製深鉢等（Fig.62・63）

粗製深鉢Ａ類（Fig.62-95～103，106）口縁付近で内湾する類をＡ類とした。95はP375出土品で，復原口径27cm。内面は横位アナダラ条痕の上をナデ消しており，上半に幾らか残る。外面は下半に縦位条痕が幾らか残る。細砂多く含み，焼成不良で内面は暗茶褐色，外面は煤が付着して黒～こげ茶色となる。内外面ともに凹凸多し。96はP872出土品で，内面は横位条痕の上をナデ。凹凸あり。外面はナデ。細砂幾らか含み，焼成不良で内面は暗黄色，外面は淡褐色。97は第11号住居跡出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位擦過。細砂かなり含み，焼成良好で外面は暗褐色，内面は淡黄褐色。98は第１号溝出土品で，内面は横位擦過の上をナデ，外面は雑な横位擦過。粗・細砂幾らか含み，焼成やや良好で内面は茶褐色，外面は淡黄茶色。99はⅡ区包含層出土品で，内面はナデで凹凸あり。外面はやや斜位の極めて雑な擦過。粗砂多く含み，片岩片も目立つ。焼成不良で内面は淡橙～肌色，外面は淡灰黄色。薄手だがかなり大口径となりそう。100は第14号土壙出土品で，内面は雑な横位擦過で凹凸著しい。外面は雑な横位擦過の上をナデ。細砂多く含み，焼成不良で内面は灰褐色，外面は淡灰茶褐色。101

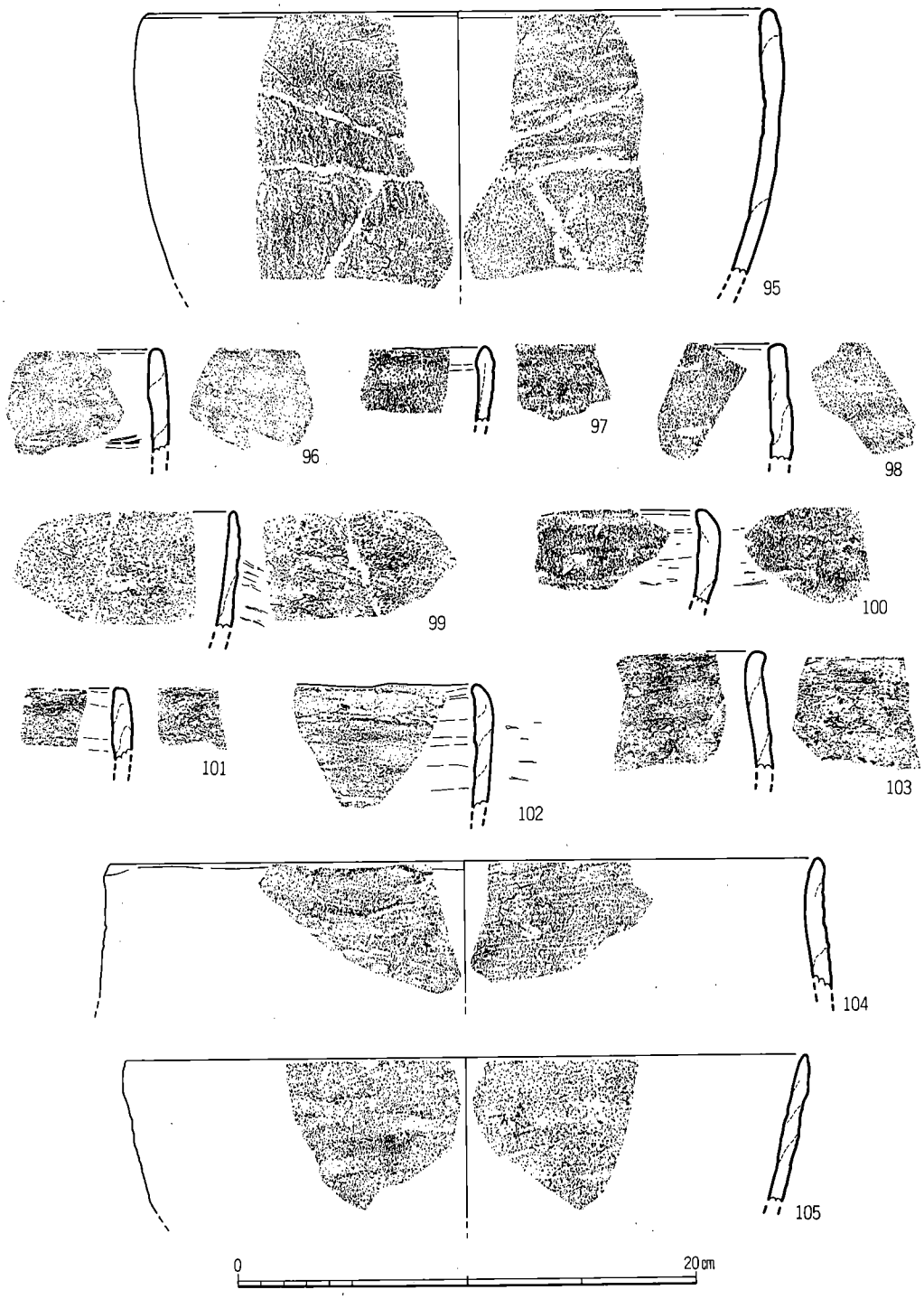


Fig. 62　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その７）(1/3)

は暗褐色包含層出土品で，内面は横位擦過，外面は横位擦過の上をナデで内外面ともに凹凸著しい。細砂多く含み，焼成やや不良で内面は黒色，外面は上半が黒色，以下茶褐色。102は第11号土壙出土品で，内面は強い横位指ナデで凹凸著しい。外面は横位擦過の上をナデ。粗砂幾らか含み，焼成やや不良で内外黄白色。103はⅡ区表採品で，内面は横ヘラ磨き，外面は横ナデでやや凹凸がある。粗・細砂幾らか含み，焼成やや不良で内外面黒色。外面には煤がこびりつく。半精製の異種深鉢で，深みのある大きめのボール状鉢となるか。106はⅡ区遺構検出時出土品で，口唇上面に貝殻腹縁による抉り状刻目を施す類。内面上端は横位ナデ，以下は横位擦過の上をナデか。かなり平滑。外面は雑な未調整風横位ナデ。粗・細砂かなり含み，焼成やや不良で内面は黒褐色，外面は茶黄～暗褐色。半粗製的で，晩期後葉段階のものか。

粗製深鉢Ｂ類（Fig.62-105，Fig.63-107～112）粗製深鉢のうち口縁が外傾して開くものをＢ類とした。大きく外反して開くものをＢ１類，外傾気味に緩やかに開くものをＢ２類とした。105は第11号住居跡の上面暗褐色包含層出土品で，復原口径29.6cm。内面は横位擦過で，上半はその上を横ナデ。外面は雑な未調整風の強い指頭横位ナデ。粗・細砂を多く含み，焼成不良で内面は黒色，外面は淡茶褐色。107はP12出土品で，復原口径21cmの小型鉢状品。内面は丁寧なヘラナデ，外面は雑な指頭ナデで凹凸多し。粗砂僅か，細砂かなり含み，焼成やや良好。内面は黄茶色，外面は暗褐色。晩期中葉前後の半粗製鉢となるか。108はP820出土品で，内面は極めて雑な横位擦過で凹凸著しい。外面は深く粗い横位条痕の上をヘラ押さえ的。粗・細砂多く含み，焼成やや良好で内面は明橙褐～こげ茶色，外面は煤が付着して茶褐～黒褐色をなす。破片上端面は擬口縁風。粗製深鉢片ではあろうが，荒い条痕で異類。晩期かどうかも不明。109は第11号住居跡埋土中出土品で，復原口径20.8cm。内面は横位擦過の上をナデ，外面はナデで，内外ともに凹凸著しい。細砂多く含み，焼成不良で内面は暗茶褐色，外面には煤が付着して茶色。110は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，復原口径33cm。内面は横位擦過の上をナデ，外面は横位擦過状の雑なヘラナデ。粗・細砂多く含み，焼成やや不良で外面は茶褐色，内面は黄灰褐色。中型の鉢状品だが，下半に稜をなすことから，晩期後半代の組織痕文土器と類似した器形になるか。111は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，内面は上端がナデ，以下が粗雑な横位擦過のまま。外面は未調整風横位ヘラナデ状で凹凸多し。粗砂多く含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は暗灰茶褐色。粗製深鉢Ｂ２類。112はⅡ区南半包含層出土品で，内面はやや右下がり方向への斜位の雑な擦過のまま。外面はナデで，内外ともに凹凸多い。粗大石英粒を幾らか含み，焼成やや良好で内面は淡黄褐色，外面は煤がこびりつき黒～暗褐色をなす。口縁の開く粗製深鉢Ｂ１類となるか。

粗製深鉢Ｃ１類（Fig.62-104）粗製深鉢のうち口頸部が内傾して肩が張るものをＣ類とした。104はP948出土品で，復原口径が30.6cmとなる。内面は横位擦過のままで，上端は一部が横ヘラナデ。外面は極めて粗雑な未調整風の横位指ナデを施している。粗砂粒を幾らか，細砂粒を

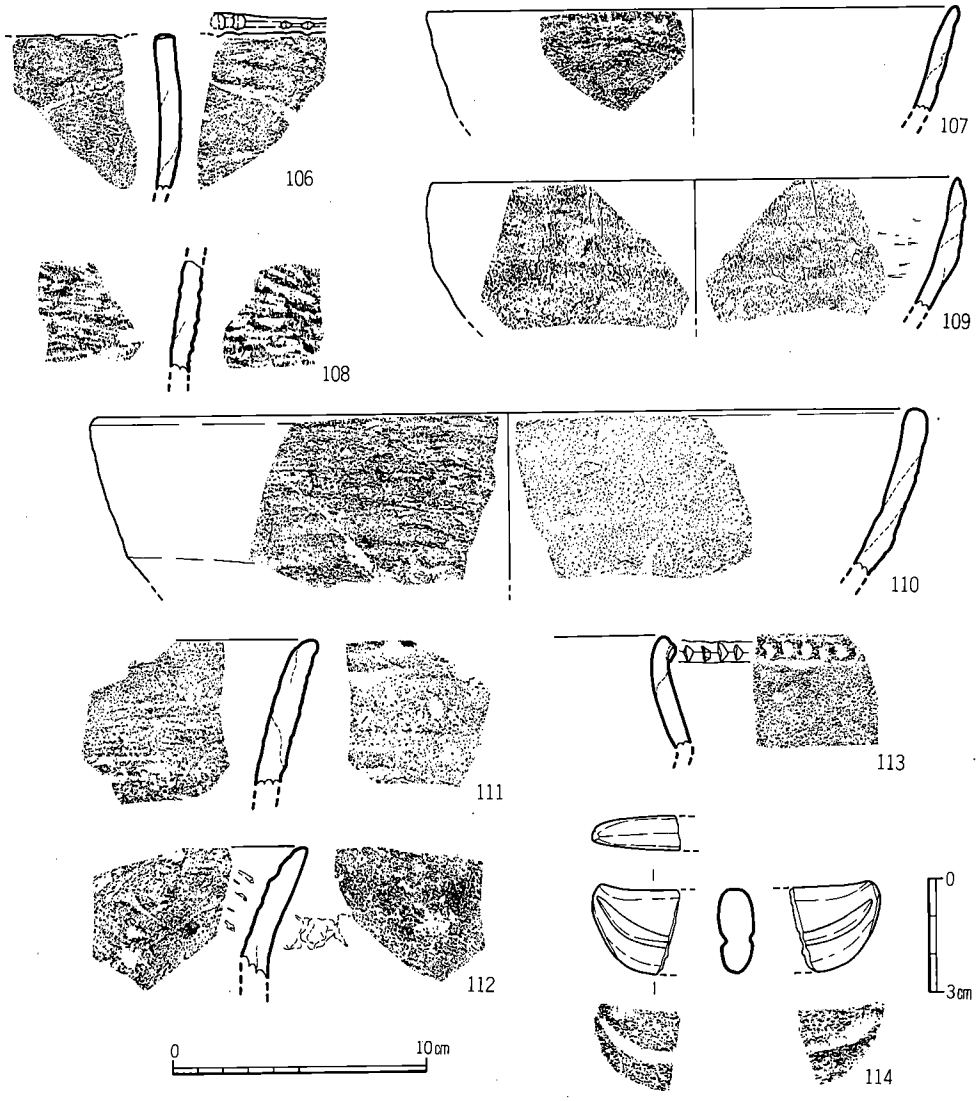


Fig. 63　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その８）(114のみ1/2，他は1/3)

多く含み，焼成やや良好で，内外面ともに黒色をなす。晩期中～後葉か。

縄文晩期刻目土器（Fig.63-113）

本遺跡からは，縄文晩期～弥生早期の刻目・刻目凸帯土器の類は，ここに示す１点しか出土していない。113は第11号住居跡上面出土品で，内面は横位ナデ，外面はナデか。口縁外面直下の凸帯に，深い抉り取り状の貝殻腹縁による刻目を施す。細砂多く含み，焼成やや良く，内

面は灰黄褐～黄茶色，外面は淡灰茶色をなす。弥生早期になるか。

縄文晩期土製品（Fig.63-114）

不明土製品が出土しているので，ここで報告しておく。114は第11号住居跡南側暗褐色包含層出土品で，鳥の羽先を表現したような破片。現存左右長23㎜，上下幅22㎜，厚さ９㎜となり，表裏面ともに中央にしっかりした深い沈線を施す。端部の方向へ薄く尖る。胎土に細砂粒を僅かに含むが精良な方。焼成やや良好で明橙褐色をなす。精製浅鉢に付くリボン状突起の異類か，土偶の手の部分か，諸説あるが確定できない。諸氏の御教示を請う。

縄文晩期深鉢底部（Fig.64）

115は第１号溝出土品で，底径6.6㎝。内外面ともに丁寧なナデ。細砂多く含み，焼成やや不良で内面は黒褐色，外面は茶～暗茶褐色。御領式系精製深鉢。晩期前葉。116はＣ１出土品で底径9.4㎝。内面は丁寧なナデ，外側面は丁寧な横ナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面は灰黄褐色，外面は茶褐色。晩期前～中葉の精製深鉢底部。117は第６号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，底径9.8㎝。内外面ナデ。粗砂幾らか，細砂多く含む。焼成やや不良で内面は黒色，外面は赤茶～黄茶褐色。底外面に大砂粒・豆粒的圧痕がかなりみられる。晩期定型深鉢。118はⅡ区包含層出土品で，底径９㎝。内面は丁寧なナデ，底外面には小さめのドングリ大の圧痕幾らかあり。粗・細砂多く含み，焼成やや不良で内面は灰褐色，外面は灰茶褐色。晩期精製深鉢。119は第２号土壙出土品で，底径9.2㎝。外側面は丁寧な横ナデ，内面はナデか。底外面の内側はナデ，外周縁は擦過。細砂多く含み，焼成良好で内外暗黄褐色。精製深鉢。120は第１号溝出土品で，底径8.6㎝。内面はナデ，底外面は擦過，外側面は横位指ナデ。粗・細砂かなり含み，焼成やや良好。内面は暗褐色，外面は茶褐色。晩期定型深鉢。121は第11号住居跡上面出土品で，底径7.2㎝の小型品。内面と外側面はナデ，底外面は擦過。粗砂かなり含み，焼成やや良好で内面はこげ茶色，外面は暗黄茶色。晩期前半代精製深鉢。122は第１号掘立柱建物Ｐ４出土品で，底内外面は丁寧なナデ，外側面は横位ナデ。底径９㎝で，細砂多く含む。焼成不良で内面は淡灰黄色，外面は暗黄褐色。精製深鉢。123は暗褐色包含層出土品で，底径8.6㎝。内外面ナデで，底外面は特に丁寧。粗・細砂をかなり含み，焼成不良。内面は暗褐～灰褐色，外面は暗灰黄褐色。作りは全体に丁寧で精製深鉢。124は第15号住居跡出土品で，底径9.6㎝。内面は雑な指ナデ，外側面は横位ナデ，底外面には小礫的圧痕がかなりみられる。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外茶色。晩期定型深鉢。125はⅡ区南半茶色包含層出土品で底径10㎝。内外面ナデで，内面は丁寧，外側面はやや丁寧。細砂多く含み，焼成やや不良で，内面はこげ茶色，外面は赤茶～暗茶色。精製深鉢。126は第10号土壙出土品で，底径8.6㎝，内面はヘラ磨き，体部外面は縦横の擦過，底外面は回転方向のヘラナデ。粗砂かなり含み，焼成良好で

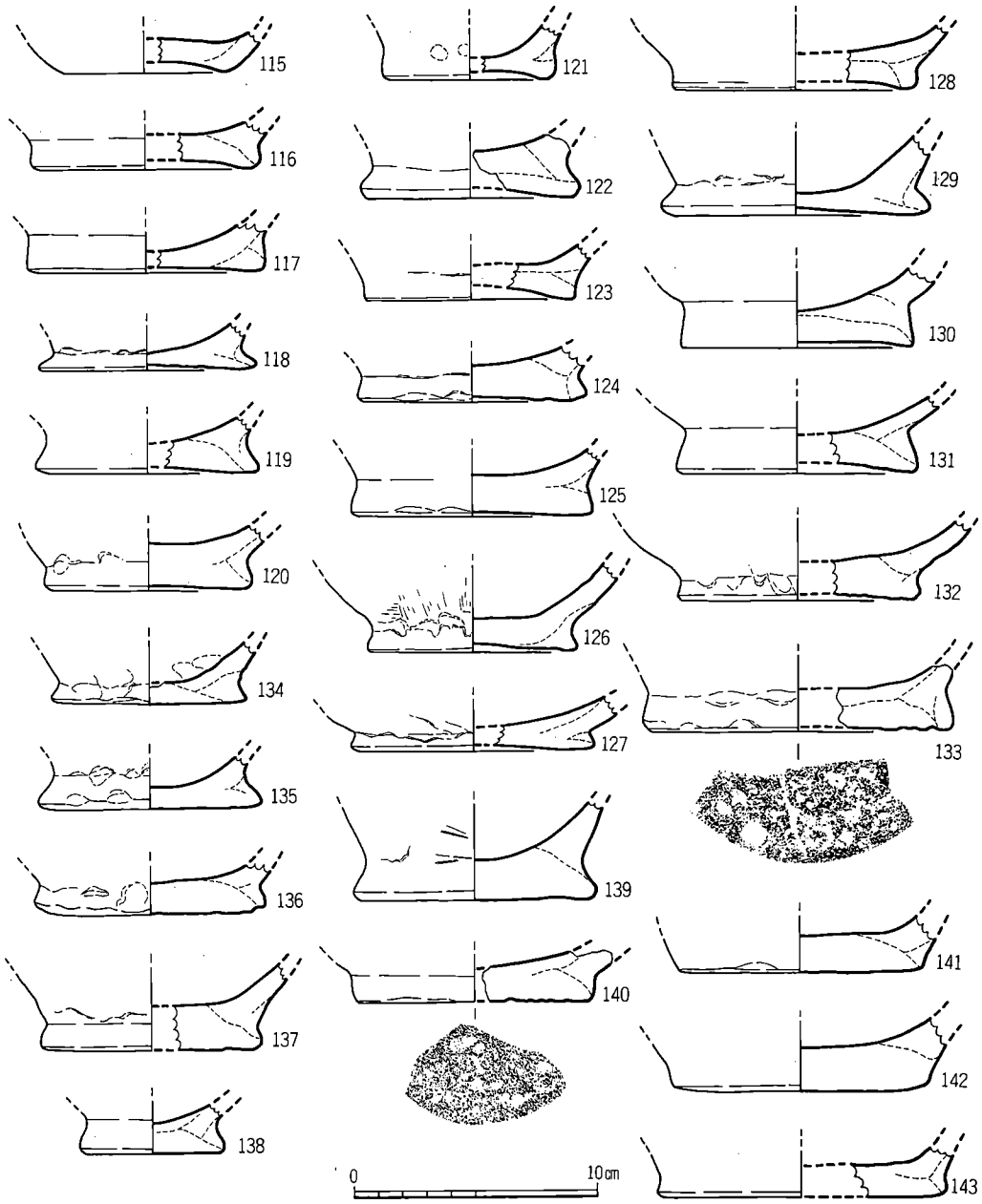


Fig. 64　その他の遺構出土晩期深鉢実測図（その９）(1/3)

内外面ともに茶褐色。精製深鉢。127はP102出土品で，内面はナデか。他は磨滅しているが，外側面は凹凸多し。底径10cmで，粗・細砂多く含む。焼成不良で内外とも明黄茶色。定型深鉢。128は第１号住居跡出土品で，外側面は横位ナデ，底内外面は丁寧なナデ。底径10cmで焼成や

や不良。内面は暗灰褐色，外面は茶～暗黄褐色。粗・細砂を多く含む。定型深鉢。129はP813出土品で，底径11cm。内面と底外面はナデ，外側面は横位ナデ。内底面にはやや凹凸がある。粗・細砂多く含み，焼成やや良好で内面は灰黒～白褐色，外面は茶褐色。定型深鉢。130は第2号住居跡出土品で，底径9.6cm。内面は一方向への擦過。他外面はナデ。粗・細砂をかなり含み，焼成やや良好で，内面は黒色，外面は淡茶橙色。全体に作りが丁寧で，精製深鉢。131は第11号住居跡出土品で，底径10cm。内面はヘラナデ状，外側面はわりと丁寧なナデ。底外面は回転方向の粗い擦過。粗砂多く含み，焼成良好で内面は白褐色，外面は橙褐色。精製深鉢。132はP133出土品で，底径10cm。内面はナデ，外側面は雑な横位ナデ，底外面には大小の豆粒大の圧痕が幾つか見られる。粗・細砂多く含み，焼成不良で，内面は肌色，外面は黒褐～暗茶褐色。晩期定型深鉢。133は暗褐色包含層出土品で，底径12.8cm。内面はナデ，外側面は指オサエ痕多し。底外面は小礫のような圧痕が多く見られる。粗・細砂かなり含み，焼成良好で内外茶褐色。大型深鉢。134はP254出土品で，底径8cm。内面はナデで，内外指オサエ痕多し。焼成やや不良で，内面は白褐～黒褐色。外面は黄茶～肌色をなす。粗・細砂，片岩片を多く含む。作りは粗雑で晩期定型深鉢。135はP1003出土品で，底径9.2cm。内面は擦過の上をナデ，外側面は指オサエ痕多し。底外面は擦過の上をナデか。細砂幾らか含み，焼成やや不良。内面は暗黄灰色，外面は茶～暗茶色。精製深鉢。136はⅡ区包含層出土品で，底径9.4cm。内面は擦過の上をナデておりやや凹凸あり。外側面は雑なナデで凹凸多し。底外面は小礫等の圧痕が多く凹凸著しい。粗・細砂多く含み，焼成不良で内外面淡橙褐色をなす。粗製深鉢となるか。137は第11号土壙出土品で，底径9.2cm。内面はナデ，外側面は雑なナデで凹凸多し。粗・細砂幾らか含み，焼成良好で，内面は灰褐色，外面は白黄褐色。定型深鉢。138はラベルを紛失したもので，底径6cmの小型品。内面はナデか。外側面は横位ナデ。底外面は擦過の上をナデ。粗砂幾らか含み，焼成やや良好で，内面は暗灰褐色，外面は淡茶褐色。精製深鉢の小型品。139は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，底径10cm。底外面の外縁から5mm内側から14mm幅が輪状にへっこむ類。内面はナデ，体部外面は縦横の擦過。底外面は擦過の上をナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外茶褐色。定型深鉢。140は第6号住居跡出土品で，底径9.6cm。内面はやや凹凸のあるナデ，外側面はわりと丁寧なナデ。底外面には米粒大から豆粒大までの圧痕が多くみられるが，原体は確定できない。粗・細砂多く含み，焼成やや良好で外面は茶色，内面は暗灰色。精製深鉢。141は第15号土壙出土品で，底径10cm。内面はナデ，外側面は縦位の削り上げ状擦過。底外面は指ナデ状でかなり凹凸あり。粗・細砂多く含み，焼成やや良好で内面は暗黄褐色，外面は茶褐色をなす。粗製深鉢か。142は第2号集石炉内混入品で，底径10.4cm。内外面ナデで，粗・細砂多く含み，焼成不良。内面は淡茶褐色，外面は暗黄褐～白褐色をなす。やや大型の定型深鉢。143は暗褐色包含層出土品で，底径12cm。内面は強い指オサエ痕多く，外側面は雑なナデ，底外面は擦過。粗・細砂多く含み，焼成やや不良で内面は

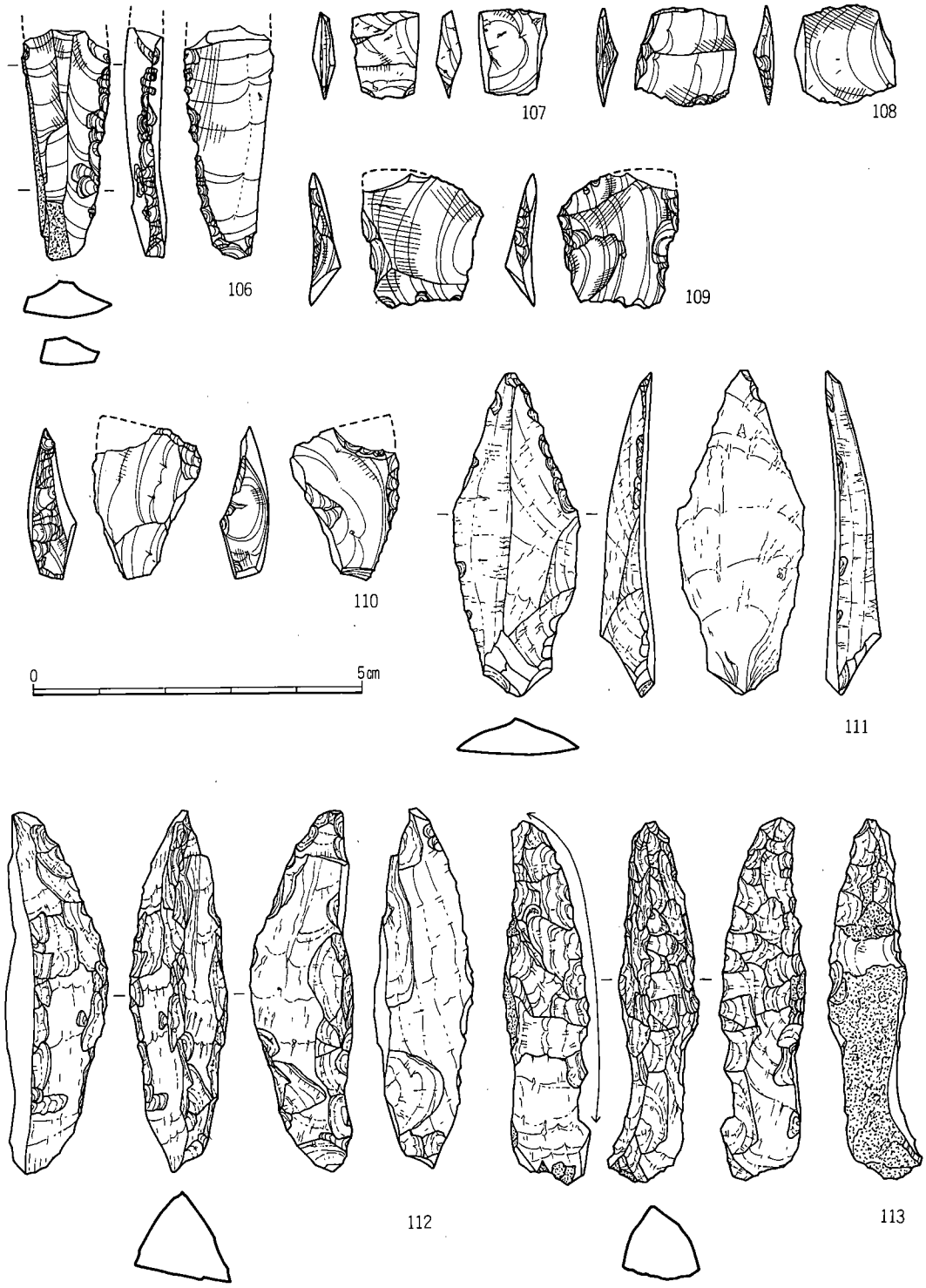


Fig. 65　その他の遺構出土台形石器・尖頭器等実測図（実大）

暗褐色，外面は茶褐色をなす。定型深鉢。

G　その他の遺構出土石器

ここでは，旧石器～縄文時代の石器のうち，既報告のⅠ区グリッド出土品，及び住居跡・土壙出土品等を除いたすべてを，各器種毎に報告したい。つまり，各区の縄文包含層や小ピット群から出土したもの，更には遺構検出時に取り上げたもの，弥生～奈良期の明らかに新しい遺構に混入したもの等をすべて含む。なお，打製石器の番号は，本遺跡出土の打製石器としてⅠ区グリッド出土品から続けて通し番号を付した。

ナイフ形石器（Fig.65-106）

第16号住居跡周辺茶褐色包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。縦長剥片を素材とするナイフ形石器基部側片と思われるが，基部調整は不充分。表面左側辺は礫面であり，鈍角すぎて刃部にはならない。表面右側辺には平坦剥離に近い細調整が施されるが，その裏の下半部には鈍角なブランティングが認められる。現存長34㎜，幅13㎜，厚さ5.5㎜，重さ2.3g。

台形石器（Fig.65-107～109）

107は第11号住居跡に混入していたもので，不純物をかなり含む黒曜石製。右側面は打面そのもので，下辺の両端に僅かに微剥離がみられるが，これが折断後の意図的調整かどうかは不確実。長さ13㎜，幅10㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.5g。108は，第11号住居跡に混入していたもので，半透明良質の腰岳系黒曜石製。縦長剥片の両端を折断後に，側面基部側を雑に調整する。長さ15㎜，幅15㎜，厚さ３㎜，重さ0.7g。109はⅡ区包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。両側面に雑な細調整を施している。長さ21㎜，幅18㎜，厚さ４㎜，重さ1.3g。

台形様石器（Fig.65-110）

Ⅱ区包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。右側面は打点からバルブ部をカットしたもので，左側面は折断後に上半は表からの，下半は裏面側からの丁寧なブランティングが施されている。上辺の裏面側にみられる欠損部分のブランティングは，他面より明らかに新しいもので，後の時期に再利用したものと考えられる。表面左上端にみられる剥離は偶然的要因による刃こぼれ的な薄い平坦剥離。長さ22㎜，幅16㎜，厚さ７㎜，重さ1.9g。

尖頭器（Fig.65-111～113，Fig.66-115・116）

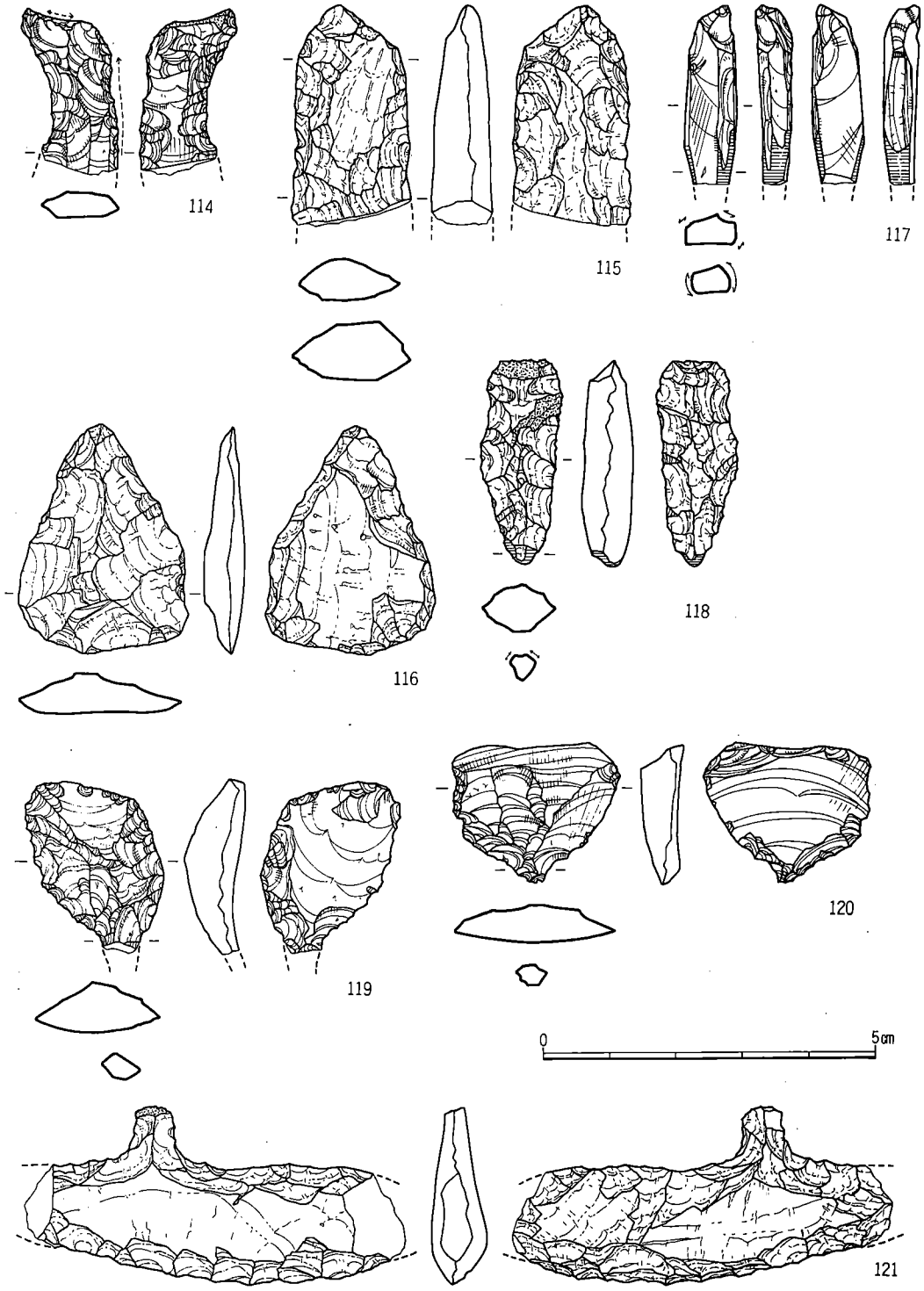


Fig. 66　その他の遺構出土尖頭器・石錐等実測図（実大）

111は第33号土壙に混入していたもので，安山岩製。縦長剝片を素材とするが，表の左辺側は横剝ぎであり，90度転換でこの素材が剝ぎ取られている。右側辺上半には平坦剝離による細調整が施され，刃潰しではなく刃部形成的である。表面の基部右側の細調整は明らかに新しいもので，後の時期に再利用されたものと考えられる。形状からは剝片尖頭器的だが，基部加工が弱く，ナイフ形石器の可能性もある。長さ49㎜，幅19㎜，厚さ８㎜，重さ５g。112は第16号住居跡内に混入していたもので，安山岩製角錐状尖頭器。見るからに舟底形石核のスポールであるが，だとすると，舟底稜の調整が充分でなく，スポール打撃が横剝ぎ方向で，しかも打点は遠い。よって，横剝ぎ面から90度転換して，縦剝ぎで断面三角の廃核的素材を得たものと考えられるため，三稜尖頭器を意図した素材採取によるものと判断でき，スポールの再利用ではない。段階状剝離がかなりみられ，中央稜の調整がなされている。基部調整はあまり意識されていない。かなり風化しており，長さ55㎜，幅15㎜，厚さ15㎜，重さ9.9g となる。113はＰ470出土品で，安山岩製の小型異類の角錐状尖頭器。凹凸のある礫面を打面として，90度変換によって，細長い断面三角形の厚みのある素材を得ている。基部の調整は殆ど意識されておらず，全体の形状からみると，使途は，小刀状のスクレイパー的だが，尖頭器状刺突具として角錐状石器に含めてよい。長さ55㎜，幅12㎜，厚さ13㎜，重さ6.5g となる。115は第６号竪穴住居内に混入していたもので，安山岩製の多久系小型尖頭器。厚みのある横剝ぎ素材を使用。部分的に階段状剝離が施され，安山岩製としてはかなり縁辺細調整も丁寧である。表裏の中央に素材面を残す。かなり風化しており，長さ33㎜，幅18㎜，厚さ９㎜，重さ6.1g。116は第15号竪穴住居跡に混入していたもので，安山岩製の大型鏃というより尖頭器。横剝ぎの不定形剝片を素材とする。全体に薄手で，調整は雑。表面中央付近では階段状剝離がみられ，縁辺細調整は薄い平坦剝離。かなり風化しており，長さ34㎜，幅25㎜，厚さ６㎜，重さ4.4g となる。

異形石器（Fig.66-114）

第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。礫面を打面とする縦長剝片を素材とする。表裏に素材剝離面を残す。左右辺の縁辺調整は丁寧で，上辺の一部と右側辺が潰れ状になっており，掻器的使用が考えられる。形態上は両端が屈曲する縄文晩期の所謂異形石器になると思われる。

石錐（Fig.66-117～120）

117は第14号土壙出土品で当該遺構の項で報告する。118は第33号土壙出土品で当該遺構の項で報告する。119はＰ222出土品で，良質だが幾らか不純物を含む黒曜石製。厚みのある不定形剝片の尾部端をドリル部としたもの。作りは雑。現存長26㎜，幅20㎜，厚さ９㎜，重さ3.4g となる。120はＰ491出土品で，良質な腰岳系黒曜石製。不定形剝片の片辺のみに雑な調整を施

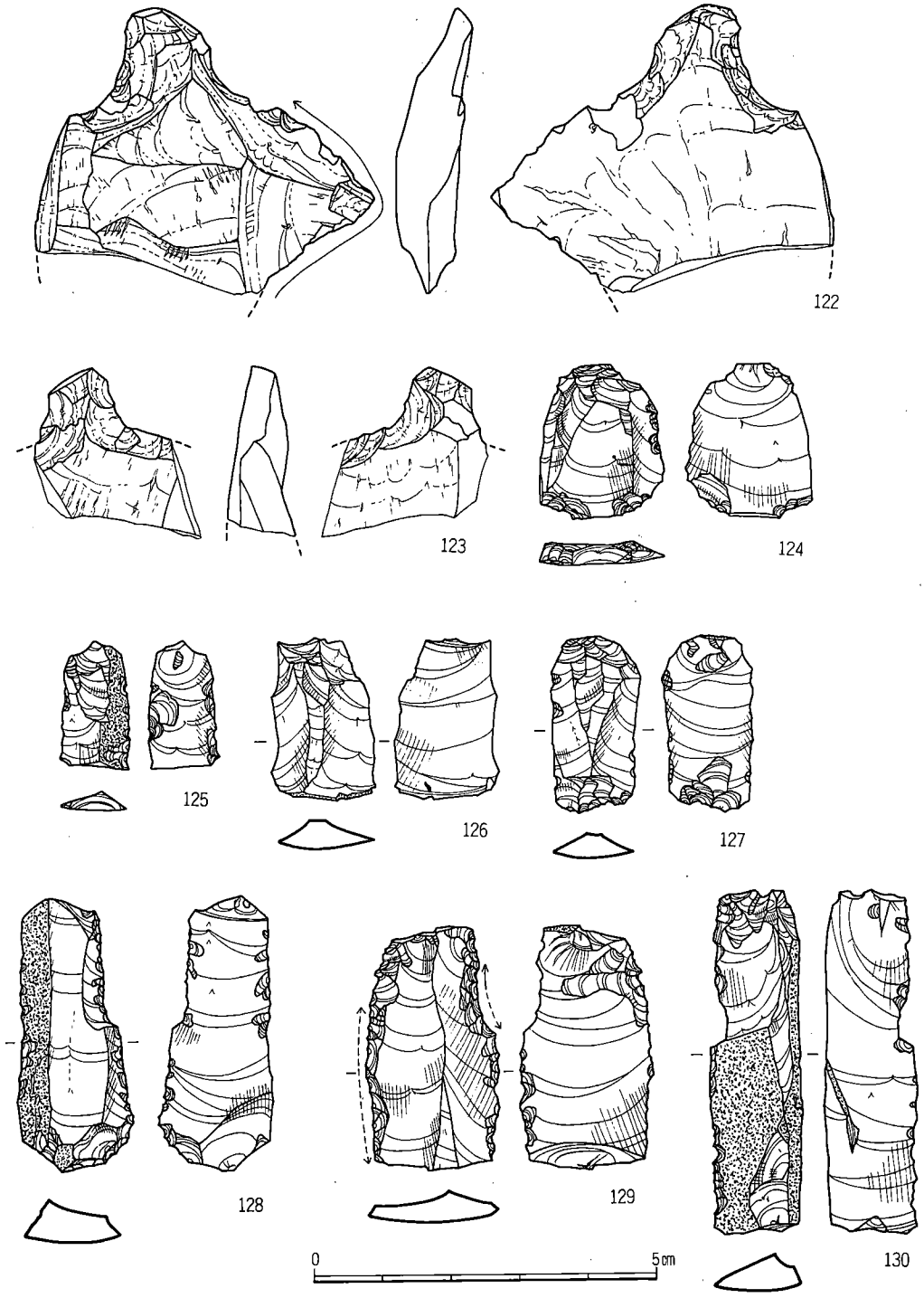


Fig. 67　その他の遺構出土石匙・石刃等実測図（実大）

しただけのもので，ドリル部先端は潰れており，欠損かもしれない。現存長21㎜，幅25㎜，厚さ6㎜，重さ2.7gとなる。

石匙，掻・削器，使用剝片（Fig.66-121～Fig.74-168）

121はⅡ区表採(包含層出土)品で，安山岩製石匙。横剝ぎ素材を用いた横型石匙だが，表裏に素材面を大きく残し，わりと丁寧な縁辺調整を施す。打面は礫面で，細身の撮部を持つ。長さ25㎜，現存幅57㎜，厚さ8㎜，重さ11.2g。かなり風化している。122は第2号住居跡上面出土品で，安山岩製。不定形剝片を素材とし，撮部と両抉部のみを調整しただけのもの。長さ42㎜，幅50㎜，厚さ9㎜，重さ14.6g。123は第12号住居跡中央土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。124はP537出土品で，良質の腰岳系黒曜石製の撮形石器。折断のための両脇からのノッチの細調整は表裏からなされ，丁寧である。右側縁には使用刃こぼれがみられる。長さ22㎜，幅18㎜，厚さ3㎜，重さ1.8g。125はP196出土品で，良質の腰岳系黒曜石製小石刃。両側辺には使用刃こぼれがみられる。長さ18㎜，幅10㎜，厚さ3㎜，重さ0.6gとなる。細石刃に近い。126は第11号住居跡上面の暗褐色包含層出土品で，小さい不純物を多く含む漆黒色の黒曜石製縦長石刃状剝片。上端は両側からの雑なノッチ加工により折断されており，撮形石器とみることもできる。折断は表からの加撃による。長さ23㎜，幅15㎜，厚さ4.5㎜，重さ1.6gとなる。127はP1189出土品で，良質の腰岳系黒曜石製石刃を素材とする楔形石器。打面は礫面で，上下端に細調整を施したもの。上端縁は一部潰れている。長さ25㎜，幅13㎜，厚さ4㎜，重さ1.3g。両側辺には僅かに使用刃こぼれがみられる。128はP1158出土品で，良質の腰岳系黒曜石製の使用剝片。厚みのあるブレイドの両側辺を使用したもの。上端は表面からの加撃による折断。長さ40㎜，幅17㎜，厚さ6㎜，重さ4.1g。129は第7号住居跡に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製石刃。打面は礫面で，左側辺には鈍角でブランティング的細調整が施され，右側辺の上半にはノッチ状部をブランティング調整で形成している。このノッチ部は潰れており，使用が考えられる。長さ36㎜，幅19㎜，厚さ4.5㎜，重さ4gの典型的ブレイド。130はP826出土品で，良質の腰岳系黒曜石製使用剝片。皮除去時の石刃状剝片で，左側辺に使用刃こぼれがみられる。打面は調整面で，下端は完結している。長さ50㎜，幅14㎜，厚さ5㎜，重さ4.7gとなる。131は第11号住居跡上面の暗褐色包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製石刃。上端は表からの加撃により折断されており，両側辺には使用刃こぼれが多くみられる。長さ27㎜，幅15㎜，厚さ3.5㎜，重さ1.4gとなる。132はP432出土品で，姫島産黒曜石製。石核自体がやや厚み（15～18㎜）を持つ瀬戸内技法的横長剝片で，下縁には使用による刃こぼれが多くみられる。長さ19㎜，幅38㎜，厚さ14㎜，重さ6.1g。133は第13号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告済。134は第33号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。135は第17号土壙に混入したもので，姫島産黒曜石製。横剝ぎ素材の下辺に丁寧な細調整を施したスクレイパー。

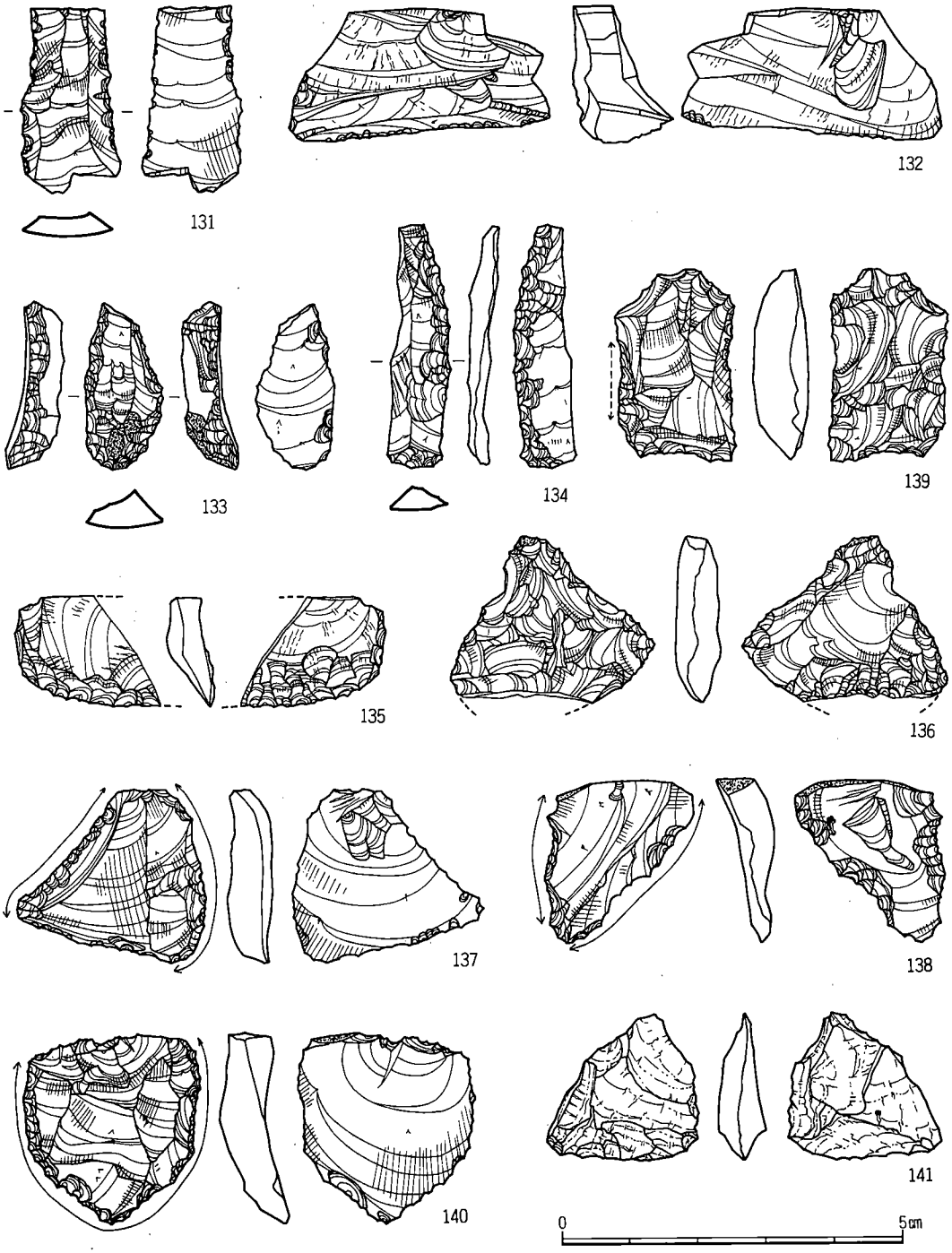


Fig. 68　その他の遺構出土石刃，掻・削器等実測図（実大）

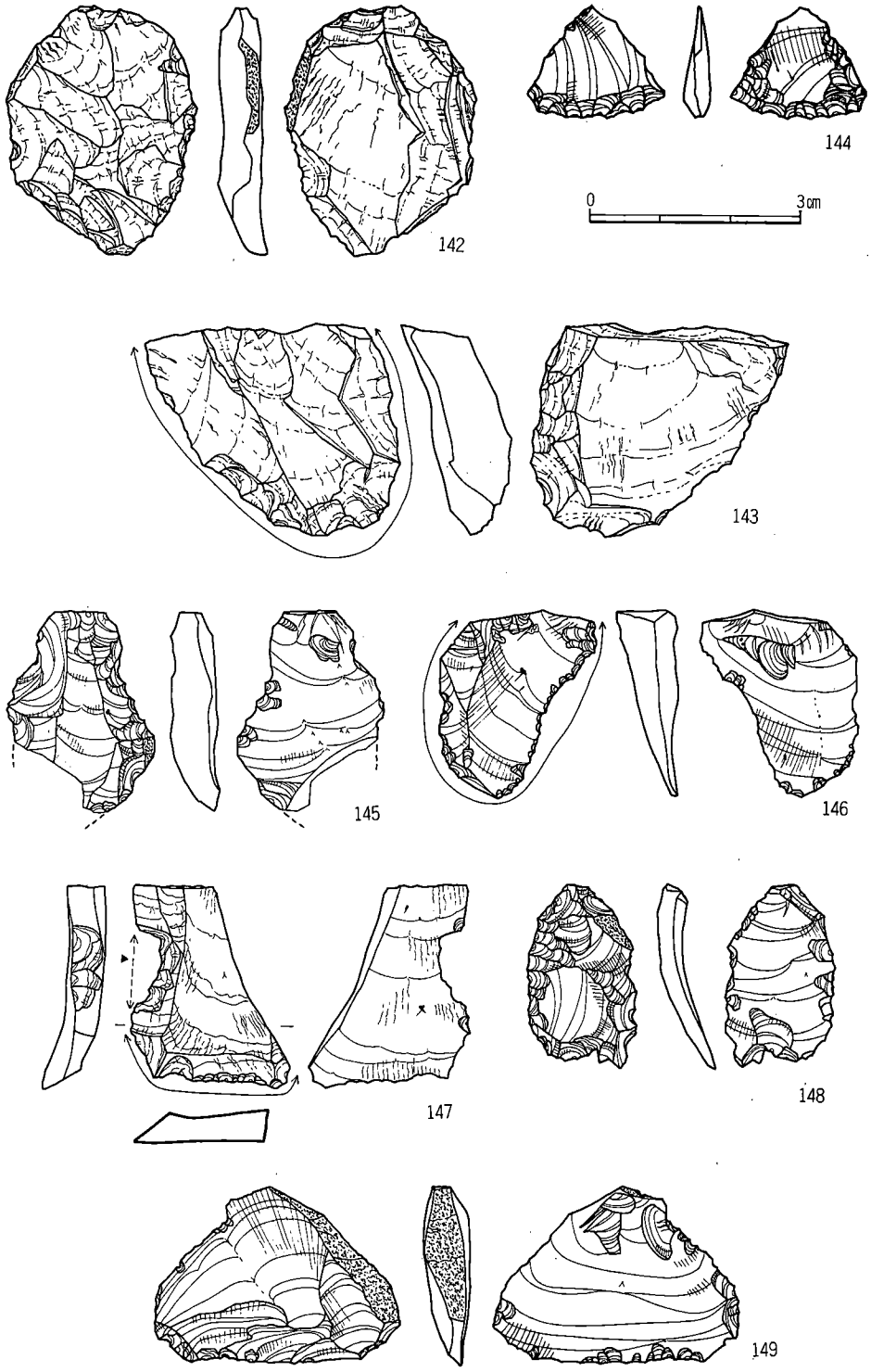


Fig. 69　その他の遺構出土掻・削器実測図（その１）(実大)

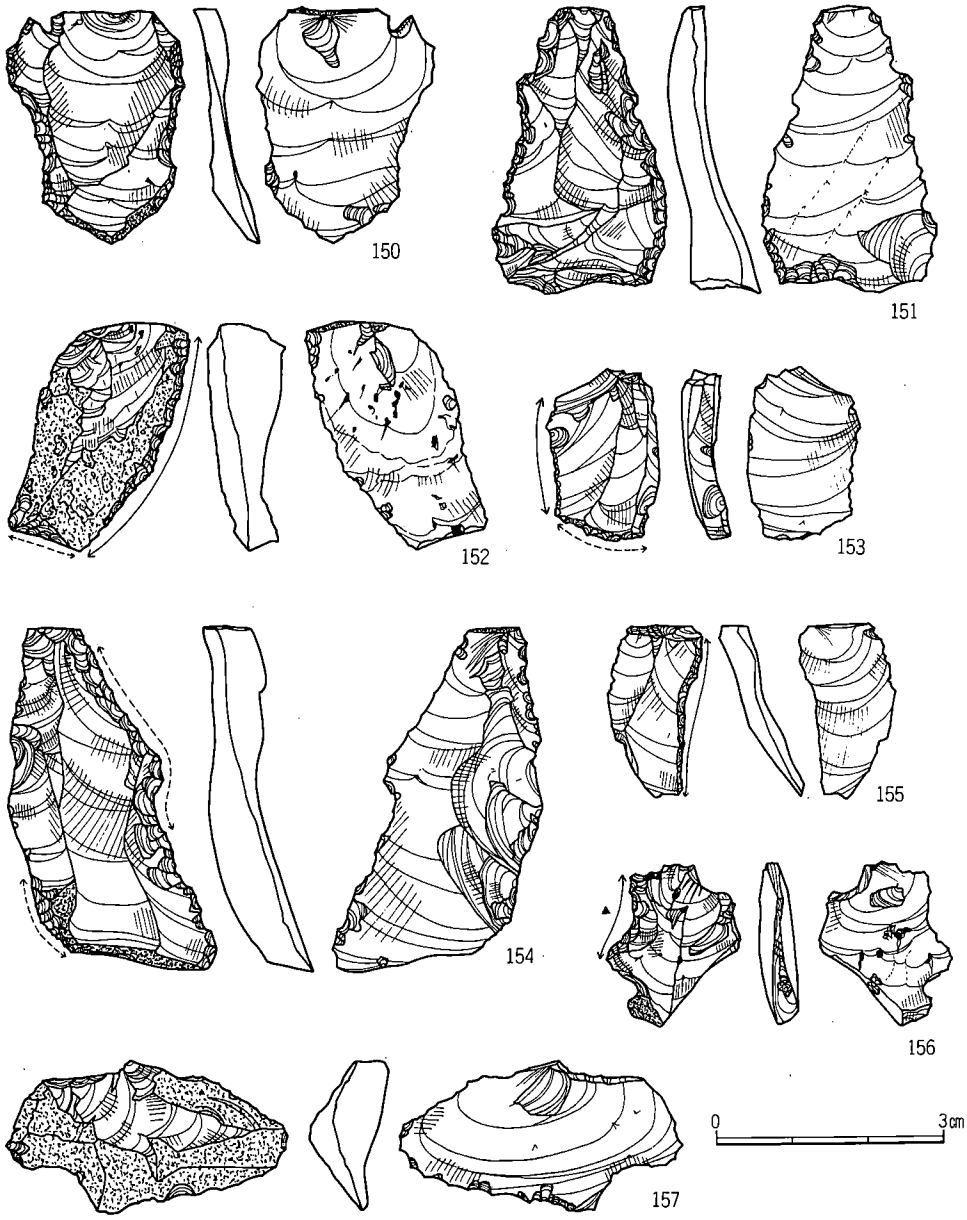


Fig. 70　その他の遺構出土掻・削器実測図（その２）(実大)

長さ16㎜，現存幅21㎜，厚さ３㎜，重さ1.5g。136は第６号土壙に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製。形態的には石匙を意識したかと思われるスクレイパー。打面は礫面で，調整剥離の手数はむやみに多いが，方向も一定せず作りは雑。長さ35㎜，幅30㎜，厚さ７㎜，重さ4.1g。137はP12出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。不定形剥片そのものの使用剥片。左右

両辺の表側のみに縁辺細調整を施す。打面は調整面。長さ26㎜，幅28㎜，厚さ７㎜，重さ3.8g。138は第12号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。139は第１号掘立柱建物Ｐ４に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製。厚みがあり，表裏ともに丁寧な調整剥離が施される。形態上は楔形石器だが，左側辺と下辺に潰れがみられ，掻器的使用も考えられる。長さ28㎜，幅17㎜，厚さ８㎜，重さ4.1g。140はP118出土品で，良質の腰岳系黒曜石製使用剥片。不定形剥片の縁辺に微細なチッピングを施しただけのもの。長さ28㎜，幅26㎜，厚さ６㎜，重さ4.5g。141は第16号土壙に混入していたもので，安山岩製の使用剥片。下辺の片面のみに縁辺細調整が施されたもの。長さ21㎜，幅22㎜，厚さ７㎜，重さ2.7gとなる。142はP837出土品で，安山岩製スクレイパー。縁辺調整はあまり無く，ほぼ全周が刃部として使用可能。長さ36㎜，幅27㎜，厚さ６㎜，重さ6.5g。143は第９号住居跡に混入したもので，安山岩製スクレイパー。厚みのある不定形剥片を素材とし，表裏からの縁辺調整のみを施したもの。かなり風化しており，長さ30㎜，幅35㎜，厚さ11㎜，重さ11g。144は第11号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。145は第６号土壙に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製使用剥片。両側辺の表側縁辺のみに雑な細調整を加えただけのもの。打面は礫面。長さ29㎜，幅21㎜，厚さ７㎜，重さ2.9g。146はP14出土品で，白い不純物を僅かに含む漆黒色の黒曜石製使用剥片。打面は調整面で，不定形剥片の縁辺に使用による刃こぼれがかなり見られるだけのもの。長さ26㎜，幅22㎜，厚さ９㎜，重さ３g。147は第２号住居跡上面出土品で，姫島産黒曜石製使用剥片。不定形剥片の下辺に細調整を施し，更に左側辺中途にノッチ部を作り，その部分は鈍角な調整剥離を施している。長さ28㎜，幅23㎜，厚さ４㎜，重さ３g。148はP930出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。薄手の小剥片の縁辺に細調整を加えたもの。打面は調整面。長さ26㎜，幅15㎜，厚さ４㎜，重さ1.3g。149は第９号住居跡のＰ２内に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製。横長剥片の各辺に使用による刃こぼれが若干見られるだけのもの。打面は礫面。長さ25㎜，幅35㎜，厚さ７㎜，重さ4.9g。150は第２号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。151は第11号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。152はP994出土品で，白い不純物を多く含む漆黒色の黒曜石製。礫面を多く残した不定形剥片の右側縁のみに細調整を施し，下辺には鈍角の調整剥離が施されている。エンドスクレイパーも兼ねている。打面は礫面。長さ30㎜，幅18㎜，厚さ10㎜，重さ４g。153は第６号土壙に混入していたもので，良質の腰岳系黒曜石製。縦長剥片の上下端を折断し，下端辺はブランティング的鈍角な調整がみられ，掻器的性格を持つ。左側辺は微細な使用刃こぼれが密にみられる。長さ23㎜，幅15㎜，厚さ５㎜，重さ1.6g。154はP816出土品で，良質の腰岳系黒曜石製サイドスクレイパー。表面の左側辺下端付近は鈍角の細調整，右側辺の上半はやや鈍角の調整が施され，その部位は部分的に潰れている。打面は礫面で，尾端にも礫面を残す。長さ43㎜，幅24㎜，厚さ８㎜，重さ７g。155はP115出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。縦長小剥片の右側辺のみに微細なチッピングを施した

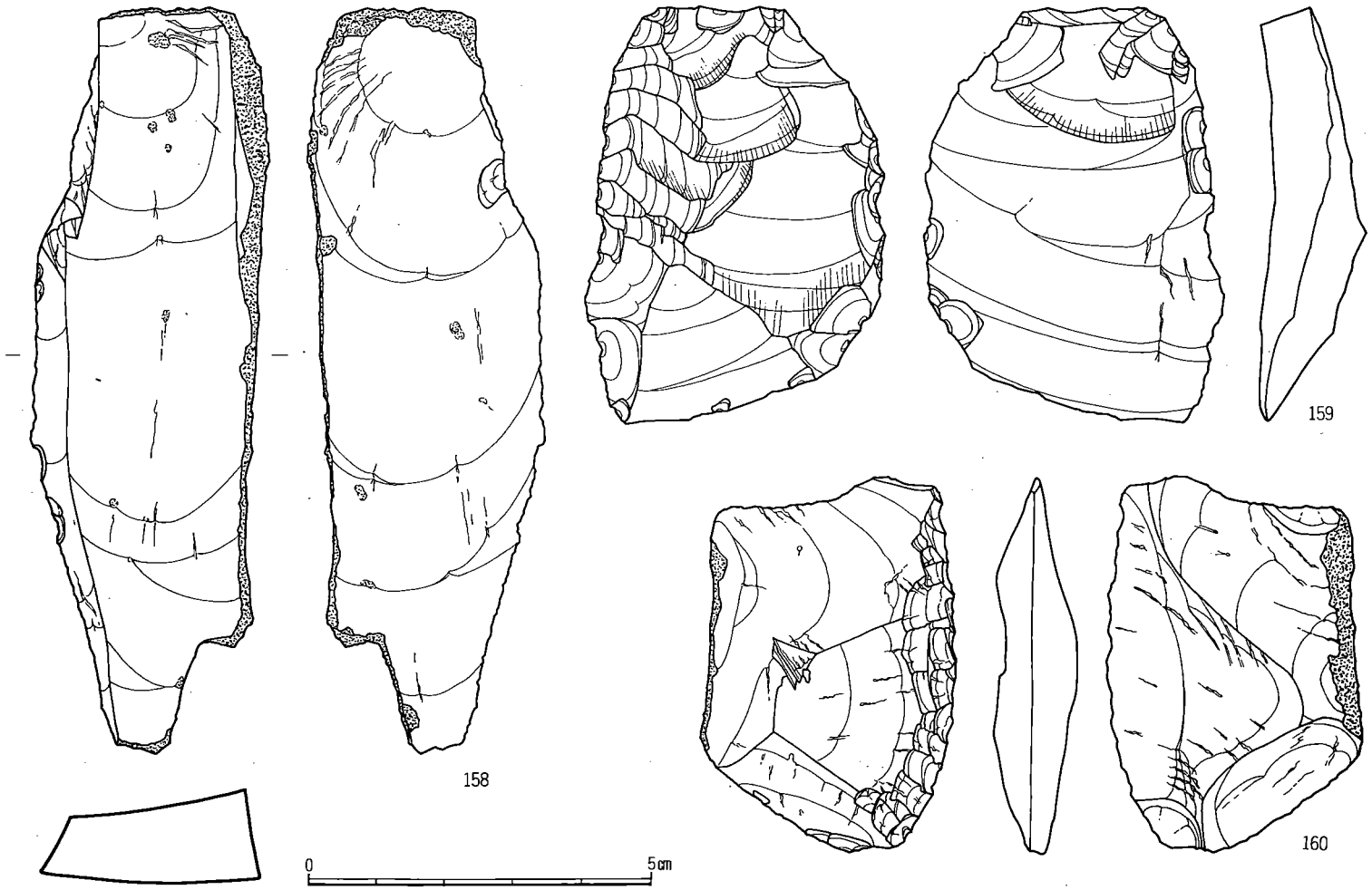


Fig. 71　その他の遺構出土掻・削器実測図（その3）（実大）

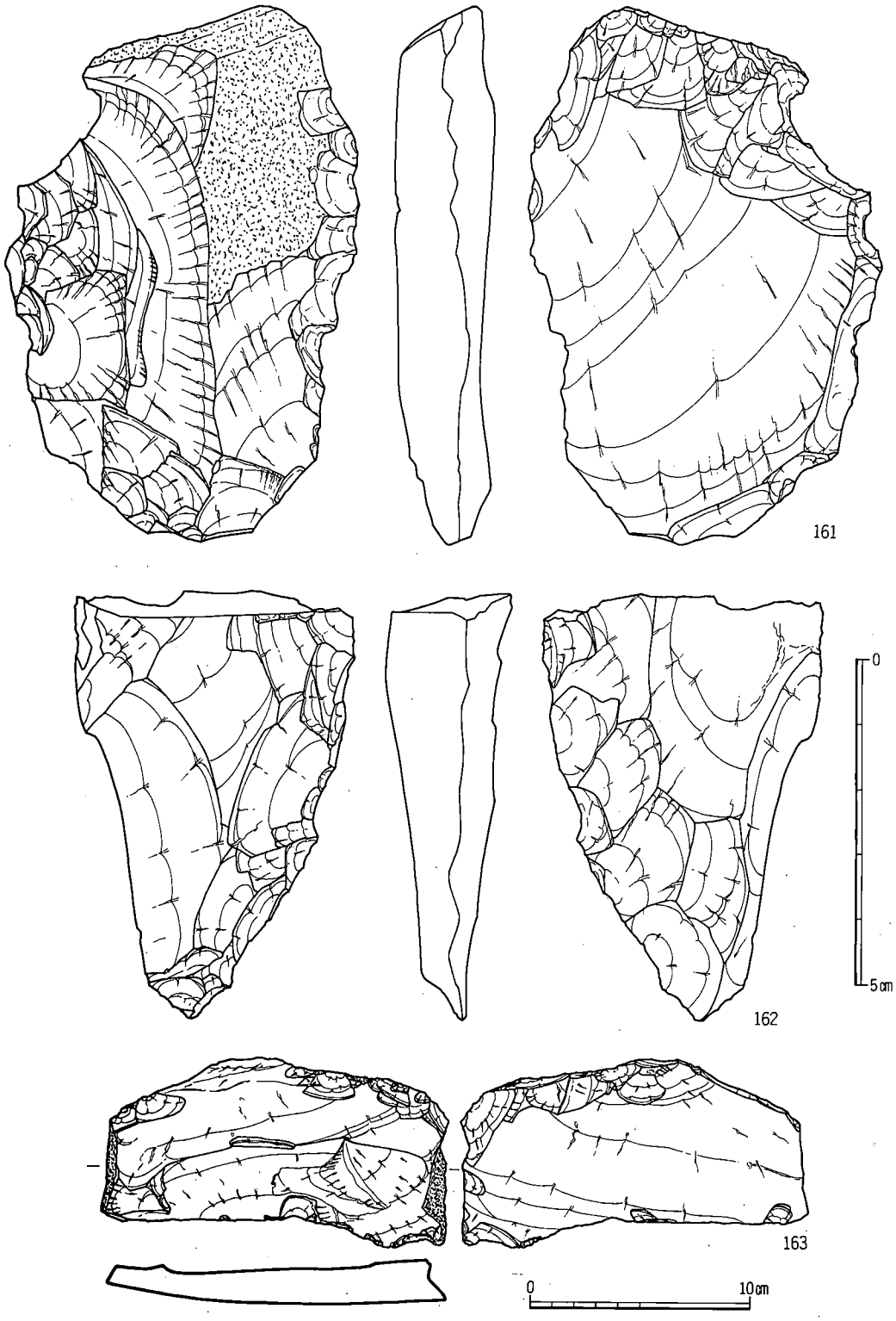


Fig. 72　その他の遺構出土掻・削器実測図（その４）(実大，163のみ1/3)

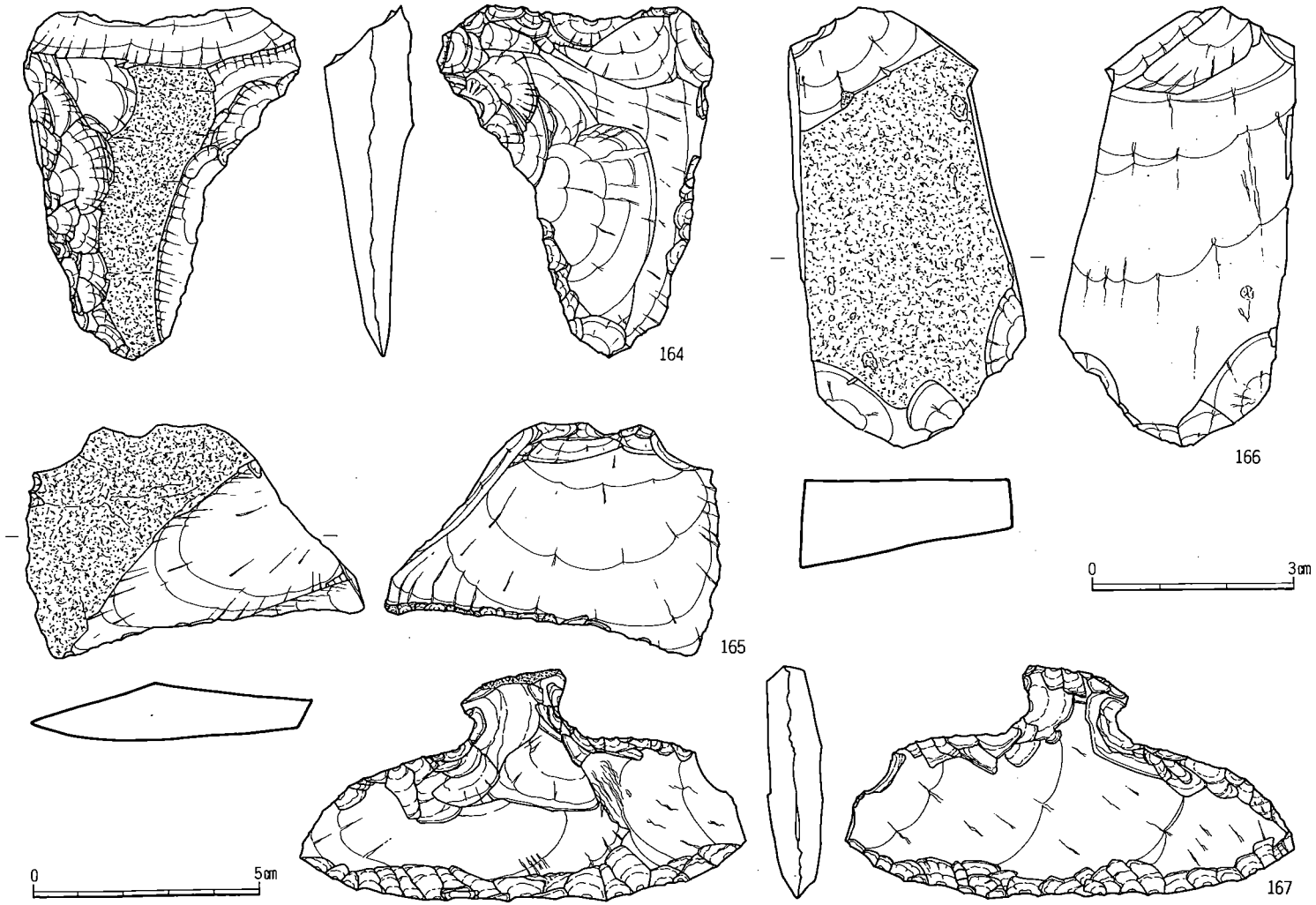


Fig. 73　その他の遺構出土掻・削器，石匙実測図（166のみ実大，他は2/3）

だけの使用剥片。打面は調整面で，長さ22㎜，幅12㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.9gとなる。156はP119出土品で，漆黒色だが白い不純物を多く含む黒曜石製。不定形剥片の左側辺にノッチ部のみを作っただけのもの。この部分は潰れており，丸いものへの掻器的使用が考えられる。長さ21㎜，幅17㎜，厚さ4.5㎜，重さ1.3gとなる。157は第6号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，良質の腰岳系黒曜石製。皮剥ぎ段階の横長剥片の下辺に使用刃こぼれがみられるだけのもの。打面は調整面で，長さ20㎜，幅37㎜，厚さ9㎜，重さ3.7gとなる。やや風化しており，層位からも縄文期でも古い段階のものと推定できる。158はP293出土品で安山岩製の特異な大型縦長剥片。打面と右側面は礫面で，左側辺中央部に使用刃こぼれがみられる。かなり風化しており古い様相を示す。旧石器であろう。長さ109㎜，幅32㎜，厚さ14㎜，重さ63.3gと極めて大型である。159はⅡ区南半包含層出土品で，姫島産黒曜石製の大型剥片使用のスクレイパー。左側辺にはわりと丁寧な調整剥離が施され，裏面のバルブは除去されている。長さ60㎜，幅43㎜，厚さ14㎜，重さ32.4gとなる。160はⅡ区包含層出土品で，安山岩製スクレイパー。下辺に表面側からだけの縁辺細調整が施されている。打面は礫面。長さ55㎜，幅37㎜，厚さ12㎜，重さ21.4gとなる。161はP1073出土品で，安山岩製の大型スクレイパー。表面右側辺には幾らか細かい縁辺調整を，裏面の右側辺には雑な縁辺調整を施す。左側辺上半部には意図的ノッチが入れられている。長さ81㎜，幅54㎜，厚さ15㎜，重さ62.8gと大きい。162は中原1号墳盛土中出土品で，安山岩製の大型スクレイパー。横剥ぎ素材の下辺に調整を加えたもの。現存長65㎜，幅43㎜，厚さ18㎜，重さ42.4gとなる。163はP807出土品で，安山岩製特大型スクレイパー。両側端に礫面を残す大型の横剥ぎ素材の下辺を刃部に使用したもの。上辺沿いに若干の剥離がみられるが，他は殆ど手を加えていない。長さ86㎜，幅167㎜，厚さ19㎜，重さ280.4gと大きい。164はP321出土品で，安山岩製スクレイパー。横剥ぎ素材を縦に半裁して，各辺にある程度縁辺調整を施したもの。長さ80㎜，幅61㎜，厚さ20㎜，重さ64.6gと大きい。165は第16号住居跡周辺茶褐色包含層出土品で，安山岩製使用剥片。表に礫面を大きく残した横長剥片の打点からバルブ部分をカットし，下辺を刃部として使用したもの。長さ51㎜，幅75㎜，厚さ13㎜，重さ43.1gとなる。166はP368出土品で，安山岩製。縦長剥片のバルブ部以上をカットし，下端縁に簡単な調整を加えたもの。強いて言えばエンドスクレイパー。長さ65㎜，幅34㎜，厚さ12㎜，重さ41.9gとなる。167はⅠ区の遺構検出時に取り上げたNo.1で，安山岩製横型石匙。打面が礫面の横剥ぎ素材を用い，抉り部と縁辺全周に細調整を加えたもの。全体の整形としてはうまい作りである。長さ52㎜，幅100㎜，厚さ12㎜，重さ48.5gとなる。168は第10号土壙に混入していたもので，安山岩製横型石匙。礫面を打面とする横剥ぎ素材を用い，抉り部～上辺と下辺に縁辺調整を施しただけのものである。長さ56㎜，幅81㎜，厚さ13㎜，重さ45.5gとなる。

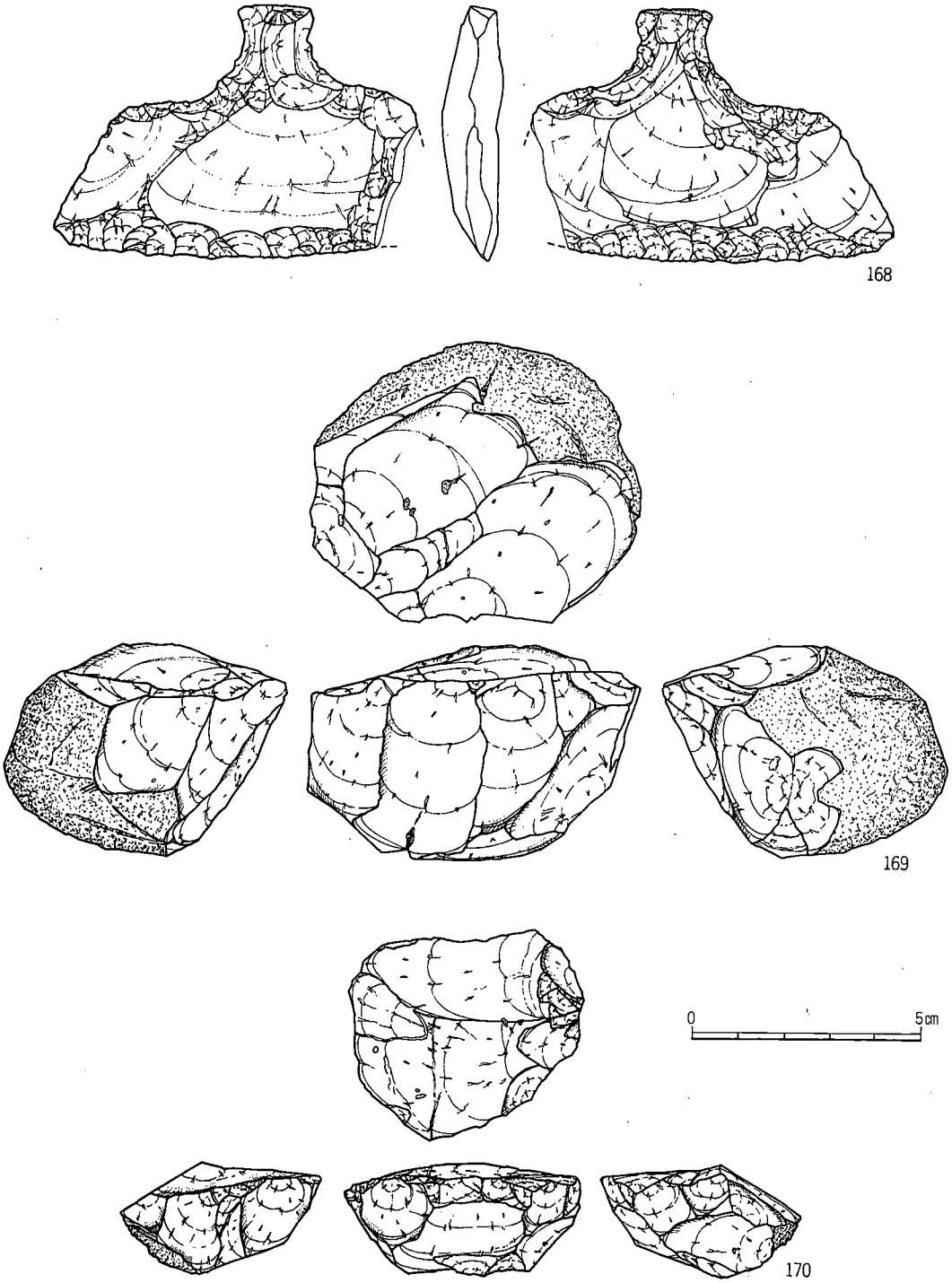


Fig. 74　その他の遺構出土石匙・石核実測図（2/3）

石核（Fig.74-169～Fig.75-172）

169はⅢ区杭40付近出土品で，玻璃質安山岩の縦長剥片採取用石核。背面から底面にかけては礫面のままで，これから推定できる原石は70×80×50㎜程の小型の円礫となる。打面と剥ぎ取り面の角度は鋭角。幅26㎜，最長45㎜程の縦長剥片が剥ぎ取られている。高さ47㎜，幅73㎜，厚さ61㎜，重さ220.7g となる。170は P90出土品で，安山岩の不定形小剥片採取用石核。背面側の底面に礫面を残す。直径70～80㎜程の円礫状原石を半裁し，その面を打面としており，皮剥ぎは打面側からと背面側から，更に底面側からの各方向から行い，或る程度終った時点で打点調整を施し，不定形小剥片の剥ぎ取りを始めたと考えられる。打面と剥ぎ取り面の角度はかなり鋭角となる。高さ25㎜，幅52㎜，奥行き47㎜，重さ54.5g。171はⅠ区グリッド㋓9で，玻璃質安山岩の原石から皮剥ぎを始めた程度の段階のもの。少なくとも，まだ不定形剥片しか採取されていない段階。打面側と側面側の剥離が交互に行われている部分がみられ，未だ打面と剥ぎ取り面が確定していない段階とも言える。高さ47㎜，上面径55×62㎜，重さ152.1g。172はⅢ区の杭48付近出土品で，黄白色のチャート質の石材。底面から背面，側面に礫面を残している。打面と剥ぎ取り面がまだ一定していない段階のもので，現段階での剥離順序だけからみると正面を打面とするものもみられる。幅広の縦長状不定形剥片採取のための石核と考えられるが，本遺跡からはこの石材の剥片は出土しておらず，この石器自体の用途にも問題を残す。高さ85㎜，上面径106×100㎜，重さ940.4g と大きい。

打製石鏃（Fig.76～78）

173はⅠ区遺構検出時（包含層）出土品で，腰岳系黒曜石製。長脚類で調整は丁寧。長さ20㎜，幅13㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.3g。174は第19号住居跡下層に混入していたもので，腰岳系黒曜石製。基部が逆Ｖ字に切れ込む類で，調整は丁寧。先端を欠損し，現存長13.5㎜，幅17㎜，厚さ３㎜，重さ0.4g。175はⅡ区南半茶褐色包含層出土品で，安山岩製。特大型の鍬形鏃だが，整形はわりとうまい。現存長35㎜，現存幅21㎜，厚さ５㎜，重さ2.9g。176は第７号住居跡に混入していたもので，安山岩製。先端と片脚を欠損する。現存長33㎜，現存幅23㎜，厚さ2.5㎜，重さ2.5g。作りは雑。177は P966出土品で，安山岩製。わりと丁寧な調整で，長さ33㎜，幅15㎜，厚さ3.5㎜，重さ1.3g。178はⅡ区表採品で安山岩製。主要剥離面を一部残すが，わりと丁寧な調整。長さ29㎜，現存幅18㎜，厚さ４㎜，重さ1.5g。179は P125出土品で，姫島産黒曜石製。片脚側が大きく欠損。長さ30㎜，現存幅15㎜，厚さ４㎜，重さ1.2g。180は P491出土品で，腰岳系黒曜石製。裏面右側辺には急角度のブランティング的調整が施されている。主要剥離面を一部残す。長さ29㎜，現存幅21㎜，厚さ５㎜，重さ1.8g。181は P919出土品で，安山岩製。現存長21㎜，現存幅18㎜，厚さ４㎜，重さ1.2g。182は第11号住居跡の上面暗褐色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。主要剥離面を一部残す。長さ23㎜，幅17㎜，厚さ５㎜，重さ

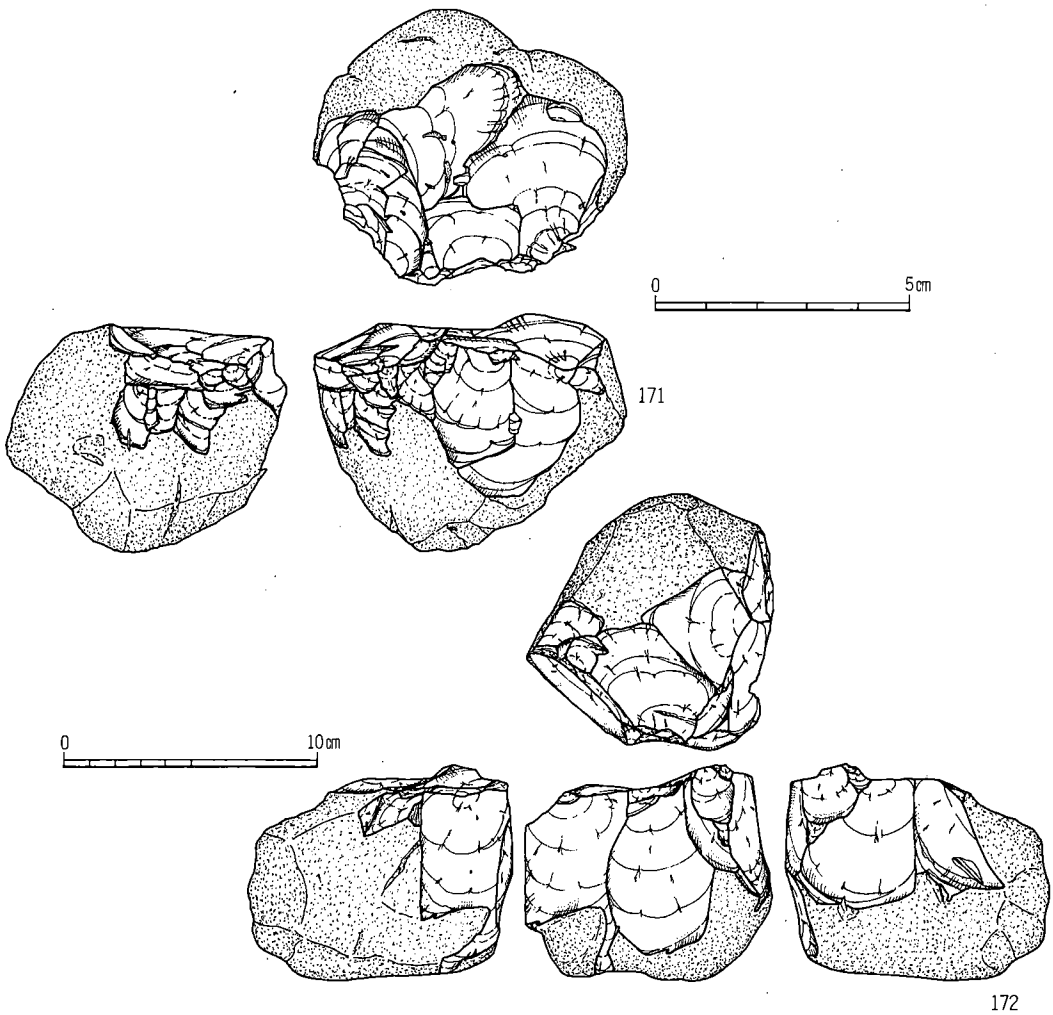


Fig. 75　その他の遺構出土石核実測図（2/3，1/3）

1.2g。183は第6号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，安山岩製。雑な整形剥離のままで，片脚も短い。長さ24mm，幅16mm，厚さ4.5mm，重さ1.2g。184はⅡ区北半暗褐色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。先端を欠損しており，長さ19mm，幅16mm，厚さ3mm，重さ0.8g。185は第13号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告済。186は第11号住居跡上面の暗褐色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。長さ24mm，幅17mm，厚さ5mm，重さ1.3g。187は第15号土壙の北半から出土したもので，腰岳系黒曜石製。調整は丁寧で，基部が逆V字状に切り込まれた類で古いタイプ。長さ20mm，幅14mm，厚さ2.5mm，重さ0.4g。188はⅡ区北半包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。表裏に素材剥離面を残すが，縁辺調整は丁寧。長さ22mm，幅14mm，厚さ3mm，重さ0.6g。189

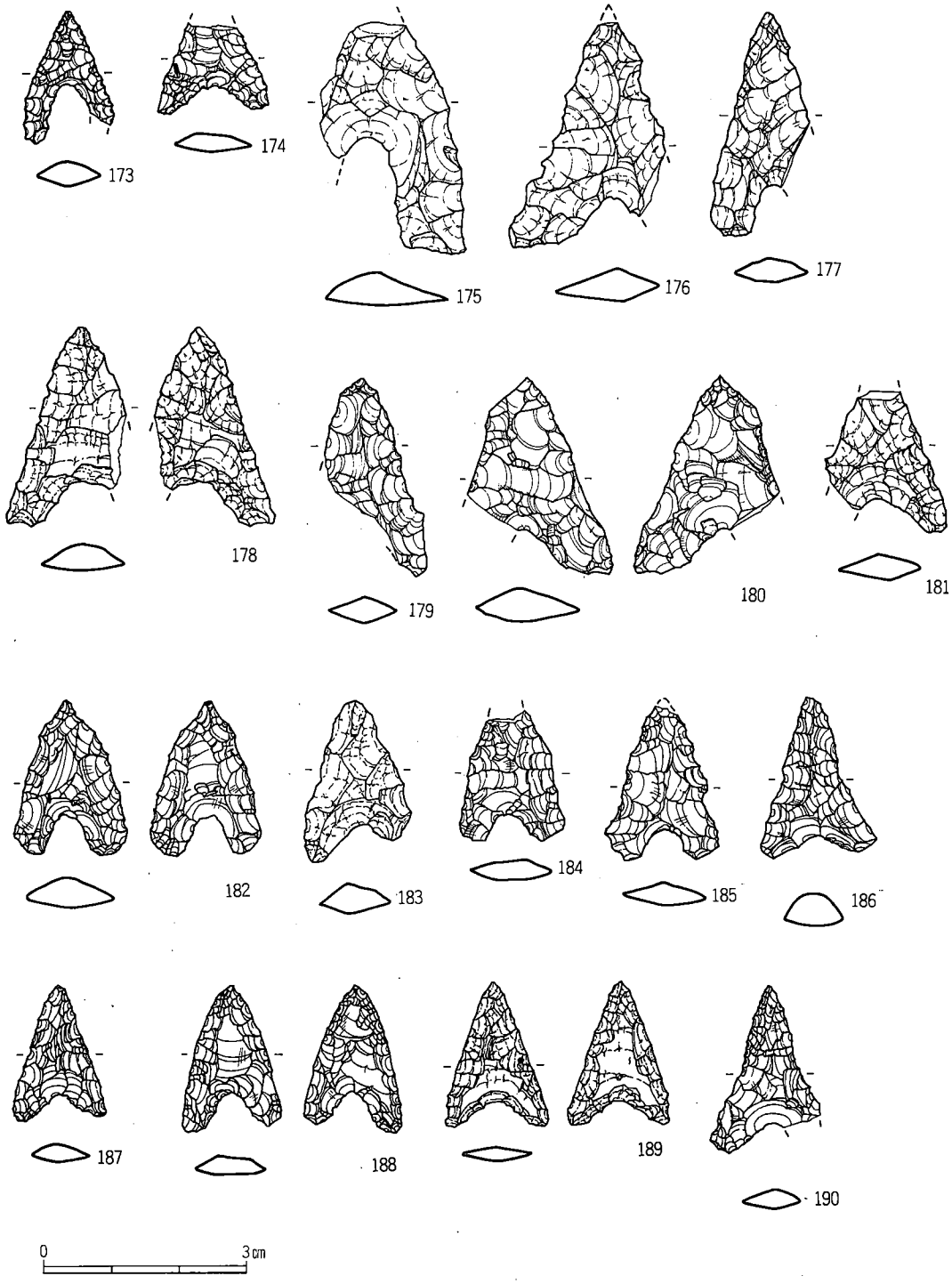


Fig. 76　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その１）(実大)

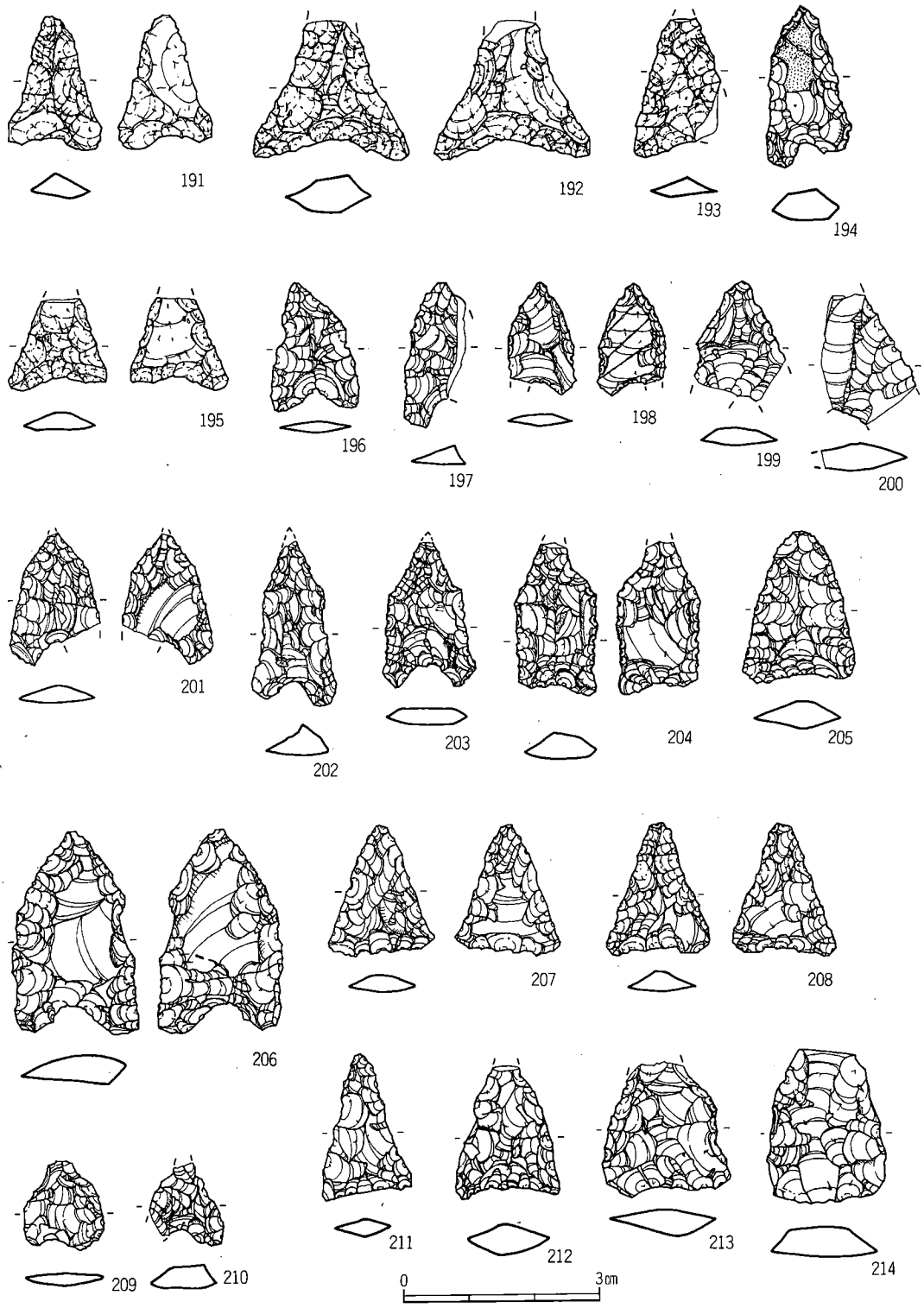


Fig. 77　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その２）(実大)

は第15号住居跡に混入していたもので，安山岩製。表裏に素材剥離面をかなり残す。長さ21㎜，幅15㎜，厚さ２㎜，重さ0.5gと薄手。190はⅡ区南半茶色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。鮫歯的形状をなし，上半の細い部分の細調整は丁寧だが，下半は雑。長さ25㎜，現存幅16㎜，厚さ３㎜，重さ0.6g。191は第15号住居跡に混入していたもので，安山岩製の粗製品でかなり風化している。長さ21㎜，幅14㎜，厚さ４㎜，重さ１g。192は第８号住居跡に混入していたもので，安山岩製。主要剥離面を残す。長さ21㎜，幅24㎜，厚さ６㎜，重さ2.3gと大きい。193は第15号住居跡に混入していたもので，安山岩製。先端と片脚部を欠損。現存長21㎜，幅13㎜，重さ0.7g。194はP834出土品で，腰岳系黒曜石製。礫面を残し，調整も雑で，左右非対称となる。長さ25㎜，幅13㎜，厚さ５㎜，重さ1.1g。195はP1030出土品で，安山岩製の剥片鏃。風化著しく，裏面は縁辺調整のみで，左右非対称。長さ14㎜，幅15㎜，厚さ３㎜，重さ0.6g。196はⅠ区包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。完形品だが先端が異常に曲がっており，その理由は明確でないが，先端欠損後の再調整によるものか。長さ19㎜，幅13㎜，厚さ２㎜，重さ0.5g。197は第33号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。198は第15号住居跡出土品で，腰岳系黒曜石製剥片鏃。表裏に素材剥離面を大きく残し，縁辺に簡単に調整を施しただけのもの。長さ17㎜，幅10㎜，厚さ２㎜，重さ0.3gとなる小型品。199はＣ１周溝内出土品で，腰岳系黒曜石製。両脚を欠損しており，現存長18㎜，幅14㎜，厚さ３㎜，重さ0.8g。200はⅡ区包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。大型類となりそうで，現存長20㎜，幅14㎜，厚さ４㎜，重さ１g。201は第15号住居跡北側の茶褐色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。五角形鏃で，主要剥離面を残す。長さ20㎜，幅14㎜，厚さ３㎜，重さ0.5g。202はＣ１墓壙内に混入していたもので，腰岳系黒曜石製五角形鏃。長さ25㎜，幅13㎜，厚さ５㎜，重さ１g。203はⅠ区包含層出土品で，腰岳系黒曜石製五角形鏃。微細な調整が施されており，長さ22㎜，幅14㎜，厚さ３㎜，重さ0.8g。204はP119出土品で，腰岳系黒曜石製五角形鏃。主要剥離面を残し，左右非対称。現存長23㎜，幅13㎜，厚さ４㎜，重さ1.2g。205はⅠ区包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。長さ24㎜，幅17㎜，厚さ４㎜，重さ1.2g。未製品か。206は第13号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告済。207は第33号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。208は第31号土壙出土品で，当該遺構の項で報告済。209はⅡ区北半包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。小型不整形で未製品か。長さ14㎜，幅12㎜，厚さ２㎜，重さ0.4g。210は第11号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。211は第１号溝出土品で，腰岳系黒曜石製。粗雑な調整のままの平基鏃で，長さ22㎜，幅14㎜，厚さ３㎜，重さ0.6g。212はP783出土品で，腰岳系黒曜石製。浅い凹基類で，丁寧に調整を施す。長さ20㎜，幅16㎜，厚さ５㎜，重さ１g。213は第15号住居跡床面下に混入していたもので，腰岳系黒曜石製。調整はやや雑で，長さ20㎜，幅20㎜，厚さ４㎜，重さ1.6g。214は第11号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。215は第14号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。216はⅡ区包含層出土品で，安山岩製。調整は雑で，現存

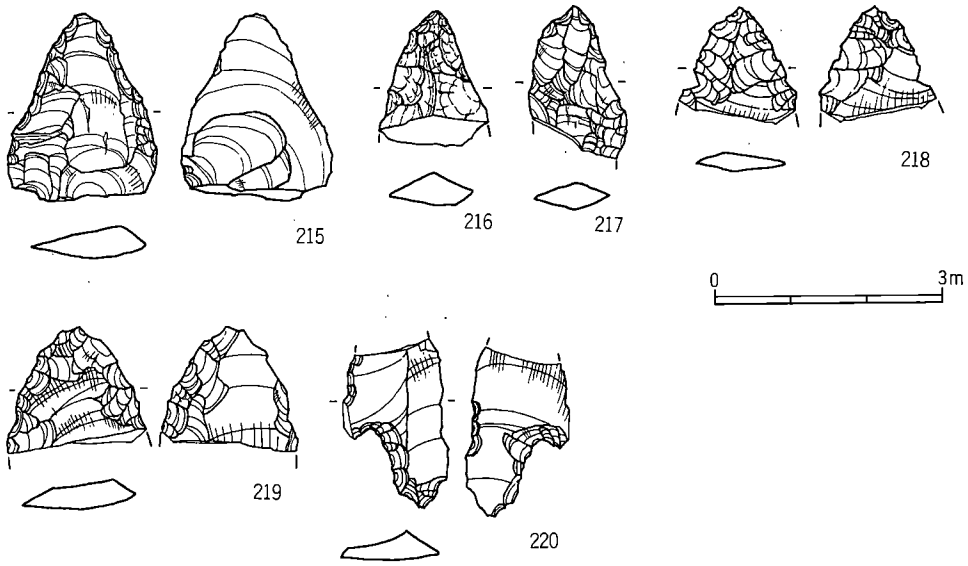


Fig. 78　その他の遺構出土打製石鏃実測図（その３）(実大)

長18㎜，幅15㎜，厚さ4.5㎜，重さ0.8g。217は第１号掘立柱建物Ｐ４に混入していたもので，腰岳系黒曜石製。現存長20㎜，幅13㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.7g。218は第11号住居跡上面の暗褐色包含層出土品で，腰岳系黒曜石製。表裏に素材剥離面を残し，縁辺細調整も殆ど見られない。現存長16㎜，幅15.5㎜，厚さ２㎜，重さ0.4gとなる。219はP929出土品で，腰岳系黒曜石製剥片鏃。縁辺に雑に調整を施しただけのもの。現存長16㎜，幅18㎜，厚さ４㎜，重さ１g。220は第７号住居跡下層に混入していたもので，腰岳系黒曜石製剥片鏃。基部の抉り調整だけのもので，未製品の可能性が高い。現存長22㎜，幅13㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.9g。

石錘（Fig.79−１～９）

本遺跡出土の両端打ち欠きの石錘は，すべて凝灰岩質の河原石を用いたものである。１はＰ813出土品で，上面は磨石として使用されている。径48×33㎜，厚さ18㎜，重さ42.5g。２はＣ１周溝内出土品で，上面中央に小孔を穿ち，凹石として使用していたものの転用品と考えられる。径47×46㎜，厚さ16㎜，重さ41.6g。３は第15号住居跡に混入していたもので，薄手品。径54×47㎜，厚さ12㎜，重さ46.6g。４は第９号住居跡に混入していたもので，径53×41㎜，厚さ17㎜，重さ49.1g。５は第16号住居跡下層に混入していたもので，径54×47㎜，厚さ18㎜，重さ51.1g。６はⅡ区表採品で，打ち欠きが大きい。径50×43㎜，厚さ20㎜，重さ56g。７は第11号住居跡周辺の暗褐色包含層出土品で，径56×48㎜，厚さ15㎜，重さ60.4g。８は第14号

土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。9は第8号土壙に混入していたもので，本遺跡出土品の中では，これのみ大型品である。上面を磨石として使用している。径90×65㎜，厚さ25㎜，重さ188.7g。

凹石（Fig.79-10～12・17）

10は第11号住居跡周辺暗褐色包含層出土品で，凝灰岩質河原石を用いる。上面は磨石として使用され，上下両面の中央に凹部を持つ。更に側面には各所に敲打部がみられる。径72×69㎜，厚さ23㎜，重さ177.8g。11は第11号住居跡出土品で，当該遺構の項で報告する。12はP774出土品で凝灰岩質の河原石を用いる。上下両面の中央に凹部を作り，下面は磨石として使用している。また，左右両側面には敲打痕がみられ，敲き石としても使用されたことが判かる。径68×63㎜，厚さ29㎜，重さ183gとなる。17は第2号住居跡上面出土品で，角閃石が目立つ凝灰岩質河原石を使用する。上面中央に小さめの凹部を作る。上面は磨面のようであるが，風化のため明瞭でない。左端側面には敲打痕がみられる。径107×65㎜，厚さ47㎜，重さ506.9gとなる大型品である。

磨石・石球（Fig.79-13～16・18～20，Fig.80）

13はP289出土品で，凝灰岩質の小河原石の上面のみを磨石として使用したもの。径42×37㎜，厚さ20㎜，重さ42.7g。14は第24号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。15は第6号土壙に混入していたもので，凝灰岩質石材の小河原石の上下両面を磨石として使用したもの。径56×48㎜，厚さ21㎜，重さ72.3g。16は取り上げのラベルを紛失したもので，径67×52㎜，厚さ20㎜，重さ99.5gとなる。両面とも使用している。18はP809出土品で，上面のみ使用している。径65×61㎜，厚さ23㎜，重さ137.8gとなる。19はP465出土品で，上面のみを使用する。径62×56㎜，厚さ32㎜，重さ135g。20はP546出土品で，石球。所謂ボラストーンの可能性もあるか？径68×58㎜，厚さ54㎜，重さ199.3gとなる。21は第28号土壙出土品で，当該遺構の項で報告済。22は第1号掘立柱建物P9に混入していたもので，多孔質の凝灰岩質河原石の上下両面を使用したもの。径98×97㎜，厚さ34㎜，重さ534.4g。23はP515出土品で，凝灰岩質河原石の上面のみを使用したもの。使用痕は不明瞭。残存部径103㎜，厚さ40㎜，重さ367g。24は第28号土壙出土品で，当該遺構の項で報告済。25はⅡ区包含層出土品で，凝灰岩質河原石の上面と下面の中央付近を使用している。上面は極めて良く使い込まれている。径118×85㎜，厚さ55㎜，重さ851.1g。26は第6号住居跡に混入していたもので，灰色の河原石の上下両面を磨石として使用したもの。側面は全周敲打痕がみられる。磨面は良く使用されている。径123×114㎜，重さ1,155g。27は第24号土壙出土品で，当該遺構の項で報告する。28はP818出土品で，大きい凝灰岩質河原石の上下両面を使用したもの。径134×121㎜，厚さ41㎜，重さ

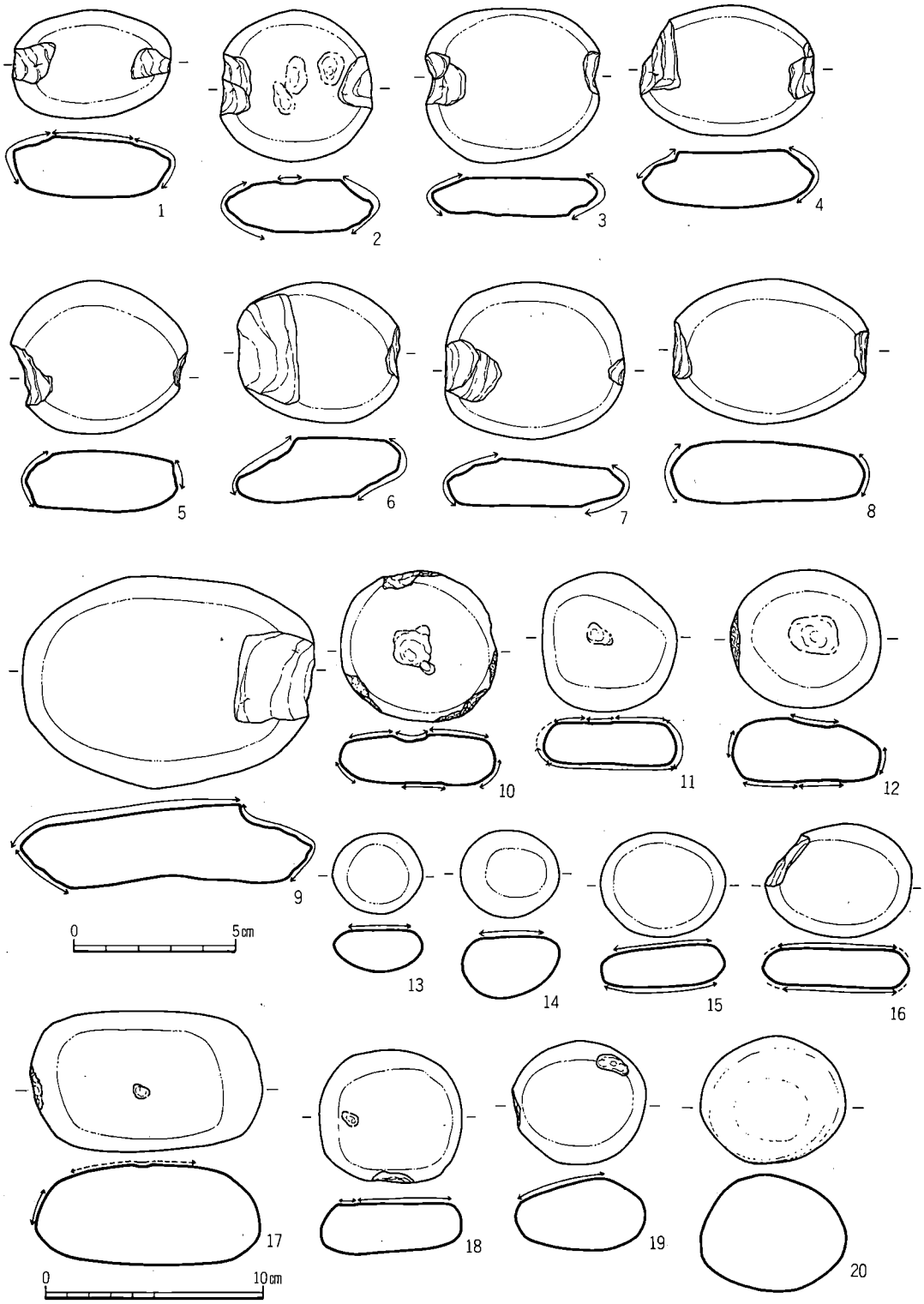


Fig. 79　その他の遺構出土石錘・凹石・磨石実測図（1～9は1/2，他は1/3）

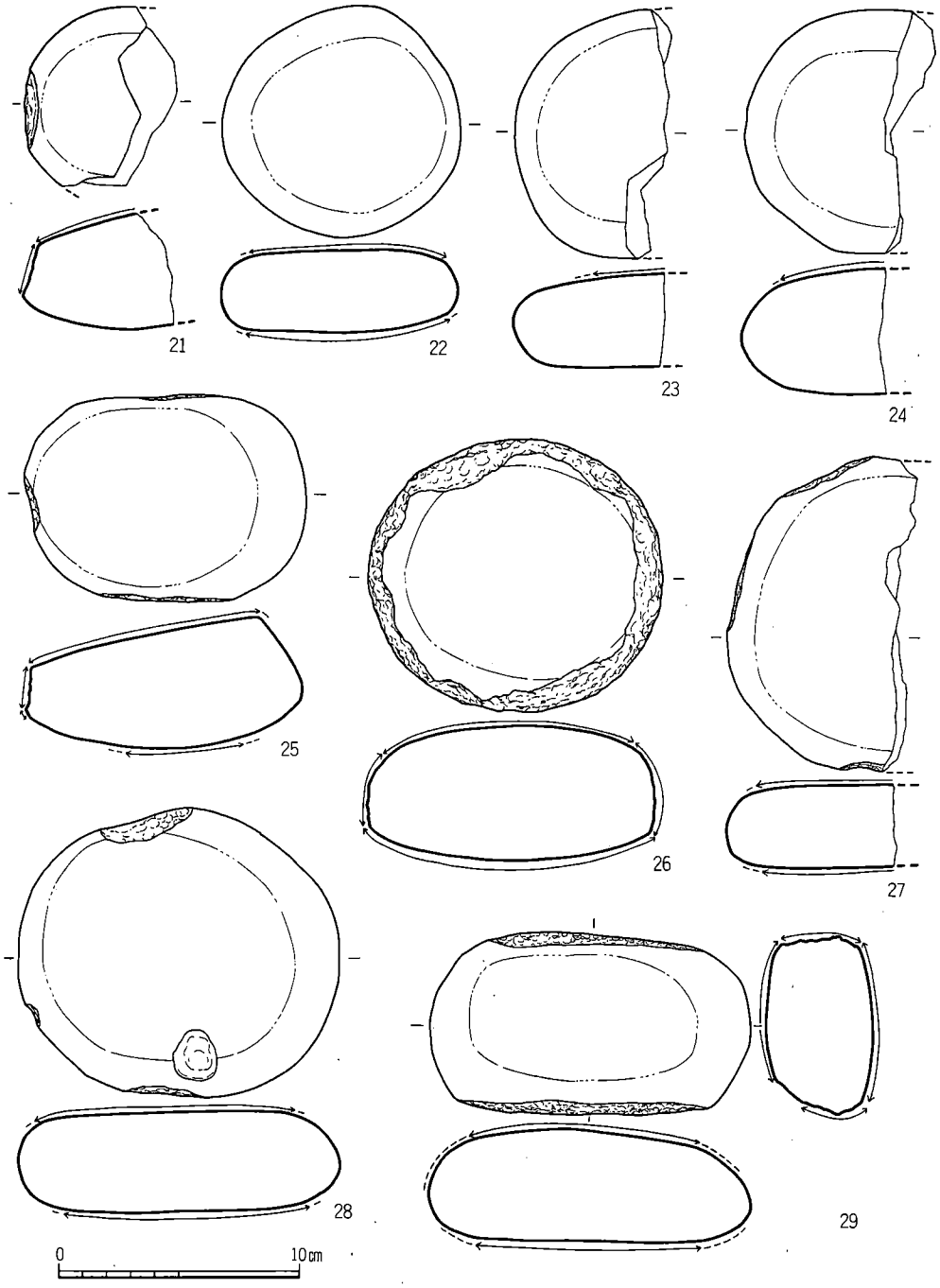


Fig. 80　その他の遺構出土磨石実測図（1/3）

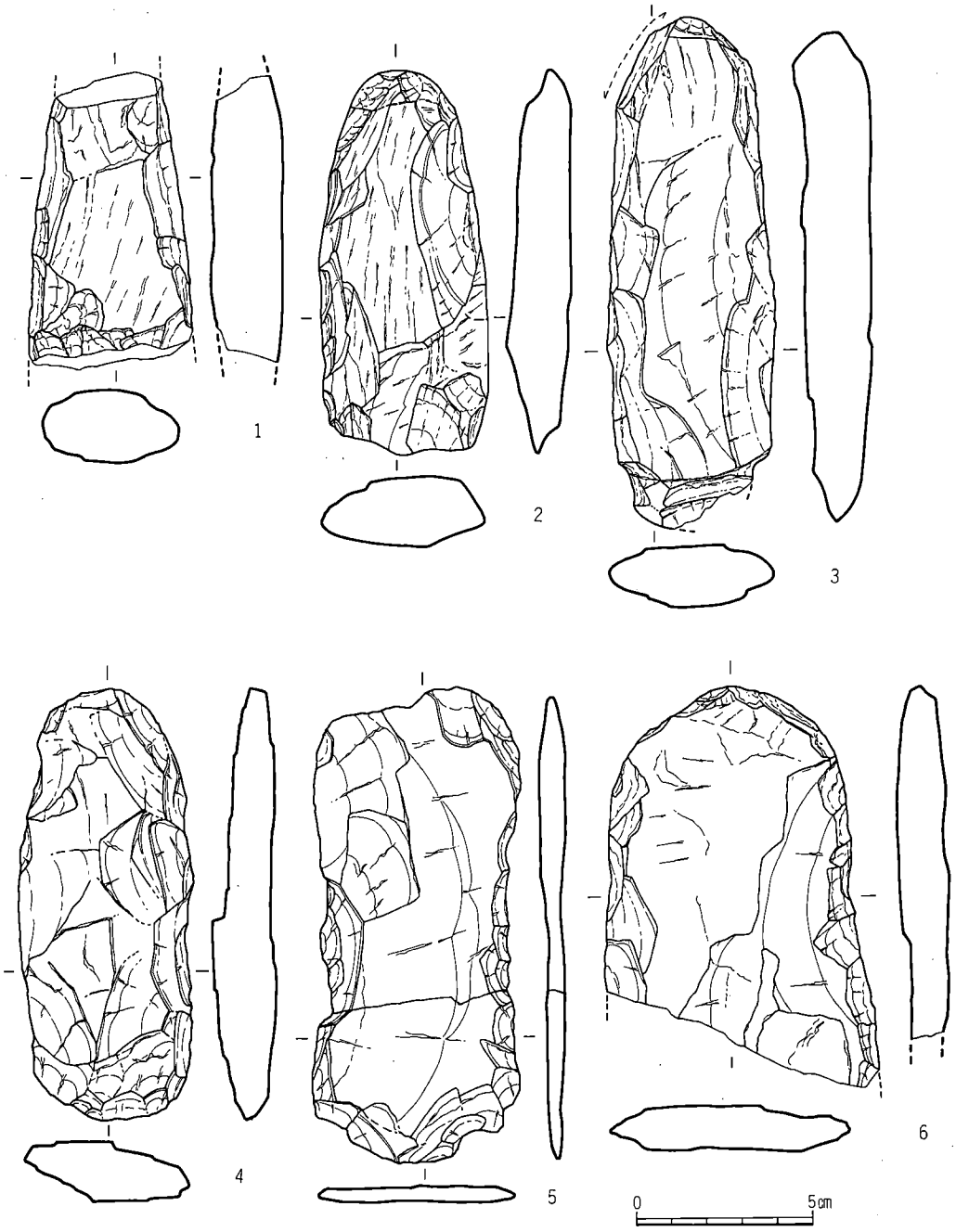


Fig. 81　その他の遺構出土打製石斧実測図（1/2）

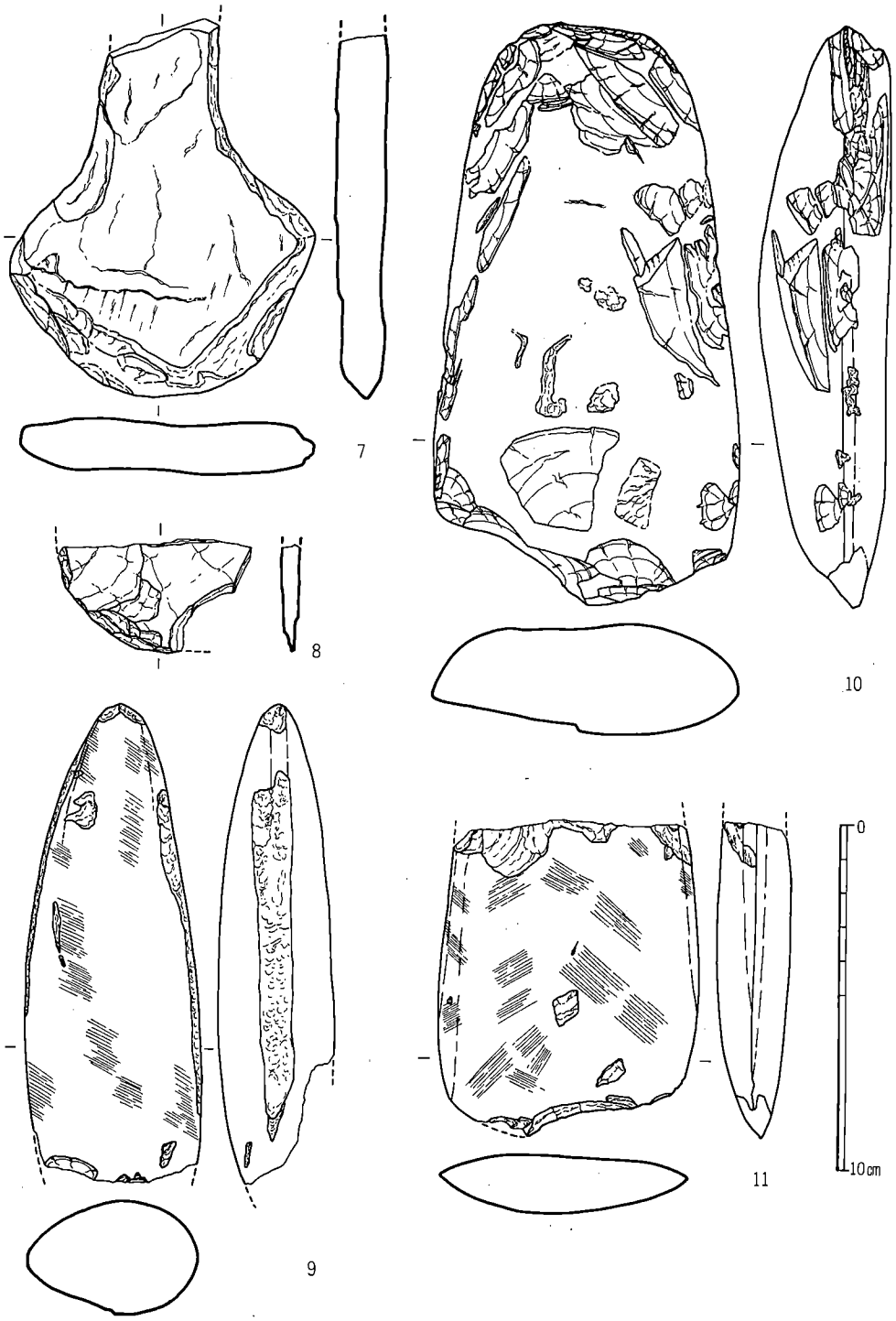


Fig. 82　その他の遺構出土打製・磨製石斧実測図（1/2）

1010.8g。29は第6号住居跡に混入していたもので，凝灰岩質河原石の上下面ともに使用したもの。長側面は敲打調整が両面とも施されているが，その意味は不明。長さ133㎜，幅75㎜，厚さ47㎜，重さ730.1g。

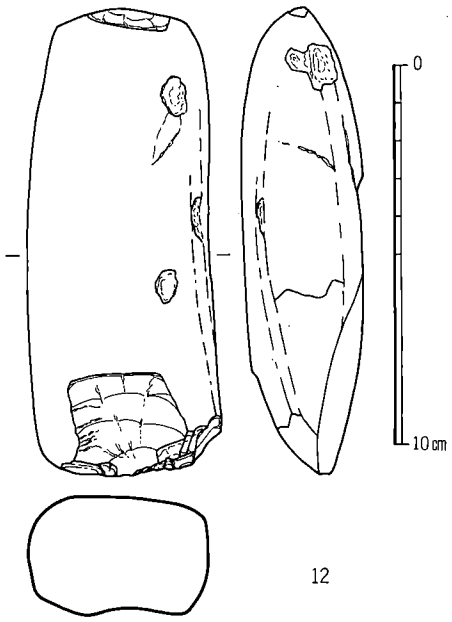


Fig. 83　その他の遺構出土磨製石斧実測図（1/2）

偏平打製石斧（Fig.81，Fig.82−7・8）

1はC3南側黄褐色包含層出土品で，黄茶色の縞状の堆積岩製。横剝ぎの剝離面を大きく残すが，本来磨製石斧であった可能性がある。全体に磨滅著しい。現存長83㎜，幅47㎜，厚さ21㎜，重さ129.4g。2はC1周溝内に混入していたもので，灰色に風化した玄武岩製。長さ119㎜，幅48㎜，厚さ19㎜，重さ136.2g。3は第4号土壙⑨で，緑色片岩製。横剝ぎ素材で，基部左側には礫面を残す。長さ144㎜，幅48㎜，厚さ22㎜，重さ203.3g。4はP798出土品で，黄白色の粘板岩質石材を用いる。横剝ぎ素材を用い，風化が著しい。長さ124㎜，幅50㎜，厚さ18㎜，重さ111.1g。5は第6号土壙に混入していたもので，緑色片岩製。薄手で横剝ぎ素材を用い，縁辺に細調整を加えただけのもの。長さ136㎜，幅59㎜，厚さ7㎜，重さ84.2g。6はP255出土品で，緑色片岩製。長さ115㎜，幅78㎜，厚さ15㎜，重さ182.9g。7は第10号住居跡P1に混入していたもので，緑色片岩製。長さ109㎜，幅88㎜，厚さ15㎜，重さ184.3g。8は表採品で，緑色片岩製。薄手で他器種の可能性もある。長さ33㎜，幅55㎜，厚さ5㎜，重さ12.5gとなる。

磨製石斧（Fig.82−9〜11，Fig.83）

9は第15号住居跡に混入していたもので，灰緑白色の硬質石材を用いる。側面には敲打痕を残すが他は丁寧に研磨する。長さ138㎜，幅51㎜，厚さ33㎜，重さ335.4g。10は第10号土壙に混入していたもので，安山岩製。調整剝離時の凹部をかなり残す。大型石斧で，刃は片寄り気味になるものと思われる。現存長167㎜，幅88㎜，厚さ37㎜，重さ703.9g。11は暗褐色包含層出土品で，灰緑色の蛇紋岩系の石材を用いている。刃部は1回欠損後に再び使用している。裏面下半には敲打面が残る。長さ91㎜，幅74㎜，厚さ21㎜，重さ194.3gとなる。12は第11号住居跡の西隣の暗褐色包含層出土品で，灰緑色の硬質砂岩製。風化著しくザラつく。右側面の刃

部寄り下半は砥石に使ったのか，かなり滑らか。長さ123㎜，幅49㎜，厚さ31㎜，重さ331.9gとなる。

Ⅳ　弥生～歴史時代の遺構と遺物

A　竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（Fig.88，PL.13）

Ⅰ区中央に位置する円形住居で，北側で第2号土壙に切られ，南半は畑の開削により段落ちとなっており，住居壁が残らない。直径664㎝，残存深さ28㎝で，面積は34.6㎡と推定される。中央に浅い土壙があり，その両端に心々距離166㎝を保って細身の2柱穴を有する松菊里型住居である。床面には5個の主柱穴（図中▲印）がまわり，更に壁ライン外側に接して略一定間隔で壁ライン柱穴（図中■印）がめぐる。これらの中央2柱穴・5主柱穴・壁ライン柱穴等がすべて揃っているのは，珍しく，いずれも40㎝前後と深く，この住居の特徴である。なお，中央2柱穴のうち南東側の柱穴発掘時に，この柱穴は中央土壙埋没後に掘り込まれたことを確認した。このことは，粕屋町江辻遺跡の夜臼新期松菊里型住居の一軒においても確認したことがあり，中央土壙と中央2柱穴の性格を解明する手懸りとなろう。

出土遺物（Fig.89）

甕（1・2・4）1は復原口径24.8㎝の，折れ曲がるような形状の如意形口縁類。外面は粗い縦ハケ，内面は丁寧なナデ調整。焼成良好で暗褐色～黄褐色をなす。外面には煤が付着する。2は胴部外面に1条の沈線を巡らす如意形口縁類で，外面は縦ハケ，口縁内面には横ハケ，以下内面は丁寧なナデ調整。焼成良好で茶褐色をなす。4は底径8.3㎝で，底部が充実した底外面中央が丸くくぼむ類。内外面ともに磨滅しているが，底内面には炭化物が付着している。焼成良好で暗茶褐色をなす。

壺（3）底径8.6㎝で，底外面全体が大きく上げ底状になる。内面は指オサエで凹凸が著しく，底外側面には縦ハケを施す。底内面には炭化物が付着している。焼成良好で，内面は暗褐色，外面は褐色をなす。

砥石（Fig.195-3）細粒砂岩製の偏平な中砥。表裏ともに使用されているが，表面には10～13㎜幅の条溝状痕跡が認められ，特殊なものの研磨に用いられたものと考えられる。現存長

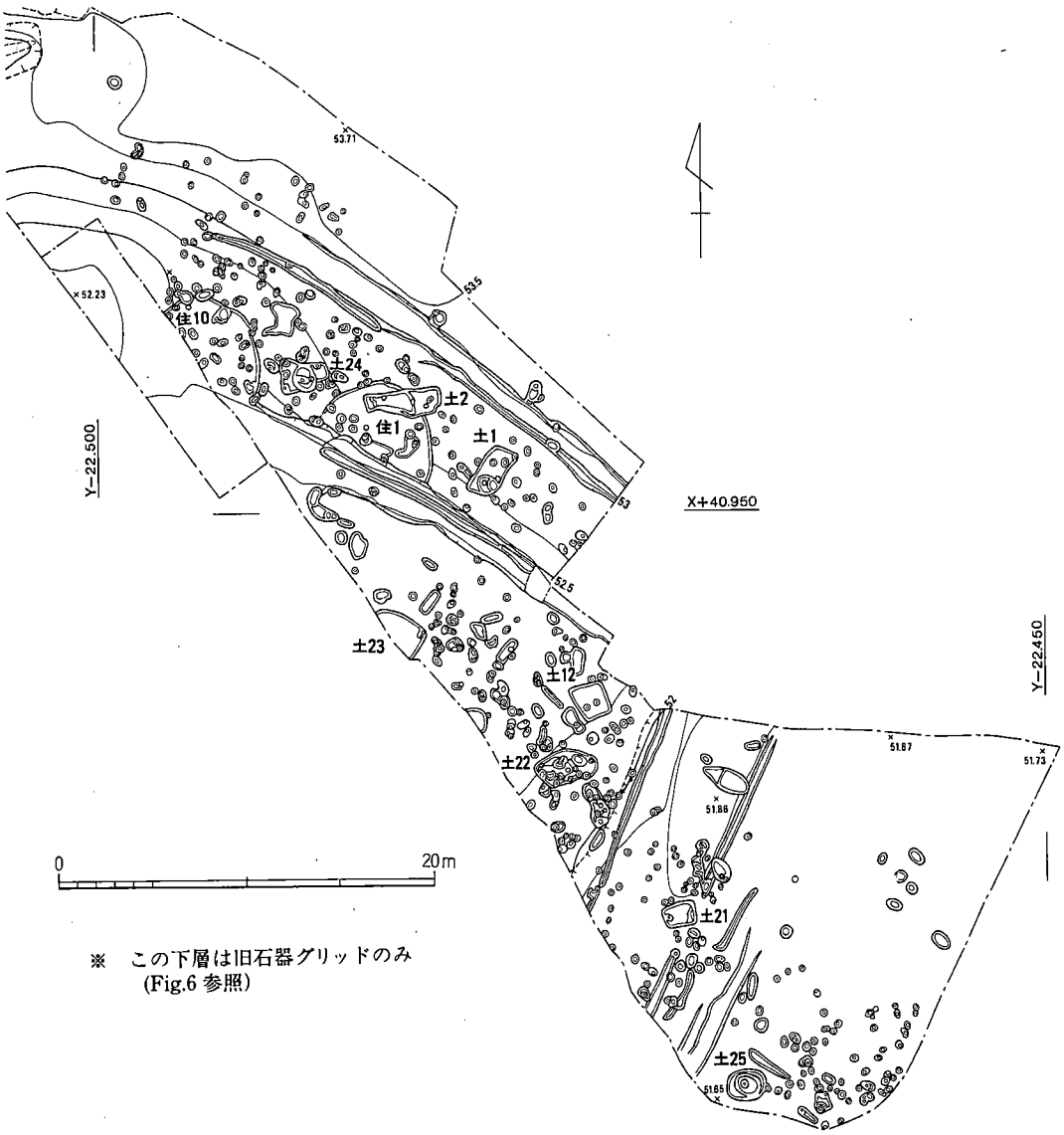


Fig. 84　I 区遺構配置図（上層）(1/400)

108㎜，幅93㎜，厚さ17㎜，重さ152.7g となる。

以上の出土遺物のうち，土器は弥生中期初葉のもので，当住居の時期を示している。住居の構造としては，変形５主柱穴の類だが，後述する第11号竪穴住居の裏返しプランに酷似する。両者の共通性が見出せる。松菊里型住居という視点からみると，主柱穴が５個と少なめで，中央２柱穴が深く，更に壁ライン柱穴を有することから，新期松菊里型住居と発展松菊里型住居

Fig. 85　Ⅱ区遺構配置図（上層）(1/400)

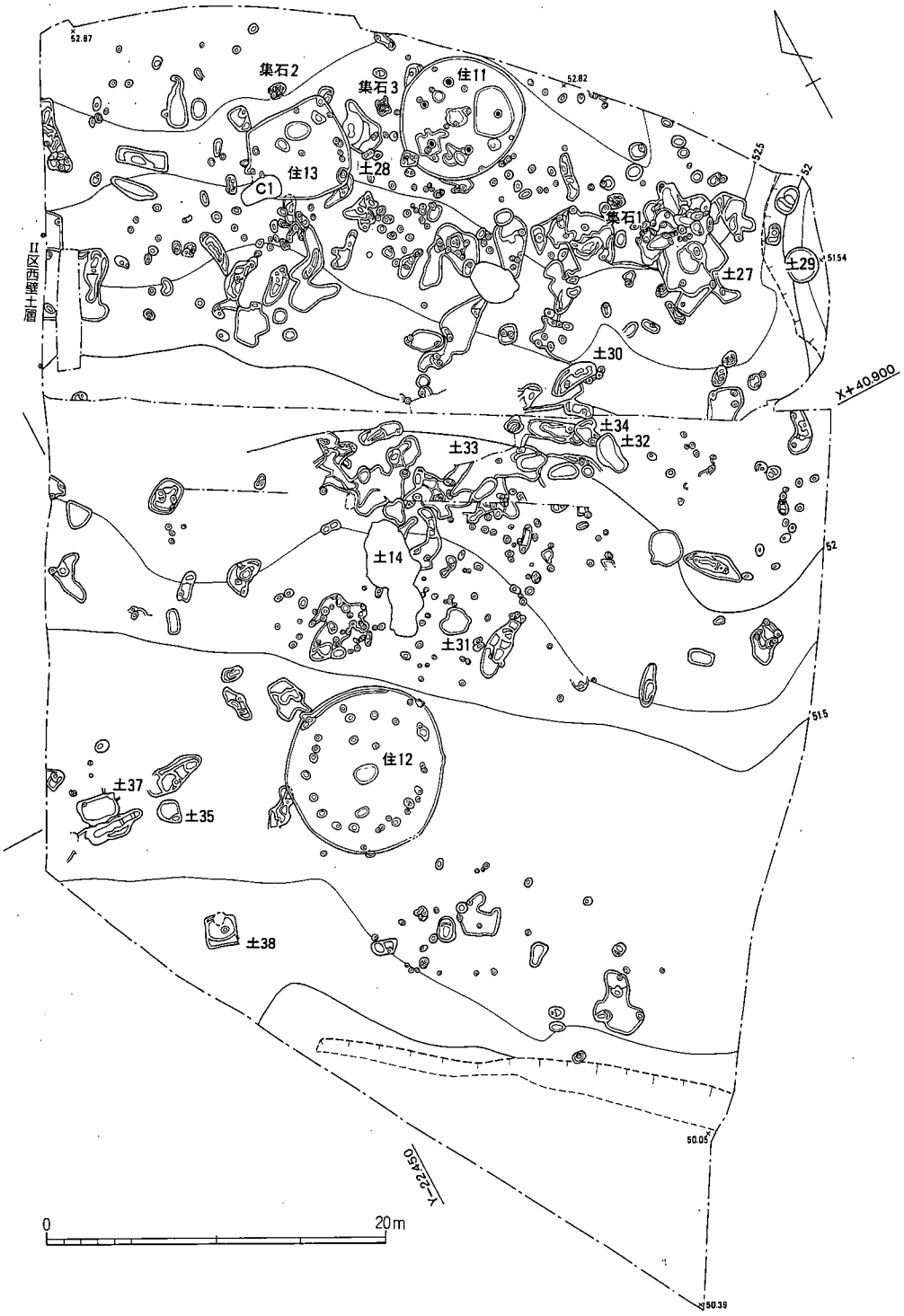


Fig. 86　II区遺構配置図（下層）(1/400)

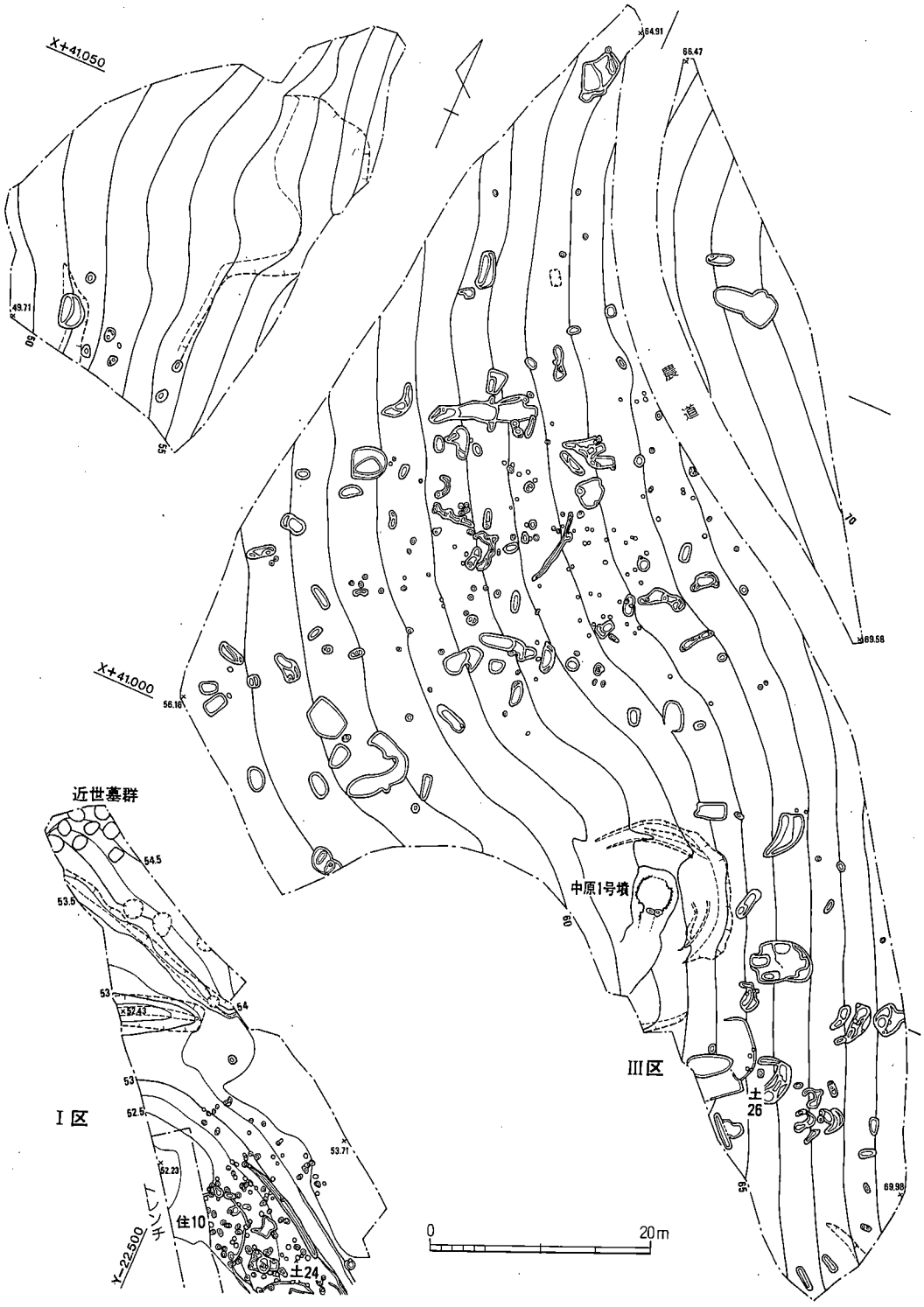


Fig. 87　Ⅲ区・Ⅰ区北西端部遺構配置図（1/600）

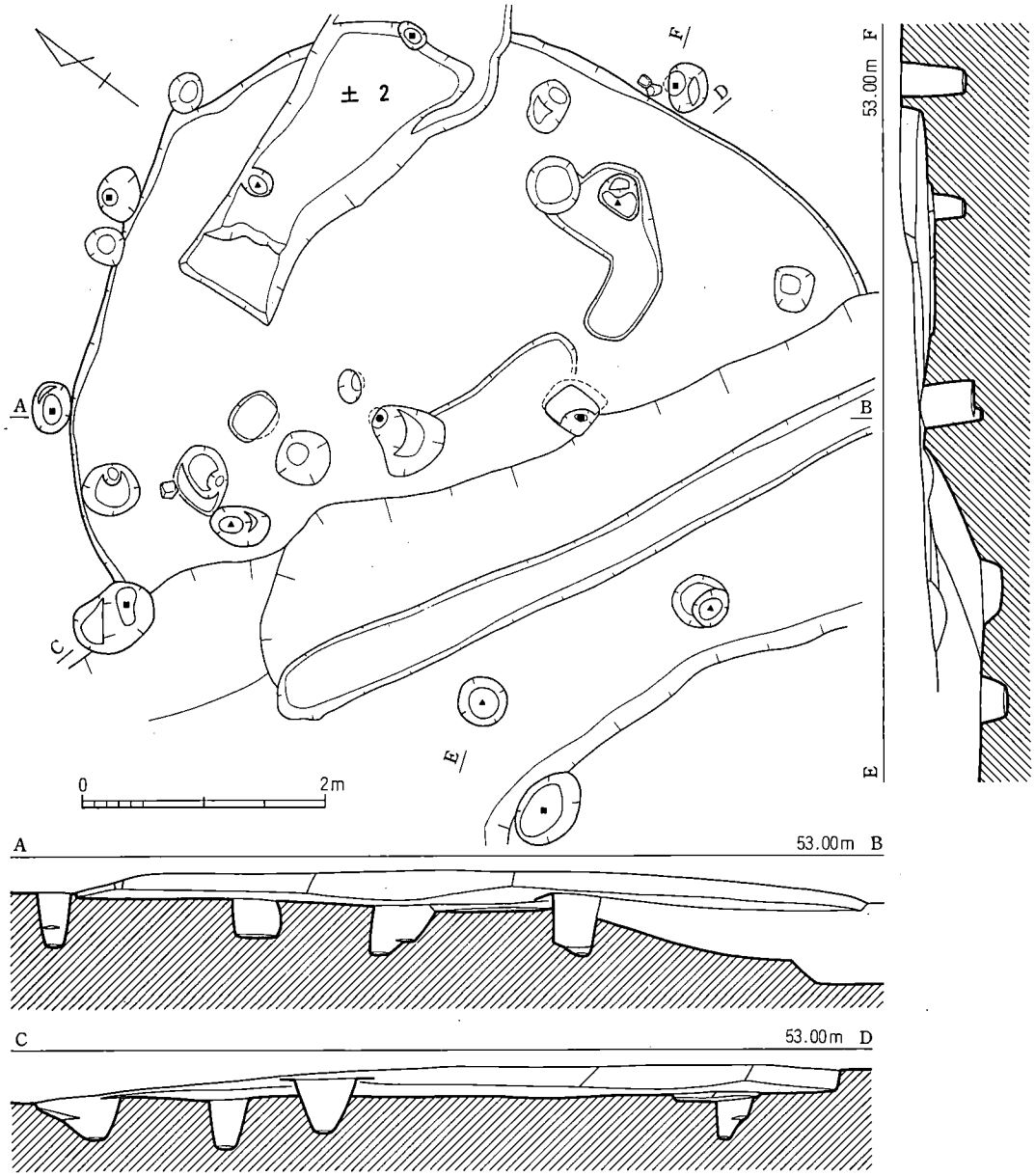


Fig. 88　第1号住居跡実測図（1/60）

の中間状態を示している。時期からみて，形態的には古い様相を残したままこの地で存続した後，この時期になって発展型に接触して，遅ればせ乍ら発展型へ移行しようとした漸移的様相を持つものと理解しておきたい。

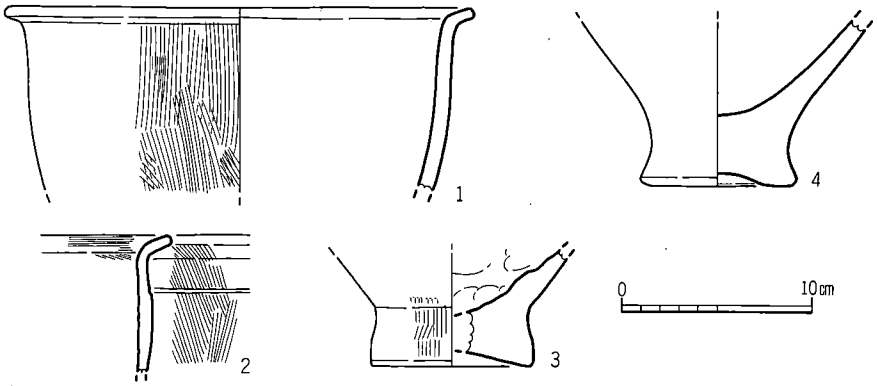


Fig. 89　第１号住居跡出土土器実測図（1/4）

第２号竪穴住居跡（Fig.90，PL.13）

Ⅱ区北半の東端に位置する小型住居である。南北360cm，東西275～306cmの長方形プランをなし，面積は約10.5㎡となる。床面はほぼ平坦で，炉やカマド等は確認できなかった。柱穴は，南北両壁際に各１個検出したが，主軸に合わず，当住居に伴うものとは確定し難い。

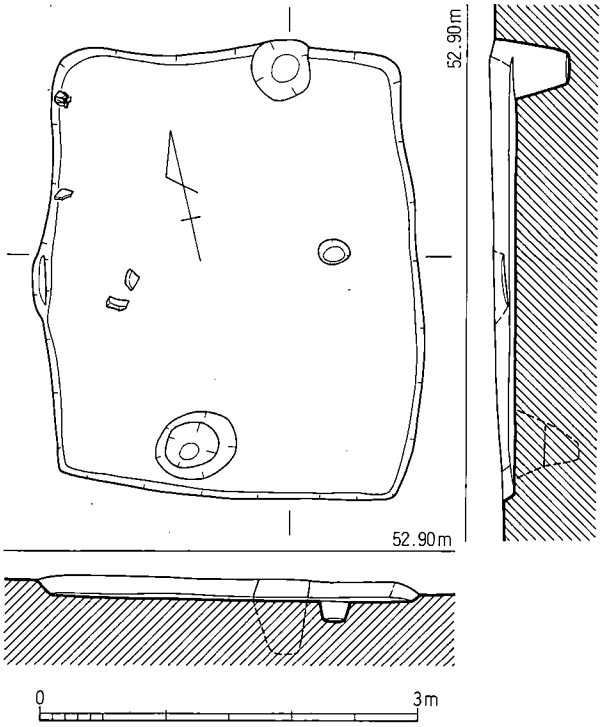


Fig. 90　第２号住居跡実測図（1/60）

出土土師器（Fig.91）

甕（１）復原口径23cmで，丸く張る胴部から大きく外反屈曲して開く口縁となる。胴部内面はヘラ削り上げ，外面は縦ハケを施す。焼成良好で黄茶褐色をなす。

把手（２）断面がかなり偏平で，長く丸みを帯びて上方へ伸びる類である。外面は指押圧による仕上げで凹凸が多い。焼成良好で淡橙色をなす。

以上の第２号住居跡は，第４・８・17・19号住居跡に規模が酷似する小型住居であり，主軸方向も近隣の第５～７・14・15号住居跡と同じであり，同一グループとして併存していたと考えてよかろう。出土土器や以上の諸点から，当住

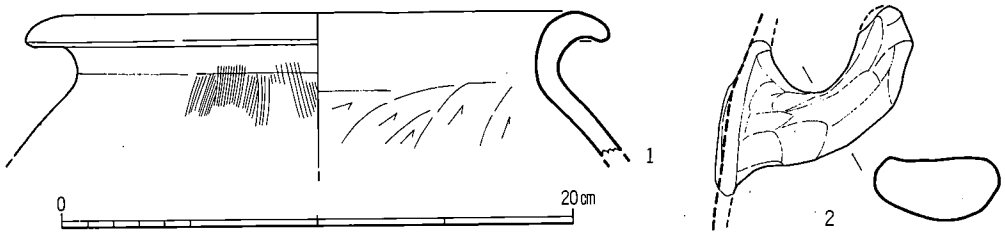


Fig. 91　第２号住居跡出土土器実測図（1/3）

居は７Ｃ後半を中心とする時期の特殊小型住居であったと位置付けられる。

第３号竪穴住居跡（Fig.92・93, PL.14・15・22）

Ⅱ区の南半中央に位置する，大型方形住居である。南辺660cm，北辺680cm，東辺544cm，西辺640cmと東辺が短い台形プランをなし，面積が39.7㎡にもなる。主柱穴は４本で，南北柱間心々距離が330cm，東西が300cmとなり，南北方向に一尺分長くなっている。この４柱は，住居の西側に片寄って設けられている。北壁際のカマドも，この４柱の中軸線上に築かれており，その結果，住居の中心ではなく西側に寄った位置となっている。各柱穴は大きく，深さ60～70cmと深くしっかりした類であり，この大きな住居の上屋を支えるにふさわしいものである。住居内の東側の２主柱穴と東壁間のスペースが広くとられているのは，類例を知らないが，何らかの特別な空間利用を目的とした構造をとったものと考えられよう。床面は全体に貼床が施され，その下層面は，南・西・北壁に沿った内側が掘り込まれており，中央部と東辺側には掘り込みはみられない。

カマド（Fig.93, PL.14）

北壁西寄りに設けられたカマドは，大型住居にふさわしい大きなもので，カマド内面基底最大幅が70cm弱もある。住居の貼床土の上から掘り込まれている。火床面以下の下層にはカマド作りに使用されている暗緑灰色粘質土（図中の11層）が焼土・炭と撹乱されて残っていた。左袖内には旧左袖の固く焼土化した内壁が残っており，造り直した袖には炭・焼土が多量に混入しており，右袖内にも旧右袖が短く残っていた。以上のことから，火床面は一面しか確認できなかったが，旧カマドとほぼ同位置に，下層まで掘り直して新しくカマドが作り直されていることが明らかになった。カマド床面奥側に小穴が上・下層ともに検出されたが，支脚痕とするには火床部分から離れすぎて奥壁寄りすぎることから，否定的と考える。

出土遺物（Fig.94）

須恵器杯蓋（１）内側に返りを持つ類で，内外面とも回転ナデ調整を施す。焼成堅緻で暗い煉瓦色をなす。

須恵器皿（２）復原口径12.6cm，器高１cmとなる小型品。焼成堅緻で灰色をなす。内外面とも

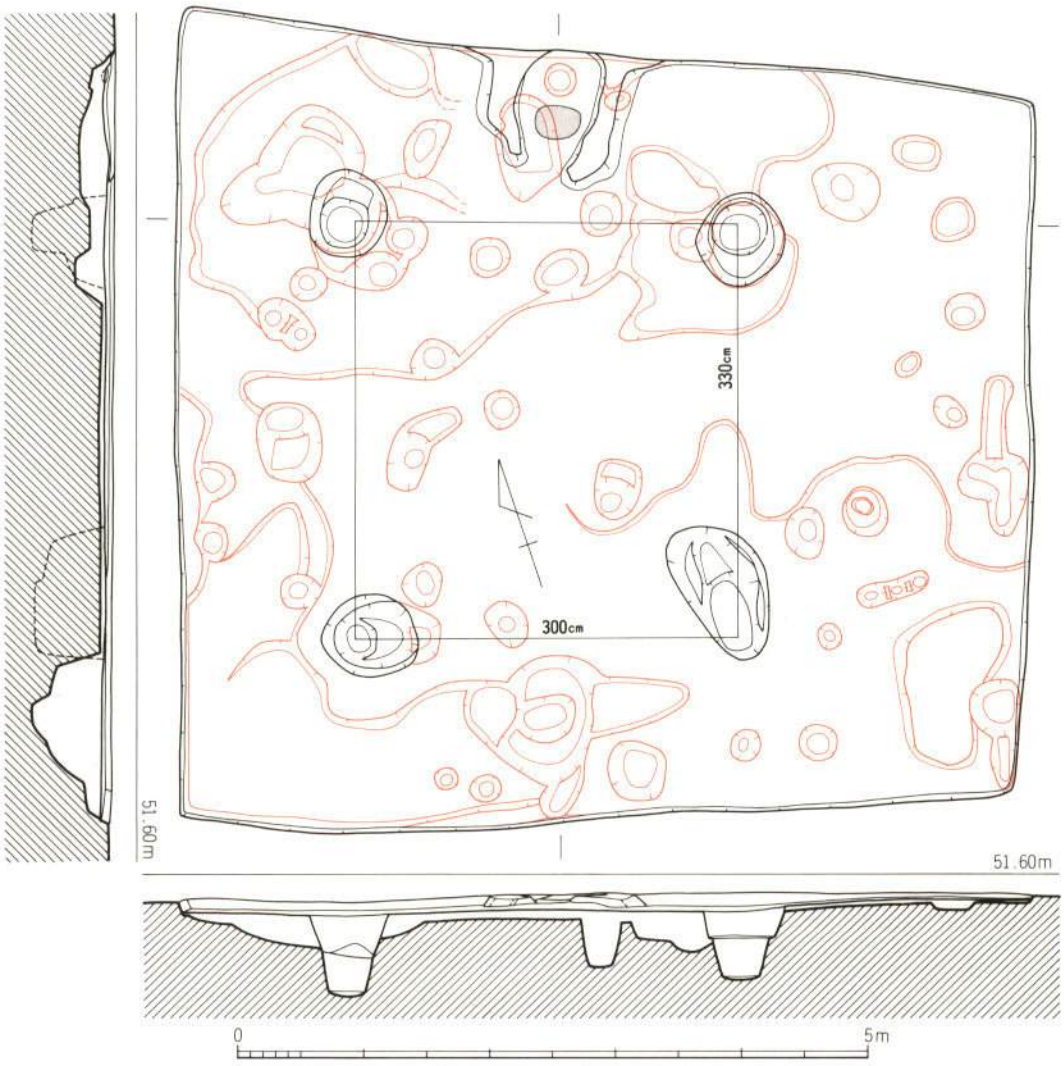


Fig. 92　第３号住居跡実測図（1/60）

に回転ナデ調整。

土師器杯（３・４）３は口径9.8cm，器高3.1cmで，底外面は手持ちヘラ削り，口縁内外面は横ナデ，内底面は丁寧なナデ仕上げ。胎土に雲母・赤褐色粒・細石英粒を僅かに含むが大旨精良である。焼成良好で暗黄茶褐色をなす。４は，図示したよりももっと深めになる可能性が強い。復原口径17.9cmで，器壁が厚く，内外面ともに磨滅しており調整不明。焼成良好で橙褐色をなす。

土錘（Fig.196−８）最大径2.2cm，現存長4.9cmの葉巻形類で，直径６mmの中心孔は片側に

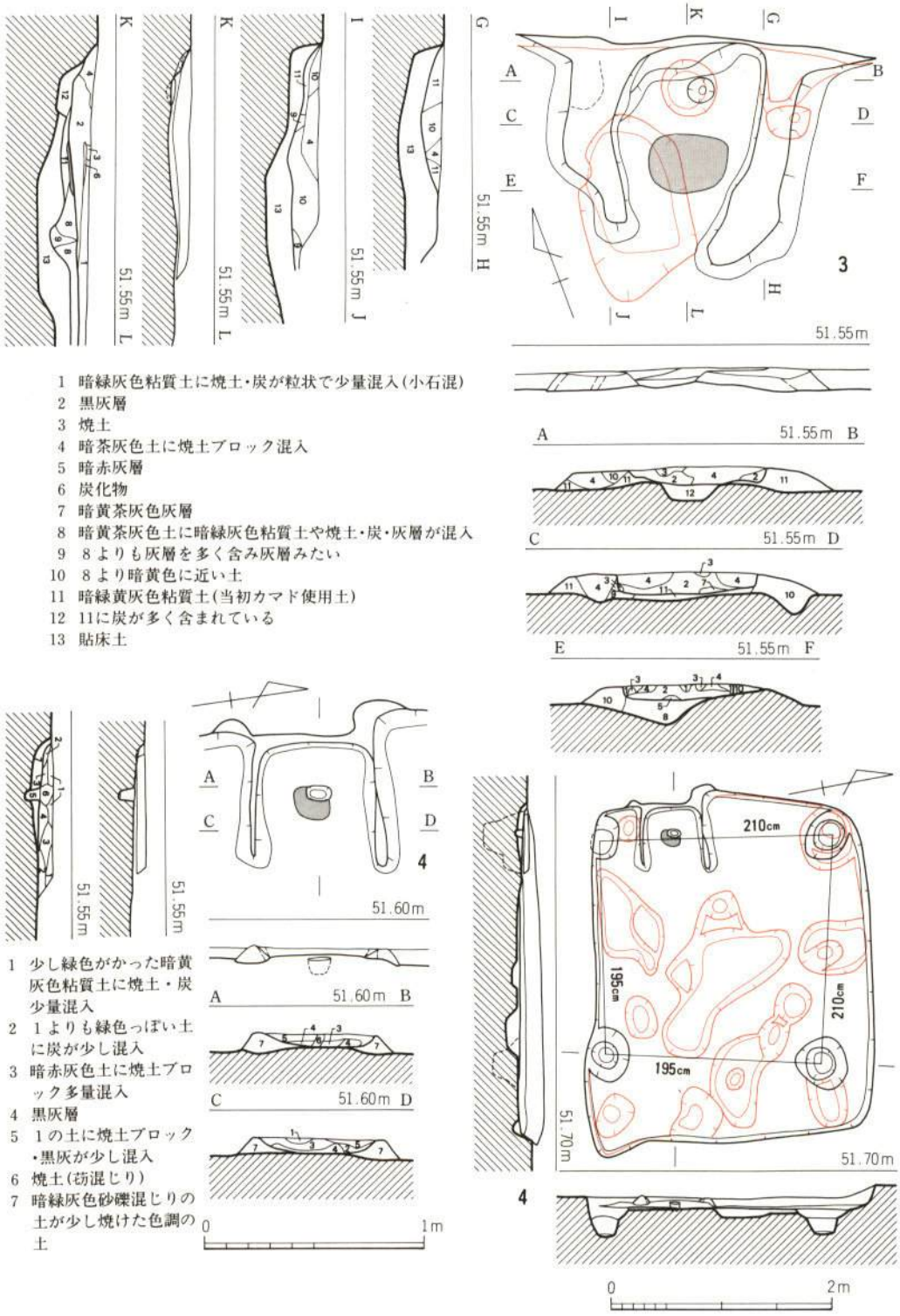


Fig. 93 第3号住居跡カマド・第4号住居跡実測図 (1/60, 1/30)

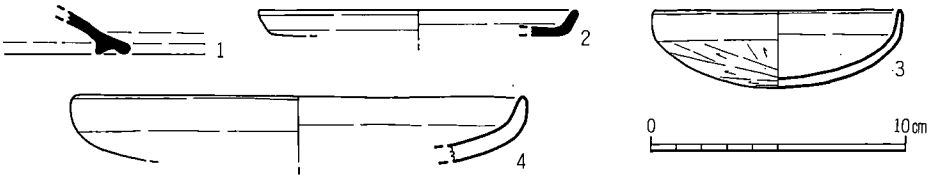


Fig. 94　第３号住居跡出土土器実測図（1/3）

寄っている。手捏ね的で，現存重量23.1g。大型類である。

以上の出土遺物からみて，当住居跡は７Ｃ後葉の年代が与えられる。遺跡中央に位置する大型特殊住居であったと考えられる。

第４号竪穴住居跡（Fig.93，PL.15・16）

Ⅱ区中央西側に位置する小型長方形住居である。本遺跡では珍しく，第18号住居跡とともにカマドを西壁に設ける類となる。東西が290～320cm，南北が225～262cmの規模で，面積はわずか7.4㎡となる。カマドもぐっと南西隅へ寄った位置に設けられるという異例さを示す。主柱穴は住居の北西・南西コーナーに接するものと，南壁に接したものと北東隅に近い位置のものとの４主柱穴となる。各柱穴心々距離は，北辺と西辺が210cm，南辺と東辺が195cmとなる。住居床面は下層に掘り込みがみられ，貼り床が施されている。掘り込みは中央と，その北・南・東側の壁寄りに小ピットの連続状になされている。

カマド（Fig.93，PL.16）

南西隅の至近に設けられ，同時に４主柱穴の中心軸上には当然位置せず，南西柱穴のすぐ脇に構築された異類である。内底幅45cmで，その中央に火床面があり，支脚抜き跡の小穴も確認した。残存していた袖の大部分は，地山の削り出し部分で，珍しい構造である。埋土の中から直径３～４cm大の土玉状のもの（暗褐色粘質土が焼土化して暗赤灰色になったもの）が10数個出土した。カマド造りに使用されたものかと思われる。

出土遺物のうち，実測に耐え得るものが無く，住居の時期を決定するのは困難だが，カマド方向が同じ第18号住居跡が７Ｃ後葉代と考えられることから，ほぼ同時期の小型異類住居かと推定されよう。

第５号竪穴住居跡（Fig.95，PL.17・18・19）

Ⅱ区の東端中央付近に位置する方形住居である。北側で当住居のカマドが第14号竪穴住居跡を切っている。当住居の北半は上に農道が走っていたため，最初南半部だけの調査を行い，農道を付け替えた後に，その下の住居北半を発掘したことにより，住居壁検出面に段差がついてしまった。住居の規模は南北440cm，東西462cmの中規模でも小さめの類となる。床面積は約

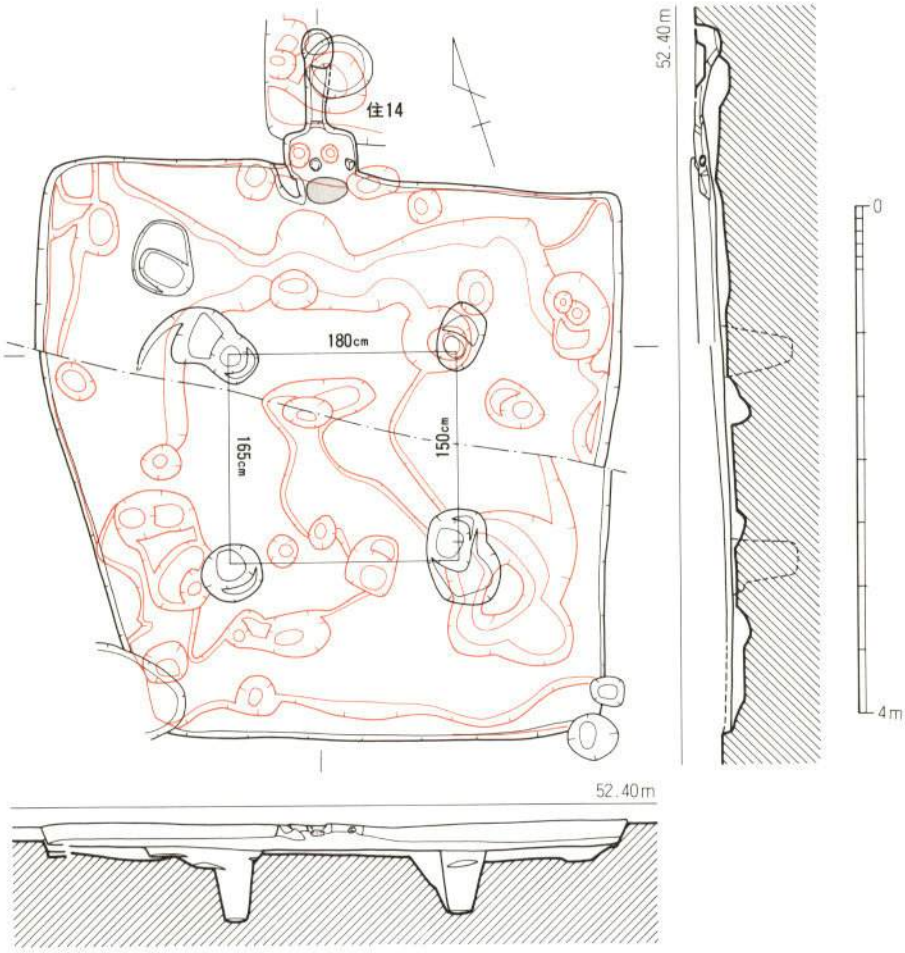


Fig. 95　第５号住居跡実測図（1/60）

20.3㎡。４主柱穴構造で，東西柱間６尺，南北柱間５・5.5尺（１尺＝30cm）となる。住居の床面は貼床構造となり，その下層掘り込みは，壁沿いに４周に巡っている。

カマド（Fig.96，PL.19）

住居の北壁中央より僅かに西寄りに設けられている。住居壁の外側へ方形の掘り込みを持つ類で，更に長い煙道を付けている。カマド袖は暗緑黄灰色粘質土を用いており，右袖は残らない。火床面から奥の方はだんだん高くなって行き，煙道のはじまり部分で最も高く，以後煙道の奥へ行くに従って逆に下がってゆく。煙道最奥部はピット状になる。カマド内底面幅は50cmで，支脚はその抜き跡すら検出できなかった。

出土土器（Fig.97）

須恵器杯蓋（１）当住居の，北半出土のもので，径14.8cm，返り部端径12.5cm，器高2.4cmと

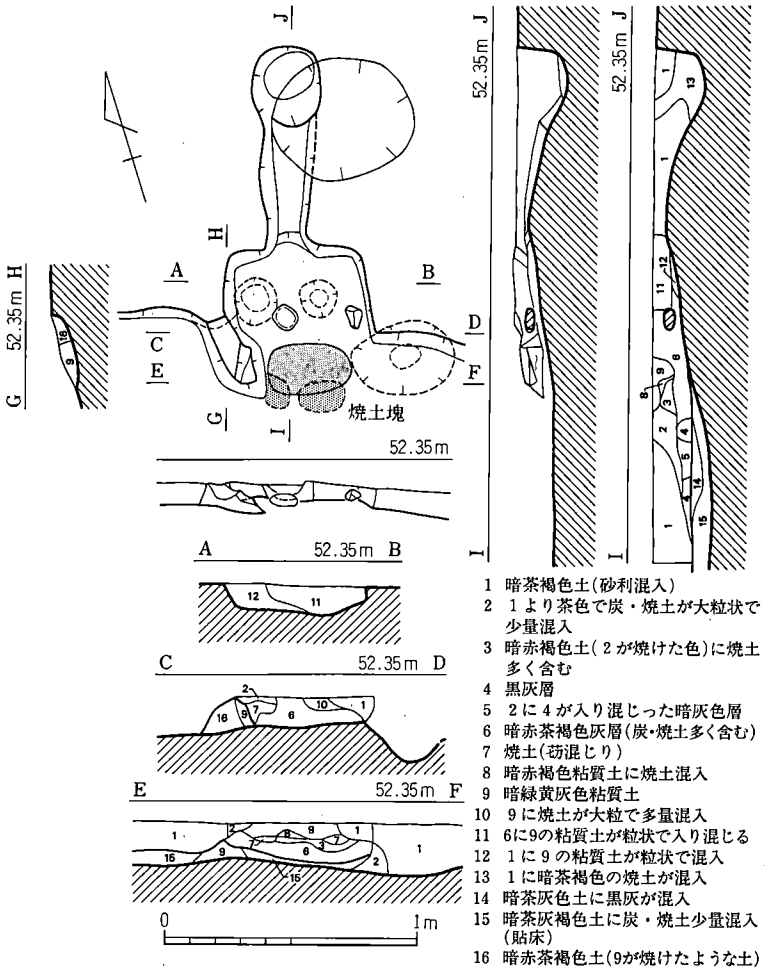


Fig. 96　第5号住居跡カマド実測図（1/30）

なる。天井外面は回転ヘラ削り，内面はナデツケ調整。焼成堅緻で灰色をなす。

土師器杯（2～5）2は床面下出土品で，口径14.1cm。体部外面下半は削り痕あり。細砂少量含み，焼成良好で白黄茶色をなす。3は北半部からの出土品で，内外磨滅。焼成良好で橙褐色をなす。4は床面下出土品で，体部外面下半は手持ちヘラ削りを施す。他は横ナデ。焼成良好で橙褐～褐色をなす。5も床面下出土品で，内底面はナデツケ，外面磨滅。焼成良好で白黄茶色をなす。

土師器甕（8～10）8は口径31.1cmで北半部出土品。口唇部が外折する特徴を示す。口縁内外横ナデ，胴部内外面ともに磨滅。焼成良好で黄褐色をなす。5C代のものの混入品であろう。9は北半部出土品で，口径35cm。胴部内面は磨滅。焼成良好で内面は淡茶褐色，外面は橙褐色をなす。10は口径36.4cmで，北半部からの出土品。胴部内外面はかなり磨滅。焼成良好で橙褐

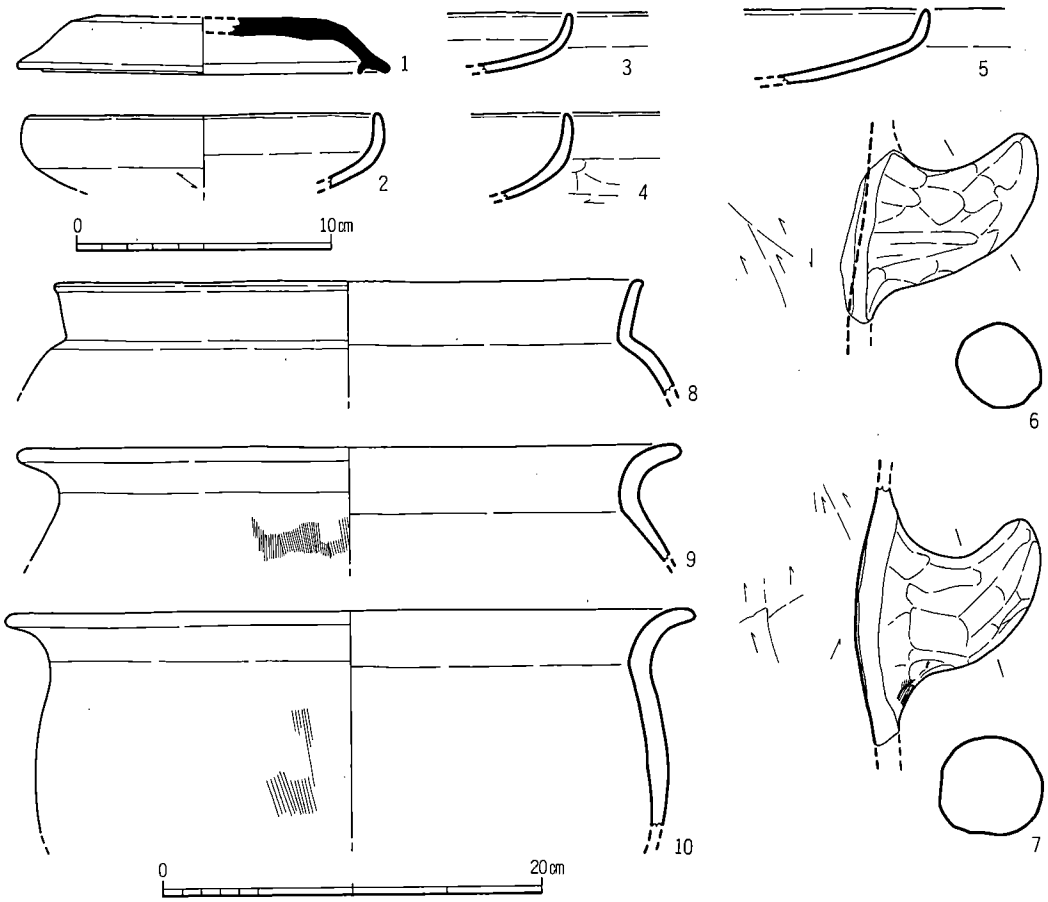


Fig. 97　第５号住居跡出土土器実測図（１～７は1/3，８～10は1/4）

色をなす。胴部外面には煤が付着。

土師器把手（６・７）６は断面の丸い牛角状把手。内面はヘラ削り調整を施している。焼成良好で黄褐色をなす。７は内面ヘラ削りで，断面がほぼ丸い牛角状把手。淡茶褐色をなす。外面下端にハケが施されている。

以上の出土土器からみて，８以外の土器の示す７Ｃ後葉代が当住居跡の時期とされよう。周辺の主軸方向を同じくする竪穴住居群とほぼ同時期であり，矛盾は無い。規模が小さめであることは，住居の施設としての性格，もしくは居住する人の社会的性格の違いのいずれかの理由によるものであろう。

第６号竪穴住居跡（Fig.98，PL.20・21・22）

Ⅱ区の中央よりやや北寄りに位置する方形住居跡である。東側で第６号土壙を切る。北壁際

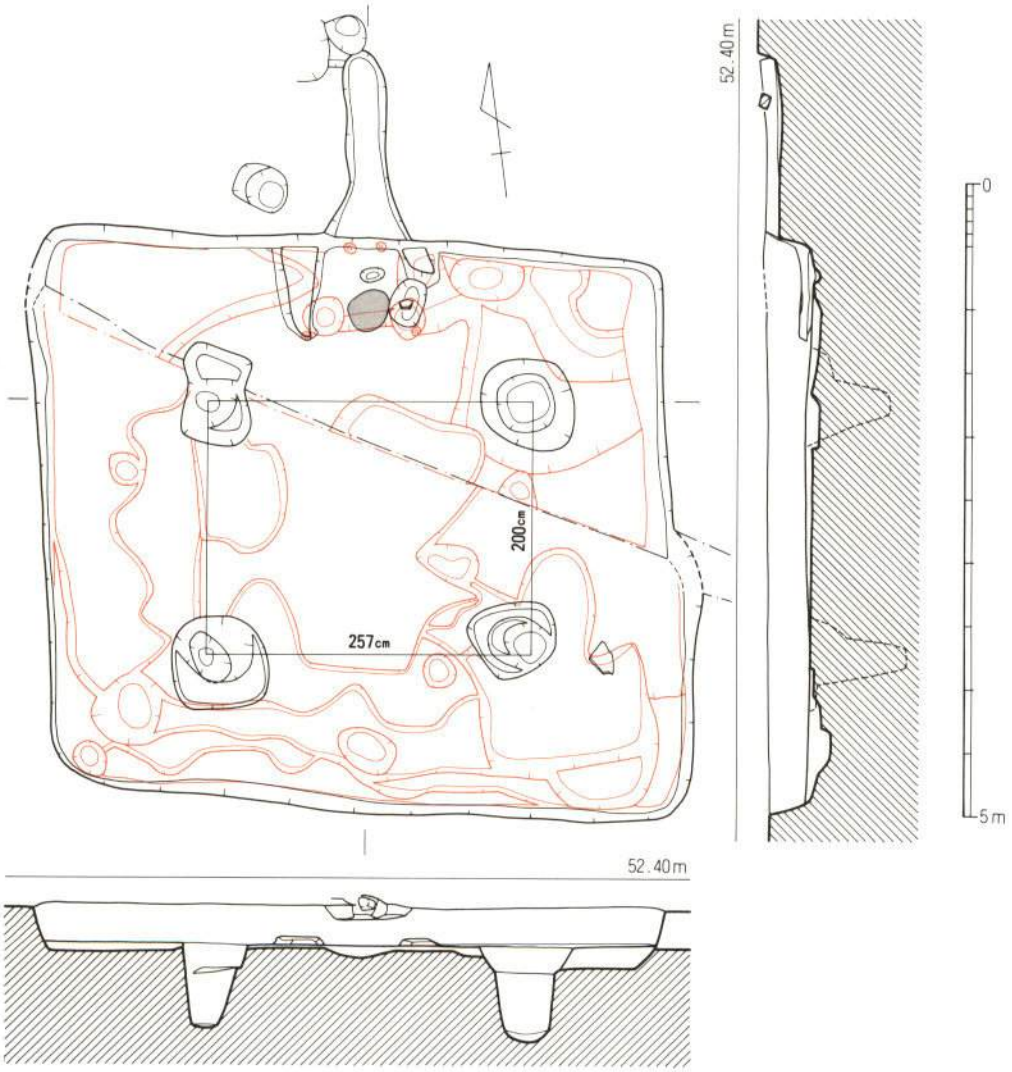


Fig. 98　第6号住居跡実測図（1/60）

中央に煙道の長いカマドを持ち，横長の4主柱配置となる類である。規模は南北に446cm，東西に508cm，面積は22.7㎡となる中規模類。4主柱穴は，すべて70～80cmと深くしっかりしている。柱間心々距離は東西257cm（28.6cm尺で8尺）南北200cm（同7尺）となる。床面は貼床構造で，下層の掘込みは西壁沿いと南壁沿いに明瞭に確認できた。なお，住居全体の平面形は，北西隅と南北隅がやや鋭角となる平行四辺形をなす。

カマド（Fig.99，PL.21）

北壁中央に設けられていて，両袖が残る。壁外へ掘り込む類ではなく，火床面は一面のみ。

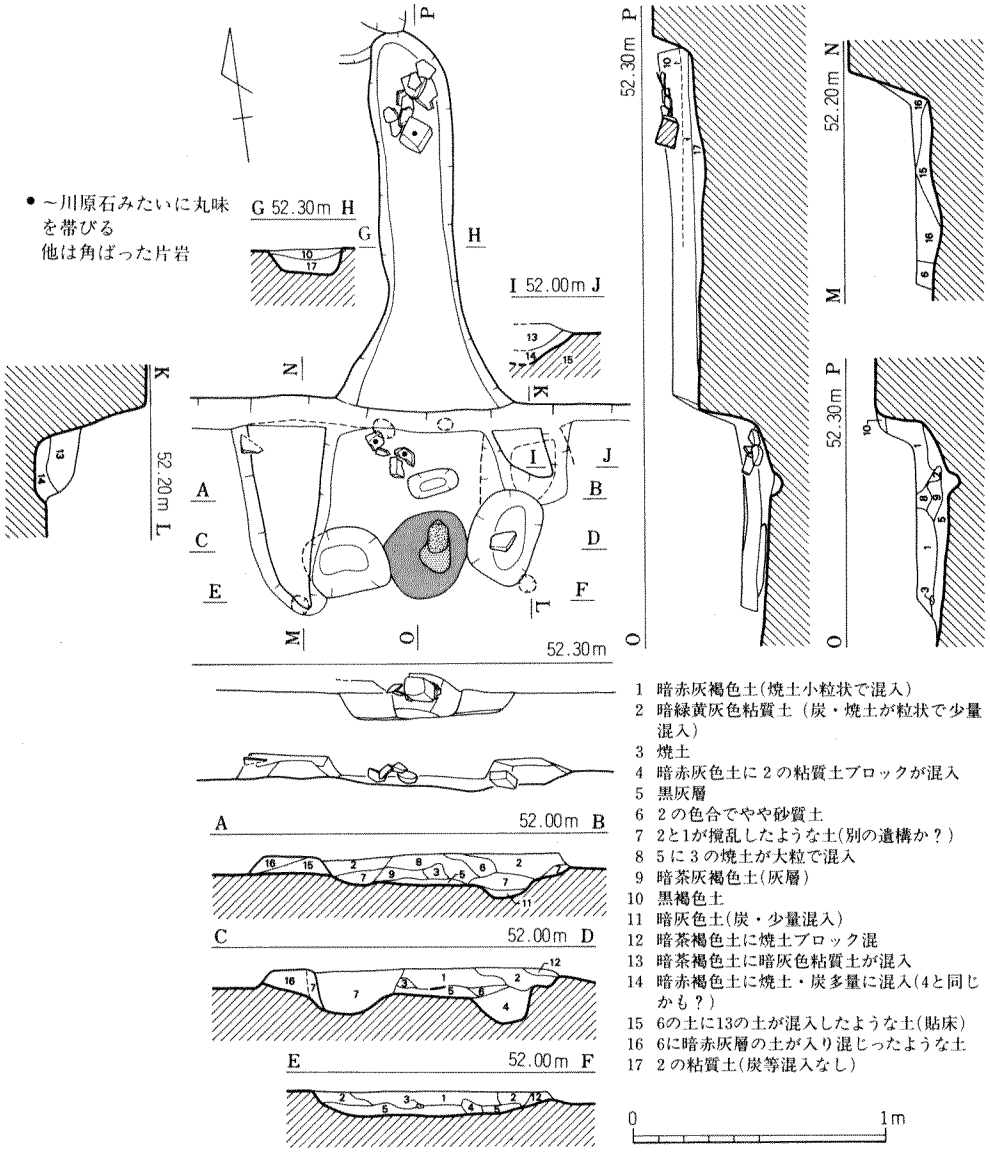


Fig. 99　第６号住居跡カマド実測図（1/30）

壁と火床の中間に小穴がみられ，支脚抜き跡かと思われる。火床面中央の上層中から骨片が多く集中して出土した。鳥獣のものか。両袖先端部とカマド奥壁面に２個，計４個の小杭痕のような小穴が最下層で検出された。奥壁際の２穴は杭が北へぐっと傾けて打ち込まれたように斜めの穴で，深さは6.5cmと2.5cm，両袖先端の２穴はいずれも垂直に打ち込まれたようで，深さは６cmと7.5cmとなる。カマド基底内幅は65cmとなる。煙道は外方へ145cmまで延びており，カ

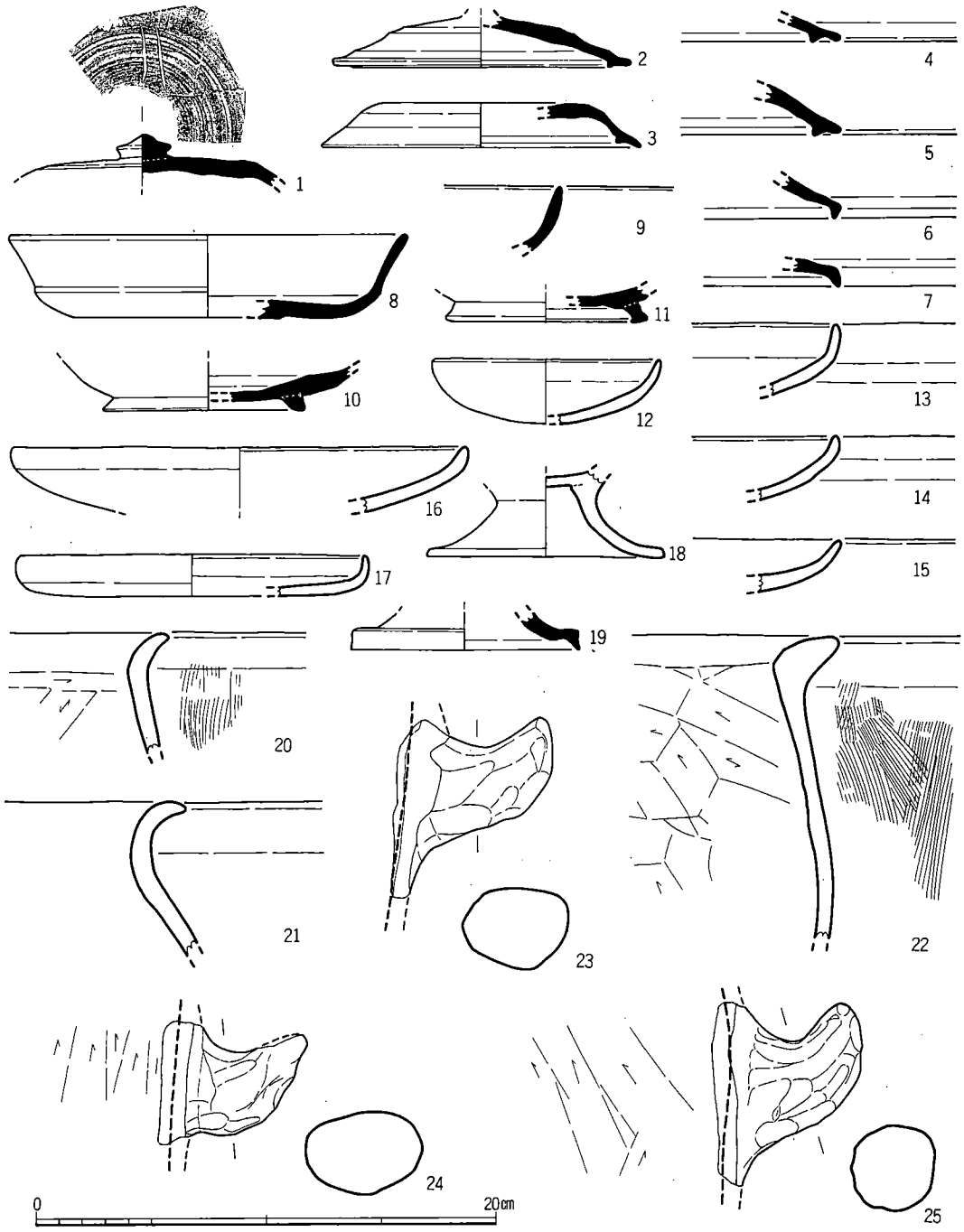


Fig. 100　第６号住居跡出土土器実測図（その１）(1/3)

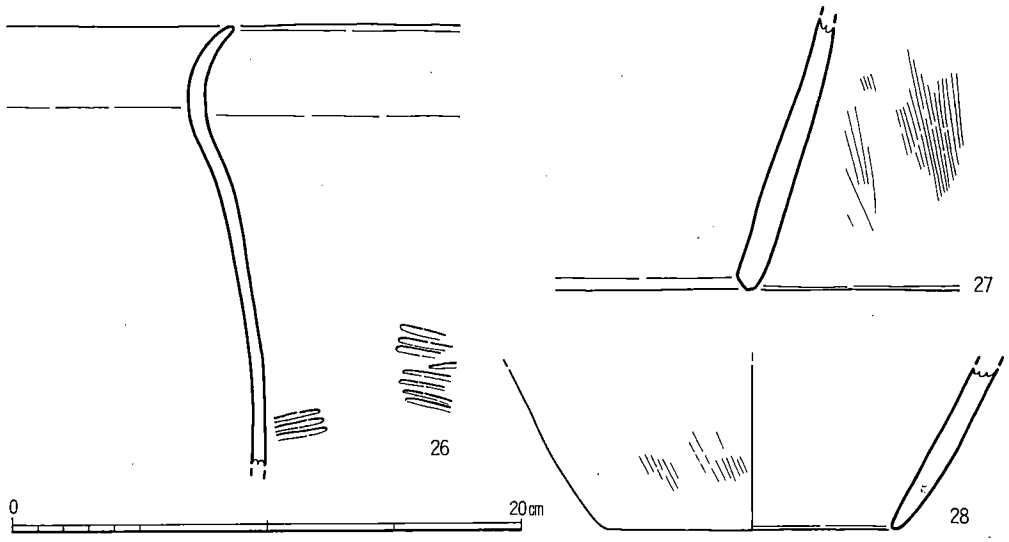


Fig. 101　第6号住居跡出土土器実測図（その2）(1/3)

マド底面から25cm上方で水平に延びる。煙道北端には，土師器甕（Fig.100-22）が投棄されていた。

出土遺物（Fig.100・101）

須恵器杯蓋（1～7）1は下層出土品で擬宝珠形撮を付ける。天井内面はナデツケ，外面には2本平行線のヘラ記号がみられる。焼成堅緻で灰色をなす。2は返り端部径11cmで，外面は灰かぶり，内面中央付近はナデツケ。焼成堅緻で内面は青灰色，外面は灰褐色をなす。3は返り端部径11.8cmで，極めて短く矮化した返り部となる。焼成堅緻で内面は灰色，外面は黒灰色をなす。4は内外面ともに回転ナデで，焼成堅緻で内外面ともに淡灰色をなす。5は内外面ともに磨滅しており，生焼け品で黄灰褐色をなす。6は鳥嘴状口縁類で，焼成堅緻。内面は灰色，外面は暗灰色をなす。7はやや長めの鳥嘴状口縁で，内外面ともに回転ナデ調整。焼成やや甘く，内面は灰色，外面は淡灰色をなす。

須恵器杯身（9～11）9は内外面回転ナデで，細砂含み，焼成堅緻で内面は灰色，外面は黒灰色をなす。10は径8.8cmの低いが外方へ踏ん張った高台を付ける。内外磨滅。生焼けで灰黄色をなす。11は径8.8cmの，内外端が小さく突出する癖のある強く踏ん張った高台を付ける。内底面と底外面中央はナデツケ，高台周辺は回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。

須恵器高杯（8・19）8は復原口径17.4cm，杯部高3.6cmで，体部下半に段を作る。内底面はナデツケ，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で内面は赤茶色，外面は暗赤茶色。19は脚端部片で，復原脚端径10cm。シャープな鳥嘴状断面をなし，内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で内面は淡灰色，外面は黒灰色をなす。

土師器杯（12～17）12は復原口径10cm，器高2.8cmとなる小型品で小皿とした方が良いかもしれない。口縁内面は横ナデ，以下内面と外面は丁寧なナデ。焼成やや良好で茶黄褐色をなす。13は床面直上出土品で，焼成良好で内外面ともに橙色をなす。14は，13ほどは体部と口縁部との境の屈折が明瞭でない類。内外磨滅しており，焼成は良く，暗黄茶褐色をなす。15は皿状の器形で，内外磨滅。焼成やや良好で，内外面ともに橙褐色をなす。16は復原口径20cmの大きい類で，蓋となるかもしれない。口縁内外面横ナデ，以下内面は丁寧なナデ，外面は磨滅。焼成良好で淡橙色をなす。17は床面直上出土品で，復原口径15cmとなる皿状品。器高1.8cm。焼成やや良く，内面は淡橙色，外面は橙色をなす。

土師器高杯（18）脚端径10.4cm，脚部高３cmの小型品で，脚部内外は回転ナデ，杯部内面は丁寧なナデ調整。焼成やや良好で内外面ともに淡茶褐色をなす。

土師器甕（20～22）20は小甕で，頸部内面に稜を作り，それ以下はヘラ削り上げ。焼成良好で淡橙色をなす。21は，やや張る胴部から丸く外反して開く口縁となる。内面もナデており，焼成やや不良で，内面は黄橙褐色，外面は橙褐色をなす。22は煙道部出土品で，部厚い口縁となる。内面に炭化物が薄く付着しているが，これは煙道の煙出し部に転用されていた為か。焼成良好でこげ茶色をなす。

土師器把手（23～25）23は下層出土品で，横断面がやや偏平となる類。内面は磨滅。把手部下面に煤が付着する。24は短い類で，横断面形が偏平となる類。白黄褐色をなす。25は貼床下層出土品で，胴部内面はヘラ削り上げ。断面は丸く，橙褐色をなす。24は甑の把手となろう。

土師器甑（26～28）26は貼床下層出土の所謂赤焼土器である。器壁が薄く，胴部外面に横位の条線状敲きが施されている。内面は磨滅しているが，丁寧なナデであろう。器種としては，やや長胴の甕とした方が良いだろう。焼成やや不良で橙褐色をなす。27は張らない胴部から，やや直線的に下方へすぼまる類。内面はナデか。焼成良好で，内面は暗黄茶褐色，外面は橙褐色をなす。28は底径11.4cmで，27よりは丸く下方へすぼまる類。底部内外は横ナデ，内面はナデか。焼成良好で，内外面ともに茶褐色をなす。底部周縁内外には煤が付着している。

管玉（Fig.196－２）滑石製の作りの粗い珍品である。長さ24mm，最大径７mm，孔径４～2.5mm，重さ1.7gとなる。断面形が六角形的になったままで，裏面の両端側は欠損している。穿孔は両面から施されている。上下両端側がやや細身となる特徴を持つ。以上の諸点からみて，この管玉は，当住居に伴うものではなく，縄文晩期のものと判断される。

砥石（Fig.195－２）カマドの煙道部から出土したもので，凝灰岩質石材。火熱を受けて全面赤色化している。そのためか使用状況は明確でない。また，加熱のため割れている。長さ109mm，幅105mm，厚さ71mm，重さ1586.1gとなる。

以上の出土遺物のうち，須恵器杯蓋１～５は７Ｃ後葉～末葉の幅がみられるが，６・７は８Ｃ代までずれ込む。須恵器杯身の９～11は，７Ｃ末の特徴を示す。土師器杯は７Ｃ後半代に含

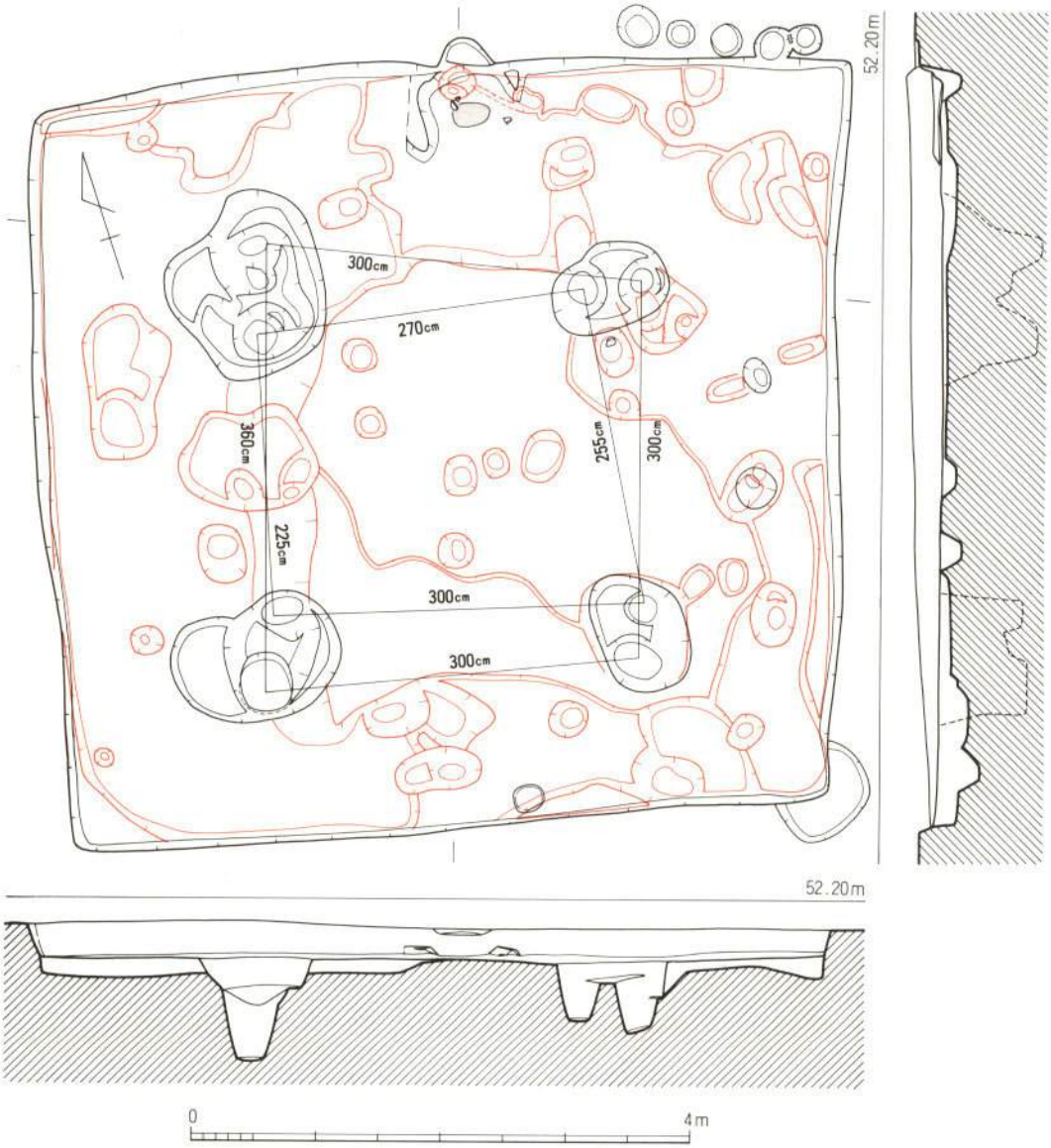


Fig. 102　第７号住居跡実測図（1/60）

まれ，中でも皿に近い器形のものは，未だ８Ｃ代の定型化した類とは程遠い形状を示している。土師器甕の中には22のように口縁の肥厚形態が８Ｃ前葉代のものの特徴に近付いているものもみられ，８Ｃ初～前葉の幅の中に比定できよう。また甑類の中には内面をナデ仕上げするもの（26～28）も見られ，新しい様相がうかがわれる。以上のことから，この第６号住居跡の時期は，出土遺物のうち新しいものの示す７Ｃ末～８Ｃ初葉であると判断しておきたい。古い７Ｃ

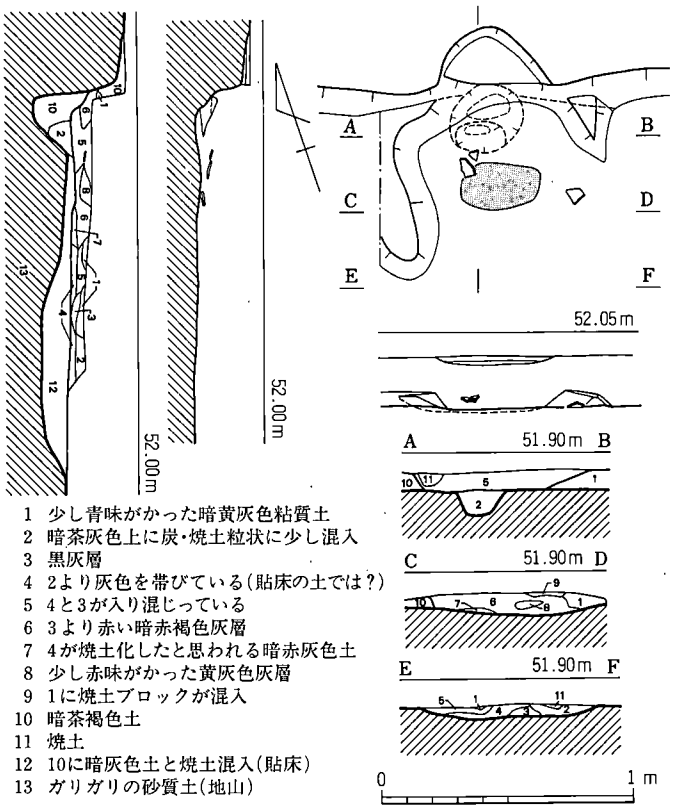


Fig. 103　第7号住居跡カマド実測図（1/30）

中～後葉の多くの土器類は，東半で大きく重複している第6号土壙に起因するものと考えられる。

第7号竪穴住居跡

(Fig.102, PL.22～24)

Ⅱ区の中央，やや東南寄りに位置する大型方形住居跡である。北側で第16号土壙と第15号住居跡を切る。また，住居内の南半で第9号土壙に切られる。北壁中央にカマドを設け，4主柱構造となる。住居の平面形は，北東隅のみが鋭角となって，東壁が長くなる台形気味のプランをなす。南北620～590㎝，東西660～608㎝，面積が38.4㎡という大規模なものである。主柱穴は，4主柱の位置に各々2個の柱穴が隣接して検出され，明らかに建て替えがあった事を示している。図中に主柱穴配置を示したが，内側の4柱穴で構成される小さな構造と，外側の4柱穴で構成される大きな構造があることが判かった。しかし，この大小両構造の新旧関係は確認できなかった。柱間心々距離は，東西間が基本的に300㎝（10尺）で，南北が225・255・300・360㎝（7.5・8.5・10・12尺）と不揃いである。このことは，建て替えの際，東西方向の幅はそのままで，南北方面のみに拡張（或いは縮小）がなされたことを示しているのだろう。柱穴はすべて50～80㎝の深さがあり，しっかりしたものである。住居床面は貼床構造をしており，4主柱穴と各壁との間の四周がしっかりと掘り込まれている。

カマド（Fig.103, PL.23）

住居内には，カマドとして良い程の焼土部分が2～3ケ所みられた。そのうち，東と北側の2ケ所を断ち割ってみたが，東壁沿いのものはカマドではないと判断され，この北壁中央のものだけがカマドである事が確認できた。ただ，あまり残りが良くなくて，カマド内部埋土中の

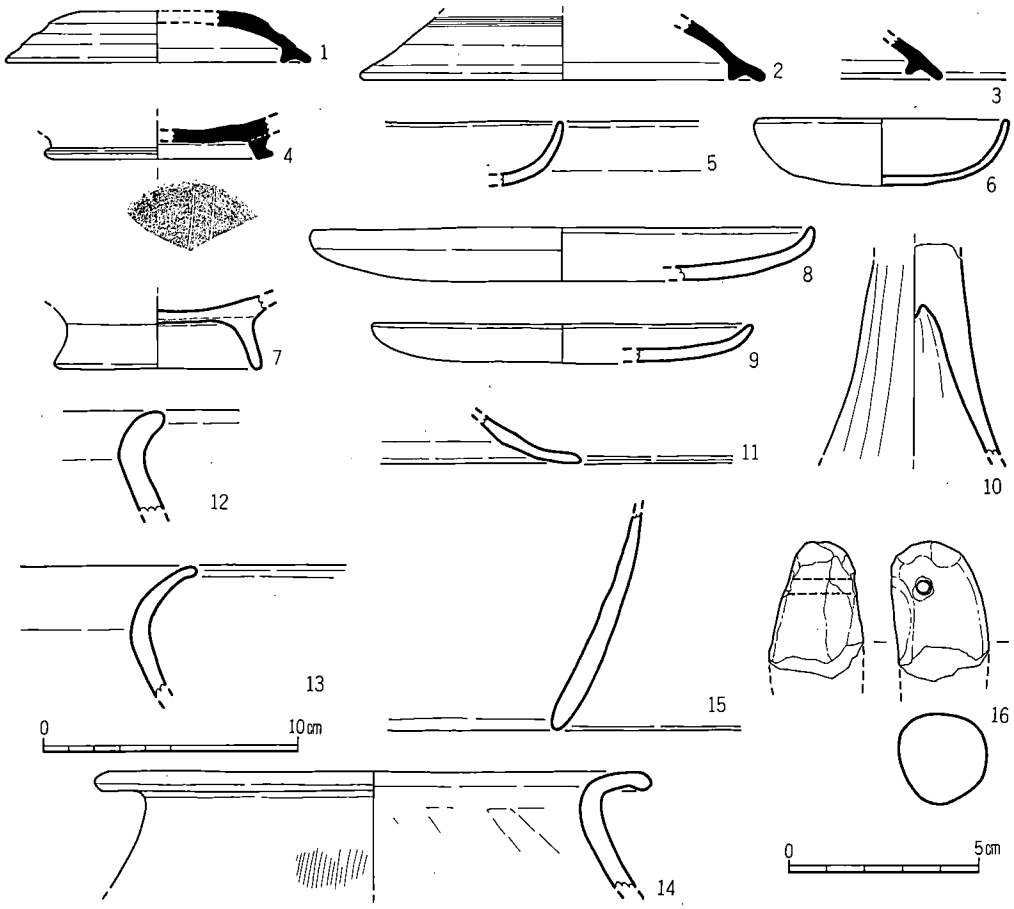


Fig. 104　第７号住居跡出土土器実測図（16のみ1/2，他は1/3）

焼土は他住居例と比べて少なく，火床面もやや固めに焼土化していた程度であった。支脚抜き跡及び掘方が奥壁寄りに検出されたが，あまりに奥壁に寄り過ぎており，若干疑問も感じる。カマド内底幅は60cm前後となろう。底面近くからは土師器甕片３点が出土した。また，このカマド奥壁の上方（底面から17cm上）に，住居壁外への掘り込みがみられた。現状では住居壁ラインから23cm外側へ張り出しただけであるが，煙道であった可能性が強い。煙道のタイプとしては，第６号住居の煙道がカマド底面より高い位置に水平に作られていることから，これに類似した長い煙道であったと思われる。

出土土器（Fig.104）

須恵器杯蓋（１～３）１は返り端部径9.8cm，高さ２cmとなる。天井外面は回転ヘラ削り，内面中央付近はナデツケ。焼成堅緻で内面灰色，外面は暗灰色をなす。２は返り端部径13.2cmとなり，天井外面にカキ目を施す類。生焼けで内面は淡茶，外面は明茶色をなす。３は内外面と

もに回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。

須恵器杯身（4）外方へ踏ん張り，内端で接地する高台を持つ底部片。高台径9㎝で，底外面は回転ヘラ削りで，平行2直線のヘラ記号が施されている。内面はナデツケ。焼成堅緻で灰色をなす。

土師器杯（5～7）5は全面磨滅しており，焼成良好で橙褐色をなす。6は復原口径10㎝，器高2.6㎝。内外磨滅しており，焼成やや良。内外とも橙褐色をなす。7は2㎝近い高さの高台を付ける類で，これだけ時期が下る。高台径8.2㎝，内外の底面はナデツケ。焼成良好で淡橙色をなす。

土師器皿（8・9）8は復原口径20㎝，器高2.1㎝の大型類。口縁内外横ナデ，内底面はナデ，外面は磨滅。焼成良好で淡橙色をなす。9は復原口径15㎝，器高1.5㎝。焼成良く，茶褐色をなす。内外面磨滅。

土師器高杯（10・11）10は脚柱部で，外面は縦位ヘラ削り，内面下半は横位ナデ，上半にはシボリ痕残る。焼成良好で橙褐色をなす。11は脚裾部片で，内面中途に稜を作る。焼成やや不良で橙褐色をなす。

土師器甕（12～14）12は小甕片で胴部内面はヘラ削り。外面は横ナデ。焼成良好で暗褐色をなす。内面は炭化物が付着。13は内外面磨滅しており，焼成やや良好で橙褐色をなす。14は床面下層出土品で，強く屈曲して外反する類。復原口径22㎝で，胴部内面はヘラ削り。焼成良好で内外面ともに橙褐色をなす。

土師器甑（15）内外面ともに磨滅する。焼成やや不良で内面は淡橙色，外面は橙色をなす。底部内外面には煤が付着する。

土製玉（16）上端に径4㎜の孔を持ち，下方へ厚みを増すもので，現存長3.6㎝，径2.4㎝。下方へ伸びて勾玉となるものか。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成やや不良で茶褐～暗黄灰色をなす。表面は指頭ナデ仕上げ。胎土や焼きの状態から見て，縄文期のものの可能性も捨てきれない。

以上の出土遺物のうち，土師器高台椀の7は明らかに平安期に下るもので，おそらく当住居を切る第9号土壙に関るものであろう。これ以外は，1が7C中葉，2・3が7C後葉，土師器杯・皿も同時期。16は既述の如く，縄文期の可能性もある太い類。これらの遺物からみて，当第7号住居跡は7C後葉代と考えてよい。

第8号竪穴住居跡（Fig.105，PL.24・25）

Ⅱ区西端中央に位置する方形小型住居である。4隅に4主柱穴を配置する類で，第4号竪穴住居跡に似ている。南北の長さ300～372㎝，東西が310～318㎝となる南北に長い長方形プランをなし，面積は10.6㎡となる。短側辺である北壁中央にカマドを設けている。4隅の柱穴は深

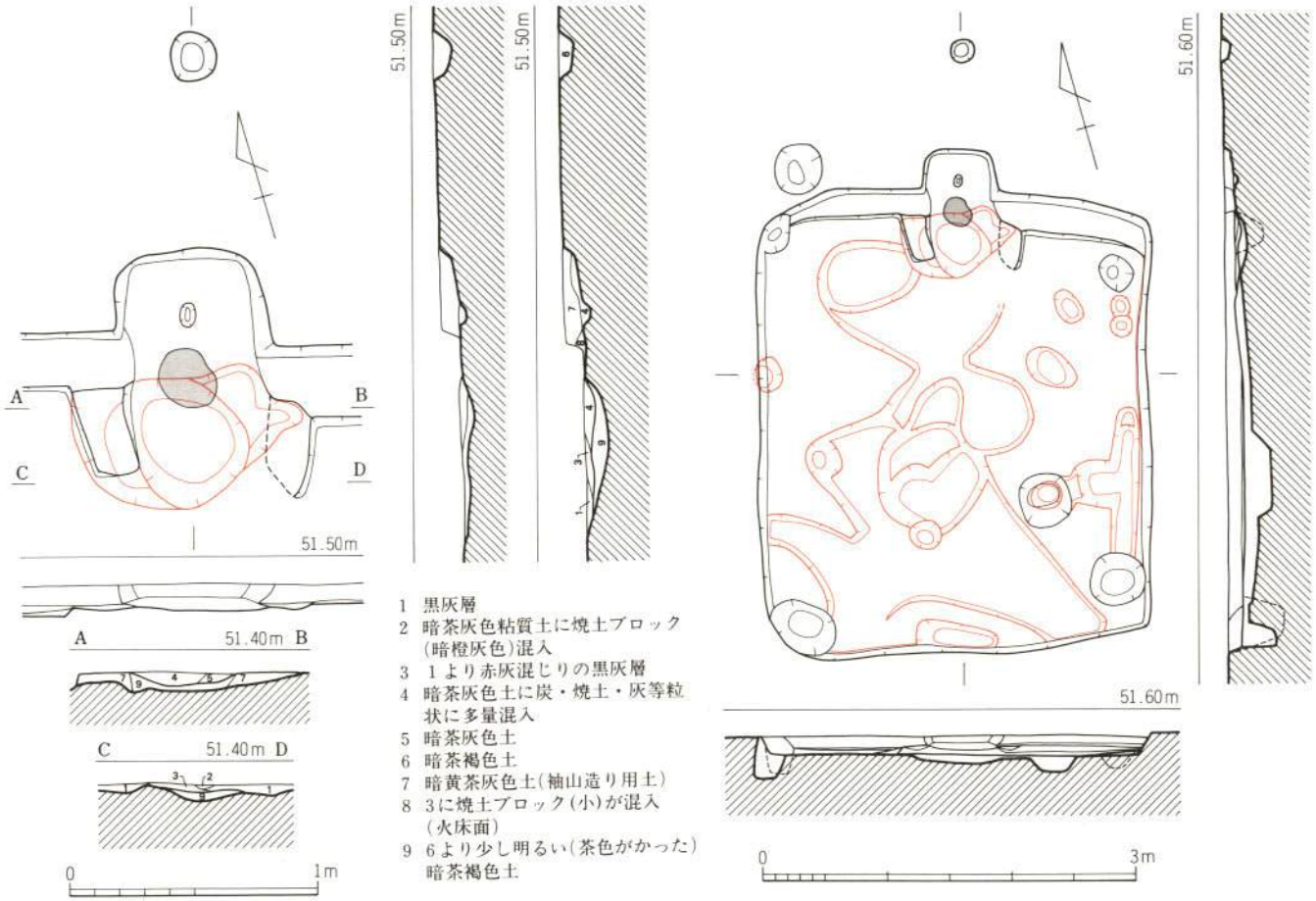
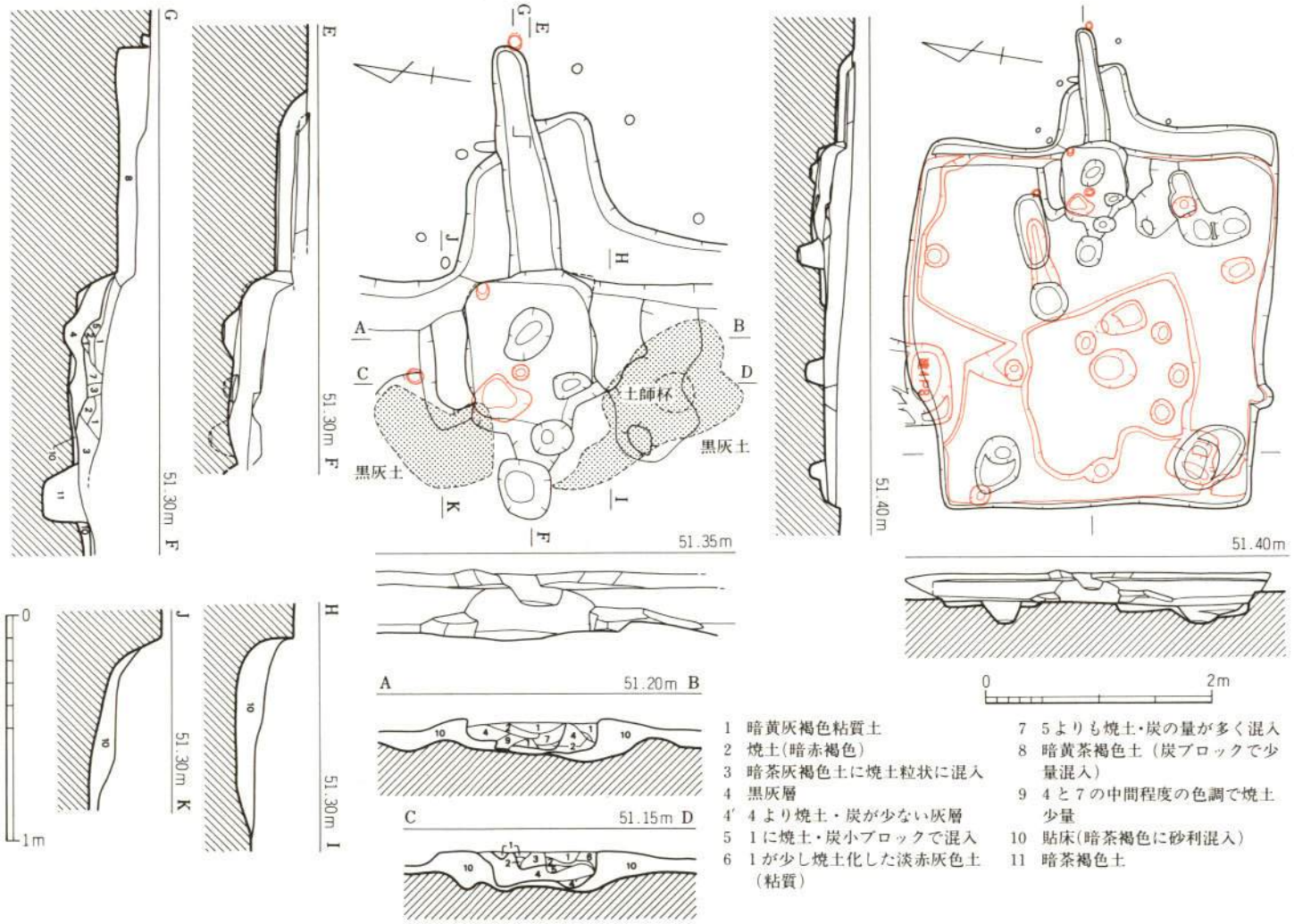


Fig. 105　第8号住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）



1 暗黄灰褐色粘質土
2 焼土(暗赤褐色)
3 暗茶灰褐色土に焼土粒状に混入
4 黒灰層
4′ 4より焼土・炭が少ない灰層
5 1に焼土・炭小ブロックで混入
6 1が少し焼土化した淡赤灰色土(粘質)
7 5よりも焼土・炭の量が多く混入
8 暗黄茶褐色土(炭ブロックで少量混入)
9 4と7の中間程度の色調で焼土少量
10 貼床(暗茶褐色に砂利混入)
11 暗茶褐色土

Fig. 106 第9号住居跡・カマド実測図(1/60, 1/30)

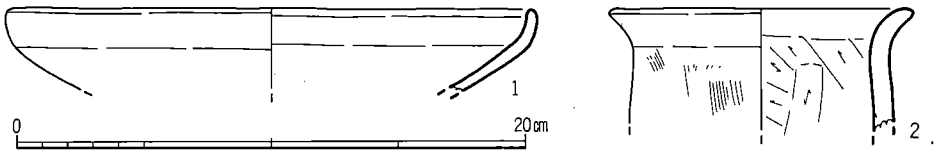


Fig. 107　第９号住居跡出土土器実測図（1/3）

さ20～30cmと浅く，他住居例からすると主柱穴的ではない。床面は貼床構造で，下層の掘り込みは，住居の南半から中央付近に認められるが，企画されたような類ではなく雑である。

カマド（Fig.105，PL.25）

住居北壁中央に設けられ，壁外方へ掘り込まれるタイプとなる。カマドの奥壁から70cm離れた住居外方に，カマド中軸線上に乗る小ピット（径18×20cm，深さ７cm）が検出され，削平されて無くなった煙道の先端部と推定される。カマド底面での規模は，奥行きが最低95cm，幅が50cmとなる。火床面の奥壁寄りに小穴が検出され，支脚抜き跡と推定される。袖の残りは良くないが，暗黄茶灰色土の地山に近い土を用いている。住居壁の外方へ掘り込まれている分だけ，袖は短かかったものと思われる。カマドとしての使用面は１面のみである。

以上の第８号住居跡からは，実測に供し得るような土器等が出土していない。よって，時期が確定できないが，他の北壁にカマドを持ち，主軸方向を同じくする第３・５・７号住居跡と同時併存だったとすると，当住居も７Ｃ後葉を中心とする時期と推定できよう。

第９号竪穴住居跡（Fig.106，PL.26・27）

Ⅱ区南半の西寄りに位置する小型方形住居である。カマドを東壁中央に作り，住居主軸を東北東から西南西にとる，当遺跡では全く異例のものである。北壁際で第４号掘立柱建物の南東隅の柱穴（建４-Ｐ８）を切っている。住居の規模は，東西310cm，南北320～270cmと西壁が短い台形プランとなる。面積は9.1㎡と狭い。柱穴は床面や下層面に小穴が多くみられたが，明らかに主柱穴配置を示すものは断定できない。ただ，西壁側の西北隅と西南隅近くの２柱穴は，深さ20cm程度と浅いが，上屋構築に関る柱穴に違いないと考える。この２柱穴と対になるような東壁近辺の柱穴は見当らない。床面は貼床構造で，下層の掘り込みは，中央部を掘り残して壁までの間が浅めに掘り込まれている。

カマド（Fig.106，PL.27）

東壁中央に設けられ，住居壁を幾らか外方へ掘り込む類。カマド奥壁から更に外方に１ｍ延びる煙道も検出された。カマド内の底面は２度の使用面が認められたが，火床面は明確には残っていなかった。袖は貼床と同じ粘質土を用いており，同時構築の可能性がある。両袖の外方床面上には，黒灰が多量にみられ，灰の掻き出しが行われたことを示している。更にこの黒

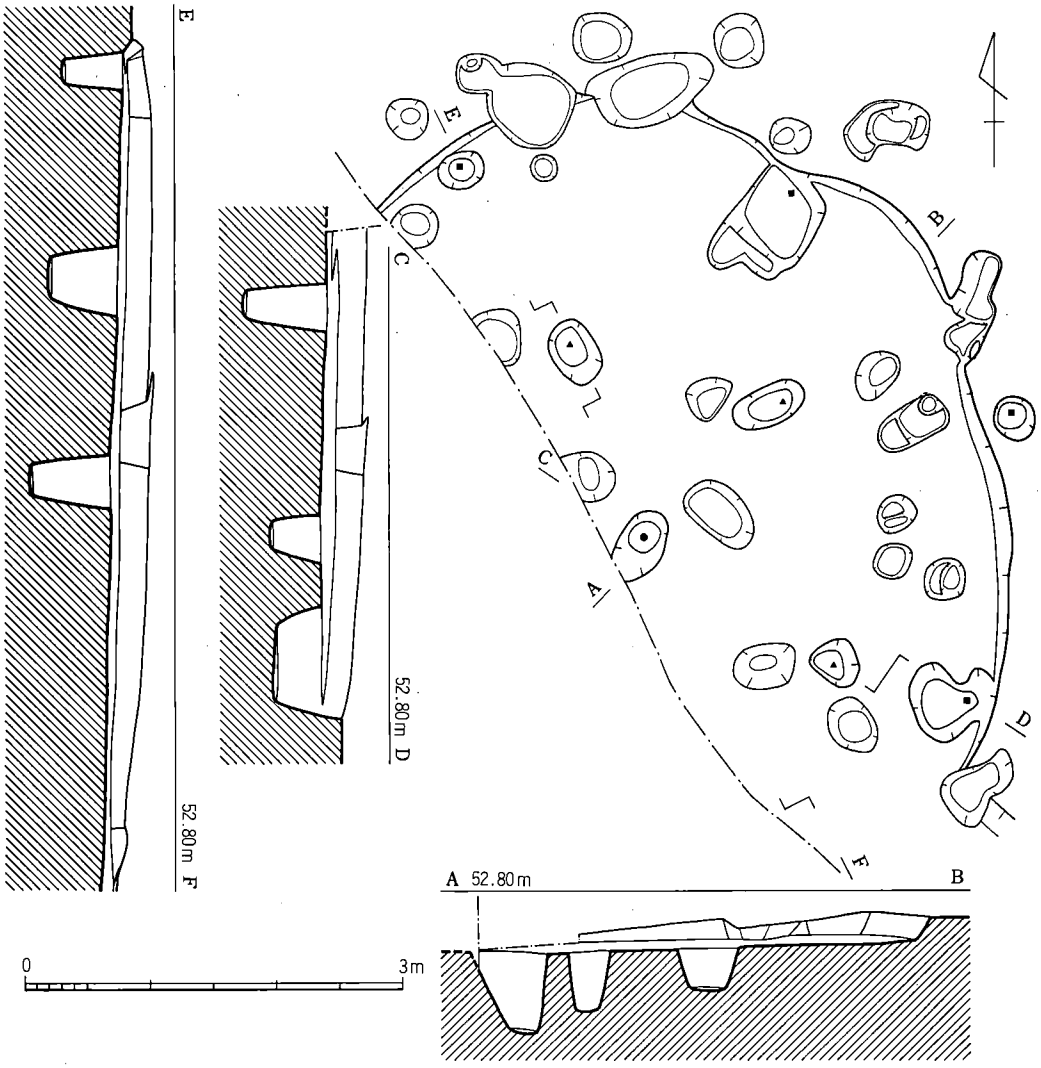


Fig. 108　第10号住居跡実測図（1/60）

灰層は右袖では，袖の土の中に一部入り込んでおり，袖部も再構築或は修理されたことが判かった。袖内には土師器片が含まれており，袖作りの際の補強材とされたようである。なお，カマドの内外及び煙道外側の住居壁外には，直径３～６㎝，深さ３～10㎝の小さな杭を打ち込んだような穴が並んで検出された。カマド・煙道部に関る壁構造に使用された杭の跡であろう。

出土土器（Fig.107）

土師器杯（１）カマド内出土品で，復原口径21㎝。体部上半で内側に折れて口縁となる類。口唇内側が僅かに突出気味になる。口縁内外面横ナデ，以下磨滅気味だが内外面はナデ。焼成良

好で明茶褐色をなす。

土師器甕（2）復原口径12cmの小甕類。口縁部の肥厚はみられず，胴の張りも少い。口縁内外面は横ナデ，胴部内面はヘラ削り上げ，外面は縦ハケをナデ消している。焼成良好で，内面は茶褐色，外面は赤茶褐色をなす。

以上の出土土器のうち1は，体部から口縁部にかけての丸味も無くなり，折れ曲がりも明瞭になりつつあり，8C代に下るのは確実であろう。一方，切合いから第4号掘立柱建物よりも当住居が新しい事が判かっていて，前者が8C初葉前後とされることから，当住居の時期は8C前葉頃になると考えられる。

第10号竪穴住居跡（Fig.108，PL.28）

I区の北西端に位置する円形住居で，南西半は発掘区外となり，半分しか調査していない。直径640cmで深さ30cm，推定面積は32.2㎡となる。主柱穴は図中▲印の3柱穴で，全体で6柱穴となると思われるが，他の第1・11号住居跡の例からみると5主柱穴となる可能性もある。深さは34～55cmと，割としっかりしている。更に，住居の壁際やその外側にも柱穴が配されている。（図中■印）これらは略240cm間隔で配置されており，全周で8～9個になるかと思われる。この壁際柱穴は主柱穴と同様に深くしっかりしている。更に中央に深い穴（図中●印）があり，ひょっとしたら，中央土壙を挟む対ピットのひとつではないかと思われる。この中央土壙は検出していないが，あるとしたら調査区外であろう。床面は中央付近が低くなっている。炉等他の施設は見られない。出土遺物のうち実測できるようなものは無く，時期の確定は困難であるが，4m離れた東隣に位置する第1号住居跡と，主柱穴配置や壁際柱穴の存在など共通する点があることから，両者が同時併存していた可能性も考えられる。以上のことから，当第10号住居跡は弥生中期初葉頃のものと推定しておきたい。

第11号竪穴住居跡（Fig.109，PL.28）

II区の北端の発掘調査区際にて検出した円形住居である。下層面で検出したもので，この上層には周溝を持った土壙墓である第13号土壙が在った。住居の規模は，東西径746cm，南北径692cmと東西にやや長い楕円形プランとなる。面積は40.6㎡となり，同じ円形住居の第1・10号住居跡よりもひと廻り大きい。中央に直径108×116cm，深さ25cm程の土壙があり，その東西両端に小さい対ピットがみられる。この中央土壙は全く焼けておらず，埋土中に炭も検出できなかった。対ピットは直径25～30cm，深さは西側のものが46cmと深く，東側は24cmと浅い。主柱穴は5個で，すべて柱痕が確認できた。柱穴径は57～42cm，柱痕径は18～23cm，深さは50～60cmと深くしっかりしている。5主柱穴の配置は明らかに均等ではなく，各柱穴間心々距離はすべて異り，単純な企画ではない。北側の2柱間が最も狭く，東側の2柱間が最も広い。この

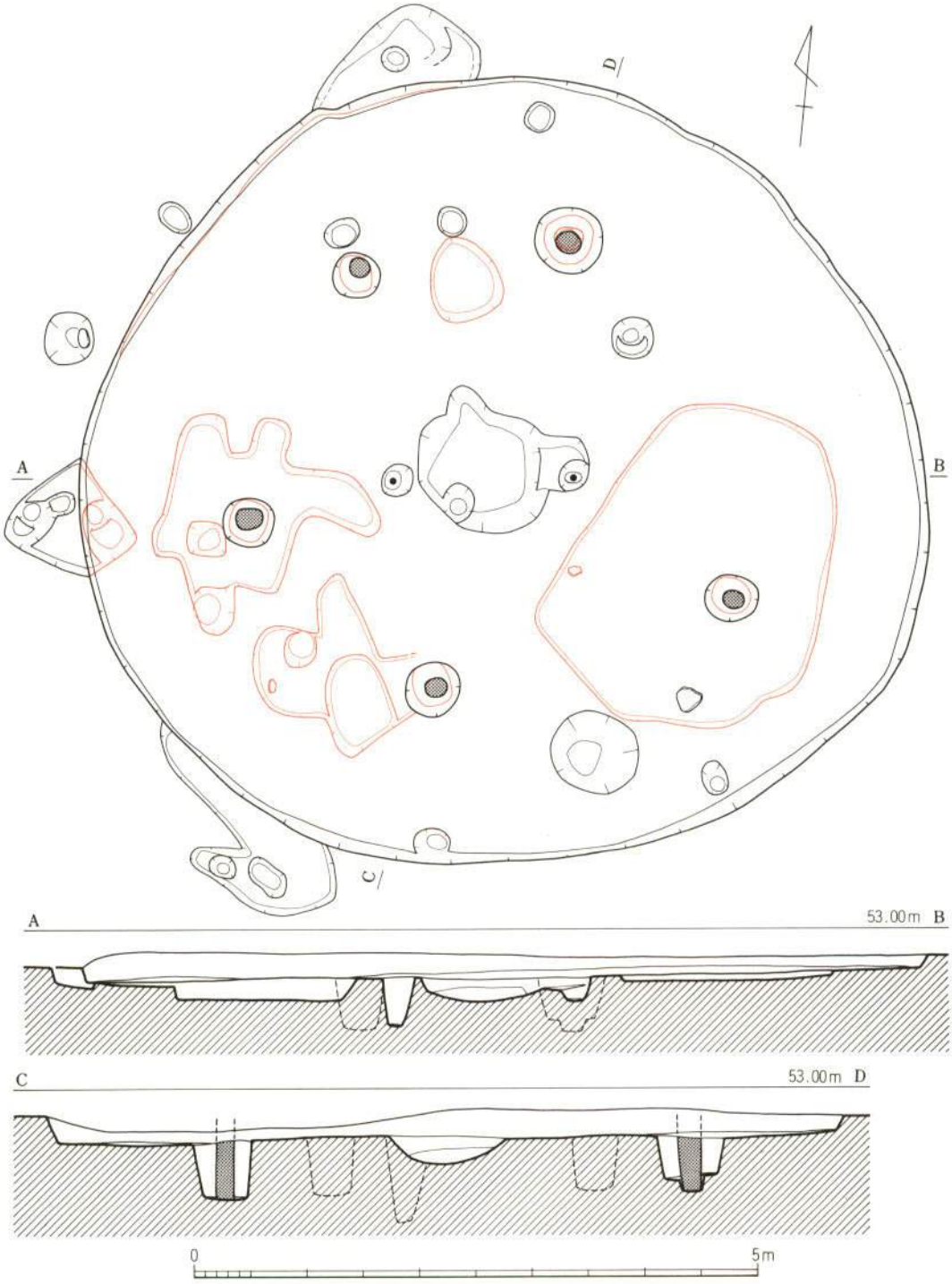


Fig. 109　第11号住居跡実測図（1/60）

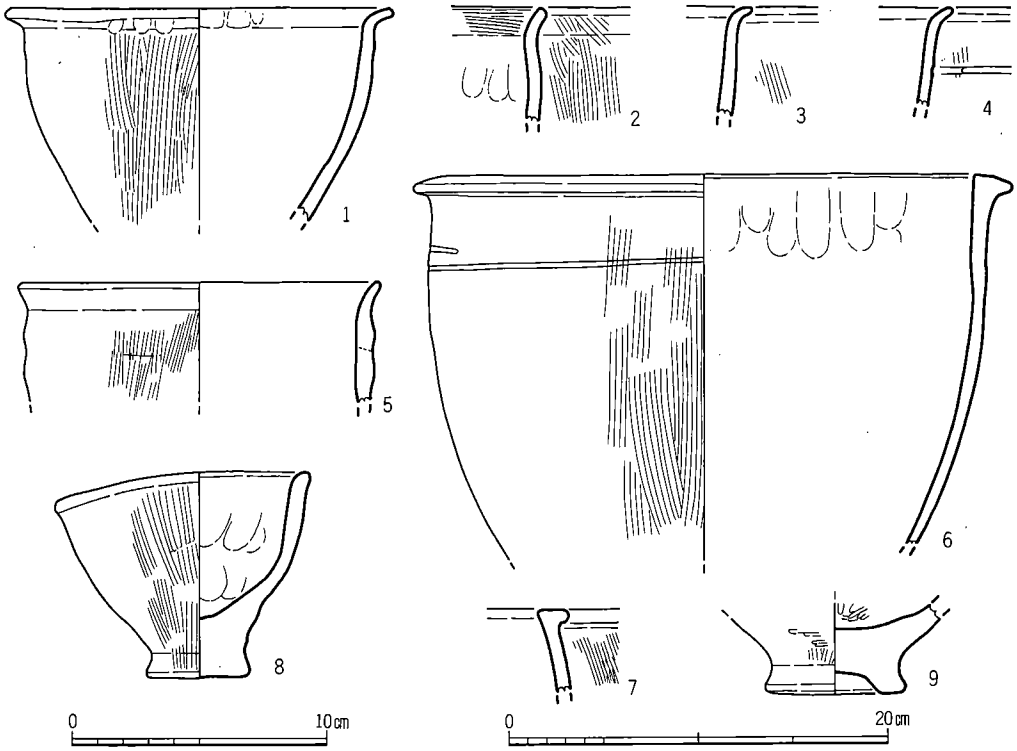


Fig. 110　第11号住居跡(1～8)，第12号住居跡(9)出土土器実測図（8のみ1/3，他は1/4）

配置は第1号住居跡の主柱穴配置を裏返しにすると良く似ている。両者の関連性は当然あろう。床面は全体に西南側が低くなっている。床面は貼床だと思われたので，地山でない部分を掘り下げてみたが，掘り込みは部分的なものであった。この住居を中心とするⅡ区北端部分は縄文早・前・晩期の遺構・遺物包含層が集中しており，この下層の掘り込みも，縄文期遺構の一部である可能性が高く，貼床構造とは言えないだろう。

出土遺物（土器はFig.110-1～8）

甕（1～7）1は中央土壙内出土品で，復原口径20.6cmの刻目無しの如意形口縁類。口縁内外面横ナデ，胴部内面は丁寧なナデ調整。焼成良好で内面はこげ茶色，外面は茶褐色をなす。2は床面出土品で，胴部内面は丁寧なナデ。外傾する程度の如意形口縁。焼成良好で淡茶褐色をなす。3は第11号住居跡上面暗褐色包含層出土品だが，住居上層ということだろう。内外面磨滅する。外面のハケは粗い。焼成良好で黄褐色をなす。4も住居上面暗褐色包含層出土品だが，住居上層のものだろう。如意形口縁に太めの沈線1条を巡らす類。口縁内外面横ナデ，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で淡褐色をなす。5は復原口径19.2cmの僅かに開く口縁となるが，胴部外面の凹凸が異常にある異種。内面は丁寧なナデ，口縁上端から外面上端は横ナデ。焼成

良好で淡赤茶褐色をなす。6は埋土上層出土品で，復原口径30.6cmの中型品。胴上位に1条の沈線を巡らす亀ノ甲タイプ。口唇内端は小さく突出する。沈線は1周した所で上下にずれている。内面は丁寧なナデ。胎土に雲母や6mm以下の石英粒を多く含む。焼成良好で，内面は淡茶褐色，外面はこげ茶～暗褐色をなす。胴部内面中位には炭化物が付着する。7は住居の上面暗褐色包含層出土品だが，住居埋土の上層ということだろう。口縁上面は水平となり，胴部が張ってきて，内端が張り出してきている。内面はナデで炭化物が付着している。焼成良好で茶褐色をなす。

鉢（8）復原口径10cmの小型鉢。甕のミニチュア的な類だが，内底面には炭化物が付着し，外面にも煤がこびり付いており，実際に使われたものである。充実する脚台で，内面は指頭圧痕を残すナデ。底外面はナデ。焼成良好で内面は茶褐色，外面は暗褐色をなす。

土製勾玉（Fig.196-3）床面から出土したもので，孔が斜めに穿たれ，全体に雑なつくりで手捏ね的である。屈曲部内側の側面は平坦面をなす。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成良好で淡橙～肌色をなす。現存長35mm，最大径13mm，孔径2mm，重さ5.3gとなる。当住居に伴うとすれば，時期的に稀例である。後世の古墳時代のものが混入した可能性は無く，時期が違うとすれば，縄文晩期のものの可能性しか無い。晩期としても類例が無く，いずれにしても貴重な一品である。

紡錘車（Fig.194-6）住居の床面から出土した灰色の片岩系石材を使用したもので，全面丁寧に研磨している。直径50mm，厚さ5.5～7mm，孔径9～5mm，重さ28gとなる。中央孔は両面から穿孔している。

凹石（Fig.79-11）偏平な河原石の片面中央に浅い凹部を持つもので，凝灰岩質石材。表裏面と側面のほぼ全面を磨っており，磨石としての機能も有している。直径64×62mm，厚さ20mm，重さ134.1gとなる。

打製石鏃（Fig.77-210・214）210は腰岳系黒曜石製で，先端と片脚端を欠損する。製作の仕上げ調整中途で放棄した未製品の可能性もある。現存長12mm，幅11mm，厚さ3.5mm，重さ0.5gとなる。214はやや大ぶりの平基鏃で，腰岳系黒曜石製。縁辺細調整が殆どなされていない点や，先端の欠損の仕方からみて，製作中途の未製品の可能性が強い。現存長24mm，幅18mm，厚さ4.5mm，重さ2.4gとなる。

使用剝片（Fig.69-144，Fig.70-151）144は良質の腰岳系黒曜石製で，不定形小剝片の縁辺に細調整を施したもの。下辺が若干潰れており，掻器的用途が考えられる。風化が殆どみられず，縄文期のものの混入ではなく，当住居に伴うものと考えてよい。長さ16mm，幅19.5mm，厚さ4mm，重さ0.8gとなる。151は腰岳系黒曜石製で，尾端の厚い縦長剝片そのものを使用したもの。縁辺細調整が各辺に施され，下辺には潰れ部もみられ，掻器的使用もあったことがわかる。打面は調整面で，長さ38mm，幅23mm，厚さ9mm，重さ4.8g。

以上の出土遺物のうち甕7は弥生中期初葉の中でも前葉に近付いているものだが，他の土器は中期初葉の典型と言える。よって当住居の時期は弥生中期初葉である。時期的には第1号住居跡と同時期であろうが，住居形態から言えば，同じ松菊里型住居の中でも，こちらはより発展型に近いもので，中央土壙両端の対ピットが主柱穴よりも明らかに小さく浅いものとなっている点や，壁際柱穴が無い事など，古い要素が残った第1号住居跡よりも発展型へ脱皮した形態と言えよう。

第12号竪穴住居跡（Fig.111，PL.29）

Ⅱ区の中央，やや西南寄りに位置する大型円形住居である。住居の規模は東西990cm，南北934cmと，東西にやや長い楕円形気味となる。面積は72.7㎡と大規模である。中央に150×102cm，深さ23cmの楕円形土壙を持ち，北側の壁沿いには幅30cmの周壁溝がみられる。柱穴は壁から100～140cm内側にずらりと小柱穴が巡る。これらを図面上で検討した結果，図中の▲印が8主柱穴となり，△印が10主柱穴となって配置されている事から，この両者の新旧関係は明確では無いが，主柱穴の建替えがあったと判断した。或いは，この両者を合わせた18柱穴のうち，東側の2ケ所で重複しているものを各々1柱穴であるとして，計16個の柱穴で構成されたと推定することもできる。ただし，この16主柱穴となると，隣り合う柱間距離が1m未満の所が何ケ所もあって，あまりにも柱が密接しすぎているように思われる。よって，前記のように8本主柱と10本主柱の建替えであると考えておきたい。各柱穴は18～44cmの深さで，他の円形住居のものに比べて明らかに浅い。その理由としては，柱の数を増やすことによって，上屋での構架部分での連結数が増え，強度が上がるため，柱の埋め込み時点での強度があまり必要でなくなったからかもしれない。

出土遺物（土器はFig.110-9）

壺（9）中央土壙出土品で，中央部が大きく上げ底になる類。底径7.4cmで，胴部外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き，内底面はヘラ磨き。外面全体に煤が薄く残る。焼成良好で白黄茶色をなす。部厚い底部となる類である。

石匙（Fig.67-123）住居の中央土壙内出土品で，安山岩製。粗製品の撮部分片で，縁辺調整のみ施されただけのもの。現存長24mm，現存幅24mm，厚さ7mm，重さ4.7gとなる。

使用剝片（Fig.68-138）住居内周壁溝出土のもので，漆黒色だが少し不純物を含む腰岳系黒曜石製。不定形小剝片の縁辺に簡単な細調整を施しただけのもの。打面は礫面で，長さ24mm，幅21mm，厚さ5mm，重さ2.4gとなる。

以上の出土品のうち，壺底部片は，弥生中期初葉の特徴を良く示す。当住居の時期を示すものはこれ1点のみなので，これ以上何とも言えないが，住居の形態上，弥生中期初葉の松菊里型住居である第1・11号住居よりも後出的であることは明らかであることから，本当の時期は

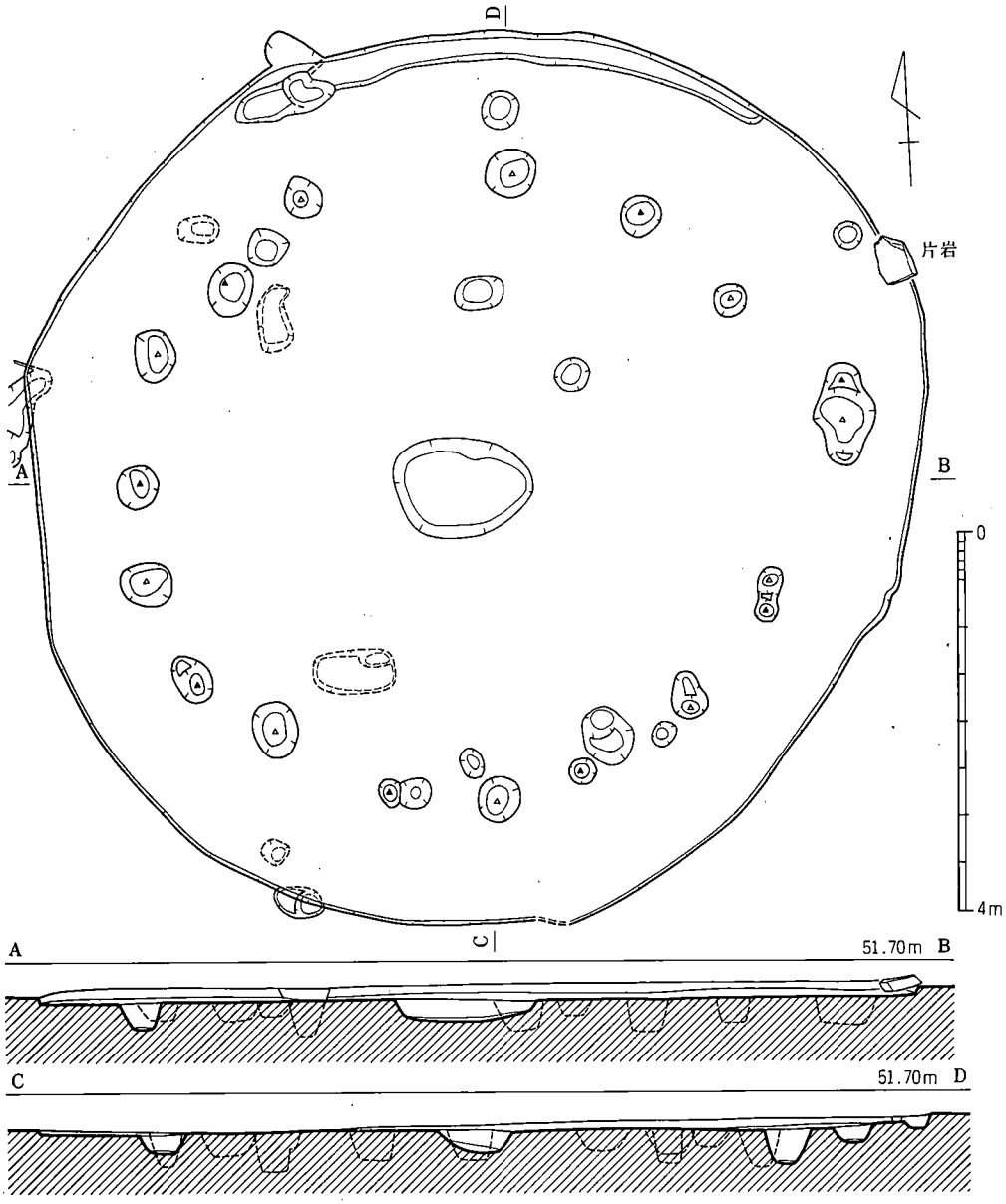


Fig. 111　第12号住居跡実測図（1/80）

やや遅れるのではないかと推測する。よって当住居は，弥生中期初葉を上限とする時期のものと記しておく。

第14号竪穴住居跡（Fig.112，PL.30）

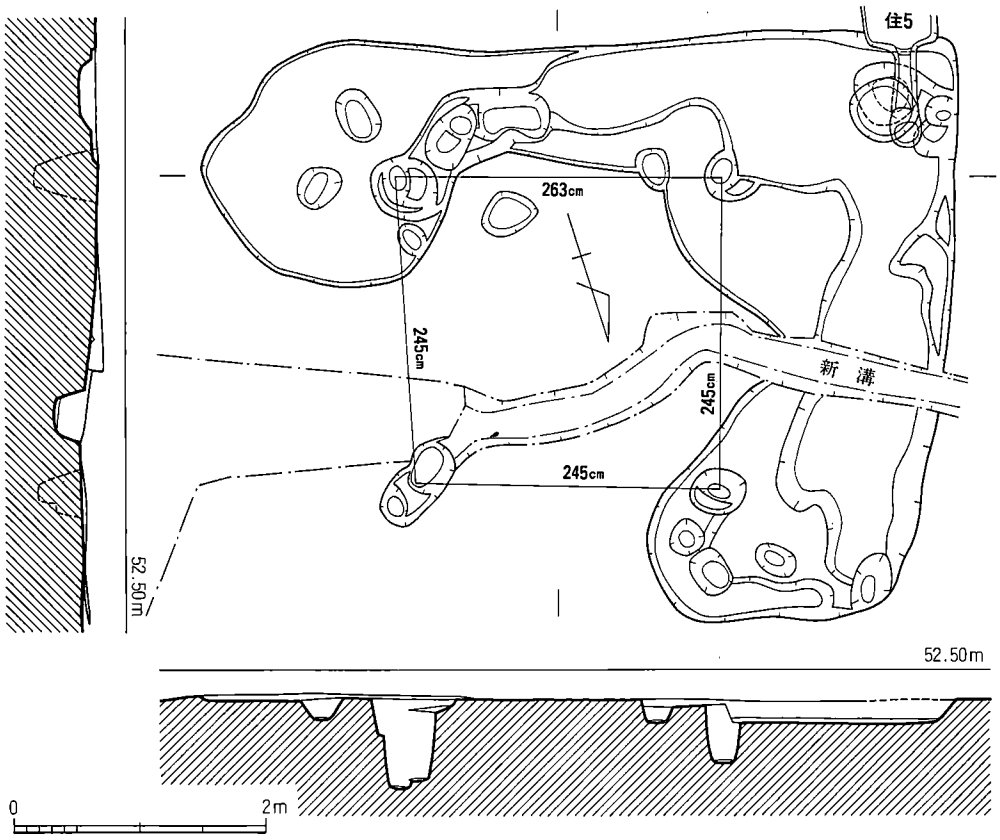


Fig. 112　第14号住居跡実測図（1/60）

Ⅱ区の最東端のやや北寄りに位置する方形住居である。中央部を東西に新溝に切られ，南西隅で第５号住居跡のカマドによって切られている。北半と東半は既に耕作等により削平されて住居壁等全く残存しない。よって，遺構検出時には竪穴住居跡と認識していなかった。下層まで下げて，４主柱穴まで確認した段階でやっと住居と認定した次第であった。よって住居床面（貼床上面）もとばしてしまったが，標高52.30m 前後になると考えられる。住居の規模は４主柱穴が中央に位置すると仮定して，東西が623cm，南北が445cm，面積27.7㎡に復原することができる。東西に長く，しかも４主柱穴が台形状配置をして，西壁もそれに平行しているようなので，北辺が南辺より短い台形プランとなろう。カマドは北壁中央に在ったと考えられる。４主柱穴は深さ53～73cmとしっかりしており一目瞭然。柱間心々距離は，南辺だけが263cm（35cm尺で7.5尺）で，他３辺は245cm（35cm尺で７尺）となる。床面は貼床構造で，下層の掘り込みは，南壁と西壁沿いにしっかりと掘り込まれている。東壁・北壁沿いは下層部分すらも削平されていて残らない。

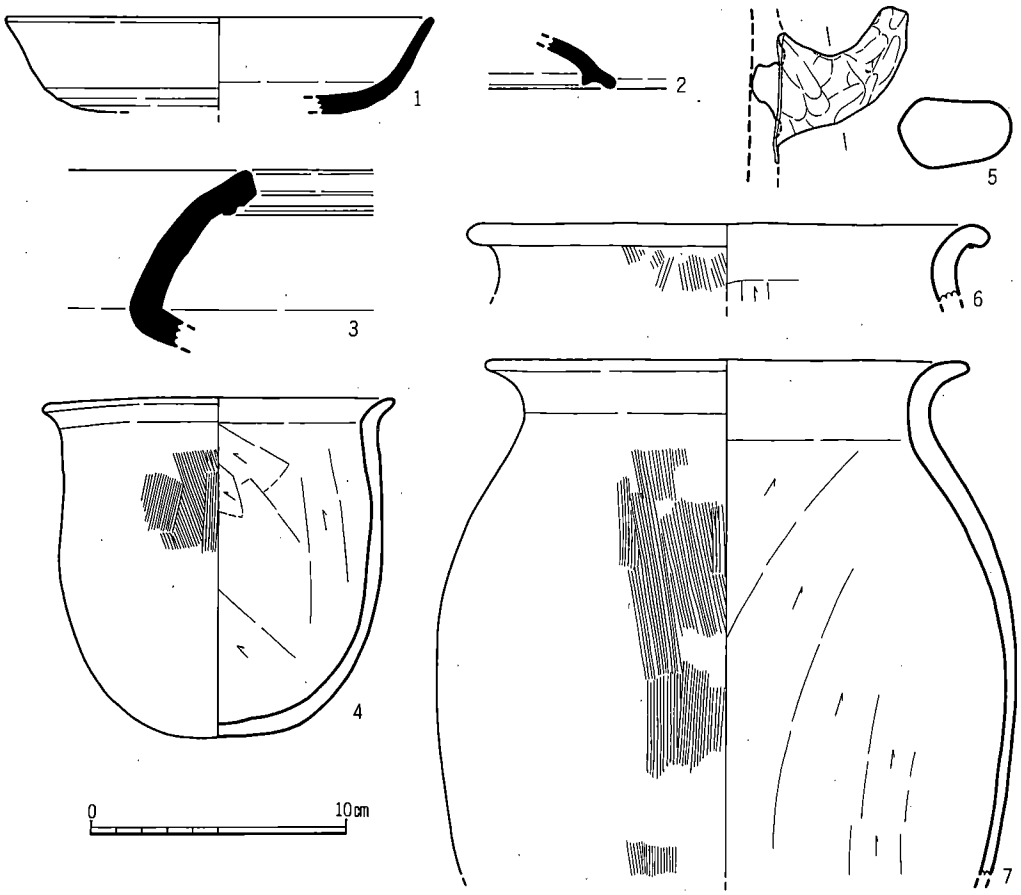


Fig. 113　第14号住居跡（１），第15号住居跡（２～７）出土土器実測図（1/3）

出土土器（Fig.113-１）

須恵器杯（１）床面下出土品で，復原口径16.8cm，現存器高3.7cmとなる。外面の体部と底部の境が丸く回転ヘラ削りされる類で，体部内外面は回転ナデ，内底面はナデツケ。高台が付く可能性もある。焼成堅緻で，内面は灰紫色，外面は暗灰色をなす。

この土器は大口径で大きく体部が開く器形をなし，７Ｃ後葉の典型例である。これが当住居跡の時期を示すものであろう。

第15号竪穴住居跡（Fig.114，PL.30・31）

Ⅱ区の中央東寄りに位置する大型方形住居跡である。南半を第７号住居跡に切られ，西側で第16号土壙を切る。北壁中央に長い煙道を持つカマドを設ける。住居の東壁の南半と南壁が残っておらず，全容の詳細は不明。住居の規模は，東西が738cm，南北は４主柱穴の中軸線で

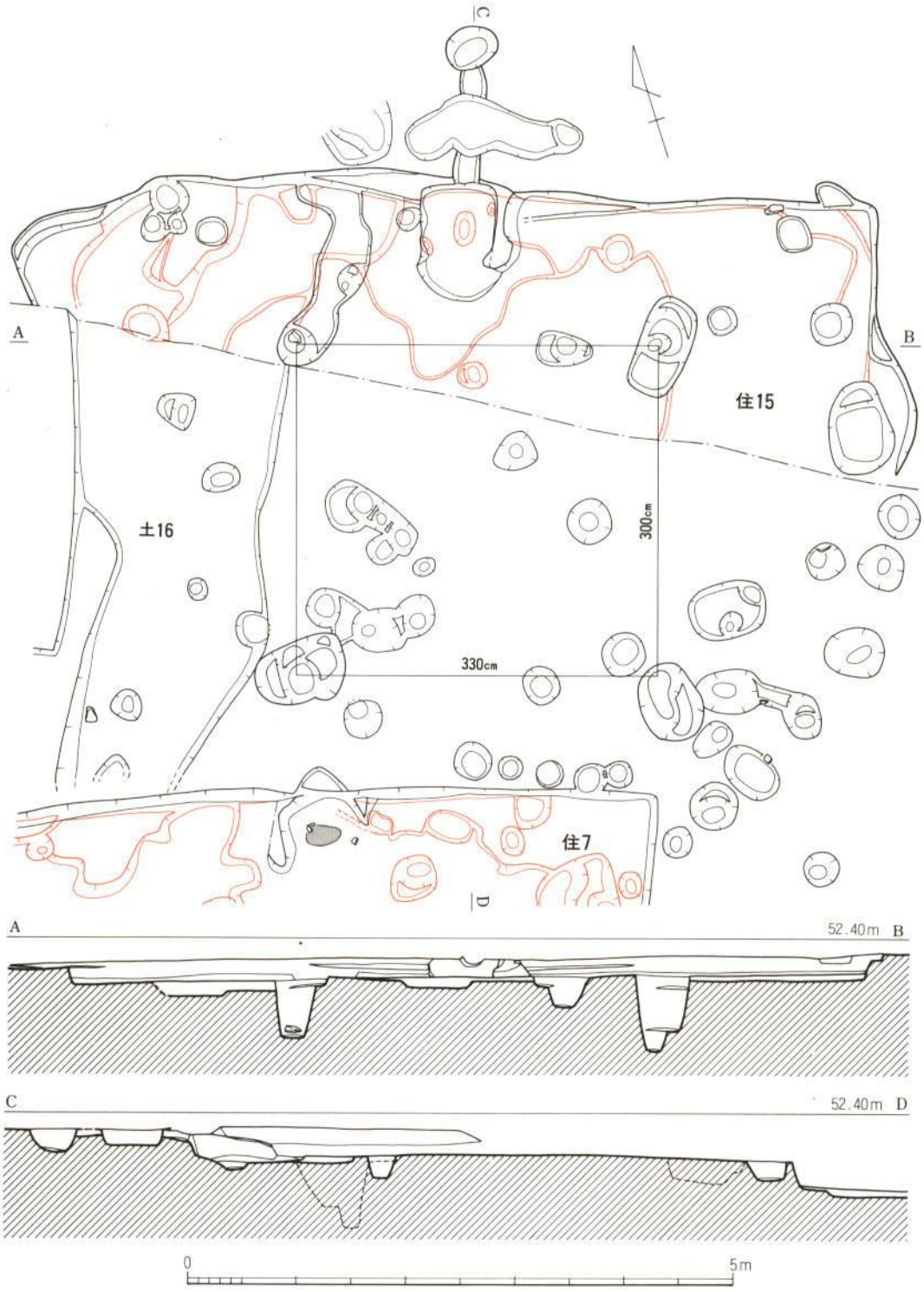
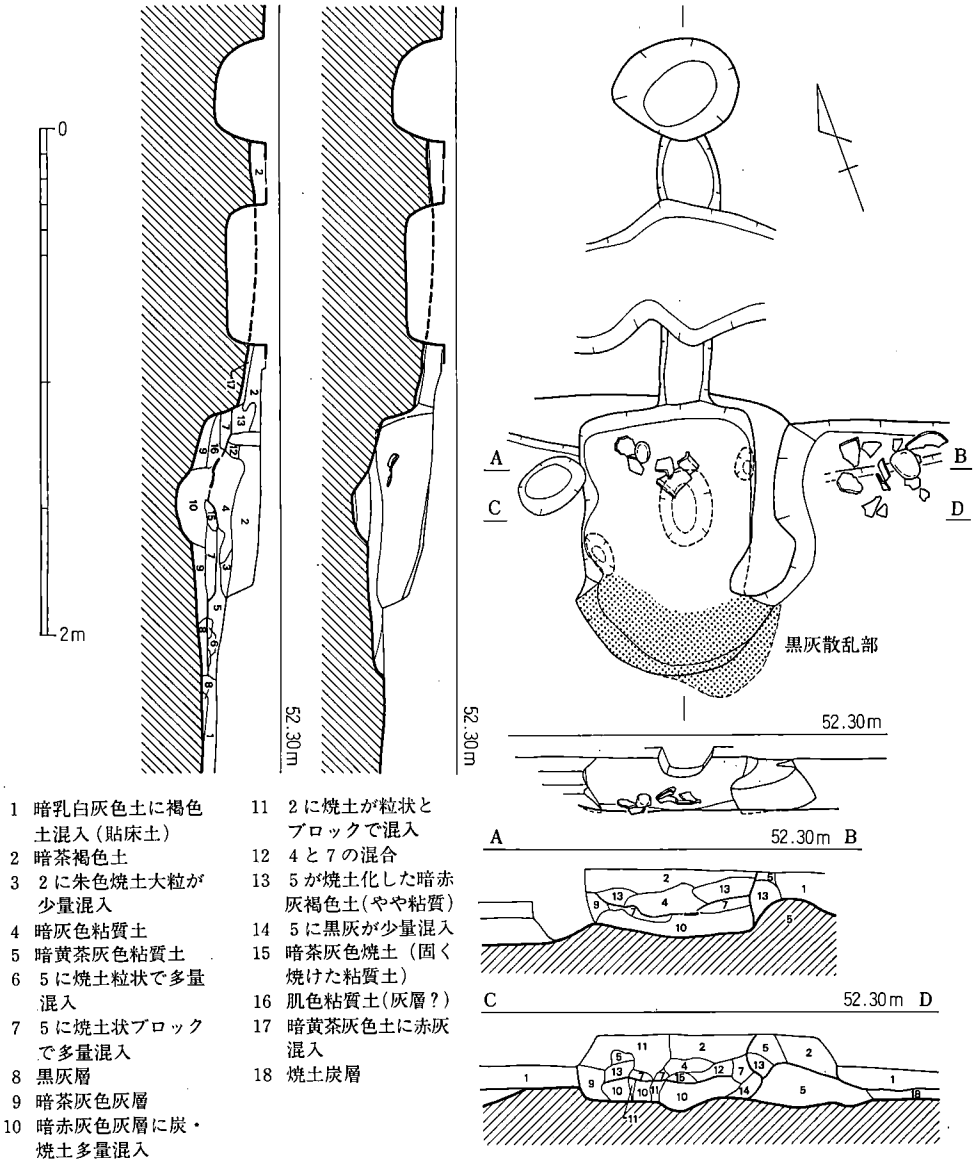


Fig. 114　第15号住居跡実測図（1/60）



1 暗乳白灰色土に褐色土混入（貼床土）
2 暗茶褐色土
3 2に朱色焼土大粒が少量混入
4 暗灰色粘質土
5 暗黄茶灰色粘質土
6 5に焼土粒状で多量混入
7 5に焼土状ブロックで多量混入
8 黒灰層
9 暗茶灰色灰層
10 暗赤灰色灰層に炭・焼土多量混入
11 2に焼土が粒状とブロックで混入
12 4と7の混合
13 5が焼土化した暗赤灰褐色土（やや粘質）
14 5に黒灰が少量混入
15 暗茶灰色焼土（固く焼けた粘質土）
16 肌色粘質土（灰層？）
17 暗黄茶灰色土に赤灰混入
18 焼土炭層

Fig. 115　第15号住居跡カマド実測図（1/30）

折り返して復原すると600cmとなり，推定面積は44.3㎡となる。本遺跡の方形住居中では最大規模となる。4主柱穴の心々距離は，東西が330cm（30cm尺で11尺），南北が300cm（30cm尺で10尺）という長いスパンとなる。各柱穴は深く，70～54cmとなりしっかりしている。床面は貼床構造で，下層の掘り込みは東壁沿いの北半，西壁沿いにみられるが，東壁沿いの南半と南壁沿いのものは削平されていて確認できなかった。更に西壁沿いのものは第16号土壙と重複する

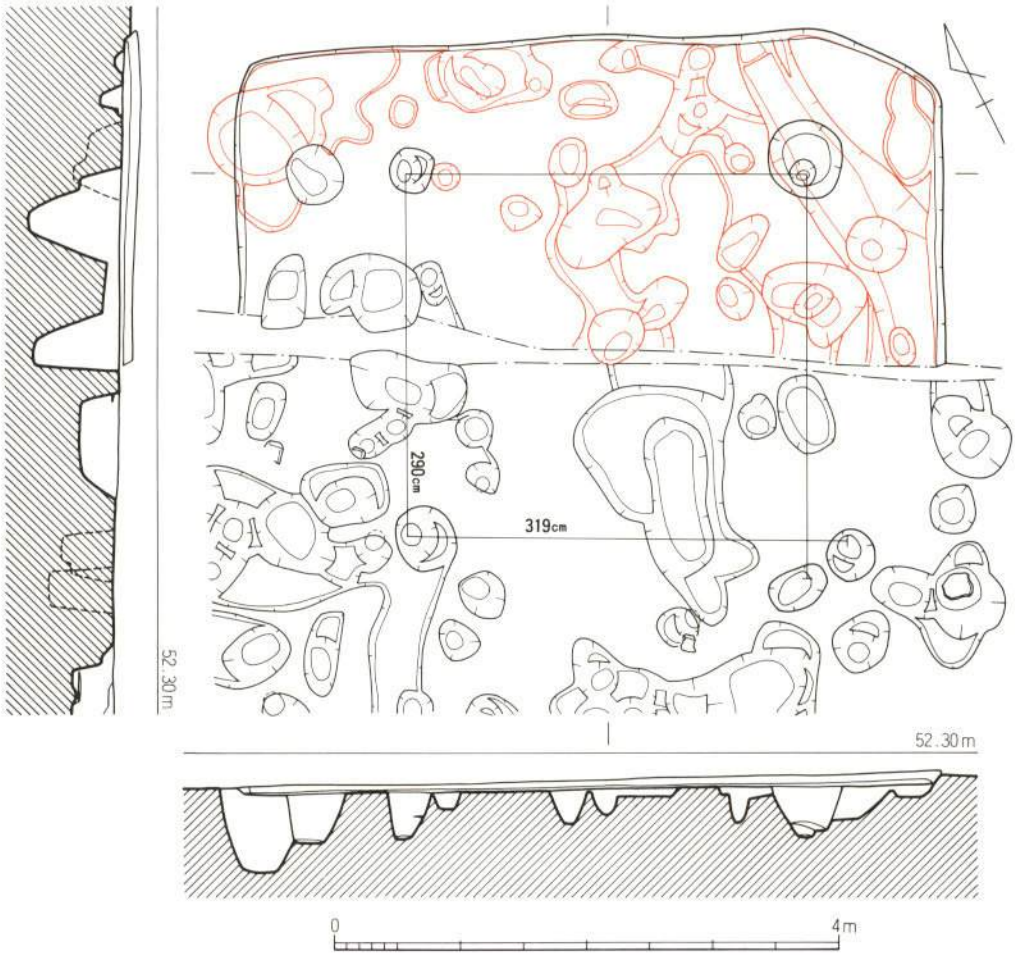


Fig. 116　第16号住居跡実測図（1/60）

部分も多いと思われ，両者を峻別することはできなかった。

カマド（Fig.115，PL.31）

北壁の中央に設けられ，住居外方へ105cm以上のびる煙道を付ける類。最低２度の作り直しがみられ，新しいカマドは全体を前面側にずらして造られているため，カマド奥壁やカマド左右外側の住居壁そのものまでも前面に作り直されている。当初面での火床は残っていないので，造り替えの際に下まで掘り込み直したものと考えられる。カマド袖は右袖が残っていて，その断面を見ると，古い袖部（土層番号５）を利用してその上に焼土等も入れ込んで構築している。左袖は上からのピットでやられて殆ど残っていない。煙道はカマド底面から13cm上の所から水平に外方へのびるが，最端部は新しいピットに切られて不明。カマド内には中央から土師器小甕が一括破片となって出土したが，これは最終使用時の支脚と考えられる。

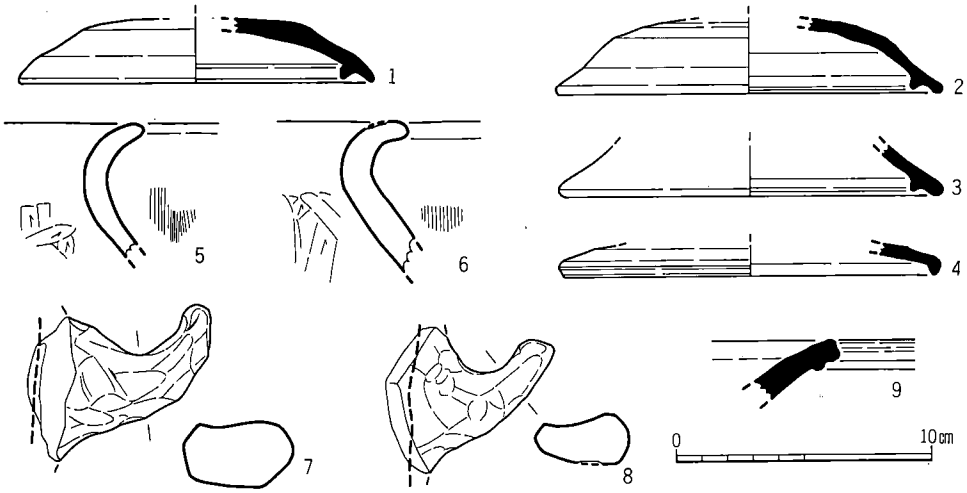


Fig. 117　第16号住居跡(1)，第17号住居跡(2～8)，第18号住居跡(9)出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (Fig.113-2～7)

須恵器杯蓋（2）返り部が短く断面三角形状になった類で，内外面ともに回転ナデ調整を施している。焼成堅緻で内面は灰色，外面は黒灰色をなす。

須恵器甕（3）口縁外面を肥厚させ，その下半に沈線1条を巡らす。内外面ともに回転ナデ調整。胎土に雲母・2㎜以下の石英を少量含む。焼成堅緻で淡灰色をなす。

土師器甕（4～7）4はカマド内出土の小甕で，支脚に使用されたものであろう。口径13.8㎝，器高13.3㎝で，胴部内面はヘラ削り上げ，外面下半はナデ。底部外面には煤が付着している。焼成良好で，内面は暗茶褐色，外面は淡茶褐～橙褐色をなす。5は把手部で，横断面が偏平となる類。甕本体へはヘソ挿入法を用いて接合している。淡茶褐色をなす。6はカマド内出土品で，復原口径20.6㎝となる。頸部が丸く屈曲して外反する類で，胴部内面はヘラ削り，口縁内外面は横ナデ。焼成良好で淡茶～暗茶褐色をなす。7は復原口径19.1㎝，胴部最大径22.8㎝となる長胴類。胴部内面はヘラ削り上げ，口頸部内外面は横ナデ。焼成良好で内面は淡茶褐色，外面は茶褐色。胴外面下半には煤付着。

以上の出土土器のうち，2の蓋は7C後葉で他の甕等も時期的には矛盾無い。よって当住居跡は南側で切っている第7号住居跡と時期的にあまり変わらない7C後葉代となろう。

第16号竪穴住居跡 (Fig.116, PL.32)

Ⅱ区西端寄り中央に位置する方形住居で，北西隅側で，第5号掘立柱建物の南東部分の柱穴2個を切る。更に，北東側でC3の周溝を切っている。住居北半は現農道下にあたっていたため，残りが良くて住居壁は残っていたが，南半は畑部分で，既に削平されて住居壁は全く残っ

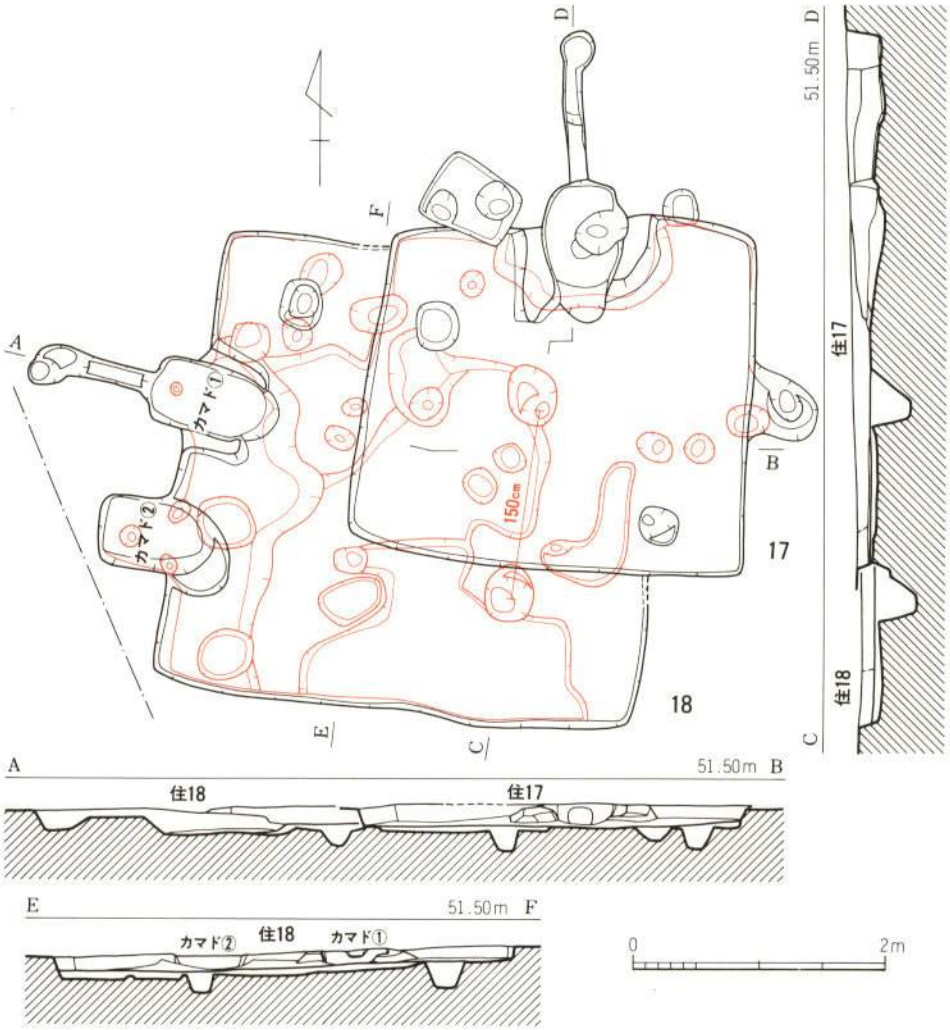


Fig. 118　第17・18号住居跡実測図（1/60）

ていなかった。カマドは通常の北には無くて，南か西の可能性しかない。おそらく西にあったのであろう。住居の規模は，東西556cm，南北は510cmに復原でき，面積は28.4㎡となる。4主柱穴配置になると思われるが，南西隅の柱穴は2柱穴が候補となり，いずれを採っても台形状の平面配置となる。主柱穴間心々距離は東西が319cm（29cm尺で11尺），南北が290cm（29cm尺で10尺）となる。柱穴の深さは40～50cmあり，しっかりしている。床面は貼床構造であるが，壁沿いの掘り込みなどの企画性はあまり見られない。

出土土器（Fig.117）

須恵器蓋（1）住居の下層出土のもので，復原径14cm，返り端部径11.6cm，器高2.5cmとなる。

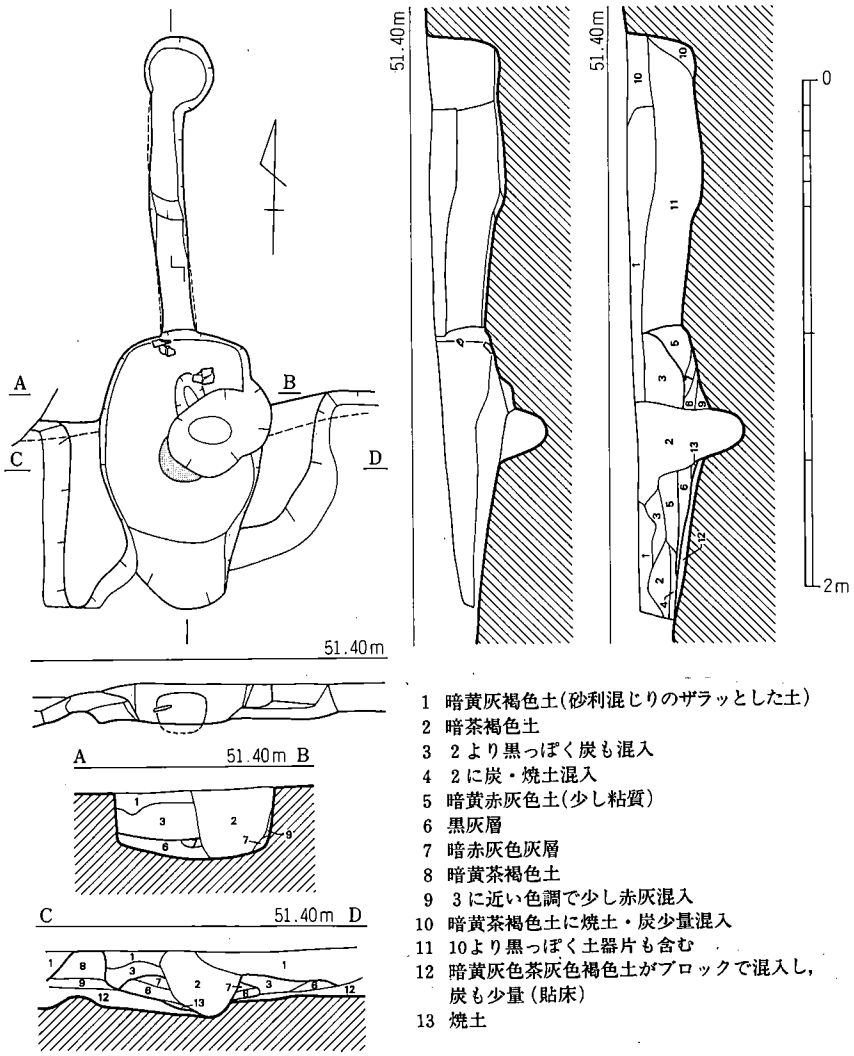


Fig. 119　第17号住居跡カマド実測図（1/30）

天井内面はナデツケ，焼成堅緻で灰色をなす。

この土器は７Ｃ後葉でもやや古い様相を示すが，当住居は北壁にカマドを持たず，住居主軸もかなり東に振っている事など，他の７Ｃ後葉代の住居群とは異なる点が多い。第５号掘立柱建物を切っている事からも，時期的にやや下がるのではないかと考えられる。よって当住居跡はこの土器が示す７Ｃ後葉を上限とするが，より新しいもので８Ｃまでの間としておく。

第17号竪穴住居跡（Fig.118，PL.33・34）

Ⅱ区のやや南寄りの西端に位置する小型方形住居である。北壁中央に，煙道が長くのびるカ

マドを設ける。住居の平面形は台形状をなしており，北壁辺が284cm（31.5cm尺で９尺），南辺が315cm（同尺で10尺），南北長は284cm（同尺で９尺）となる。面積は8.5㎡と小さい。西～南側で第18号住居跡を切っている。床面には規則的な主柱穴配置を示すようなものは見付けられず，これは小型住居に共通する事のようである。床面は貼床構造であるが，下層の掘り込みは企画的な類ではなく，南西側の広い掘り込みも第18号住居に伴うもののようである。

カマド（Fig.119，PL.33）

北壁中央に設けられるが，他大型住居のものと同じ大きさなので，この小型住居においては異常に大きく見える。まさにカマド小屋的イメージそのものである。住居壁ライン外方へかなり掘り込むタイプで，両袖もしっかりと残っている。底面は２回の使用が認められるが，大きなピットで切られているため，最終使用底面の火床は残っていない。床面幅は60cmで，底面の高さは住居床面より下がっている。煙道はカマド底面から３cm程上がった位置から，外方へ緩やかに傾斜して行って，最奥の煙出し部では直に上方に立ち上がっている。その全長116cmとなり，住居壁からは152cmのびていることになる。煙道幅は13cm前後，高さ15cm強となる。

出土遺物（土器はFig.117-２～８）

須恵器杯蓋（２～４）２は床面下出土品で，復原径15.2cm，返り部端径13cm，器高３cm程となる。天井外面は回転ヘラ削り，内面中央はナデツケ。全体にやや薄手で焼成堅緻。灰色をなす。３は復原口径15.2cm，返り部端径12.6cmとなり，内外面ともに回転ナデ。胎土に１mm大の石英を少量含む。焼成堅緻で灰色をなす。４はカマド内出土品で，復原口径14.6cmとなる鳥嘴状口縁類。内外面ともに回転ナデで，焼成堅緻。灰色をなす。

土師器甕（５～８）５はカマド内出土品で，口頸部の肥厚があまり無く，胴が張る類。胴部内面はヘラ削り，口縁内外面は横ナデ。焼成良好で橙褐色をなす。６は強く張る胴部から丸く屈曲して外反する口縁となる類。胴部内面はヘラ削り，口頸部内外面は横ナデ。焼成良好で橙褐色をなす。７は横断面が偏平になる類の把手部で，外面は指頭による仕上げで凹凸多し。淡茶褐色をなす。８も把手部で，横断面が薄手の偏平となる類で，淡橙色をなす。

鞴羽口（Fig.196-９）復原径71mm，孔径34mmとなる筒状土製品。先端が斜めにそがれて尖っている特徴がある。胎土に細砂粒を少量含み，内面は赤褐色，外面は灰黄色をなす。先端の内外面には融滓が付着しており，更に欠損面にも付着していることから，使用中に破損したものと考えられる。

以上の出土遺物のうち，須恵器杯蓋２・３は恐らく第18号住居跡に伴うものであろう。４～８の８Ｃ代の特徴に近い類とは異質である。カマドの形態も，長い煙道がカマド底面からあまり高くない所から始まり，奥へ下がり気味になる特徴など，奈良期の典型例を示している。よって，当住居の時期は８Ｃ代の範囲の中に収まるものと考えられる。

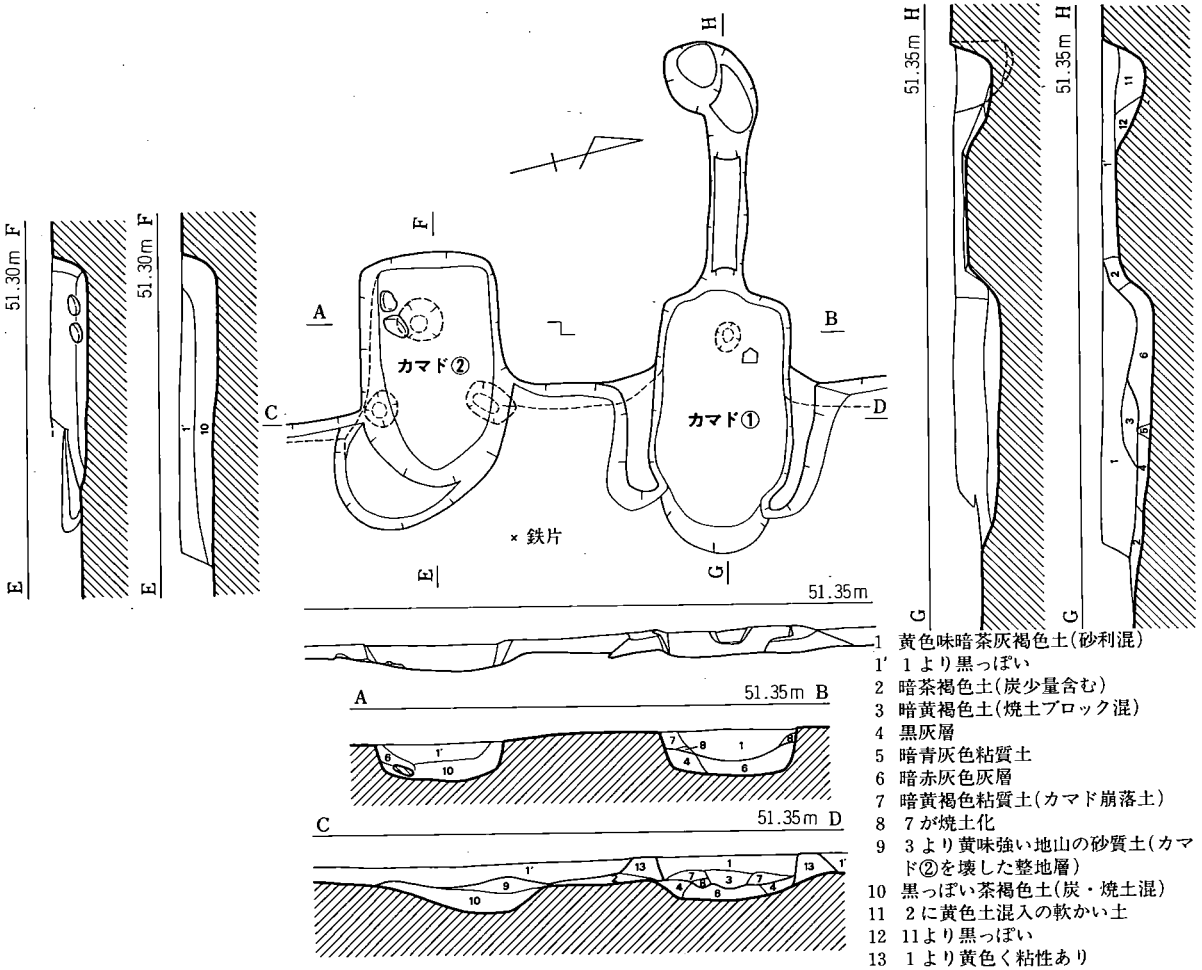


Fig. 120　第18号住居跡カマド実測図（1/30）

第18号竪穴住居跡（Fig.118, PL.33・34）

Ⅱ区西端のやや南寄りに位置する方形住居跡で，北東側で第17号住居跡に切られている。本遺跡では珍しい西側にカマドを設ける住居で，しかも2基が並列するという，当地方では稀例

である。住居の規模は南北に360㎝（30㎝尺で12尺），東西に375㎝（同尺で12.5尺），面積が13.5㎡となる。主柱穴は東半に南北に150㎝の心々距離で並ぶ2柱穴しか企画的配置のものは見つからず，小型住居の特殊性かと思われる。床面は貼床構造で，下層の掘り込みは，西辺沿いと南辺沿い，中央部とに明らかに認められる。東壁沿いはあまり見られない。

カマド（Fig.120，PL.34）

西壁に2基検出した。北側のものを①，南側のものを②として説明する。カマド①は住居壁から35㎝外方へ掘り込まれており，それから更に煙道が101㎝のびて，先端は煙出し部のピット状部となる。カマド内底面は2回の使用面が認められ，新しい使用面の時に左袖が再構築されている。上下の使用面いずれにも明確な火床面は見られない。カマド底面は住居床面より5～9㎝程下がっており，また，底面幅は51㎝，底面長さ94㎝と，非常に奥行きのある構造となっている。また，カマド底面と煙道底面とは14㎝程の段差がみられ，明らかに煙道付カマドでも7C代の古い様相を示している。次にカマド②は，カマド①の掘り込みから60㎝，主軸どうしで115㎝離れて設けられており，煙道は確認できなかった。両袖も全く残っておらず，袖を壊して整地した土（図中の土層9）が確認された。住居の壁を外方に掘り込んだ部分は60㎝程と，カマド①よりも外方へ深く掘り込んでいる。カマド底面は複数の使用面は認められず，火床面も検出できなかった。左奥底面には河原石2個が残存していたが，その用途は不明である。以上のカマド①と②の新旧関係は，最終的には①のみが使用されていた事が判かる。しかし，当初はどうなのかは確認できなかった。ただ，両カマドの位置を見ると，いずれも西壁の中央ではなく，どちらかが当初作られ，その後もう1基に作り替えられたという状況ではなさそうだ。むしろ，西壁に適当な間隔でうまく並行して配置されたという感じが強く，当初から2基が計画的に設けられたというのが本当ではなかろうか。そしてこの2基がどちらも同じ性格（用途）のカマドというのではなく，各々異った目的の為に同時に用いられ始めたと想像しておきたい。

出土遺物

須恵器甕（Fig.117-9）カマド内出土品で，口縁外面に丸っこい凸帯を付けるもので，内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。外面には自然釉が薄くかかる。

鉄滓（PL.34）カマド②の全面から1点が出土している。重量5gの小さいものである。これ以外には鍛冶関連遺構のものは，全く出土していないため，当住居が鍛冶関連施設であるとは言い難い。発掘調査範囲外の近隣に鍛冶関連遺構が所在している事が想定される処である。

以上の出土遺物で当住居の時期を決定する事は困難だが，既述の如く第17号住居跡下層出土の須恵器杯蓋（Fig.117-2・3）が，当第18号住居跡のものと考えられる事から，当住居の時期は7C後葉と考えられる。カマドの構造からも肯首できる処である。

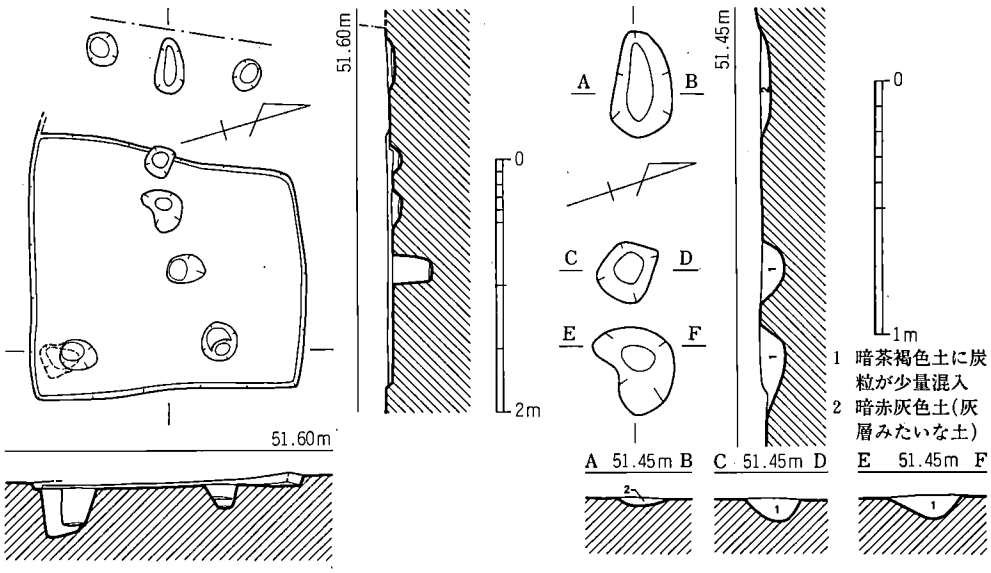


Fig. 121　第19号住居跡・カマド実測図（1/60, 1/30）

第19号竪穴住居跡（Fig.121, PL.35）

Ⅱ区西端のやや南寄りに位置する特小型方形住居跡である。第８号住居跡の西にきちんと接するように設けられたもので，西壁側にカマドがあったようだ。規模は，南壁が210cm（７尺），南北長が210cm（７尺）であるが，北壁が165cm（5.5尺）となり台形状平面形をなす。面積は3.9㎡となり極めて小さい。床面には柱穴になりそうな穴が３個みられたが，きれいに主柱穴配置になる類ではない。住居壁は全体に残り悪く，北壁側で高さ７cm程残る他は，殆んど床面すれすれまで削平されてしまっている。住居床面は貼床ではない。

カマド（Fig.121）

住居検出当初，西壁際中央付近の約60cm四方に焼土・炭片が集中していた。これがカマドである事を確信して，その範囲を残してカマド断面等の作業を行う予定であった。しかし，そのまわりを下げたら，すぐ下に住居床面が出てきてしまい，残した部分の意味の無い事がわかった。よって，図面にカマドの輪郭や土層断面を示すことができなかった。しかし，その部分にカマドが在った事は確信している。更に，住居外方40cmの所に縦長の長いくぼみが検出され，灰が入った埋土であったため，煙道の存在も確信している。よって，カマドの詳細は明確にできないが，この小さな住居跡に煙道付きのちゃんとしたカマドが設けられていることから，通常の住居ではなく，カマド小屋的施設と考えられる。

出土遺物のうち，実測し得るものは無く，時期の確定ができないが，他の同類住居の例として，西側にカマドが付いている点で共通する第18号住居跡が７Ｃ後葉代とされるので，ほぼ同時期のものと推定される。

B 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物（Fig.122, PL.35）

Ⅱ区北半の中央に位置する3×4間の東西棟で，主軸方位をN80°Wにとる。全体の規模は南北が360cm（30cm尺で12尺），東西が690cm（23尺）となる。柱間心々距離は梁行105・150cm（3.5尺・5尺），桁行135cm・150cm・180cm・195cm・210cm（4.5尺・5尺・6尺・6.5尺・7尺）とかなりまちまちである。

北辺と東辺では布掘り的構造が認められるが，南・西辺では見られない。北辺の外方には，80～130cm離れて浅く細い溝が東西に見られ，雨落ち溝かとも考えられる。ただ，他の辺側には見られないのが疑問ではある。

西南隅付近で，C3の周溝を切っている。出土遺物は，掘立柱建物にしては結構在り，ここが生活空間として使用されていた事を物語っているようだ。

出土土器（Fig.123-1～18）

須恵器杯蓋（1～4）1は低い撮を付ける類で，生焼け品。暗黄茶褐色をなし，内外磨滅。2は暗赤褐色をなし，内外回転ナデ。焼成堅緻で返り部が短い。3は返り端部径12cmで，天井外面はナデ。焼成堅緻で内面は灰色，外面は淡灰色。4は返り端部径14.2cmで，白黄茶色の生焼け品。内面は回転ナデ，外面は磨滅。

須恵器杯身（5～9）5は口径11cm，器高3.7cmで，底内面はナデツケ，底外面は回転ヘラ削り。胎土に細砂を少量含み，焼成堅緻で灰～淡灰色をなす。6は口径13.6cmで，内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。7は口径11.4cmで，外面下端は回転ヘラ削り，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で淡黒灰色をなす。8は高台径8.8cmで，淡灰黄色をなす生焼け品。全面磨滅。9は口径13.8cm，器高3cm。外面下半から底外面にかけては手持ちナデ。底内面中央はナデツケ。焼成堅緻で白黄灰～淡灰色。

須恵器高杯（12）脚柱上端径3.6cm，杯部内面はナデツケ，脚柱外面は丁寧なナデ。細砂粒を少量含む。焼成堅緻で灰～淡茶灰色をなす。低めの脚部となろう。

土師器杯（10・11）10は口径13.7cmで体部の屈折が明瞭になってきている。外面下半は手持ちヘラ削り。焼成良く，暗褐色をなす。11は口径15.5cmで内外磨滅。焼成良好で橙褐色をなす。

土師器高杯（13・14）13は脚柱部で，上端径3cm。杯部内面はナデ，脚柱部外面は縦ヘラ削り，内面は横位のヘラ削り。内面の上方奥はシボリ痕が認められる。14は脚裾部片で，屈折せずに緩やかに開く。内外磨滅しており，焼成良好で橙褐色をなす。

土師器鉢（15）あまり肥厚しない口縁部となり，内外磨滅するが，体部内面はヘラ削りか。焼成良好で橙褐色をなす。

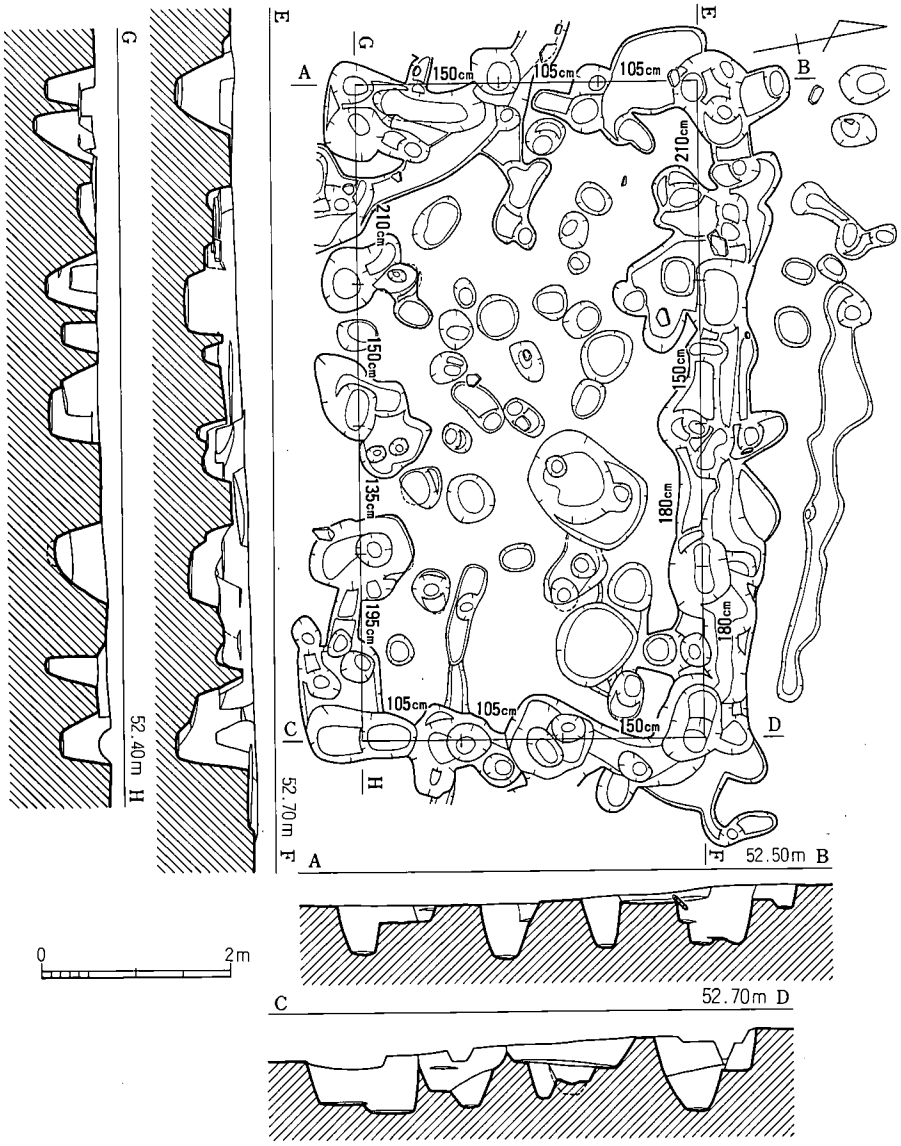


Fig. 122　第1号掘立柱建物実測図（1/80）

土師器甕（16・17）16は肥厚した口縁内面に稜を作り，内面稜以下はヘラ削り。他内外面は横ナデ。焼成良好で黄橙色をなす。17は復原口径27cmの中型品。内面に不明瞭な稜を作るが，それ以下はヘラ削り。長めに開く口縁を持つ。外面は粗いハケ。焼成良好で，白橙褐色をなす。

土師器甑（18）直線的に底部へすぼまる類。胴部内面はヘラ削り上げ，外面は密なハケ，底内外面は横ナデ。焼成良好で茶褐色をなす。

以上の出土土器は，1～4が7C後葉～末，5は7C初葉，6・8・11が7C後葉，7が7

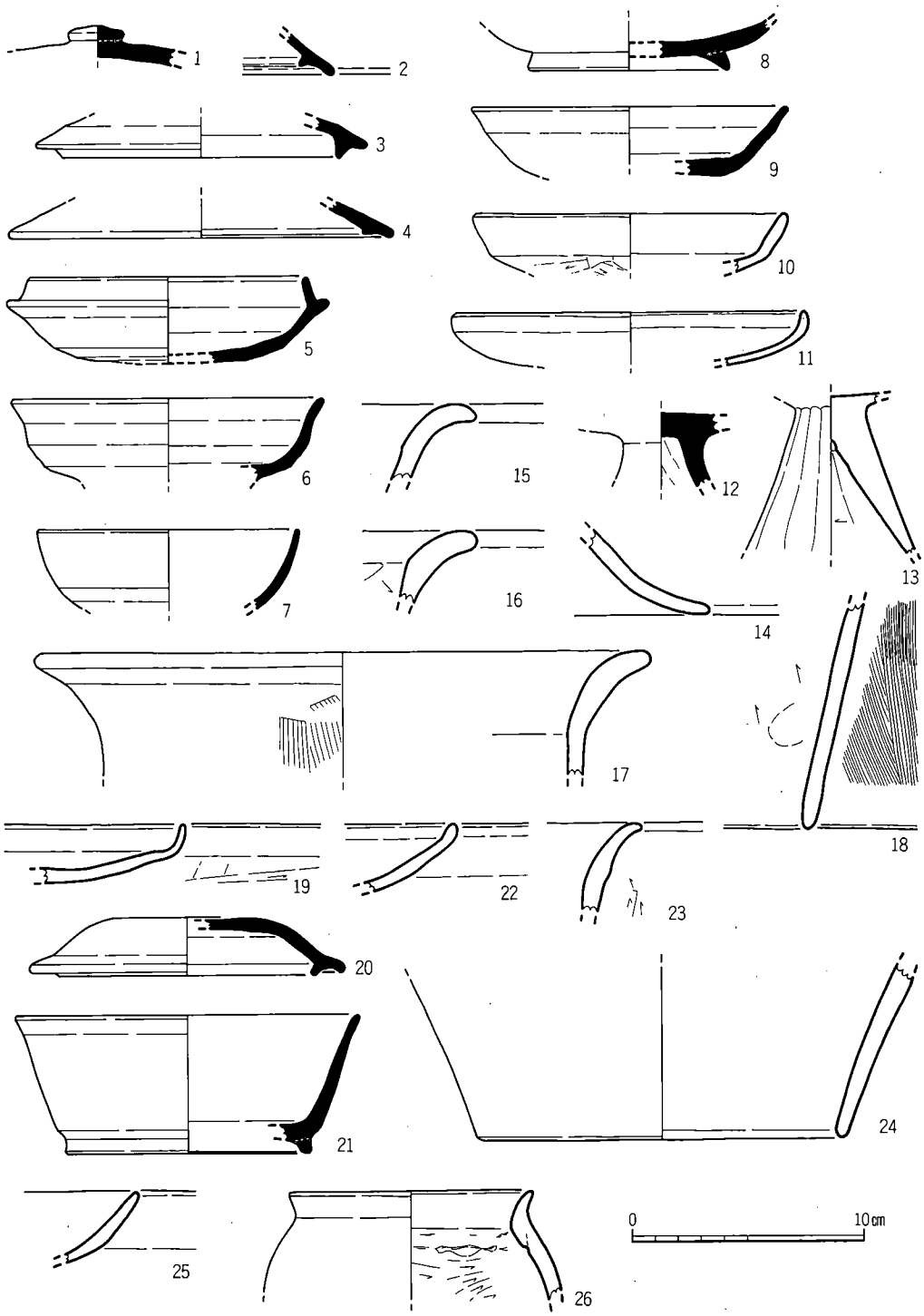


Fig. 123　第1号建物(1～18)，第3号建物(19)，第4号建物(20～24)，第5号建物(25・26)出土土器実測図 (1/3)

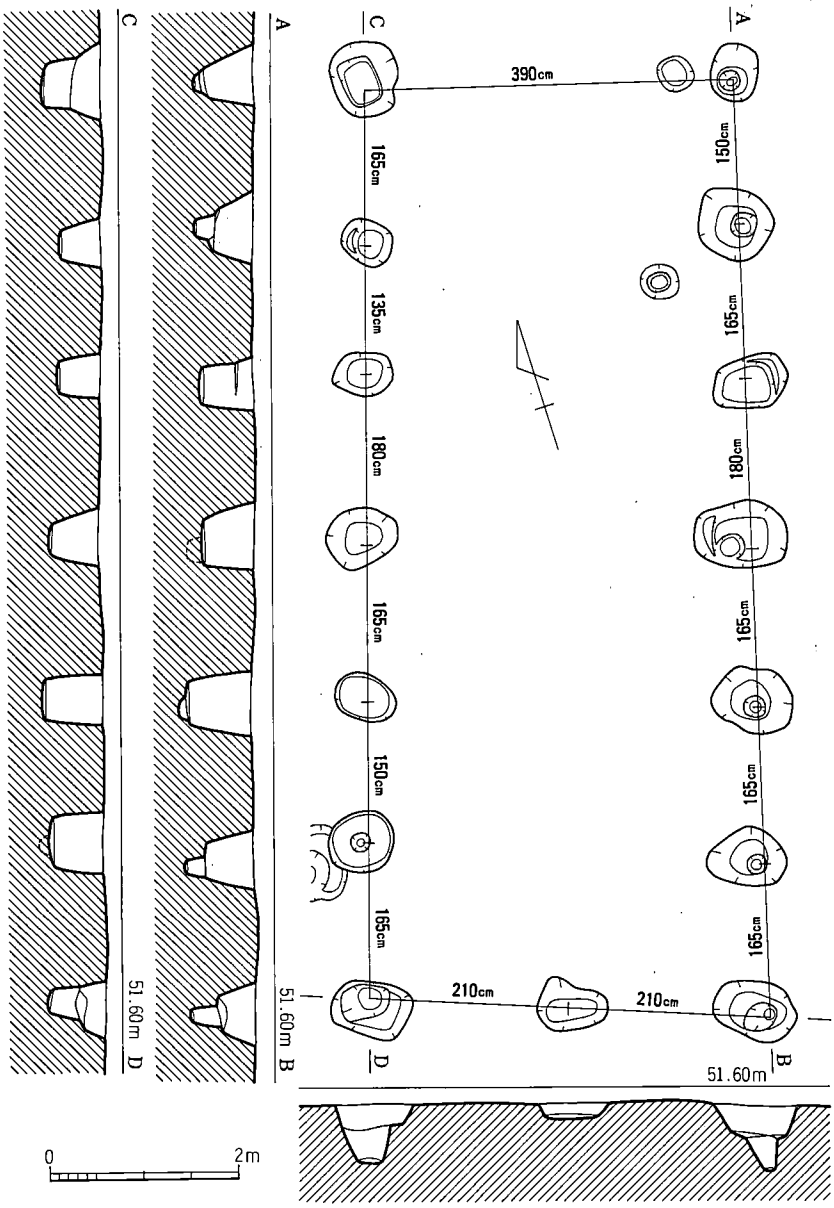


Fig. 124　第２号掘立柱建物実測図（1/80）

Ｃ中葉，10が７Ｃ末前後となる。17も新しい様相を見せ，７Ｃ後葉以降でも８Ｃにかかる時期となろう。これらのうち，最も新しい時期をとると，当第１号掘立柱建物は７Ｃ末前後の所産として良かろう。丘陵を背後にした好位置に在った生活居住棟と考えられる。

第2号掘立柱建物（Fig.124，PL.36）

Ⅱ区の南端，東寄りに位置する2×6間の長い南北棟である。主軸をN15°30′Eにとり，他の近隣建物と比べると，やや東に振る。正確な長方形プランではなく，明らかに北辺と西辺が1尺ずつ短い。全体の規模は990～960cm（30cm尺で33尺～32尺）×420～390cm（14尺～13尺）となる。柱間心々距離は，梁行が210cm（7尺）等間，桁行は135・150・165・180cm（4.5・5・5.5・6尺）とまちまちである。南辺の梁行中間の柱穴は深さ15cm程と極端に浅く，それと対する北辺中間には柱穴すら見受けられない。各柱穴は，深さ45～80cmとしっかりしている。

出土遺物のうち，実測できるものが無く，時期の決定ができない。主軸の方向から見て，北方の第7号住居等と同じであることから，7C後葉と推定することもできよう。

第3号掘立柱建物（Fig.125・126）

Ⅱ区南端に位置する3×4間の南北棟建物で，拡張して建て替えが行われている事が判かった。建物の主軸方位はN15°Eで，建て替え後も変化しない。当初の建物は図示したもののうち内側のプランで，全体の規模が420×720cm（30cm尺で14×24尺）となり，柱間心々距離は梁行間で135・150cm（4.5・5尺），桁行間で165・180・195cm（5.5・6・6.5尺）となる。建て替え後の拡張された建物は全体規模が455×770cm（35cm尺で13×22尺），柱間心々距離は梁行で140・157.5cm（4・4.5尺），桁行柱間で175・192.5・210cm（5・5.5・6尺）となる。新旧の建物のうち，明らかに新建物の柱穴の方が深く，建て替えの意味がわかるような気がする。また，南辺の梁間柱穴は，北辺と対称とならず，西側の1柱穴が無い。これはこの間が入口部となっていたものか。建て替え後もこれは踏襲されている。

出土遺物（Fig.123-19）

土師器杯　体部と口縁部の境の屈折が丸味を帯び乍らもややはっきりしてきた段階のもので，内底面はナデ，口縁内外面は横ナデ，底外面は手持ちヘラ削り。焼成良好で内外面ともに橙色をなす。全体に薄手品である。

この土器は7C末前後の特徴を良く示しており，当建物の上限を示すものとなろう。

第4号掘立柱建物（Fig.127，PL.36・37）

Ⅱ区の西南側に位置する3×4間の南北棟建物である。主軸方位をN12°Eにとり，どちらかというと第1号掘立柱建物と近似する。建物全体の規模は475×845cm（35.2cm尺で13.5×24尺）となり，本遺跡では最大規模となる。柱間心々距離は，梁間が158cm（4.5尺）等間，桁行が194・211・229cm（5.5・6・6.5尺）となる。南東隅の柱穴が第9号住居跡に切られている。柱穴の深さは40～55cmと，他の建物の柱穴と比べて，かなり浅い。柱穴掘方は方形・隅丸方形が多く，この点も他の建物と異る。柱痕がほぼすべての柱穴で確認され，その直径は23～29cm

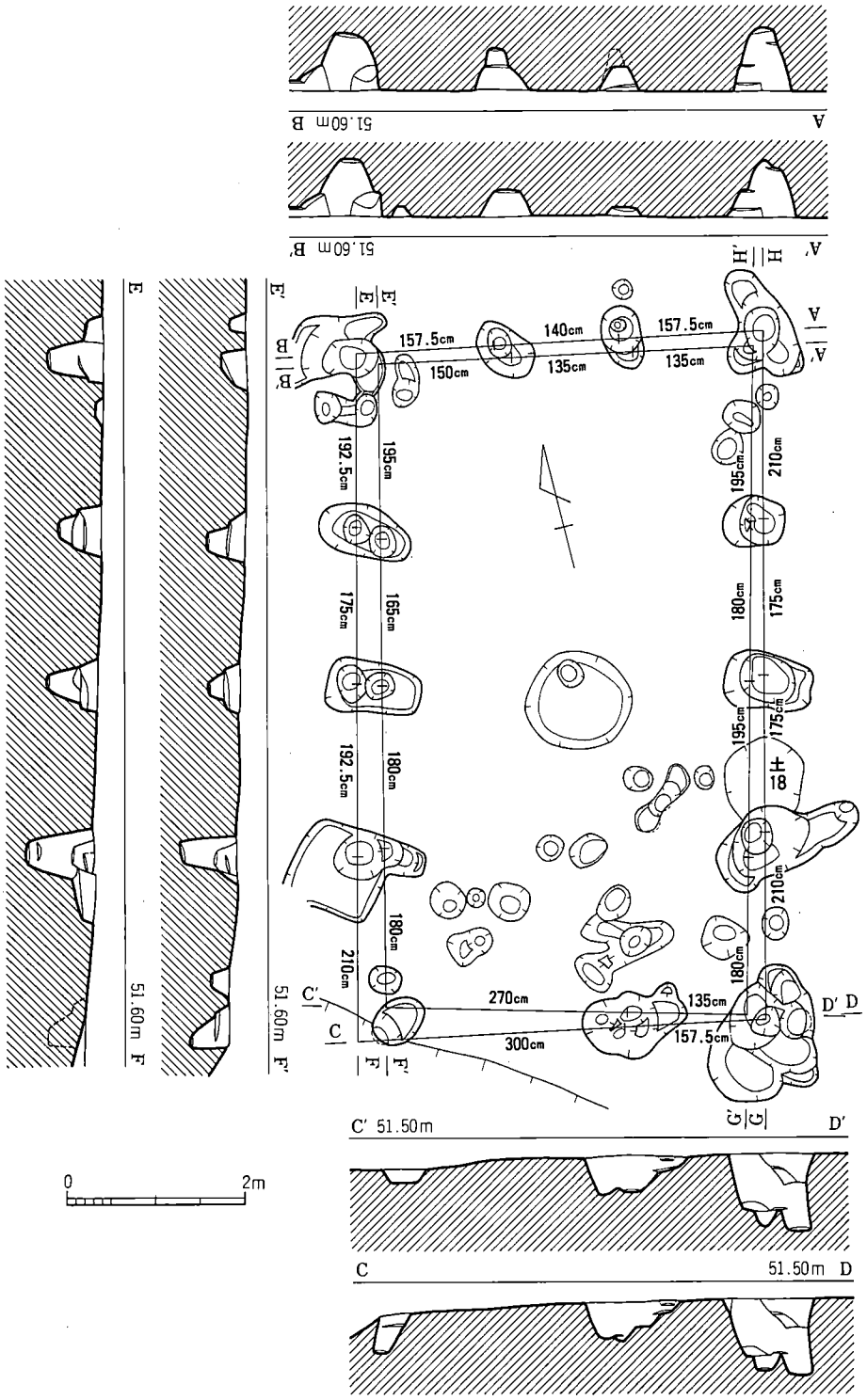


Fig. 125　第３号掘立柱建物実測図（その１）(1/80)

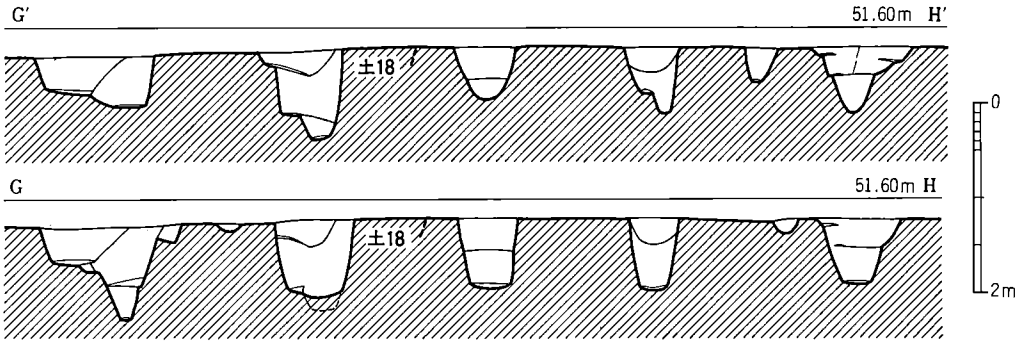


Fig. 126　第３号掘立柱建物実測図（その２）(1/80)

となり，かなりしっかりした柱である。掘方内の埋土は，暗黄褐色粘質土を混入した土で固めている。

出土土器（Fig.123-20～24）

須恵器杯蓋（20）返り端部径11cm，器高2.5cmとなり，返り部はまだ長め。天井外面は回転ヘラ削り，内面中央はナデツケ。生焼け品で淡白灰色をなす。

須恵器杯（21）口径15cm，器高６cm，高台径10.7cm。内外面回転ナデで，焼成堅緻。内面は暗えび茶色，外面は灰色をなす。体部はまだ外傾せず深いが，高台が短かめに外方へ張り，体部と底部の境に近い部分に高台が付くようになっている。７Ｃ後葉の特徴から既に脱皮している類と考えられる。

土師器杯（22）内外面ともに磨滅するが，体部から口縁部にかけて，緩やかに湾曲する類。焼成良好で淡橙褐色をなす。

土師器甑（23・24）23はあまり肥厚しない口縁となる。内外磨滅し，焼成良好で淡茶褐～淡黄茶色をなす。24は底径16.4cmで，直線的に下方へすぼまる類。内外磨滅。焼成良好で橙褐色。

以上の出土土器のうち，20は７Ｃ後葉代。21は８Ｃ初葉までは下げられる。22は７Ｃ後葉代となろう。当建物が８Ｃ前葉とされる第９号住居跡に切られる為，建物の時期は８Ｃ初葉という事になろう。

第５号掘立柱建物（Fig.128）

Ⅱ区の北半西端に位置する３×３（＋α）間の東西棟建物である。西側は現町道金場上ノ宿線の下に在り，全容を明らかに出来ない。南東隅の２柱穴が第16号竪穴住居跡に切られる。全体の規模は，495×800（＋α）cm（30cm尺で16.5×26尺以上）となり，柱間心々距離は梁間で150・165・180cm（５・5.5・６尺），桁行間で195・210・225cm（6.5・７・7.5尺）となる。各柱穴は50～100cmとかなり深くしっかりしている。主軸をN85°Wにとる。東辺の梁間の内側

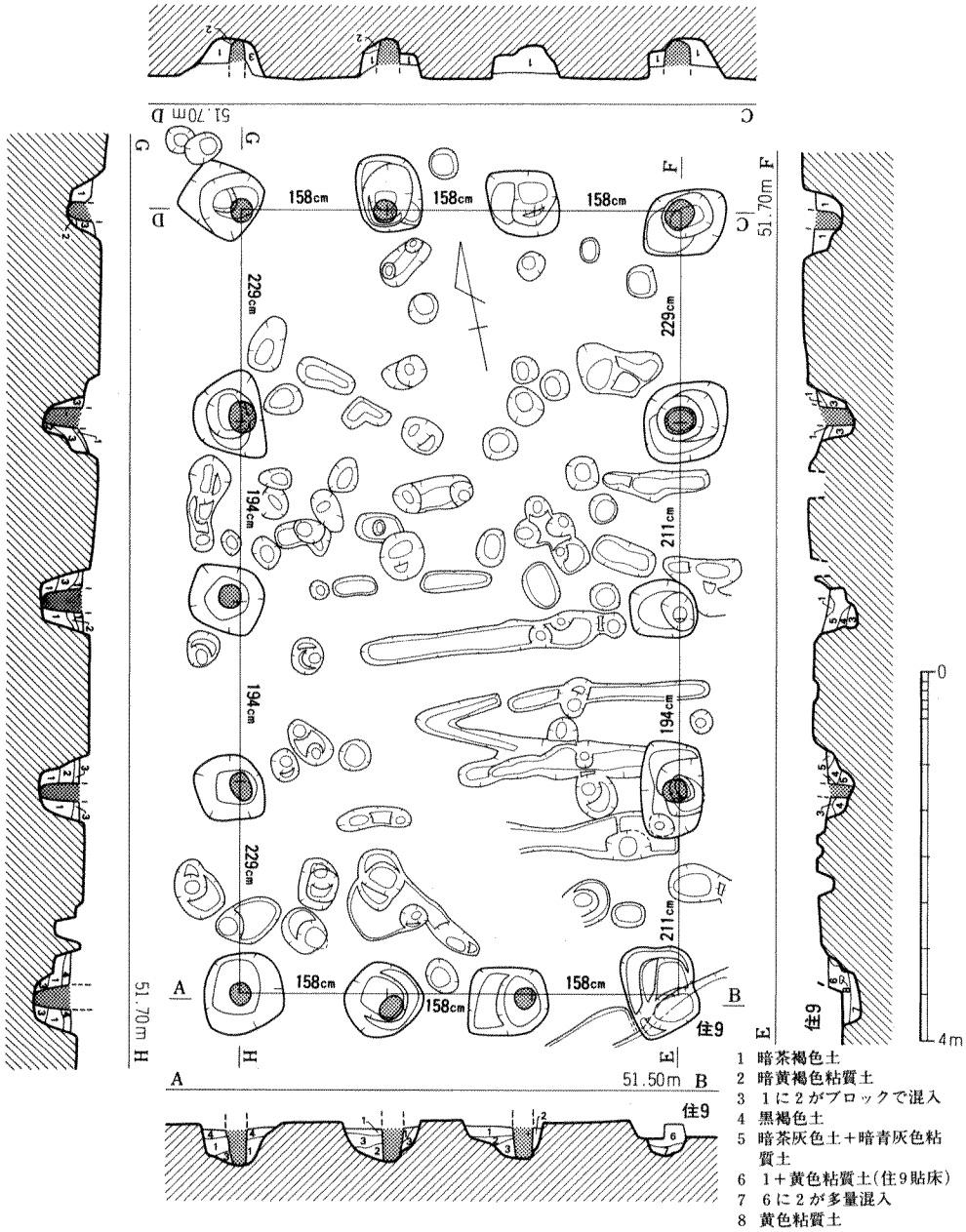


Fig. 127　第4号掘立柱建物実測図（1/80）

2柱の間は布掘り状に深さ20cmの浅い溝で継がれている。掘方平面形は大旨円形で直径90cm前後の大きい類である。

出土土器（Fig.123-25・26）

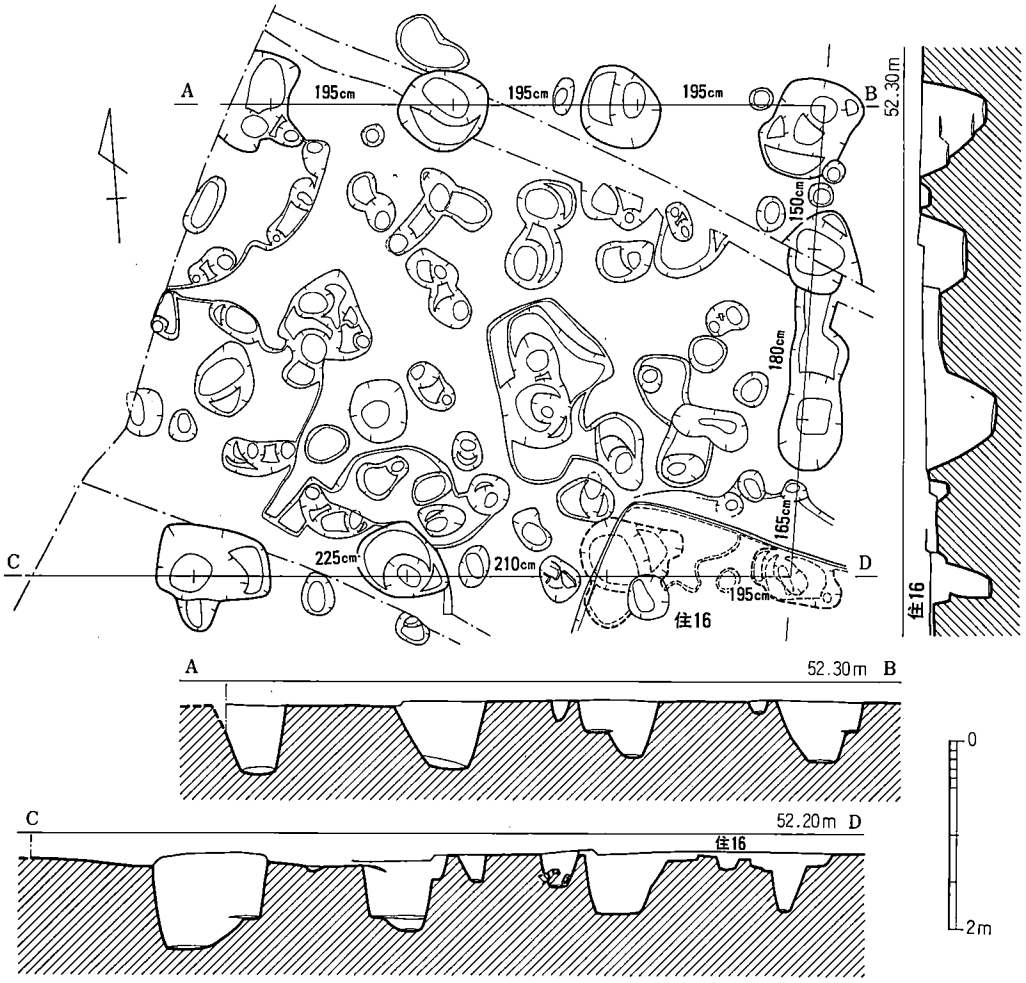


Fig. 128　第５号掘立柱建物実測図（1/80）

土師器杯（25）体部から口縁への立ち上がりが全く見られず，直線的に開いてしまう類。内外面ともに磨滅。焼成良好で淡橙褐色をなす。

土師器甕（26）口径10.6cm，胴部最大径13cm程となる小甕。胴部内面はヘラ削りで他面は磨滅。胴部が丸く張る古い様相を示す。焼成良好で淡橙褐色をなす。

以上の出土土器は，いずれも７Ｃ後葉を下るものではなく，当建物の時期を示すと思われ，７Ｃ後葉を上限とするとされる第16号住居跡に切られる事実とも矛盾はしない。

第６号掘立柱建物（Fig.129）

Ⅱ区南端の段落ちのへりに位置する東西棟である。主軸をN84°Wにとり，北の方の第５号

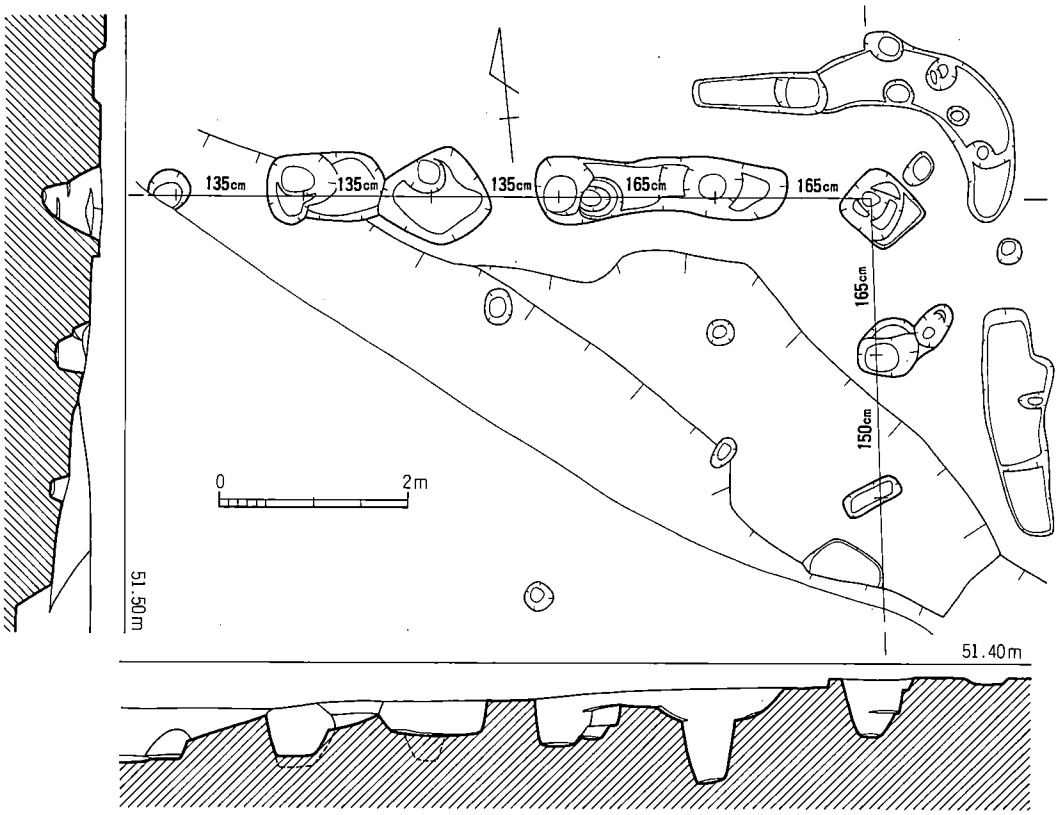


Fig. 129　第６号掘立柱建物実測図（1/80）

掘立柱建物と主軸方向が近似する。すぐ東隣に南北棟の第３号掘立柱建物があるが，これとは明らかに主軸方向を異にする。建物の規模は，３×５間かと推定されるが，南西側を大きく畑開墾等で削られているため確定できない。３×５間だとすると，全体の規模は480×735cm（30cm尺で16×24.5尺）と復原できる。柱間心々距離は梁間が150・165cm（５・5.5尺），桁行が135・165（4.5・5.5尺）となり不規則的。北辺の東寄りの２柱間は布掘り状に連結されている。また，北東隅から東辺にかけての，建物外側には90～110cm建物から離れた位置に，切れ切れになった溝がみられ，雨落ち溝と考えられる。柱穴の深さは若干不揃いで，40～100cmとなるが，平均65cm程でかなりしっかりしている。

出土遺物のうち，実測できる類が無く，時期の確定は困難である。あえて推測するならば，主軸方向の異同から，東隣の第３号掘立柱建物とは同時存在はあり得ないだろうという事，更に主軸方向が酷似する第５号掘立柱建物が７Ｃ後葉かとされる事等から，この第６号掘立柱建物も７Ｃ後葉代の可能性が考えられる。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 10	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 54 —

上巻

平成11年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　赤坂印刷㈱

福岡市中央区大手門１丁目８番34号